
精霊騎士

水海翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊騎士

【Nコード】

N0164I

【作者名】

水海翠

【あらすじ】

孤児で教会育ちのエンナは、ある日、突然人身売買を行っている裏組織に攫われる。しかし、そこへエンナを助けに来たという超美少女が現れ、彼女と一緒に逃亡することに。ところがその美少女、実は少女ではなく少年で…！？華麗なる(?)騎士転身王道ファンタジー

花の精霊のプロローグ

夜も大分耽った頃。

欠伸を抑えず盛大に吐き出した後、気怠そうに男は丘の向こうにある町の明かりを眺めた。

本当なら、自分も酒を煽って騒いでいる一人の筈だった。なのに、見張りを交代しろと先輩に言われてしまったのである。今日の酒宴によつぽど参加したかったようだ。それもその筈で、今日の酒宴は頭首の奢りで催されるのだ。

先輩の言うこと、それを断るわけにもいかず、見張り番を代わりに男がする羽目になった。だが、それはこの男に限ったことではなく、他の見張り連中も自分と同じように押し付けられた者達が多いだろう。組織において、年功序列というものが如何に強いが、思い知らされる今日この頃である。

きつと今頃、酒の後は上機嫌の力も大いに助けて、繁華の美女達を抱いているだろう。

心底、羨ましい。羨ましすぎる！

男が恨みがましく町を見ていると、町へ続く街道から光が一つ、こちらに近付いてくるのが見えた。町の明かりと夜空の星々以外は光がないため、そこだけはつきりと浮かび上がっている。

一瞬、仲間の一人が帰ってきたのかと思ったが、あの野生動物のような彼らが 勿論この男もそのうちの一人だが こんなに速く戻ってくるわけがない。

かといって、ここはあまり人が来ないような丘の上であり、今は夜のため、森に囲まれた暗い街道になど危険すぎて普通の町人達は近付いてこない。となると……

男は警戒して、壁に立てかけていた木の棍棒を手に取り、その光を睨み付ける。

徐々に近付いてくると、それがランタンの灯火だとわかり、それを持っているのが少女であることが分かった。

少女は男の前でピタリと立ち止まると、足下を照らしていたランタンを掲げた。少女の陰っていた顔に光が差し、はつきりとその顔立ちがわかる。

男は、ぼかんとした。

何故かって、その少女があまりにも美しかったからだ。

スツとした目鼻立ち、眉は優美な曲線を描いている。ランタンの光だけでも、この少女がどれだけの美貌を持ち合わせているかはつきりとわかった。今日、競りに出された一番の容姿を持っていた少女よりもずっと上玉だ。

「ねえ」

少女は、魅惑的な唇を動かして、男に話しかけてきた。その声は、心地よく耳に響く。

惚けていた男ははつと我に返り、馬鹿面していた己の顔を厳威に見えるよう険しくした。もう今更なのだが。

「なんだ」

少女はそんな男に微笑む。それだけで男はくらくらときた。美しいものとは、こういうことなのだろうか。その少女の一つ一つの小さな動きにさえ魅了されてしまう。

だが、ここでだらしない姿を見せるわけにもいかない。男は努めて平静を装った。

「あなた、ブラインのお仲間さんよね？」

「あ、ああ」

が、吃ってしまった。

ブラインとは、この男が入っている裏組織である。勿論、下の町で遊んでいる男達もその一味だ。ブラインは、人身売買を生業としており、今日もその競売が行われた。男女問わず、なりが普通の者や見窄らしい者達は只の召使として、楽に優れている者や見目麗しい者達は、娯楽のために貴族や金持ちの商人などに買われていく。要は、奴隷である。

そして今日、これは高値で売れると、組織の頂点に立つブライヤが特に目をつけていた眉目秀麗な少女が予想額よりもかなり高い値で売れたのである。しかも、他の商品達もなかなか良い値で売れたため、頭首の機嫌はすこぶる良い。そういう時の頭首は気前が良くなり、部下達に労いの意味も含めて、やれ酒だ飯だ女だとパーツと宴を催すのだ。

あまり景気が良くないと周囲に当たり散らして大変なのだが、こういう太っ腹なところもあるので、皆不満を溢しつつもブライヤの下を離れていかず素直に従っている。

「わたし、今下に遊びに来てるブラインの人に頼まれて来たの。あなたには悪いことをしたから、慰めてやって欲しいって……」

少女は男の間近までくると、少し恥ずかしそうに目を逸らす。

男は、ごくりと生唾を飲んだ。

話からして、どうやら男に見張りを押し付けた先輩に頼まれてこ

こへ来たようだが、今自分は扉の前の見張り番、留守を守る身である。ここは罠と考えて、この少女も警戒するべきだ。するべきなのだ。

理性を何とか保ち、男は自分の役目を全うすることを選んだ。

「悪いが、ここを見張ってないと」

「あら、ちよつとくらい良いじゃない」

折角、決意したのにその一言で速くも崩れそうだ。

「いや、そういうわけには」

「少し抜ける程度のことよ。町に来てる人達だって遊んでいるんだから、いいじゃない。バレやしないし、中にも留守番の人達がいるんでしょう？ 大丈夫よ」

この少女が大丈夫だと言うと、何故かそんな気がしてくる。

そうだ。少しくらいなら大丈夫ではないだろうか。

何だか、だんだん頭がクラクラしてきて、思考回路が麻痺してくる。

「ちよつとくらい……ね？」

少女は、少し背伸びをして、男の耳元に囁くように言った。上目遣いで少女は、人差し指でつつーっと男の身体をなぞる。

もう、男は迷わなかった。

留守番？ 理性？ 何だそんなもの。クソくらえだ！

こんな美少女を相手に出来るなど、滅多にないチャンス。逃す方がどうかしている。

男は、森の中へ少女を連れて行こうとした。しかし、外は嫌だと一点張りで、部屋の中が良いと言い出した。流石にそれは不味いと言ったのだが、見付かったらその人達も巻き込むまでと少女は言い切った。この少女、なかなかの強者のようだ。しかも、少女が言うと本当にそれも可能そうに思うのだから不思議である。

二人は、扉の向こうへと消えていった。

1・空中ダイブ（1）

「いやああああっ！！！」

絶叫。絶叫。

エンナは、真つ逆様に夜の中へ落っこちていた。彼女から見れば、色々な意味で真つ暗な闇の底へと落ちていくような感じだ。

ああ、どうしてこんなことになってしまったのか。今まで起きたことをエンナは走馬燈のように思い返した。

* * *

「なんでわたしがこんな目にあわなきゃならないの」

冷たく寒い牢屋の中で、エンナは呟いた。

確かに、世の中というものは色々なことがある。

エンナでまず例えるなら、彼女は身寄りのない孤児だ。

まだエンナが赤ん坊だった頃、教会に捨てられた。孤児として教会で育ったエンナは、自分と同じく教会で育った年下の子達の面倒を見ながら、十五歳を迎えた彼女は仕事を探していた。十六歳になると、教会を出て行かなければならないのだ。苦勞の末、小さな宿屋だがそこで下働きとして働けることになった。

だが、その日の帰り道。意気揚々と教会へ戻ろうとしたら、突然、見ず知らずの柄の悪い男達に囲まれて、気付いたらここにいた。どうやら、エンナは攫われたようだ。しかも、人身売買の裏組織。孤児がこういった組織に狙われるのはよくあることだ。よくあることなのだが。

「ちょっとー！ わたしをここから出さないよー！ 誰かいないのっ、コルアーツー！！」

生憎、エンナは怯え震えて大人しく捕まっているような可愛らしい女の子ではなかった。

鉄格子を掴んで叫く。さながら、野生のゴリラのようである。

エンナの叫き声は、暗い地下牢全体に反響して虚しく響き渡った。散々叫き散らしたが、誰もやって来ない。やがて、疲れて叫くのを止めたエンナは、鉄格子に寄りかかるようにして、ズルズルとその場に座り込んだ。

どうにかして、ここから一刻も速く抜け出さなければ。

明日にはここから連れ出され、競売先へと向かうだろう。そうしたら、その競売先で捕らわれている他の子達と一緒に檻に入れられ、明後日には売られてしまう。

冷え切った素足の足を合わせ、身体を包み込むように抱くと身体をさすった。

それにしても寒い。寒くて考えるのに集中できない。

エンナが寒さと焦りで苛立っていると、コツコツと硬い音が聞こえてきた。足音だ。この連中の誰かが見回りにでも来たのだろう。怒りが込み上げてきて、不機嫌に顔を顰める。

ああ、腹立たしい！！ 一言文句言ってやる！

エンナの所まで足音が二、三步というところで、頬が膨らむ程息を一杯吸った。

声を掛けてきたら、そこで痛恨の一撃を食らわせてやる！ そう意気込んで。

「あんたがエンナさん？」

あのむさつ苦しい男共にしては随分と可愛らしい声に驚く。アルトかテノールか、そのくらいの音域の声は、エンナの耳に心地良く入ってくる。

不審に思い、エンナは恐る恐る振り返った。するとそこには……超が付くぐらい、それはそれは綺麗な女の子が立っていた。

年の頃は、自分と同じくらいとみた。

エンナは、保存していた息を止めて、あんぐりと口を開けたまま少女を見つめた。少女の持つ手燭の灯火と廊下を照らす燭台だけが頼りだが、この少女が綺麗であることは間違いなくわかる。昼間の時のような明るい場所で見たら、さぞ美しいことだろう。

彼女は、惚けてしまっているエンナの目線に合わせるようにしゃがみ込むと、にっこりと笑んだ。

「今晚は、そして初めましてエンナさん。あなたを助けに来ました」「……はっ？」

突然のことで、エンナは更に呆然とする。

助けに来たって誰を？ わたしを？ なんで、どうして？

まさかこの子も連中の一人で、助ける気なんてサラサラなくせに、そう言うてからかかってるだけなのかも。いや、でもこんな綺麗

な子がこんなところにいるのも変……

訳が分からず、思考回路の線路をぐるぐる回っていると、彼女は立ち上がった。

「詳しいことはまた後で話すとして、まずはここからさっさと脱出しないとね」

彼女は入り口に近付くと、鍵穴に手を押し当てた。

一体全体、何をしているのだろう。まさか、この鉄で出来た格子を壊そうとしているのだろうか。この美少女が筋肉ムキムキ野郎のような怪力には見えない。そんな怪力があっても鉄格子は壊せないと思うが。

暫くすると、鍵穴の中から赤い光が漏れてきた。ジジーツと鍵穴から何か聞こえてくる。

「そろそろ頃合いかな」

少女が軽く戸を押しした。そんなんで開くかと思っただが、驚いたことに鉄格子の戸は何の抵抗もなくすんなりと開いた。

目を丸々と見張る。施錠はすっかりとしてあったはずだ。エンナは、どうにかならないかと何度か戸を揺さ振ったり試してみていたが、びくともしなかった。それがどうして……

「そこでぼうつとしてるのもいいけど、いいの？ 逃げなくて」

エンナは、開いた戸と少女を交互に見比べた。

もしかしたら、これは罠かもしれない。裏の人間という者達は、人を貶めるのも死んでいくのも、全てが遊びでそれが快樂なのだ。

でも、何も出来ないままここで叫んでいるよりは、外に出た方が逃げ出せる可能性はある。

エンナは覚悟を決めて立ち上がった。

この少女、只の美少女というわけではなさそうだ。でも、自分よりも華奢な身体付きに見えるし、何かあれば力業できっとどうにかできる。

牢屋の入り口から一步、そしてもう一步と廊下へエンナは出た。

それを見ていた美少女は、エンナが大人しく外へ出ると満足そうに笑う。

「こっちだよ」

エンナの手を引っ張って少女は先へと導いた。

* * *

暗くて寒い地下から抜けて、今度は地下よりも真つ暗な通路に出た。隠し通路なのか、それとも逃亡を防ぐためなのか、石のブロックで出来た通路には、室内灯が一つもなければ窓もない。まるで、長方形の箱の中にも閉じこめられている気分だ。少女の持つ手燭の炎だけが唯一の頼りである。

少女に導かれるまま、二人は心持ち駆け足で先へと進んだ。

少しすると、エンナを誘導していた少女が立ち止まる。急に少女が止まるので、エンナは前につんのめりそうになった。

「急に止まらないでよ」

エンナが文句を言うと、少女は手燭を掲げた。

掲げた炎の光は闇に吸い込まれず、何かに当たってその姿を映して光が帰ってくる。木製のドアだ。地下よりも暗さに関して地下

らしい通路からやっとなげ出せるようだ。

速くここから出たい。逃げ出したい。

そんな気持ちが先走って、エンナは急いでそのドアへ駆け出そうと足を踏み出した。が、それを少女が腕を垂直に上げて制する。

何か言おうとすると、少女はエンナの方に顔だけ振り返って、しゅんと人差し指を口に押し当てた。そして、ちよいちよいつとドアの向こうを指すように指差す。

エンナは訝しんでドアの外へと耳を澄ませた。微かだが聞こえる。ドアから少し遠いところから、足音と話し声だ。

「おい、あそこ。どうして見張りがいないんだ」

「さあ、サボってんじゃね」

どうやら、この組織の仲間が見回りに来たようである。

見張りがどうのと言っていたから、このドアのところにも当然見張りがいたのだ。それをこの少女がどうにかした、と。

.....

これは非常にマズい。

ここは商品を逃がさないための重要なポイントのはずだ。いくらなんでも、ここに誰もいないなんて可笑しい。

「そんな馬鹿な。大切な商品をしまっておくところだぞ。流石に見張りの奴らがここから離れるのはおかしいだろ」

ああ、ほら。あいつらも訝しんでるよ！

「うーん、やっぱりそう簡単にはいかないか」

少女は、ふうっと溜息をついて肩を竦めた。

なんでこの子こんなに余裕なの！

「ど、どうするのよっ。ここ、何処も隠れるところないわよ!？」

エンナは、なるべく声を潜めて少女に言った。見付かったら一巻の終わりだ。

少女は目をパチクリさせて、何が可笑しいのかふつと笑う。

「面白いこと言うね。そりゃ、ここには隠れるところなんてないだろっせ」

少女は不敵に笑った。

どうして、この少女はこんなにも余裕綽々なのだろう。

流石のエンナも心中焦りまくっているというのに。心臓が早鐘のようにドクドクいつている。

「あんたはー、二歩下がってて。下がったら蠟燭の火を消すけど、驚かないでそこで大人しくしててね」

「えっ」

彼女の真意が分からず、エンナは眉を潜めた。一体何をするつもりだろうこの子は。

「考えてる暇はないよ。ほら、あいつらが来る」

そこを畳み掛けるように少女が言った。確かに足音がどんどん近付いてくる。

考える余裕もなく、エンナは慌てて彼女の指示に従った。この状況では従うしかない。

ええいつ、もうこうなったらどうにでもなれよ！

「エンナ、良い子だね」

彼女はにっこりと笑うと、エンナを褒めた。まるで、小さい子を褒めるような感じだ。

そうして、少女はふつと息を吹き付けて蠟燭の火を消す。一瞬のうちに、この通路を闇が支配した。

その間も足音は近付いてきて、エンナの心臓は爆発寸前だ。心臓が今にも胸から飛び出してきそうな程。

暗くて何も見えないせいか、耳だけが嫌に周りの音を拾ってくれる。男達の足音だけは特に目立って聞こえた。

あの子はちゃんとここにいるのだろうか。

まるで自分一人だけ、ここに取り残された錯覚を覚える。

色々な不安がのし掛かって、エンナは手をぎゅっと握り生唾を飲んだ。

大丈夫、大丈夫……何かあった時はあった時。その時は自分の本能のままに動けば怖くないわ。上手くいく、きっと。

そうやって自分を気丈に奮い立たせて、いつもの勝ち気な自分を保つので精一杯。

あぁっ、もう奴らがそこまで来てる！

ドアが勢いよく開かれて、真っ暗だった通路に光が差し込んだ。

男は二人、どちらとも体格はがっちりとしている。

ドアを開けた男が目の前の少女を見て眉を潜めた。

「女？」

「今晚は」

美少女は極上の笑みを浮かべて、夜の挨拶を男達にする。

少女の笑顔に男達は魅了され、固まってしまった。

その隙を少女は見逃さなかった。少女の瞳が鋭く光る。

少女は素早く飛び上がると、身体を捻ってドアを開けた男の上顎の部分に思いつき蹴りを食らわせた。

いきなりの先制攻撃。

何が起こったのかわからなかった。ただろう男は、倒れてそのまま気絶した。気の抜けた表情のまま横っ面が潰れて変形してしまっている。

後ろにいた男も展開についていけず、只呆然と目の前の男が倒れるのを眺めているのみ。

少女は着地するとその勢いのまま、今度は呆然とする男に飛び込んで拳を腹に打ち込んだ。

「はっ」

男はお腹を押さえて蹲る。そこを容赦なく少女は蹴り倒した。

「エンナ!!!」

事の成り行き只見ていたエンナは、自分の名を呼ぶ声にハツとなる。

一人は気絶し、もう一人は苦痛に動けない状態。

今ならここから抜け出せる。

少女はエンナの腕を掴むと、通路から廊下へ出て走り出した。

廊下には室内灯が等間隔に設置してありとても明るい。エンナ達が通ってきた通路とはえらい違いだ。しかも、赤い絨毯のお陰で足も冷たくならないから助かる。

「侵入者だ……！ 侵入者だぞー！！」

エンナは走りながらその声を聞いて後ろを振り返った。床に這い
蹲り苦痛に顔が歪んだまま男は力の限り叫んでいる。
これでは見付かるのも時間の問題だ。

「そうそう、しっかり仲間を呼んでくれよ」

「アンタ何言ってるの！？」

聞き捨てならない言葉だ。

自分達は今まさに逃げているのだ。

少女の言葉は、自分達を追い込む言葉である。

それをこの少女は笑顔で言っている。しかも、若干楽しそうに。
遊びと勘違いをしているのではないかと思う程だ。

「いたっ、やつらだ！！」

案の定見付かった。

仲間の声を聞きつけた男達が前から突進してくる。

エンナはそれを見て立ち止まりそうになったが、少女がそれを許
してくれず、引っ張られるまま走る。

このまま突っ込むつもりだ！

そして、少女は空いている手を翳して叫んだ。

「< 発火せよ！ >」

すると、なんとということか。

室内灯の幾つかがパンツと弾けたのだ。

そこから小さな炎がちろちろと溢れ出るように燃え、火の粉が男達へ襲いかかる。

「うわ、あちっ、あちちちちっ！」

「くそっ、なんだこれは！」

男達は驚いて立ち止まり、自分達の髪や服に燃え移る火を必死で消している。

しかし、消しても消しても壊れた室内灯の中から火の粉が舞い出て、男達へまとわりついていく。なんだか不思議な光景だ。

二人は、慌てて火を消す隙に男達の間を擦り抜けて疾走した。

だが、ここを突破しても次から次へと組織の連中が沸いて出てくる。何処からと言いたくなる程だ。

それでも迫り来る男達を少女がちぎっては投げちぎっては投げ、たまに不可思議な力で連中を退けどうにか逃げている。

見た目は可憐な少女なのに、それに反して随分と腕っ節が良い。

一体、この少女は何者なのだろうか。

わかるとすれば、徒者ではないということと、エンナでは到底この少女には敵わないということくらいだ。

少女に導かれるまま走り続けると、いつの間にか屋上へと出ていた。夜空に浮かぶ月と星々が二人を出迎える。

「どうするの。これじゃ逃げられないじゃないっ」

エンナは肩で息をして、乱れた呼吸を落ち着かせてから少女に訴えた。

改めて周囲を見渡しても見晴らしが良いという以外は何もない。

少女は、うんと少し考える素振りを見せたが、その顔には不適な笑顔が広がっている。どう見ても真剣に考えているようには見えない。

「取り敢えず、こつするかな」

少女は手を翳し唱え始めた。

1・空中ダイブ（2）

「<我が精霊にして 炎の化身ファイリア 我が声に答えよ>」

すると、少女が翳した手の先に赤い光の粒子が集まりだして、集まった粒子が渦巻き、赤々と燃え上がる炎の球体を作り上げていく。それをエンナは目を見張って見ていた。

この子、もしかして……

「<私の道阻むものを破壊し 切り開け！>」

少女は呪文の終焉を高らかと告げ、それと共に炎の塊を前方へと投げつけた。

空気中の酸素を燃やしながら、炎の球は石の壁に吸い込まれるように一直線に向かっていく。

次の瞬間。

轟音が轟き、爆風が吹き荒れた。風に乗って叩き付けてくる砂埃にエンナは思わずぎゅっと目を瞑る。

少しすると強風が収まり、エンナは閉じていた瞼を開けた。

そして、エンナの目に飛び込んできたのは、無惨に破壊された壁。ぽっかりと穴が空いたそこを通り道に夜風が吹き出してくる。

エンナはよろよろ近付いて、そこから見える景色を呆然と眺めた。景色を遮るものがなくなって、さつきよりもっと見晴らしが良いい。ここから朝日を見られたら、さぞ美しい風景だろう。

「よし」

少女は腕を組み、その眺めを見て満足そうに頷いた。

「いや、よしじゃないでしょよしじゃー!!」

現実逃避をしていたエンナは、少女の満足そうな声に我に返ってすかさず突っ込む。

自分が何をしでかしたかわかっているのかこの子は。

「どうすんのよこれ！　こんな派手にぶっ壊しちゃって!!」

「いいじゃん別に。自分の家じゃあないんだから」

「そういう問題じゃなくてー!!」

エンナは髪がぼさぼさに乱れるのも構わず頭を掻きむしった。

もし、ここで二人共々捕まったら、一体どんな仕打ちが待っているのか。

一応、エンナは“商品”ではあるのだし、いたぶられることはあるかもしれないが、殺されることはないだろう。そんなことをしても、やつらの利にはならない。

しかし、郭になんて売られでもしたら……

考えただけでもぞつとする。

特にこの少女は美麗だから尚のことだ。

通常の競りならまだ良い主人に巡り会える可能性が　極めて低いがないわけではないから、遊郭に売られるよりはこちらの方がまだマシである。

「てめえら！　やっと追い詰めたぞー!!」

そうこうしているうちに、連中が屋上の入り口からぞくぞくとやってくる。

そして、穴が空いている壁を見て、皆一様に愕然としている。

もう駄目だ。終わった……

エンナは、半分灰になりかけた。いや、もういつそのこと、灰になってしまったかった。そうしたら、風に吹かれて跡形もなくここから消え去られるのに。

「あああああつ！ てめつ、頭の屋敷を壊しやがったな！？」
「うん、少しだけね。いいじゃんこんくらい。許してよ」

なんの悪びれた風もなく、少女はそんなことをのうのうと言っただけのけた。

「バツキヤロー！！ これが少しってレベルか！？ 許せるわけがねーだろっ！」
「ちよつと待て」

今にも襲いかかってきそうな勢いの男を遮って、敵つい身体と顔をした大柄の男が前へ出た。そうすると、ギャンギャン吼えていた男はすぐに口を閉じ、大人しくなってしまう。

どうやらこの男、ここにいる連中の中では立場は上の方にいるらしい。

「女、お前、精霊使いだな」

眉間に皺を寄せ、少女を睨み付けながら男は言った。

その言葉にエンナは確信を得、あの男以外の組織連中は狼狽えた。今まで彼女が見せたあの力。

それがもし、魔法だったのだとしたら、魔法が廃れたと言っても良いこの世界で、唯一それを扱えるのは精霊と契約を交わした精霊使いのみだ。

少女は、口端を吊り上げて不適に笑う。

「女？ 女って誰のこと？」

男達は皆眉を潜めた。それは勿論エンナも。

誰ってお前のことだよ、と皆の目が言っている。

しかし、その目が一斉に驚きに変わり息を呑んだ。

エンナも固唾を飲んで少女を見る。

なんと、少女の身体から朱色の炎溢れ出して、その炎に包まれてしまったのだ。

少女の長い髪が、服が、揺らめく炎ではためき、黒く変色したところからボロボロと崩れ始め、灰が風に攫われていく。

エンナは立ち尽くして、事の次第をただ見守ることしかできなかった。それは男達も同じようだった。手を出すこともなく、その場に立ち尽くしてしまっている。

そうして、粗方少女の髪や服が燃え尽きた後、まるで終止符を打つように炎が激しく燃え上がり一気に沈下した。

炎の中から姿を現したのは、先程とは随分違う身装の少女だった。背中に流れるような茶色の髪は、ショートカットの鮮やかな赤い髪に。

服装は、膝丈のゆったりしたワンピースから、ズボンにワイシャツの装いに。スラリとした体軀をしている少女なので、シンプルな服装でもよく似合う。

変わらないのは、彼女の端麗な容姿とブーツくらい。

それにしても、随分とスマートになったものである。胸もなければ腰の括れもない。

その姿はまるで……

「やっとあの格好から解放された。ホント、スカートって動きにくくて」

まいったまいったと呟きながら、少女は服や髪についた灰のカスを手で払って落としていく。

この時エンナは、あんなに燃えていたのに大丈夫かとか、服が勿体ないとか、色々言いたいことはあったが、最初に出てきた言葉は。

「アンタまさか、お、おおとっ、おと」

エンナは驚愕して、たった一言なのにつつかえて上手く言葉に出ない。

そんなはずはないという信じられない気持ちがあったからかもしれない。

少女はエンナの方に振り返るとにつこり笑った。

「うん、僕は男だよ」

エンナの言わんとしていることを察して、さらりと肯定。

「そんな馬鹿な……」

一瞬の静けさの後、そう言ったのは男達の中の一人だった。

信じられないというより、それこそが偽りで、どうしてそこで嘘を突くのかと想っているようだ。

全くその通りである。

こんな綺麗な男がいたら、女であるエンナの立場がない。信じられない気持ちは十分理解できる。

しかし、一応女の子なエンナにはわかる。

それは女の感という不確かなものだが、案外と当たる確率が高い直感だ。それにちゃんと観察してみたのだから、間違いない。

この少女は、信じたくない事実だが……男だ。

「ここで嘘突いたって仕方ないでしょ。まあ、そんなに信じられないなら上半身脱いで見せても構わないけど？」

少女、いや、少年は可愛らしく首を傾げてみせた。

暫しの沈黙が流れた後、周囲は一斉に震撼した。

「男ーっ!？」

「嘘だろっ」

「俺めっちゃ好みだったのに……!!」

そんな男連中の悲痛な叫びは、エンナにもよく分かる。思わず頷いてしまったくらいだ。好みのどののはよくわからないが。

この中でリーダーらしきあの男が、傍で「好きだったのにー!!」と嘆いて落胆している男の頭を思いっきりぶん殴った。

24

「何ふざけたことを言ってやがる！ 女だろうが男だろうが、相手は侵入者だぞー!!」

「そっつうがあれば……」

反則だ、と殴られた男が目には涙を浮かべ、痛そつに頭をさする。

「この馬鹿野郎共が！ 良いか、奴は精霊使いなんだ!!」

目を覚ましやがれ！ と男が喝を入れた。

その言葉に連中はハツとする。そっつだ、相手は精霊使い。容姿や性別など関係無しに精霊使いは危険な存在だ。

男達が自分を取り戻し始め、緊張が一本の線になってピンと張り詰める。

皆の視線はただ一つ。

少女……ではなく、あの少年だ。

少年はそんな彼らを見て肩を竦めた。

「見逃しては貰えそうにないようだね」

「何を当たり前なことを」

「まあ、そう言わずにさ……見逃してよ」

エンナは、そう言って妖しく微笑む少年を見ていて、その瞳に吸い寄せられるような不思議な感覚を覚えた。

何故か目が離せない。頭もポーツとしてきて、何も考えられなくなってくる。

「魅了、チャームか……！！ おいつ、奴の目を見るんじゃない！！」

リーダーの男がいち早く異変に気付き、周囲を叱り飛ばした。

その叱責の声で、夢現だった男達が次々と我に返る。エンナも夢から覚めるように現実へ引き戻された。

どうやら、この少年がまた何かしたようである。

「おっさん、なかなかやるね」

少年はにやりと笑った。

「知り合いに魔法に詳しい奴がいるんでな」

おっさん呼ばわりされた男は、それを怒るでもなく受け流して、警戒を緩めずに少年を睨め付ける。

「ふうん、成る程ね。他の奴らと違って、あんたとなら少し楽しみ
そうだ」

彼は不適な笑顔のままそんなことを言う。

「そんなわけで、僕はコイツらの相手をしてるから、エンナは先に
下へ降りててくれる？」

「やっ、アンタ何言ってるの」

いきなり話を振られた上、先に降りるとは意味がさっぱりわから
ない。

「だから、先に逃げててくれって言ってるんだけど」

「この状況でどう逃げると」

「そんなの、そこから逃げればいいだけじゃないか」

彼は、自分が空けた壁穴を当然と言わんばかりに指差した。

壁穴から風が入ってきて、エンナの髪を攫う。

下へ逃げ降りる。

それってつまり……

「まさか、ここから飛び降りると……そういうこと？」

「うん」

彼は満面の笑みで頷いた。

「益々何言ってるの！？ こんな高いところから落ちたら死んじや
うじゃない！！」

「大丈夫大丈夫。僕の仲間が下にいると思うから、きっと上手く受
け止めてくれるよ、多分」

「さつきから“思う”とか“きつと”とか“多分”とか、不安要素満載なんですけど！ 大体、こんな所から飛び降りたわたしを受け止めたら、その人まで死んじゃうって！！」
「大丈夫だつて」

少年は、満面の笑顔のまま、エンナの後ろから両肩を掴んでぐぐくと押してきた。

それにエンナは必死に抵抗する。
ここから飛び降りるなんて、自分から死に行くようなものではないか。

しかし、エンナの抵抗虚しく、あっという間に穴の縁まで追いやられてしまう。

眼下に薄暗い森が見える。あと一歩踏み出したら、地上と激しいご対面を果たさなければならぬ。

エンナの顔は真っ青になった。

「ちよつ、無理無理無理！！ マジ無理だつて！ ぎゃああっホント勘弁してー！！ アンタわたしを殺す気！？」

「あつはは、そんなわけないじゃないか。大丈夫、怖いのは最初だけだよ」

少しも大丈夫ではない。

「最初だけって何！？ こんなこと一度だつてしたくないんですけど！ てか、アンタ今笑ったわね！？」

今まさに少年はとんでもないことをしようとしているのに終始笑顔である。

心底楽しそうだ。

「深刻な顔よりは、笑ってあげた方が安心するかなって思っ
「トンチンカンだってそれ！ とうか全然そんなこと思っ
い癖に！！」
「エンナ」

少年は、エンナの身体を自分の方へ向かせると、じっと彼女のこ
とを見つめた。

真剣に見つめられたエンナは、金縛りにあつたように固まる。
いきなりそんな目で見られては、どう反応を返せばいいのか困る。
そして彼は、にこつと可愛らしい笑みを浮かべて、

「じゃ、頑張つてね」
「へっ」

とんつとエンナの肩を押した。
エンナの身体は外へと傾き、落ち際に見えた少年は、良い笑顔で
エンナに手を振っていた。

その向こうに見えた男達は一様に「あっ」という表情をしている。
「いやああああっ！！」

そうして、エンナは外へとその身を投げる羽目になったのである。

* * *

エンナは、一瞬のうちに思い返した自分を凄いと褒めた。
それと同時に、走馬燈というものがどういったものなのか理解す
る。

人が死に際に過去を思い返すとはよく聞くが、まさか自分がこの年でそれを体験することになるなんて。

(教会のみんな、心配してるかな……)

エンナは自分の義兄弟達を、優しく見守ってくれた神父様を想う。血は繋がってなくとも、そこには温かな家族という絆があった。エンナの大切な帰る場所。居場所だった。

そういえば、まだ小さい義弟妹のことが心配だ。大丈夫だろうか。いや、自分がいなくなっても、上の子達が面倒を見てくれるだろう。どうせ、もうすぐエンナは教会から出ていかなければならなかったし、上の子達もよく小さな義弟妹の面倒を見てくれていた。心配ない。

しかし、結局神父様には最後まで孝行することができなかった。自分が働くようになってお給金が貰えるようになれば、そのお金を寄付して、少しでも教会の力になればと思っていたのに。それが悔やまれてならない。

(神父様、義弟妹のみんな、ごめんね……)

エンナは、心残りが一杯あるなと思いながら、意識を手放そうとした。

ああ、神様。教会で育った癖に信心深いわたしじゃなかったけど、今まで精一杯、真面目に生きてきました。都合が良すぎますが、死後はどうか、どうかせめてみんなのことを見守れる天国へとお導き下さい。

「わぶっ!」

そろそろ目を閉じようとした時、強風がエンナを襲ってそれを阻んだ。

息ができないくらいの強い風。

まるで、落ちていくエンナの身体を押し戻そうとしているかのよう
うに天に向かって吹く。

確かに、落ちる速度が緩やかになったような気がした。

今度は風が包み込むようにまとわりついて、エンナの身体を一回
転させる。真つ逆様に頭から落ちていた身体が一瞬ふわっと浮遊し
て、普通に座っている時の状態になった。

そして、すとん……と何か温かいものに受け止められる。それは
驚く程軽く、来ると思っていた痛い衝撃もない。

不思議に思い、エンナは恐る恐る固く閉じていた瞼をゆっくり開
けた。

どうやら、エンナは誰か抱き止められたらしい。

その誰か確かめようと目線を上げる。

驚いてエンナは目を丸くした。

1・空中ダイブ（3）

精悍な顔立ちの青年がこちらを静かに見下ろしていたのだ。

目の色はよくわからないが、スツと涼しげな切れ長の目。髪は癖毛なのか柔らかかそうで、月の光でキラキラと金色に輝いている。

息をするのも忘れて、エンナは彼に魅入った。が、自分の置かれた状況にすぐ気付くと、顔から火が噴くように熱くなる。

エンナは、彼に横抱きに抱かれていたのだ。俗に言う、お姫様抱っこというやつである。

「あ、あの……」

恥ずかしくて目をキョロキョロさせる。

男の人にこんな風に抱かれたのは初めてのことで、正直どうしたらいいのかわからない。

「シエル!!」

青年の腕の中でオロオロしていると、頭上から少年の叫びが降ってきた。

その声にエンナと青年はハッと上を見上げる。

なんと、あの少年が空に身を投げていたのだ。

「痛っ」

それを見た青年は、エンナから急いで手を離す。

支えを失ったエンナの身体は、地面に落ちて腰を打った。

エンナは顔を顰めて、痛めた腰をさする。

なんて酷い青年だ。一応、こう見えてもエンナだってか弱い女の

子である。それをこんな乱暴に扱うなんて、女性の扱いがなっていない。

恨みがましく見ると、青年はエンナの方は見向きもせず、あの美少年に向かって手を掲げ、空を切るようにサツと腕を振った。

突然、強風が吹いた。

まるで少年の身体を下から上へと押し上げるように吹いている。すると、少年の落下速度は急速に遅くなった。

その風に乗るように彼は落ちてくる。地上からあと三メートルというところで、一、三回身体を回転させ軽やかに着地した。

「流石、シエル。よくわかったね」

少年は青年に笑いかける。

シエルと呼ばれた青年は、無言のまま頷いた。

「確かにそうかもしれないけど」

と、少年は一人で話し出し、クスクス笑う。

エンナは眉を潜めた。

シエルは何も言っていないのだが、少年は青年と会話しているように話している。物凄く奇妙だ。

「ほら、大丈夫だったでしょ？」

少年は、事の有様を只もう呆然と見守っていたエンナに、あの憎たらしい笑みで話しかけた。

「なあにが“大丈夫だったでしょ？”よ！全然大丈夫じゃないつての！！こちら死ぬ思いだったんだからねっ！？」

それに我に返ったエンナは、すぐさま少年に抗議した。怖いも通り越して死ぬような思いをしたのだ。笑い事ではなく、本当なら彼の胸ぐらを掴んで食って掛かりたいところだったが、足に力が入らなくて立ち上がることができない。どうやら、腰を抜かしてしまったようである。なんて情けない。

「まあまあ、それでも傷一つなく無事だったんだからいいじゃない」「アンタねー！！」

全く詫びれた風もない。

「さて、そんじゃ連中が下に降りてこない間に逃げるか」

少年はまだ何か文句を言いつけそうなエンナに背を向けて、傍に待機していた馬に跨り、鞍に吊っていた外套を外して羽織った。

この状況になんとかついていくことと先程の恐怖体験で頭が一杯だったエンナは、そこで始めて馬が二頭いたことに気付いた。

シエルは、動けずにいるエンナをいきなり無言で軽々と横に抱き上げる。吃驚しているエンナをそのまま彼の傍にいた馬に座らせ、その後ろに彼も跨った。

驚きが驚きを呼んで、エンナの思考が停止する。

この構図は、あれだ。

女の子達が憧れる構図である。乙女ちっくな恋愛小説には、よく使われているネタの一つだ。

それを今、恋愛なんて程遠い人生を送ってきた自分が体験しようとは。

そんなエンナをお構いなしに、準備ができると少年が馬の腹を蹴って走り出した。それに続くようにシエル達の馬も走り出す。

「わっ」

驚きと緊張感でガチガチに固まっていたエンナだったが、走り出す馬の揺れに耐えきれず、シエルの胸に思わずしがみついてしまった。

どかーっと、恥ずかしさでまた顔が熱くなる。

「ご、ごめんなさっ、わわっ」

慌てて手を引っ込めようとしたが、激しく揺れる馬上では無理な話だった。結局、シエルの胸に縋り付くしかない。

エンナはちらっとシエルの様子を伺う。エンナが彼の服を掴んでいることについて全然気にしていないようだった。目線は先を見つめたまま、ひたすら馬を走らせる。

なんだか不思議な青年だ。

月の淡い光を街灯変わりに森に囲まれた暗い街道を二頭の馬が駆け抜ける。

少しすると、後ろから馬の蹄の音が聞こえてきた。

組織の奴らが追ってきたのだ。

「あちらさんも必死だな。って、売りものが盗まれたとあつたら、留守を守っていたあいつらの面目は丸潰れだから、それも当たり前か。シエル、任せても良いよね」

少年は、シエルに目線だけ投げ掛け言った。

シエルは頷くと、片方の手を手綱から放し指を啜え、ピーッと指笛を鳴らした。

「わあああああっ！！」

「前がっ」

「今度は何だつてんだ……！！ 進めねー！！」

すると、後方から連中の悲鳴が聞こえてくる。

一体、彼らの身に何が起こったのか。

エンナは後ろが気になったが、落馬をしないように必死の彼女に様子を伺う余裕などなかった。

そして、奴らが足止めを食らっているその間に、エンナ達は夜の中へと逃げ果せたのである。

2・精霊使い (1)

組織の追っ手を振り切ったエンナ達は、あれから馬をひたすら疾駆させた。

馬が疲れるまで彼らは走らせるつもりなのか、あと少しで夜も明けそうなのに一度も休憩を取っていない。

しかし、馬が疲れる前にエンナの方が参ってしまいそうだった。必然的にシエルに引っ付いているような状態なので少しは暖かいのだが、身体も足も冷たい夜風に晒されて、すっかり冷え切ってしまった。

乗馬なんてしたこともないものだから、お尻もかなり痛い。体力的にもう限界だ。

エンナが根を上げようとした時、馬が嘶いてその足を止めた。そこには、木々の開けたスペースに一件の小屋が建っていた。窓から光が漏れている。人が中にいるのだろう。中からドタバタする音も聞こえた。

「おや。誰か僕達を追いかけて来たかな？」

少年は、はて？ と顎に手を添え首を傾げつつ、表情は楽しそうに笑みを綻ばしている。

慌ただしい音が木戸に近付いてくると、ドアが勢いよく開かれ、

「リユーリ様!!」

そこからこれまた勢いよく女の子が飛び出してきた。

辺りが大分明るくなってきたお陰で、その女の子の容貌がはつきりとわかる。

美しい巻き毛の金髪を一つに纏め、年頃の女の子にしては服装はピシッときまっていた。

ワインレッド色のコートを羽織り、豪華なダブルフリルの白いブラウスを着ている。下はズボンと茶色の革製ブーツを履いていて、どれも高価そうだ。コートなんか金糸の上品な花だか葉っぱだかの刺繍まで施されている。

瞳の色は、普通の人間ではありえない薔薇色で、それがとても華やかだ。

「ああ、ローズ。わざわざここまでご苦労さん」

「リユーリ様、これは一体どういうことですか!? この作戦は、わたくしとシエル様が行うものだったはずですわ。それを貴方ってお人は……」

ローズは、可愛いが少しキツイ顔立ちのため、目を吊り上げてリユーリに噛み付く彼女の姿は迫力があつた。

「だって、その方が良いかなと思って。ローズがどんなに強くても、一応女の子だしね」

「まあっ、そのような理由で！ 貴方は仮にも隊長という身。隊長が副隊長を連れて一緒に出陣というのも考えものでしょう!! それに、折角のわたくしとシエル様の共同作業でしたの……!!」

なんだか物凄く不純な理由が聞こえたのは気のせいだろうか。

シエルは、後者の言葉にきゅっと眉を寄せた。

「って言われてもね、これはあのお方立っての願いでもあるんだよ」

「そ、それは……」

ローズはその一言でぐつと言葉に詰まる。
少しすると、ローズが目を見開いて驚いた顔をした。

「しかし、シエル様って、あああああああ！！」

何か言い掛けた後、ローズは更に更に驚愕し目を見開く。

「今度は何？」

「あれっ、あれは……」

ローズは、口元を手で覆い、残った手を震わせながら、顔を青くしてエンナ達の方を指差した。

なんで初対面の人に指を指されなければならないのか。とても失礼である。

始めはわからなかったエンナだったが、そこで自分がどういう状況にあるのか思い出した。

そういえば、今はシエルの馬に横座りで座っている。しかも、不可抗力とはいえ、結構身体が密着した状態。

エンナは顔を少し赤らめて、反射的にパツと身体を離れた。

「ご、ごめんなさい」

別にエンナは悪くないのだが、居たたまれなさで恥ずかしさで思わずシエルに謝る。

その様子を見て、ローズの顔は青リンゴのような色から熟れすぎたトマトのような色に染まった。相当、彼女の怒りを買ってしまったようだ。

「なんとということ」

今にもリユーリに噛み付いていた勢いでエンナに食って掛かりそうなローズをシエルは目で制する。

少しの間した後、何故かローズはショックを受けている。リユーリは可笑しそうに笑った。

「そうだね。僕も疲れてヘトヘトだ」

リユーリとシエルは馬から降り、ローズは固まったまま二人のこ
とを見ている。

この三人はどんなやりとりをしたというのだろうか。

シエルは一言も、というより声も出していないければ、口も喉も動かすことすらしていない。それでもこの三人の会話は、エンナの知らないところで成り立っているようだ。

さっぱりわからない。

エンナは腕を組んで考えていると、誰かの視線を感じた。

気になってそちらに目を向ける。シエルが降りないのかと言いた
そうな顔をしてこちらを見ていた。

そして、彼は何を勘違いしたのか、両腕を上げてみせ小首を傾げ
た。

多分、彼の言いたいことはこうだ。

一人で降りられないなら降ろしてやるうかと、そんな風に言いた
いのだと思う。

シエルの向こう側で、ローズがこちらをずっと睨め付けている。
彼女から嫌に黒いオーラがもわもわと漂っているのが見えた気がし
た。

「大丈夫っ、一人で降りられるわ！」

エンナは慌てて首を振った。

まさかそんなところまでお世話になるわけにはいかない。

それに何より、ローズが怖すぎて仕方なかった。

とはいえ、シエルの親切心を踏みにじってしまったことには変わりなく、激しく首を振って拒否したエンナに気を悪くしたかと気になったが、シエルは頷くとあっさり腕を下ろした。

彼は表情があまり変わらない上話さないので、行動で判断するしかないが、どうやら大丈夫のようだ。内心ほっと安堵する。

しかし、逆に彼の向こうにいるローズはそれが気に入らなかったようだ。頬に両手を添え「まあ！」とエンナに非難の目を向ける。
なら、どうしたら良かったんですか。

と、ローズに言っただけでやりたい気持ちを抑え、エンナは慎重に馬から降りた。

ずっと座っていたのと夜風で冷え切ってしまったせいで、足が思うように動かず苦労したが、ゆっくり降りたらどうにかかった。

地面に両足を着け、何度か踏み鳴らしてみる。

よし、大丈夫。いける。

身体が上下に揺れている感覚が残っているものしっかり歩けそう
うだ。

「さて、それじゃ中で少し休むとしようか。ここじゃ話もできないし。シエル、幻視結界宜しく」

背を向けて手をひらひらと振りながら、リユーリは小屋の中へと入っていった。

シエルはそれに頷いてからエンナの背を軽く押す。小屋の中へ入

るよう促してくれているようだ。

「えーっと、じゃあお言葉に甘えて」

エンナはおずおずと小屋の中へと向かう。

ローズがじっと見つめてくる中、彼女の横を通りすぎようとした時キツと睨まれた。

完全に、ローズに目を付けられてしまったようである。

エンナは溜息を吐き出さなくなったが、後に続くようにローズがついてきたのでぐつと堪えた。

ホント、なんでこんな目にあってんだろう、わたし。

小屋の中に入ると、ありがたいことに中は暖かった。薪ストーブに火が入っているようだ。薪ストーブの上には薬缶ケトルが置いてあり、注ぎ口から水蒸気を噴いていた。

ぐるっと部屋を見回す。小屋には、必要最低限のものしかない。本当に必要最低限。テーブル、椅子、あの薪ストーブと薬缶。それくらいのもだった。

リユースは椅子に腰掛けるとエンナに向かいの席に座るよう促す。とてつもなく不潔だが、仕方ない。

エンナは不満な顔をしつつも大人しくリユースの向かい席に座った。

「で、これはどういうことなのか、説明して貰える？」

「まあまあそう焦らずに。まずは落ち着いてからね」

エンナはむすっと顔を顰める。

十分落ち着いているつもりなんですけど。

程なくしてシエルが部屋に入ってきた。幻視結界、とやらができたようである。

リユーリは笑顔で彼を迎え、自分の隣に座るように椅子を叩いた。一つ頷いて、リユーリの隣の席にシエルが着く。

こう、二人が並んでいるところを見ると凄い迫力があつた。

なんとと言っても、二人して美形。リユーリなんか少女紛いの中性的な顔立ちのため、彼があのまま女装していたら、さぞお似合いの二人になっていただろう。

シエルが席に着くと、それを見計らつたかのようにローズが三人に紅茶の入ったカップを配った。紅茶から立ち上る湯気と共に薔薇の良い香りが漂う。カップと受け皿には花の柄が入っていた。なんかどれもこれも高級そうなんですけど……

「あ、ありがとう」

躊躇いがちにお礼を言うと、彼女はふんつとそっぽを向いて行ってしまった。

「ローズの紅茶はとても美味しいんだよ」

それを取りなすかのように、リユーリはローズティを鼻に近づけその芳香を楽しむ。

そして、「ねっ」とシエルに同意を求め彼の脇を突いた。シエルは眉を寄せて不満そうな顔をしたが、諦めたのかローズの方に視線を向ける。

エンナにはわからないが、やはりシエルは何事か話しているらしく、ローズの顔が見る見るのうちに輝き始め、頬を赤く染めた。

「まあ、そんなシエル様。わたくしにはこれしかありませんもの。」

当然のことですわ」

頬に両手を添え、恥ずかしそうにもじもじしている。
こうしていれば可愛いのに、と思わずにはいられないエンナである。

「さて、少し落ち着いたところで、まずは自己紹介といこうか。僕はリユーリアス、隣はシエルヒスト。で、控えている彼女がローズニアね。見ての通り三人とも精霊使い」

改めて、エンナは三人のことを見る。

確かに彼らは揃って精霊使いだ。

散々不思議なものを見せられてきたので、リユーリについては特にそれは確定的なのだが、精霊使いには皆一様に瞳の色に特徴があるのである。

精霊と契約を交わすと、人間の瞳はその精霊の色に染まるのだとエンナは聞いたことがあった。それは多彩で、一般的な色もあれば、普通の人ならばありえない色をしている者も沢山いる。

その証拠に、彼らの瞳は、リユーリは朱色、ローズは薔薇色、シエルは翡翠色をしている。シエルの瞳も珍しいが、特に前者の二人は、普通ならありえない色だ。

「わたしは、何故かもう知られちゃってるけど……エンナよ。で、アンタ達は一体なんなわけ？」

「僕達とはある方に頼まれたのさ。エンナを助けて欲しいってね。だからわざわざエティアからここまでエンナを助けに来たわけ」

「エティアって、王都から？」

「うん、そう」

「そんなところから来たの？わたしを助けに？」

リユーリは頷いた。

助けに来たとは、一体何からだろうか。

あの組織から？

しかし、それだと時間的におかしい気がする。

エンナは別に貴族の娘でもなければ、お金持ちのお嬢様というわけでもない。沢山いる身寄りのない孤児達のうちの一人。そんな値打ちのない自分を連中は、長期に渡って計画を練り、攫ったわけではないはずだ。教会の子供なら気付かれないよう攫ってしまえば、なんてことはない。役所に行ってもあまり大きく取り出さすことはないだろうし、教会も人を雇う余裕などない。

だから、たまたまエンナが孤児なのだと知って、突発的に犯行に及んだのだ。攫った時の様子から察するにそんな感じだった。

なのに、リユーリ達は攫われたその日のうちにやってきた。

エンナが捕らわれていたあそこが何処だったかはわからないが、国の辺境にあると言っても過言ではないあの教会から王都エティアまでの距離を考えると……早くても一週間は確実に掛かる。おかしいやっぱりおかしい。

「助けにって言うけど、根本はあの組織からってわけじゃないわよね」

「察し良いね。正しくその通り。あれは偶然に起こったことで、本命は別件」

「その別件って？」

「……………」

リユーリはそこで黙り込み、紅茶を飲むと笑顔でローズに紅茶のおかわりをくれるように言った。

シエルに何事か言われて機嫌の良いローズは、嫌な顔一つせず、

寧ろにこやかにリユールのカップに薔薇の紅茶を注ぐ。

ローズにお礼を言って紅茶を一口飲むと、彼は言った。

「まあ、兎に角そんな感じだよ」

「ちよつと！　ここが肝心なところじゃないつ。そこすつ飛ばさないで説明してよ！！　わたし誰かに狙われてるの！？　それとも何か悪いことでもしましたか！？　それに“とある方”って誰なのよ！！」

「とある方はとある方だよ。僕達の上に立つ人。尊きお方だ」

「全然わからないんですけど」

「当たり前だよ。わからないように言ってるんだから」

リユールは、にこつと笑いながら飄々と言った。

わかった。この少年は黒だ。真つ黒なのだ。

あの組織連中とのやり取りや飛び降り事件のことといい、この少年、心の中に相当沢山の悪魔達を飼っているとみえる。間違いない。

こんの腹黒野郎！！

その笑顔が憎らしくて堪らない。

「アンタ、わたしを助けに来た時“詳しくは後で話す”って言ってなかった？」

「言ったよ。でも、それはイコール今ってわけでもないよね」

沈黙。

「揚げ足を取るなー！！」

エンナの鬱積は溜まっていく一方で、椅子を倒して思わず立ち上

がった。

「まあまあ落ち着いて、冷静に、ね？」

「冷静さを失わせてる張本人が言う台詞!？」

「そうなんだけど、兎に角落ち着いてよ。僕だってこれでも考え倦ねているんだ」

「何処が……」

どう見ても、人をからかっているようにしか見えない。

エンナが疑わしく目を据えてリユーリを見ていると、彼は肩を竦めた。

「本当だよ。僕はこう見えて思慮深いんだ」

「でしょうよ。狡賢そうなもの」

エンナは反撃のつもりで嫌味たっぷりと言ってやる。

リユーリはその言葉に目を数回瞬かせて、彼お得意のにやりとした含みのある笑みを浮かべた。

「うん、よく言われる」

全然、嫌味の効果無し。

その笑みを見て、エンナはどっと疲れを感じた。

リユーリは、少しも自分が悪いだなんて思っていないようである。倒してしまった椅子を起こして座り直すと、エンナは今まで溜まっていたものを吐き出すように深い溜め息をついた。

「アンタと話してたら、すっごく疲れた……」

「それもよく言われる」

また一つ溜め息。

なんか、どうでもよくないのにどうでもよくなってきた……

要は、この少年は今話す気はないのだろう。あくまでも“今は”。

時がくれば、きっと話してくれるに違いない……多分。

そう明るく考えるしかない。

例え、彼らが何者かということさえも曖昧で、気になって仕方なくても、今は我慢だ。我慢。

エンナは心の平静を取り戻そうと、ローズから貰った紅茶を一口飲んだ。

「何これ、凄く美味しい……！」

口に含んだ瞬間、紅茶の甘みと香りを壊さず、薔薇の香りが絶妙なバランスで薫る。しかも、それが強烈ではなく、優しく包み込むような品のある香りだ。飲んだ後もほのかに薔薇の香りが口の中に残り、エンナの鼻腔を楽しませた。荒れていた心がほっと安らぐ。

「当然ですわ。このわたくしお手製のオリジナルローズティーですよ。美味しくないわけが御座いません」

エンナの賛美に気をよくしたローズは、鼻高々にふんぞり返った。どうやら、ローズは乗せると乗るタイプのようだ。エンナは、これ幸いとローズを持ち上げる。

如何せん、ローズに目を付けられてしまっているのです、ここで好感度アップを図ろうというエンナの魂胆である。

エンナが褒めちぎるので、ローズの機嫌は上昇する一方、態度も

大きくなっていった。そうでしょうとも高飛車な笑声も出てくる。リユーリはそれが可笑しかったらしく、ローズに気付かれないように忍んで笑った。

そうしてやんやんやとローズを持ち上げていると、シエルがぴくっと窓の外をじっと見る。

「シエル、何？」

彼の異変に気付いたリユーリは、笑うのを止めてシエルに視線を向けた。

エンナがなんだろうと思っていると、あんなにご機嫌で優越感に浸っていたローズもそれをピタリと止んで、態度を引き締めている。

「追っ手か。結構速かったね。で、数は？ …… 十人ね。魔犬は十五匹と……」

リユーリは顎に手を添えて、暫し思案した後立ち上がった。

「休憩はここまでとしようか」

リユーリが言うやいなや、ローズはサツと素早く食器を布に包んで革袋に片付けると、駆け足で外へ出て行く。

リユーリは薪ストーブに向かって指を鳴らし、瞬時に炎を消し去った。

「さあ、エンナも外へ出て。また逃亡劇と決め込もう」

彼のトレードマークと言っても言い含み笑いを浮かべて、リユーリは言った。

2・精霊使い (2)

エンナ達が外へ出ると、ローズが三頭の馬を並ばせて三人のことを待っていた。なんとも仕事が速い。

「さて、これからのことだけど、僕が囿になって奴らを惹き付けようかと思う」

リユーリの言葉にエンナは勿論、シエルもローズも驚いて目を見張った。

「リユーリ様、それはっ」

「まあ聞いてよ。ここで四人一緒に逃げても良いんだけど、僕はここで追っ手の戦力を割く意味も含めて追跡を撒きたいんだ。エンナをより安全にあの方の下へ連れて行きたいからね」

「しかし、それなら二人組で組んで二手に別れた方が」

「それは駄目だ」

リユーリは、ローズの提案を遮るようにぴしゃりと言い放った。

どうしてだろうか。エンナもローズの案の方が良いのではないかと思う。

「もし、二人組になるとすると、何かあった時、エンナと組んだ側に大きな負担がかかる。この場合、僕としてはエンナの傍にはシエルがいて欲しいから、シエルだね。兎に角、守らなければならぬ対象側に戦力を削ぐということは、今の状況では絶対にあってはな

らない。エンナの安全が最優先」

成る程そういうことかと、エンナは納得した。

正直なところ、エンナにどんな根性があったとしても、剣技も魔法も使えない彼女はどうか考えたって戦力にはならない。寧ろ彼らのお荷物である。

そう思うと、少し申し訳ない気持ちが入り込んできた。

この場合、エンナが気にするところでもないのだが、今まで一人でどうにかやってきていた節があるので、誰かに頼るとか守られるとか、そういう誰かに甘えるということをおぼろげに思っていた彼女には仕方のないことだった。

「でしたらっ、わたくしが困りますわ。この立地条件ならわたしの精霊術の方が遙かに有利。リユーリ様の精霊では術すら発動は憚れるはず」

「だからこそだよ。ローズの言う通り、ここでは僕の術はあまり使えない。森が火事になったらその代償は大きいからね」

リユーリは肩を竦めた。

「その点、ローズの精霊術は違う。エンナをちゃんと守れる。そうだろうか？」

「し、しかし……」

そこまで言われて、ローズは何も言えずに口籠もる。だが、それでも必死にリユーリを引き留める言葉を探しているようだ。

「ローズ、さっきも言ったように、優先すべきはエンナを安全にあなたの方のところへ連れて行くこと。だったら、ここは僕よりローズがエンナの傍にすることが最善だと思うんだけど、違う？」

「それは……」

「それに僕なら一人でも平気だ。派手な術は使えなくても、僕にはこれがある」

いつの間に帯刀していたのか、リユーリは腰に吊していた細身の剣を示すように外套の隙間から見せた。

「押し問答をしている暇はないよ。ローズ、わかるよね？」

尚も言い募ろうとするローズに、リユーリは無言を言わせぬ形で理解を求める。

案の定、これにもローズは何も言えず終いで、ついには彼女は諦めてゆっくりと一つ頷いた。が、まだ納得のいっていない様子のローズの表情は曇っている。

「そんじゃそういうことで決まりね」

リユーリはその未練を断ち切るかの如く、にっこりと笑った。

「あつ、そうそう。エンナ、悪いんだけど髪の毛一本拝借させてくれない？」

「髪？ 別に、それは構わないけど……」

いきなりそんなことを頼まれて、わけがわからなかったエンナだったが、リユーリに速くとせがまれて、仕方なく頭髪を一本引き抜くとそれを彼に渡した。

「どうするつもり？」

リユーリはエンナの問いに笑顔で答えると、ズボンのポケットか

ら藁人形を取り出した。その藁人形は手の平サイズの小ささで、何故か白いワンピースを着ている。

……藁人形？

「あいつからこれ分捕つといて良かった」

何やら穏やかではないことを呟いて、リユースはエンナの髪の毛をその藁人形の中に詰めた。

その様子をエンナは冷めた目で見つめる。

「ワタシヲ呪イ殺スオツモリデスカ」

「まさか、これは魔具だよ。これをエンナの身代わりにするのさ」

魔具。

魔術という魔法が廃退してから約六百年。

魔術が繁栄していた時代は、沢山の人々がその力を使って暮らしていたらしい。しかし、その時代は今となっては過ぎ去った栄光。

その過去の遺産とも言うべきものがこの魔具だ。より豊かに暮らしていくために、当時の魔術師達が開発した便利な魔法の道具である。

現代では精霊の力を借りて魔具紛いの魔法道具が作られているが、魔術で作られた魔具とは性能が違い、魔具の方が威力も能力も高い上、道具の種類は多岐に渡る。そのため、過去の遺物という観点からでも、今では日用品として使われていた昔の魔具でさえ希少価値の高い代物なのだ。

それをリユース、いや、正確には彼の知り合いのものだったのだろうか、知り合いにしる一体何者なのか。

(もしかして、メツチャお金持ちのお坊ちゃまだったりして)

そこでエンナはハツと失笑した。

だったとしても、そんな良いところのご令息がこんな危険な真似はしないだろう。裕福な家の息子なら、こんなこと人を雇ってやらせれば良いだけの話だ。

「幻影 虚という一時の夢を見せよ ラグ」

リユーリは藁人形を鞍に結びつけ、人形の魔術を発動させる詠唱を唱える。

すると、藁人形からもくもくと煙のような、綿のような、奇妙なものが出てきた。それが人型のような輪郭を形成していく。やがて人っぽい形になるとぽんっという気の抜けるような可愛らしい音を立てた。

「なっ」

出来上がったのは、なんとエンナだった。

紛う方なき自分の姿。

違うところといえば、目に生気が感じられないことと服装が若干違うだけ。あとは非の打ち所がないくらいエンナ本人と変わらない。

「エンナ、これを」

口を馬鹿みたいに開けて偽物の自分を見ていると、リユーリは彼が羽織っていた外套をエンナに掛けた。

「これには風の精霊力が宿ってる。エンナの気を隠して守ってくれるよ」

装身具で外套が落ちないように留めながら、気安め程度だけどねとリユーリは笑って言った。

「僕達のことはシエルとローズに聞くといい。二人ならちゃんと教えてくれるだろうから」

どうやら、リユーリはエンナが彼らの正体が気になって仕方がなかったことをちゃんとわかっていたようだ。

「ええ、そうさせて貰うわ」

エンナはそれが気に入らず、不機嫌に顔を顰めた。

わかっているながらリユーリは何も言わないのだ。時間がないせいもあるかもしれないが。

準備ができると、ローズは彼女の馬に乗るようエンナに言う。シエルと一緒に乗馬させたくないのかと思ったが、そういうわけではないようだ。顔は真剣そのもので、神経を張りつめさせているのが伝わってくる。先程のローズとは偉い違いだ。

エンナがローズの馬に乗り、彼女はエンナの前へ跨ると、しつかり自分に掴まるようにに言った。

そして、それに続くようにリユーリとシエルも彼らの馬に乗る。

「待ち合わせは、そうだな。三日後、ロクの噴水の前で」

「わかりましたわ」

シエルもそれに頷いて、じつとリユーリのことを見た。また何か交信しているようだ。

「ああ、そうして貰えると助かる」

リユーリが同意を示すと、シエルは何かを投げるように腕を振った。

その“何か”が通り過ぎた、のだと思う。だと思ふというのは、エンナには“何か”が見えない、いたかどうかもわからないので確信がないからだ。只、微風が吹いた。だから、“何か”が通ったのかなと思つたのだ。

微風はリユーリの髪を撫ぜ、彼は自分の肩に向かって声をかけた。

「やあヒン。暫くシエルと離れて寂しいかもしれないけど、宜しく頼むよ」

何もいない肩に向かって言うリユーリは妙だが、そこに何かがいるのだろう。

何せ、彼らは精霊使い。その“何か”はきつと精霊だ。エンナが見えないのも無理はない。

「二人共、エンナのことは任せたまよ」

リユーリの言葉にシエルは静かに、ローズは力強く頷いた。

エンナ達の馬がその場を立ち去ろうと背を向け、歩を進めた時、

「エンナ、一つ言っておこう」

リユーリはエンナに話しかけた。

声をかけられたエンナは、気になってリユーリの方へ振り返る。

「確かにあんたは狙われているよ。色んな奴らからね」

意味深な言葉と共に、リユーリは不適に笑った。

なんで自分が狙われているのか。色んな奴らとは誰のことなのか。

問いたいことは沢山あったが、エンナがリユーリに聞く前に馬が嘶いて小走りに駆け出してしまった。

エンナは思わずローズにしがみつく。

そして、もう一度後ろに視線を向けてみた。しかし、木の陰に隠れてリユーリの姿を再び見ることはできなかった。

* * *

「あいつ、大丈夫かしら」

あの山小屋から離れ、野道を馳駆してから少時経った頃、エンナはリユーリのが気になって誰にともなく呟いた。

敵は沢山いるようだったし、リユーリ一人では荷が重すぎるのではないか。

「リユーリ様のことでしたら心配には及びません。あのお方は、剣術にしても精霊術にしても一流の腕前。この程度のことではやられるような方ではありませんわ」

エンナはローズの後ろ姿を見つめた。

出発する前は必死にリユーリを引き留めようとしていたのに、今とあの時の態度が百八十度くらい違う。

リユーリに激しく食って掛かったり、囹を必死に止めさせてようとしたり、よくわからない女の子だ。

「ええ、そうですね。あのお方はお強いですもの。大丈夫に決まっていますわ」

まるで自分に言い聞かせるようにローズは言った。
ああそうかと、エンナは思った。

ローズはよくわからないのではなく、素直じゃないだけなのだ。
素直じゃなくて、それでいて意地っ張り。

エンナは、ローズは何処か自分に似ているなと感じた。

「それよりも貴女。他人の心配よりもまずはご自分の心配をなさった方が宜しくてよ」

ローズはちらつと視線だけ後ろに投げて言った。

「えっ？」

「きましたわ！」

ローズの大声にエンナは瞬間的に後ろを振り返る。

「魔犬！」

後方から魔犬が数頭、息荒々しく追ってきていた。

黒い毛に覆われ、鋭利な刃物の如く鋭い目は赤く血のようだ。

魔犬とは魔物の一種で、その姿は普通の大型犬と相違ない。

しかし、魔物というからにはそれだけの理由がある。魔物は大概普通の動物達と姿形はなんら変わらないが、その凶暴性、獰猛性が強く危険なのだ。

そして、ここに普通の動物と魔物との決定的な違いがある。一つに、魔物達は魔術を使うことができるということ。魔術を使う動物、だから魔物。人は魔術を使えなくなってしまったが、今も尚魔物はそれを操ることができる。なんとも皮肉な話だ。

もう一つは、あの血のように赤い目。どうしてあんなに真っ赤な目をしているのか理由はわからないが、人々の間ではこのように語

られている。

『魔物の目があんなに赤いのは、人の生き血を啜っているからだ』

それが本当かどうかはわからない。だが、魔物という生き物は、それだけ人々に恐怖心を抱かせる程恐ろしい存在なのだ。

そして、今エンナ達を追っているあの魔犬。あれはイヌ科だけに魔物の中でも扱いやすい部類に入る。手懐けてしまえば、こんなに心強く頼れる存在も少ない。その手懐けるまでが大変なのだ。

「シエル様、ここはわたくしにお任せを！」

シエルが頷くとローズはコートのポケットから何かを取り出した。それを地にまき、後方へと放つ。それは黒くて小さい粒で、何かの種のようなだった。

「くわたくし達に牙を向く愚かな者達を退けなさい！」

ローズの掛け声と共にローズが蒔いた種が発芽し、盛り上がるように成長した。

薔薇だ。

蛇のようにうねり蠢いているが、あれはれっきとした薔薇だ。見事なまでに美しい赤い花を咲かせている。

走路に尋常ではない薔薇があるうが、魔犬達はその足を止めず、自分達が追っている獲物のことしか見えていないようだ。

魔犬達が構わず、その茨の生け垣を突っ切ろうとしたその途端！薔薇が一斉に魔犬達に襲い掛かった。

茨に縛り上げられるものもいれば、身体を貫かれて苦しそうに？いているもの、急所をやられ絶命しているものもいる。

それは凄惨で背筋が凍るような光景だった。

茨には魔犬の血が流れ、それが地面に滴れ落ちて血溜まりを作っている。まるで、その血を吸って薔薇が赤く染まっているような、そんな錯覚さえ覚えた程に気味の悪い有様。

そのうちの三頭は、茨の難関をどうにか抜け出せたようだ。身体に擦り傷を付けながらもエンナ達を追ってきている。

三頭の魔犬は走る速度を上げ、一頭は真後ろを、もう二頭は左右に分かれて迫ってきた。牙を剥き出し、今にも飛び掛かってきそう
だ。

「<ニコン！>」

ローズが右腕を上げるとコートの袖口から薔薇の枝が伸びてきた。ローズはそれをしっかり持って、感触を確かめるように一度振るう。薔薇の茨は、鞭の如くしななって地を叩き、土を巻き上げた。

薔薇の鞭の鋭い音に魔犬は一層警戒を増して、威圧するようにローズ達を睨み付ける。

顔の中心に向かって皺を寄せ、牙を剥き出し、こちらに眼光を光らせる魔犬に、エンナは小さな悲鳴を上げそうになる一方、ローズは負けじと威嚇返した。

双方一步も譲らず、睨み合いながら暫時並走していると、魔犬の方が痺れを切らしたらしい。一旦ローズから目を逸らし少し離れて、木々の間からタイミングを見計らって跳び掛かってきた。

「犬っころの癖に生意気ですわね！！」

ローズは茨の鞭を魔犬に向けて振るった。風を切り、容赦なく魔犬の身体を打ち付け、跳んだ反動を利用し宙へ吹き飛ばす。

跳ね返された魔犬は空中で器用に身体を捻り、眼光を怪しく光らせた。歯の隙間からも変な光が漏れている。

エンナは息を呑んだ。

この魔犬、魔術を発動させる気なのだ。

そこへ、突如頭上から別の魔犬が落ちてきて、魔犬同士が激しくぶつかり合う。間髪入れず、強烈な風が上から襲ってきて、魔犬達の身体を刃物の如く切り刻んだ。

無惨に切り裂かれた二頭の魔犬は、力尽きてそのまま地面に落ちて倒れ込む。

その時、空から一声、甲高い鳴き声が聞こえた。振り仰いでみると、黒い点が一つ、空を飛んでいるものがある。

鳥？

それが急速にこちらに近付いてくる。いや、近付いているというよりも、落下していると言った方が正しい気がした。

兎に角、それが凄く速さで降下してくる。

エンナが鮮明に視認できる距離までくると、それは大きな翼を広げて舞い降り、シエルの後を追うように彼の頭上を優雅に飛んだ。

それは見事な大鷹だった。白い眉斑に目の後ろの眼帯のような黒斑が印象的だ。

「シエル様、ありがとうございます。助かりましたわ」

先程の事は、どうやらシエルが彼の方へいった魔犬を投げ飛ばして、術を放ったようだ。

「はいっ、後ろはお任せを！」

シエルは軽く顎を動かすと、馬の腹を蹴って疾走する。その後を大鷹が翼を羽ばたかせて追っていた。

「あっ！」

エンナは、ローズの肩越しから野道の向こうに馬が四頭いるのが見えた。勿論、馬上に騎手の姿も見える。待ち伏せされていたのだ。

「あれはっ」

そのうちの一人が彼らに向かってくるシエルを見て、衝撃に声を上げた。

「風鷹のっ、風鷹のシエルヒスト！」

苦虫を噛み潰したように歯を食い縛って男は下を向いたが、意を決したように顔を上げた。

「<我が精霊グラッドよ 地を揺らし かの者の歩を封じよ!>」

男は苦渋に顔を歪めたまま地へ手を突き出し、精霊に唱える。

その男の声に答えるように、地面が重い地響きを鳴かせながら上下に震動し始めた。

「そうはさせませんわ！」

ローズは手を前へ出すと即座に己の精霊に命じる。

「<ニコン 他精霊の力を借りて 大地を縛める鎖を作り 伏せさせなさい!>」

一度太い地鳴りと共に大きく揺れた後、何かが鬨ぎ合うように大地は小刻みに動いた。

この異常事態に馬が動揺を示したが、シエルの巧みな手綱捌きで不安を一瞬で打ち消し、彼は馬を馳せさせる。

術が阻止され、シエルが接近してくるのを見て取って、四人のうち二人が腰に帯びていた剣を鞘から抜き放ち馬を駆った。

駆け出した先方を目にし、シエルの傍を飛んでいた大鷹が羽ばたいて彼の先を行く。ある程度の距離までくると、大鷹は宙に静止した。

二人の騎手は、大鷹を警戒しながらも勢いは殺さずに走り来る。

大鷹はそれを見据えた後、翼を二、三回大きくはためかせた。

そこから激しい風が生じて、草に、木々の葉に、荒々しい波を作る。土砂を巻き込んだ突風は、勇敢な剣士達を呑み込んだ。

すると、灰黄色の霧の中からあの男達二人の悲鳴と彼らの馬の嘶きが上がった。

中で何が起こっているかは、砂の狭霧のせいではわからない。しかし、あの勇ましかった男達が叫び声を立てさせるくらいのことがあったのだということは伝わってきた。

程なくして、灰黄色の煙幕の中が静寂になり、砂が空気の流れに乗ってやがて晴れてくる。

二人の男と二頭の馬が静かに倒れていた。

それをシエルは見向きもせずに通り返ぎ、その後をあの大鷹が追っついていく。ローズ達もそこを通って行く際に、エンナは道端に伏した男が微かに動いたのを視界の隅で捉えた。どうやら、気を失ってしまったただけで生きているようだ。

それがわかった時、エンナは少し安堵した。この者達は敵だし、この状況で他人の心配なんてしている暇はないのだが、やはり人が殺されたり、死んでいるところなど目にしたくない。

相手との距離があと数秒というところで、シエルは素早く抜刀し

た。

迫り来るシエルに術を放った男は「くっ」と憎々しげに声を発して剣を構える。

そして、二つの剣が激しくつぶかりあった。火花を散らしながら馬上で一合、二合、と剣を交える。

「グラデウス様……！！」

もう一人の男が加勢しようとしたが、そこへあの大鷹が行かせまいと邪魔をしてきた。男は舌打ちして、大鷹を追い払おうと剣を振り回す。大鷹は、余裕でそれを躲した。

「貴殿は我らと同志ではなかったのか！」

睨みながら剣をかち合わせ、グラデウスと呼ばれた男は訴えるように怒号した。

しかし、シエルはそれを背くように剣を振るのを止めない。

「このっ、裏切り者めー！！」

憎しみの籠もった絶叫と共に、グラデウスは力一杯切り込んだ。

シエルは、渾身の剣を真正面から受け止めて、押し返そうと柄に力を入れる。

鉄の刃が擦れ合い、嫌な音が鳴りながら火の粉が飛び散った。

エンナは、二人の剣戟の凄さに見嵌っていると、後方から荒い息遣いが耳に入ってきた。

不思議に思っ様子を伺う。

「げっ」

魔犬が一頭、いつの間にか近づいていて、馬の後ろ足に噛み付こうと試みていたのだ。

「全く、せこい犬ですわね」

ローズは鞭を垂らすように持ち上げると、茨が独りでに動き出した。揺る揺ると先端が魔犬に目前まで近づく。魔犬は、薔薇の鞭に注意して監視する。

やがて、茨の先端に薔ができた。花冠の色は赤ワインのように濃い赤。

魔犬はじつとそれを凝視して唸る。そして、花弁は爆発するように花開いた。そこから、黄色い粉が即発して、魔犬の鼻腔を刺激する。魔犬は堪らず立ち止まり、何度もくしゃみをして、前肢を交互に使って顔を擦り付けた。

「<あの忌まわしい魔物を取り押さえなさい！>」

ローズの合図で、突如魔犬の周りから茨が数本出現した。それが魔犬の身体に巻き付いて締め上げる。魔犬は花粉の刺激と薔薇の棘の痛みを苦しそうに足をばたつかせた。

それを見ていたエンナは、先程の魔犬達のことも含め思わず呟く。

「え、えぐい……」

「何か仰りまして？」

「いいえ、何もっ！」

エンナは激しく首を振った。

ここで彼女の機嫌を損ねて、魔犬達と同じようなことをされたら

堪ったものではない。

「無駄口など叩いていないで、くれぐれも舌をお噛みにならないようお気を付けなさい」

「へっ?」

「飛ばしますわ!」

ローズは馬の腹を蹴り疾駆させる。

突然激しく動き出したので、エンナの身体がぐんと傾き、振り落とされそうになった。

ローズ達の足は、土埃を立たせながら野道を駆け、三騎の間を擦り抜けて戦場を突っ切る。

大鷹と格闘していた男が慌てて追おうとした。しかし、またしてもあの鷹が通せんぼをして、爪で男の顔や手を引っ掻いてくる。男は忌々しげに振り払おうとした。

「おのれっ、おのれええ!!」

グラデウスは、憤りを剣に乗せて切り込んだ。が、シエルはそれを上手く受け流していく。

「貴女! ポケットの中から耳栓をお出しなさい!」

「えっ、何?」

いきなりローズが大声で言うので、エンナは彼女の言葉が半分も聞き取れなかった。

「わたくしのコートのポケットに耳栓が入っていますわ。それを装着なさい! 速く!」

真意がわからないが、ローズが焦ったように言うので、エンナは慌てて彼女の言う通りにした。

エンナは、コートのポケットに手を入れて探る。小さな袋の隣に歪な硬いものが二つ指に触れた。きつとこれに違いない。エンナは、それを一緒に取り出して確かめた。奇妙な模様と形をしているがちゃんとした耳栓の形だ。

「あつたわ!」

「それを耳におつけなさい!」

エンナは耳栓を急いで耳に詰めた。

その直後。

凄い音が耳栓の向こうから聞こえてきた。いや、あれは音と言うより叫断だ。鳥達が一斉に高音で騒ぎ立てているような鳴き声。鳥が首を絞められて苦しそうに鳴いている声にも似ている。

その雑音と一緒に、男達の苦痛に叫ぶ声が聞こえた。

「くっ」

ローズは辛そうに顔を歪めた。

「大丈夫?」

エンナが心配そうに声を掛けるが返事はない。あの音はそんなに痛手を与えるのだろうか。

そのうちに空気を振るわせるようなあの音が止んだ。

耳栓を外してもいいか迷ったが、エンナは恐る恐る栓を外した。封鎖されていた耳朶に、自分が跨っている馬の他に蹄が土を蹴る音が入ってくる。

シエルだ。

彼は並ぶように馬を走らせると、ローズに視線を向けた。

「シエル様、ご心配には及びません。わたくしは大丈夫ですわ」

そう言ったローズの額には、脂汗が滲んでいる。

シエルは少しの間を置いてから頷くと、ローズ達より少し前へ馬を馳駆させた。

3・守護使（1）

「つつかれたー」

エンナは寝台に倒れ込んだ。

ちよつと固いが教会のものより柔らかい。

ずっと身体を休めることも、気を安まることもなかったエンナには、この寝台が天国のように感じた。

あの追っ手達の戦闘の後、エンナ達は馬を直走させた。

山を越え、村を二つ通り過ぎ、また山の中へ。そこから右へ曲がったり左へ曲がったりしながら、日が沈む頃になって小さな町に辿り着いた。

その町でシエルは休むことにしたらしい。

らしいというのは、相も変わらず彼の言葉は聞こえないが、ローズの発言でそれがわかった。

「わたくしはあまり気が進みません。ここで宿を取るなど……」

ローズの声は少し尖っていた。

もしかやこれは休めるのでは。

疲れ果て、おまけに半日以上も馬の上においてお尻がかなり痛かったエンナは、それを心から願った。

やがてローズは息をついて、わかりましたわと答える。エンナは心の中で小躍りした。

そして、シエル達は町を見て回ったおりに小さい宿屋を見付け、そこに泊まることにしたのだった。

今、エンナ達はその宿屋の一室にいる、というわけである。

「ご自分の身が危ないというのに暢気ですわね」

随分癪に障る言い方である。

「あのね、そつちは慣れてるかもしれないけど、わたし馬なんて全然乗ったことがないのよ？ おまけに色々なことがありすぎて、精神的にも、体力的にも疲労が堪って限界だったんだから仕方ないじゃない」

エンナが不満を言うと、ローズは溜息をついた。

「シエル様、やはり不安ですわ。こんなところで休むなんて……第一、宿に泊まるなど……」

まだ納得がいつていないようで、ローズは気が落ち着かない顔でシエルに述べる。

シエルがそれを説得しているのか、ローズは「でも」「しかし」と言葉を溢した。

「あのさ、ずっと気になってたんだけど、シエルえーっとなんとかさん？ って何か言ってるの？」

エンナの素朴な疑問にローズは目をぱちくり瞬かせた。

「そうでしたわ、貴女にはシエル様のお声は聞こえませんでしたわね」

因みにシエル様の名前は“シエルヒスト”様ですわ、とローズは

彼の名前を訂正することを忘れなかった。ごく丁寧なことである。

だって、何故かみんな名前が長ったらしいのだ。そんな一度で全員の名前を覚えるのは至難である。

シエルは寝つ転がるエンナに近付くと、すっと手を差し出した。

「これは手を出せってこと？」

エンナの問いにシエルは軽く頷いた。

エンナはベットに座り直してシエルに腕を差し出す。

シエルはエンナの目線に合わせるように片膝を付くと、ポケットから小さな緑色の小石を取り出した。その小石には、どういう原理なのか細い糸が通してある。穴はあいてなさそうなのだが。

シエルはそれをエンナの手首へ通し、小石に指を触れると目を閉じた。

すると、なんと小石が輝きだしたのだ。次第にその光が収まり、それは宝石のエメラルドのように煌めく。

どうだ？ 俺の声が聞こえるか？

不思議そうにエンナが腕飾りを見ていると、突然誰かの声が頭に響いてきた。低いような高いような、声というよりは言葉が直接脳に入ってきた感じだ。

驚いてエンナは勢いよく顔を上げ、もしかして侵入者かと思い、辺りを見回す。

この部屋にはやはりエンナとローズ、シエルの三人しかいない。

「聞こえてるみたいだな」

また、頭に声が入ってくる。エンナは視線をシエルに向け、恐る恐る訪ねた。

「もしかして、シエルーえつとヒストさん？」

シエルは軽く頷いた。

「あまり気分の良いものではないと思うが、暫くの間辛抱してくれ。それから、俺のことはシエルでいい」

「え、ええ、わかったわ」

エンナは戸惑いながらも素直に首を縦に振った。

頭に言葉を伝えられるなど、当たり前だが経験がないので、奇天烈な感覚だった。別段嫌な感じはしないので良いのだが。

「それは俺の精霊、トゥグルの涙から出来た精霊石だ。それが俺の声を伝える役割を果たしている」

「これが？」

シエルは無言で頷いた。

「だから、俺達と一緒にいる間はそれを身に付けていてほしい」

「勿論、こんな便利なものがあるんなら着けさせて貰うわ」

今まで、シエルの言葉が聞けなかったのも、彼らの会話がわからなかった。それは、まるで内緒話をされているみたいで居心地が悪かった。だが、これでもうそんな思いはしなくて済む。それに意思疎通ができないとこれから何かと不便だ。

エンナが興味深げにまたあの小石、精霊石に視線を向けているところ、腹は空いてないか、とシエルが問いかけてきた。

「お腹？ 別に」

ない、と言おうとしたところで、エンナのお腹から情けない音が鳴った。反射的にお腹を押さえる。

ずっと緊張状態でいたために、エンナ自身空きっ腹だったとわからなかったらしい。

今の一声で徐々に空腹感が戻ってきて、お腹が自分の存在を主張してきた。

「へってるようだな」

その一言にエンナは恥ずかしさのあまり顔を赤らめた。なんて羞恥だ。何もこのタイミングで鳴らなくてもいいではないか。

「し、仕方がないでしょっ。ずっと走りっぱなしだったし、わたし自身気付いてなかったんだから！」

エンナはその醜態を誤魔化すようにぷいと横を向いて、つんげんに返した。

「いや、俺は別に何も言っていないが」

倍になって返ってきた。恥が。

エンナは、自ら掘ってしまった墓穴に飛び降りた。これは慙死に値する。

そっだ、確かにシエルはそれについて何も言っていない。只、「お腹が減っている」という事実を肯定してくれたにすぎなかった。

エンナが恥の上塗りに身悶える。シエルはそれを不思議そうな顔で見ている。

「それじゃ何か買ってこよう。食べたいものはあるか？」

「……肉」

エンナはぼつりとそれだけ言った。色気も愛嬌もそっけもない。こうなったらもう意地だ。

シエルは軽く頷くと立ち上がった。

「ローズは何が良い？」

ローズに話を振ると、彼女はとんでもないと言つように慌てだした。

「そんなシエル様っ。買い出しなどわたくしが行って参りますわ！」

シエルにそんな手間を取らせたくないのだろう。表情が必死だ。

「いや、ローズはエンナと一緒にここに居てくれ。男の俺と二人でいるより、お前が傍にいた方がエンナも安心するだろう？」

「それは……」

「で、ローズは何が食べたいんだ？ エンナと同じく肉系か？」

「わたくしは……サンドイッチが良いですわ。野菜の……」

申し訳なさそうにローズは渋々答えた。こちらはエンナと違って実に女の子らしい。エンナと違って。

エンナは、少し後悔した。意地を張らずに違うものを頼めば良かった。いや、こういう疲労困憊している時だからこそ、動物性タンパク質を摂取すべきだ。そうだ。

シエルはそれにも承諾を示した。すると、ローズは更に萎縮してしまう。表情も浮かない。シエルは通り過ぎ際にローズの肩を励ますように軽く叩いた。ローズはシエルの気遣いに感動して彼の名を呟く。

そして、シエルはその場から去って行った。

ローズはドアに近付いて鍵をかけると不安の息を吐き出す。しかし、それも一瞬のことで、表情を引き締めたローズはエンナに向き直った。

「さて、貴女」

気を紛らわせようとエメラルドの小石を透かしてみたりしながら弄っていたエンナは、視線をローズへ向けた。ローズは腰に手を当て、仁王立ちしている。これは、何か小言を言われそうな予感。

「何？」

「貴女がシエル様から頂いたその精霊石、くれぐれもなくさないよう大切になさって下さいな」

案の定だ。

「言われなくても、人様から貰ったものだもの。そんな粗末な扱いはしないわよ」

エンナはふて腐れて唇を尖らせた。なんだってそんなことを注意されなければならぬのだ。

「これは別に貴女を軽んじて言っているわけではありませんわ。それは大変貴重なものですから、忠告したままでのこと」

「これが？」

ローズは點頭した。

精霊石は、今では魔法道具の動力源として多く出回っている。非常に高価な石もあるが、お守り代わりと手軽に購入できる安価なも

のも沢山あるので、一般人に親しまれている一種の装飾品でもあった。

シエルが触れるまでは只の石にしか見えなかった上、小石程の大きさしかない精霊石にまさかそんな価値があったとは。

「それはトウグルの涙から生成されたもの。あの誇り高くて高慢ちきな鳥が涙を流すなんて……正直考えられませんわ」

そのトウグルという精霊さんは、散々な言われようだ。そんなに性格が悪いのだろうか。

ローズの顔がみるみる内に不機嫌になっていく。

「えっと、その精霊って鳥の姿なの？」

気を紛らわせるようにエンナは聞いた。ここで機嫌を損ねてこっちに火の粉が飛んでくるのは嫌だ。

「あら、貴女も見ましたでしょ。あの一戦でシエル様の傍を飛んでいた大鷹のことですわ」

「ああ、あの……って、ええっ!!」

エンナは驚きで目を見開いた。

「あれ精霊だったの!？」

「そうですねよ」

「で、でもわたし、精霊が見えないのになんで……」

「肉体を持たない精霊は、人間と契約を交わすと、人々にも認識できる身体、つまりは生体化することが可能になるのです。でも、大概人の目に触れるのを嫌って、姿を消しているものですけど。わたくしの精霊、ニコンもそうですね。因みに今貴女の傍にいますわよ」

「えっ！！」

エンナはキョロキョロと周囲を探した。傍にとは一体何処にいるのだろう。エンナの目には、やはりローズの精霊を確認することが出来なかった。

でもそうか、言われてみれば確かにそうかもしれない。あの時エンナは、風を起こしたあの鷹はシエルが飼い慣らした魔物なのかと思っただが、よくよく思い返してみると目の色が赤くなかったような気がする。しかし、まさかあれが精霊だとは思わなかった。

「そういうことですから、大切にしてくださいませね」

半ば放心状態のエンナは、こくこくと首を縦に振った。そんなの勿論だ。

と、その時。ドアがノックされ、お客さんいるかい？ とドア越しに話しかけられる。

ローズはそれに警戒を示し、ドアに近付くと聞き返した。

「どなたですの？」

「この女給だよ。金髪の兄さんに頼まれてね、簡易風呂を持ってきたのさ」

金髪の兄さんとはシエルのことだろうが、お風呂なんて頼んだ覚えはない。

エンナとローズは顔を見合わせた。これは、女給と見せかけた奇襲かもしれない。

そうして暫し思案した後、ローズは鍵を開けた。その表情は険しく、いつでも反撃できるような体勢を整えている。

「はいはい、ちよいとお邪魔するよ」

入ってきたのは、肉付きの良い女性だった。彼女は風呂桶を抱えたまま、器用にドアを開けるとズカズカ入ってくる。その後、続くようにもう一人、若い女性が同じ桶を抱えて入ってきた。

「よつこいしょつと。ふう、すまないね、衝立はすぐに持ってくるよ。あと食事なだけだね、今そっちも準備してるところなんだ。まあ、お客さん達が風呂からあがった頃にはできていると思うから、あがったら悪いけど呼んどくれ」

女性はお湯の張った大きな桶を置いて、口早にまくし立てると、すぐに出ていこうとする。それをローズは呼び止めた。

「わたくし達は、お風呂を頼んだ覚えも、お食事を頼んだ覚えもありませんけれど」

「おかしいね。あの兄さんはそんな風に頼んできたんだけどねえ。ほら、これがその証拠だよ」

女性はエプロンのポケットから紙切れを出して、ローズにそれを渡した。

「確かにこれはシエル様の文字ですわね」

エンナはローズに近寄って覗き見た。

『肉料理（大きめのもの

野菜サンド

二人分の風呂』

それには流れるような字体の癖にとて簡潔に書かれてあった。

っていつか、肉料理って……

「あの、すみません……この肉料理っていつの、ハムのスライスと野菜サラダに変更してくれませんか……」

「おや、いいのかいそれで。折角腕に縋りを掛けて作ろうと思っただのに」

「いいえっ、それをお願いします！」

エンナは声を強めて言った。

この給仕さんは、多分シエルが食べるものと思っっているのかも知れないが、紛れもなくこれはエンナの分だ。エンナも肉としか言わなかったのは悪かったが、まさかこんなことになるとは。

大体、この“（大きめのもの）”っていう追記はなんだ。こんな文字はいらぬものである。シエルは一体エンナがどれだけ食べると思っただのか。

わたしそんな大食らいじゃないんですけど！

恰幅の良い女性は少し残念そうに、そうかいと了承すると部屋から出て行った。

それからすぐにあの年若い女性がやってくる。衝立を二つの風呂桶の間に立て、タオル数枚を置いて早々に去っていった。

「流石シエル様。本当に気の利くお方ですわ」

ローズは簡易風呂に熱い視線を送りながら、頬に手を当てつつとりにする。

それを目を据えてエンナは言った。

「そう？ わたしにはそれわからないわ……」

人のことはさっさと手を放して落とすし、それにこれだ。肉料理、大きめ、肉料理、大きめ……気が利く人なら、こういったことになって気が回りそうなものと思うのだ。

まあ、確かに風呂は非常に嬉しいが。

「それでは、湯が冷めないうちに入りましょうか」

ローズはウキウキしながら衣服を脱いでいく。エンナはそれを眺めながら、溜息をつくのだった。

わたしも入る……

3・守護使（2）

* * *

暗い町の小さな広間に男が一人佇んでいた。膨大な星を数えていくかのように夜空を眺めている。

黒い布に光る砂を蒔いた空の中に、一際黒い影があった。その影が徐々に大きくなってくる。男は腕を上げると、そこにその影が降り立った。

シエルと彼の精霊、大鷹トウグルだ。

トウグルは鋭い嘴を動かした。

「シエル、敵は撒けたようだ。周囲に危険はない」

なんと、大鷹が喋り出した。普通ならありえない光景だ。

幸いにも人影がないので、この奇跡を目にしているものはいない。

「そうか、ありがとう。苦勞かけたな」

「全くだ」

トウグルは鼻息を荒くした。

「ワタシをこんなに扱き使って、しかもあんな人間の小娘のために後でその償いをして貰うからな」

「ああ、わかっている」

わかっているなら良いとトウグルは満足そうに言った。

「それでは、ワタシは寝る」

翼を羽ばたかせ宙に向くと、トウグルの身体が目映く輝いた。そして、気の抜ける音と雲のような小さい煙の中から小さい鳥が現れる。

いや、これは雛だ。まん丸の身体はふわっふわの羽毛に包まれている。触ったらとても気持ちよさそうだ。

雛は小さな翼を賢明にばたつかせて、シエルの頭部に着地した、というよりは木の実が地面に落ちるように落下した。もぞもぞと身体を動かして寝る体勢を整えると、雛は目を閉じた。

「お休み、トウグル」

雛になった大鷹に挨拶の言葉をかけたが、もうトウグルは寝入ってしまったようだ。

「スー」

シエルはトウグルの寝息を聞きながら、別の精霊の名を呼ぶ。すると、忽然とシエルの肩にオコジョが現れた。

シエルが頭を撫でてやると、気持ちよさそうに目を細める。

「スー、リユーリと話をしたいんだが、大丈夫そうか？」

スーは鼻をひくつかせてから一つ頷いた。

「頼む」

スーの若草色の瞳が輝くと、シエルはスーに向かってリユーリと

呼びかけた。

『ああ、シエル。約十二時間ぶりだね』

スーからリユーリの元気な声が聞こえて、シエルは少し胸を撫で下ろした。

「その分だとそっちは大丈夫そうだな」

『そんなの当たり前じゃないか。僕を誰だと思っているのさ。あのくらいで倒されるような僕じゃない。寧ろギッタギタのケチヨンケチヨンにしてやったよ』

シエルはリユーリが今にっこりと笑っているだろうと思った。その姿を思い浮かべた後、ボコられた追っ手達を想像する。その姿が容易に頭に浮かぶのだから、リユーリはある意味凄い。

『シエル達の方はどう？』

「心配ない。三人とも怪我一つ、擦り傷一つない」

『それは何より。で、そっちは誰が追ってきたの？ 僕はウルーデイとアライセだったよ』

「こっちはグラデウスだ」

『へえ、グラデウスって、あのグラウ殿だよね。ウル殿にグラウ殿、先方は相当焦っているね』

「そのようだな」

グラデウスとウルーデイが出てきた。

これは、あちらも完全に動き出したということだ。益々細心の注意を払って事を進めなければならない。

『ところで、エンナの様子は。何か変化あった？』

「今のところ何も」

『ならいいけど』

「このまま何事もなければいいが……」

シエルは少し遠くを見つめた。このまま何もなければいい、と。

『そうだね。でも万が一、僕と合流する前に目覚めたその時は……』

リユーリは息を止め、少時の間を置いて言った。

『生かすか殺すか、判断はシエルに任せる』

「……わかった」

リユーリの重い言葉にシエルは只静かに頷いた。

夜風がシエルの頬を撫で、髪を揺らせる。

リユーリとの通信を終えたシエルは、瞼を閉じて冷たい風に身を任せた。

スーはシエルの様子を見て、彼に擦り寄る。

「心配してくれているのか。ありがとう、スー。でも俺は大丈夫だ。心配することはない」

自分を案じるスーにシエルは硬い顔に微笑みを浮かべて、頭を優しく撫でてやる。スーは嬉しそうに喉を鳴らした。

「さて、そろそろ戻るとしよう」

シエルがそう言うと、スーは空気に溶けるように消えていった。

* * *

エンナの機嫌は良かった。

汗と泥に塗れてベタ付いていた身体は、すっかり綺麗に落ちて気持ち的にも爽やか。しかも、自分の身体からは仄かに薔薇の良い香りが漂って、鼻腔を擦った。ローズから薔薇の花弁を貰って、湯に浮かべるといふなんとも贅沢なことをさせて頂いちゃったのだ。気分はまるでお嬢様。おかげで、乾燥していた肌はスベスベになった気がする。

それから空っぽだったお腹の方も、軽食だが食べ物を入れられて満足だ。美味しかったし。

「シエル様、どうなさったのかしら……随分お戻りが遅いですわね」

一方、ローズはそわそわと部屋を彷徨っていた。
そうなのだ。

あれから、シエルは部屋から出て行ったきり、まだ帰ってきていない。時間は大分経っており、いい加減もう戻ってきてても良い頃なのだが。

こここの主人の話によると、シエルは食事とお風呂を頼むと何も言わずに外へ出て行ってしまったらしい。何処に行ってしまったのか。

「まさかシエル様の身に何か……!!」

ローズはハッと雷にでも打たれたかのような険しい顔をした。

「いや、あの人なら何かあっても大丈夫じゃないの？ 強いみたいだし」

「なんてことでしょう！ 今すぐシエル様をお救いに行かなければ……！！！」

が、エンナの声はローズの耳に届いていないようだった。彼女は勢いよく顔を上げ、拳を握り締めている。

「あの、ちょっと？」

「待ってて下さいませシエル様。このローズニア、貴方様の下へ馳せ参じますわ！！！」

ローズはいきり立つと即行動に移した。足を踏み鳴らし、駆け足で外へ出て行こうとする。

「ちょっとちょっと、待ちなさいってば……！」

慌ててエンナはそれを止めようとした。ここまで盲目になってしまつとは、恋の力とは恐ろしいものである。

そこで、良いタイミングでドアが叩かれた。開けてくれというシエルの声が頭に響いてくる。どうやらシエルがやっと返ってきてようだ。ローズは血相を変えて駆け寄って鍵を開けた。

「どうした。なんだか騒がしかったが……！」

相変わらずの無表情でシエルがそこに立っていた。

「ああっ、良かったつ。一体どちらに行かれていたのですか？ とっても心配しましたわっ」

「それはすまなかつた。実は見回りに行っていたんだが……一言残

していけば良かったな」

「全くよ！ おかげでこっちは大変……」

エンナはローズが口を開く前に口火を切ったが、途中でその威勢が収まった。シエルの頭髪が不自然に揺れ動いたのだ。怪しんで睨め付ける。

シエルは訝しそうに首を傾けた。

「何だ？」

「やつ、なんか頭が……」

シエルは思い付いたように「ああ」と呟くと、ひょいっと頭にいる何かを摘み上げた。

「か、可愛い!!」

それはふわふわの羽毛に覆われた鳥の雛だった。何の鳥かはわからないが、その雛は羽毛のせいなのか身体はとても丸っこい。今はお休み中のようで、目を閉じて規則正しい寝息を立てている。

「ていうか、その持ち方可哀想じゃないっ」

シエルの持ち方はあんまりだった。まるで猫の首でも掴んでいるように、雛の首辺りを摘んでいる。

シエルからその可哀想な雛を取り上げようとする、彼はエンナの手から逃れるように雛を上へと掲げた。身長差のせいで途端に雛から手が届かなくなる。エンナはそれに気色ばんだ。

「何するのよ!!」

「いや、あまりコイツには触らない方が良い……」

「はあ？」

「そうですね。やめておいた方が賢明というもの。突かれるか噛み付かれるか、もしくは引つ掻かれますわよ」

シエルはあまり表情がないが、ローズなんか眉間に皺を寄せてそんなことを言ってくる。

「なんでよ？ こんな幼気な鳥の赤ちゃんを乱暴に扱ってるんだもの。止めるのは当たり前じゃないっ」

「いたいけえ？」

ローズは素つ頓狂な声を上げた。顔も変な風に歪んでいる。高貴な家柄のご令嬢っぽいローズがまさかこのような反応を示すとは。エンナは驚いて少し目を瞠った。

「言っておきますけれど、その雛はトウグルですわよ」

「トウグルってあの大鷹の？」

ローズとシエルはエンナの問いに頷いた。

「って、何言ってるのよ。あっちは大鷹でしょ？ この子と全然違うじゃない」

「精霊の生体化とはそういうものですわ。精霊の力が強ければ、本来の姿と系統が似ていれば容易に姿を変えることが可能。トウグルはランクで言えば上級精霊ですし、元々本来の姿が鳥型ですから、鳥の特徴を持っている生き物なら小さかろうが大きかろうが変身できるのですわ」

教鞭を振るう先生のようにローズは説明する。エンナはつらつら言われたことを噛み砕いてから驚愕に目を丸くした。

「ええ！！ それじゃこの可愛い雛はあの鷹さん！？」

シエルは無言で肯定に首を動かし、ローズは、だからそう言っておりませう、と腰に手を当て呆れている。

呆れられてもエンナは精霊使いではないのだから、ローズらにとつて常識であつても、一般人の、それも辺境地で育つたエンナが精霊のことを詳しく知っているわけがない。

「兎に角だ。トウゲルは人のことをとことん毛嫌いしているからな。触れた途端噛み付かれるのが落ちだ」

暢気に寝ている自分の精霊をじつと見つめた後、シエルは元の場所に戻した。要は、彼の頭の上へ。

この顔であんなマスコットののような可愛い雛を頭にさせておくんて、奇妙というか、ギャップがあるというか。

「それから追つ手のことだが、上手く撒けたようだ。油断はできないがひとまずは安心していい」

エンナはそれを聞いて安心した。緊迫しっぱなしというのも疲れる。

「あとリユーリのことなんだが」

リユーリと聞いて素早い反応を見せたのはローズだった。

「まさかリユーリ様とご連絡を取られたのですかっ？」

「ああ、そうしたらあつちは大丈夫みたいだ。すこぶる元気そうだった」

「そうですね、そんなのですか。良かった……」

ローズは祈るようにぎゅっと手を握ると、心底ほっと安堵した笑顔を見せた。

そこでエンナは妙な違和感を覚える。あれ？ と。

「だからローズ、あまり心配することはない」

「はいっ」

ローズは元気よく返事をした。心なしか硬かった表情が和らいでいるような気もする。リユーリのこと相当気に掛かっていたのだろう。

それにしても、一体リユーリとどうやって連絡をとったのだろうか。まあ、どうせ魔法絡みだろうことは想像できるが。

「さて、二人はそろそろ休め。明日はここを早めに出るぞ。俺は万が一に備えて、外で見張っているから、何かあったら呼んでくれ」

そう言ってシエルはまた部屋の外へ出ていこうとする。ローズは慌てて引き留めた。

「見張りならば交代で」

「いや、それには及ばない。スーとやれば問題ないだろう。それに今日はローズに無理をさせすぎた。すまなかったな」

「シエル様……」

ローズは感極まったようにシエルの名を呟いた。

「今はゆっくり休んで、明日に備えてくれ」

そう言い残すと、シエルは部屋から出て行った。その後ろ姿をローズは熱い視線で見送る。

エンナはと言えば、ローズに対する不可解な感覚と何を考えているんだかいまいち掴めないシエルのことを考えて、頭痛を覚えて仕方なかった。

3・守護使（3）

* * *

あれから、エンナとローズはそれぞれの寝台で就寝することになった。ローズは、どうやら床に着いた途端、夢の世界へ旅立ってしまったようで、静かな寝息が聞こえてくる。エンナが思っていた以上に、ローズも疲れていたのだ。

一方のエンナは寝付けずにいた。沢山のことがあつて疲れ果てているにも関わらず、何故か眠れない。確かに眠くて仕方ないと感じるのに、目を瞑ってじっとしていても意識が飛んでいかなかった。

エンナは仕方なく寝台から起き上がる。興奮が冷めず眠れないのかもしれない。少し水でも飲めば落ち着くだろう。

窓の傍にある棚に近寄ると、その上に置いてある水差しからコップに水を注いで、口に含む。喉に水が通るのを感じて、ほつっと一息ついた。

そして、おもむろに窓のカーテンを片方だけ開けてみる。淡い月光が窓から差して、優しくエンナを照らした。コップの水面が月の光を受けてキラキラと輝いている。

本当に、この一日は色んな事があつた。

攫われるは、助けられるは、助け出した少女は男だったは、その仲間達も少々変わっているし、どうやら自分は狙われているらしいしで、もう何が何だか訳がわからない。

大体、彼らが何者なのかも聞きそびれてしまつてわかっていない。そういうことを今冷静に振り返つて考えてみると、物凄いことに巻き込まれてしまつていいるのではなからうか。

エンナは、この先自分の身に降り掛かる災難を思つて溜め息をついた。

「ンナ……ま……」

「えっ」

突然、鈴を転がしたような可愛らしい声が聞こえた。驚いてエンナは辺りを見渡したが、ローズと自分以外は誰もいない。

「だ……じよ……大丈夫だから」

心に染み入る優しい声音。

エンナは、自分の頬に熱い何かが伝っているのに気付いた。不思議に思い指で触れてみる。

エンナは目を睜った。

それは、涙。

「れ……？ どうして、急にこんな……」

自分が泣いているのだと気付いたら、涙が溢れ出てきた。ずっと抑えていたものがやっと解放されたように感情の渦が流れ出る。拭つても拭つても、あとから涙が出て、止めることが出来ない。

本当は、不安だった。不安で不安で、怖くて、仕方なかったのだ。自分が見えない何かの中へ、迷い込んで行くようで。どんなに強気に、気丈に振る舞つても、それを打ち消すことなんてできはしない。

「うっ……うっ……」

エンナはその場にしゃがみ込み、口元を押さえた。感情のまま泣

き叫ばないように、ローズを起こさないように。それでも、嗚咽を止めることはできなかった。

それをあの声があっただけ優しく、温かく、エンナを慰める。エンナはその声を耳にしながら今の感情を出し切るまで泣き続けた。

ローズとシエルが、静かにそれを聞いていたとも知らずに……

* * *

「あーよく寝たあ」

早朝、エンナは起き出した。教会での習慣から、朝は日が昇るくらいには目が覚めてしまうのだ。両腕を思いっきり伸ばし身体を解す。身体に怠さもなければ痛みもない。昨日は目一杯泣いたこともあって、気分も爽快。完全復活だ。

ローズの方を見ると、まだ彼女は夢の中らしい。凄く幸せそうな顔で寝ている。エンナはそれが何だか可笑しくなって笑いを吹き出した。

「さって着替えるか」

エンナは心弾ませて、ネグリジェのボタンに手を掛ける。実は、寝る前にローズが着替えの服を貸してくれたのだ。勿論、今着ている寝間着もローズからの借り物で、これまた薔薇の香りが仄かにする。

それにしても、準備が随分良いというか、一体彼女はどれだけ荷物を抱えてここまでできたのか。

そうして、ネグリジェのボタンを外しながら、エンナはカーテン

をサツと開けた。

「……………」

「あっ」

開けたら、窓からは町並みでもなく、空でもなく、見えたのは少年だった。どういう原理なのか彼は逆さになっている。エンナは無言でその場に固まった。

「これは〜えーっと、どうも〜おはよう御座います」

少年は、少し焦ったような、困った笑顔でヒラヒラと手を振った。逆さのままです。

エンナはそれには答えず、カーテンを閉めた。無言でローズから借りたワンピースに素早く着替えてから、目に入った水差しを手に取った。

そして、エンナはカーテンを勢いよく開き、窓を開けて

「ごんの覗きー！ー！」

「どううわっ！ー！」

少年の頭部目掛けて水差しを渾身の力で振った。

少年は慌てて頭を引っ込めてギリギリのところまで避ける。

「いきなり何すんの！ 危ないな！」

「人の着替え覗いたんだからあつたり前でしょうが！ー！」

「覗くつて、別にあれは覗くつもりじゃ」

「問答無用！ー！」

エンナは少年の頭髪か何処かを引っ掴んで捕らえようとしたが、

彼はひょいっと上がってしまう。エンナの手は宙を切り、悔しそうに少年を睨め付けた。

「ふう、危ない危ない」

「下りてきなさいよ、この逆さの覗き男ー!!」

「酷いなくその言い方。まあ逆さなのは認めるけどさ」

少年は唇を尖らせて、ぷらぷらと左右に揺れた。逆さの原理がわからなかったが、どうやら白い紐が屋根から垂れていて、少年はそれを掴んでいるようだ。

「騒がしいですわね。何事ですか?」

この騒ぎでどうやらローズを起こしてしまったらしい。ローズは眠気のある眼で近寄ってきて、窓から顔を覗かせた。

「ローズううう」

ローズの顔を見て、少年は助かったと目を輝かせた。

「あら、スラッツではありませんか」

「何、アンタ達知り合いなの」

「知り合いも何も、スラッツは一応仲間ですわ」

ローズは口元を手で覆うと、眠そうに欠伸を一つする。どうやらこの二人は知り合いどころか仲間のようだ。そうすると、必然的にシエルやリューリとも仲間という括りになる。

「それにしても、一体どうしたというのです。随分騒がしかったですけれど」

「ああそうそう、聞いてよ！ コイツわたし達の部屋覗いてたのよ！」

「え？」

「だから違っちゃって！！ 誤解を招くような言い方は」

「誤解じゃなくて真実でしょ！ 人の素肌見ておいてよく言うわ！」

「いや、だからそれは」

「スラッツ……？」

エンナとスラッツが言い合っている最中、ローズの低音が嫌に聞こえた。不審に思っただけでローズの方へ目を向ける。すると、彼女はおどろおどろしい気を纏ってスラッツのことを見ていた。それを見たスラッツはひくひくと痙攣でも起こしているかの如く顔を引き攣らせる。

「ちょっと、タンマタンマツ。ローズ、まずは話を」

「問答……無用ですわ！ ニコン！！」

ローズは目を光らせ、腕を振り上げた。そこから茨が素早く伸びて、スラッツに襲い掛かる。スラッツは情けない悲鳴を発しながら、それを難なく避けた。

「あつぶね、ローズ！ こりゃいくらなんでもって、げっ」

「甘いですわ」

ローズはにやりと笑った。スラッツの目には数粒の薔薇の種が映っている。スラッツの顔に衝撃が走った。

「いつの間につ、ぎゃー……っ……！」

種が発芽して、茨がスラッツの身体に巻き付いた。まるで芋虫状態。ローズは空振った茨を改めて伸ばしていつて、スラッツの身体にしつかりと巻き付かせると、彼を屋根から引き摺り下ろした。

そうして、ローズはスラッツを乱暴に部屋の中へ放り投げる。スラッツは棘の痛さに悲痛の声を上げ続けた。

「いて、いててててっ！ 棘がっトゲがあああ！！ 痛い痛い！！」

「スラッツ、わたくしは非常に情けない気持ちで一杯ですわ。同僚としてもとても恥ずかしく、哀しく思いましたよ……貴方の下劣で腐りきったその根性……」

ローズは、薔薇の鞭をビシツと両手で突っ張らせた。

「叩き直してさしあげますわ！」

彼女は怯えまくっているスラッツを見下ろした。スラッツは顔を蒼白にし、身体を震わせている。

その光景を目の当たりにして、エンナまで恐怖に身震いした。やはりローズにそれとない態度をとっというて良かったと思う。彼女を怒らせてもしていたら、あぁなっていたのは、今頃スラッツではなく自分だったかもしれない。

「覚悟っ！！！」

「ぎゃあああああっ！！！」

ローズの叫びとスラッツの雄叫びをほぼ同時だった。そこを良いタイミングで部屋のドアが開かれる。

「おい、一体何の騒ぎ……」

現れたのはシエルだった。

部屋のあまりの情景にシエルはその場に静止してしまつた。

「シエル様っ」

顔はシエルの登場に驚いているが、鞭を片手に、今にも振り下ろそうとしているローズと、

「シエルさあああん!!」

茨でぐるぐる巻きにされ、天の助けとばかりに半泣きで叫ぶスラツツ。

シエルがこれを目にして、一体どのように思ったのかはわからない。

が、暫し彼は思案した後、明らかに見てはいけないものをみてしまった、という感じではつが悪そうに視線を逸らした。

「すまない……何だか取り込み中のようだな……出直してこよう……」

顔を背けたままドアを閉めて去っていかうとするシエル。

スラツツはショックで絶叫した。

「待って下さいシエルさん!! お願いだからオレを見捨てないで助けてー!!」

「まったく、ひでえや。ニコンの薔薇の匂いがしたから気になって寄ってみただけなのに……どうしてオレがこんな痛い目に」

結局シエルの鶴の一声で助けられたスラッツは、身体中にできた擦り傷を見てぶつくさと呟いた。

「ああもうだから何度も謝っているでしょう。男の癖にしつこいですわね。大体、その程度で大げさな」

半ば呆れたように言うローズにスラッツは目を剥いた。

「大げさ！？　これの何処が大げさ！？」

確かに、彼の姿は結構可哀想な有様だった。所々服は切り裂かれているし、皮膚には痛々しい切り傷とミミズ腫れが出来てしまっている。

「二人共、好い加減にしろ」

ローズとスラッツの間で言い争いが勃発しそうなところをシエルは止めに入った。二人揃ってシエルに言い募ろうとしたが、それを彼は手で制する。

「これは双方共に悪い。スラッツも少し軽率だったし、ローズもちやんと話を聞いてやらなかった。お互いもう少し考えて行動していれば、こんなことにはならなかったはずだ。兎に角、これは事故。ローズもこうして謝っているんだからスラッツも許してやれ。あんまり引つ張るのも良くないぞ」

シエルが二人に言い含めると、何も言えなくなってしまった口でスラッツは、お互い視線だけ見合わせて、パツとそっぽを向いてしまう。スラッツなど拗ねてしまって、頬を膨らませ唇を尖らせた。

「エンナもスラッツのことを許してやってくれ。本人も悪気があったわけではないんだ。スラッツの場合、職業病みたいなものでない。俺からもスラッツの非礼を詫びよう。すまなかった」

と、頭を下げるシエル。それを見たスラッツは、今にも溢さんばかりの涙を目に一杯溜めて情けなくシエルの名前を呼んだ。

「いや、そこまで謝らなくてもいいけど……わたしも早とちりというか、勘違いしちゃってたわけだし……」

エンナは居心地が悪くなって、視線をシエルから少しずらして言った。

エンナも多少なりとも自分も申し訳ない部分があると感じているからだ。別に大したところを見られたわけではなかったのだ。もう少し冷静にことを運んでいれば、こんな大事にはならなかっただろう。いや、大したところを見られたわけでも、やっぱりそれは無理な話だが。

「ところで、どうしてスラッツがこんなところにいるのです」

「ああ、それはこの町長に租税の督促をするために来たんだ。納期限とつくに過ぎてる上、督促状まで出したのに納付してこないもんだからさあ、ハンデル様がついに爆発しちゃって……で、オレ、それからフレン、アーメルとドリエが派遣される羽目になったわけ」

スラッツは面倒臭そうに茶色の髪を掻いた。

「ということとは、まさか……」

「そつ、守護使つてやつです」

答えを聞いたローズは、その単語が不快で顔を顰めた。

「守護使つて？」

素朴な疑問をエンナが投げると、スラッツはそれはと口を開いた。

「待て、スラッツ。まだエンナには俺達のことを説明していないんだ」

「あつ、そうだったんですか。通りで……因みに確認しますけど、これは例の件で？」

シエルは「ああ」と肯定に首を動かす。スラッツはそれだけで納得したようで、それ以上は何も聞かなかった。

それにしても、例の件とは大変気になる言い方だ。スラッツの言葉から彼は政治に関わりのある人物のような気がしてならない。本当に自分は何に巻き込まれているのだろうか。

「さて、そろそろここを出発したいんだが……スラッツは……」

「あつ、オレも同行させて下さい。もう用は済んだし、あとはあの三人に任せて帰ろうとしたところだったんで」

「まあっ、なんて無責任な！」

ローズは非難の声を上げた。確かに、それはあんまりではないかとエンナも思う。役目があるのにそれをほっぽり出してしまっただけで、エンナには考えられないことだ。

「ええだつて、別にオレがいなくてもフレン達だけで十分じゃん。それに、今はあっちよりもこっちの方が優先順位高いと思うんだけど。二人よりも三人いた方が良いつしよ」

シエルさん駄目ですか？ とスラッツは黒曜石のような瞳をキラキラさせて懇願する。捨てられまいとしている子犬のようなスラッツにシエルは言葉に詰まった。そしてついに観念して溜め息をつく。

「わかった。ただし、あまり問題を起こさないようにな」

「やった！ そんなのもっちらんですよ！」

スラッツは嬉しさにぐつと拳を握った。ローズはと言えば、不満に「ええ」という顔をしている。

「そんなわけでエンナ、オレはスバラッツ。みんなからはスラッツって呼ばれてるんだ。これから暫く宜しく！」

自己紹介を済ませると眩しい笑顔と共にスラッツはエンナの背中を挨拶宜しくバシバシツと叩いた。

「いった…！ ちょっとそんな強く叩かないでよ！ 痛いじゃない…！」

エンナが文句を言っても何処吹く風。スラッツは機嫌良くわははつと笑って外へ出て行ってしまった。

「シエル様、宜しいのですか？」

「ああ、確かにスラッツの言う通りだからな。それに、あいつの力は役に立つ」

「それはそうですが」

スラッツが道中加わることにあまり気が進んでいない様子のローズもシエルがそう言えばもう諦めるしかない。

「さあ、もう出発しよう。予定していた時間を過ぎてしまった」

シエルはエンナとローズに外へ出るように促した。

ローズは渋々スラッツのあとに続き、エンナも部屋を出て行くこととする。その時、ふと昨晚のことを思い出して足を止めた。あの可愛らしい声は、一体なんだったのだろうか。声だけなのに、包み込む温かさや優しさに溢れているのを感じた。あれのおかげで、押し潰されそうだったエンナの心が軽くなったのだ。

「エンナ？」

そんなエンナをシエルは怪訝に声をかける。

「ごめん、なんでもない。今行くわ」

エンナはハツと自分の中から引き戻されると、後ろ髪を引かれるようにその場を後にした。

4・変調（1）

スラッツを新たに加えた一行は、それぞれの馬に乗ってのんびりと街道を歩いていった。

朝日も随分昇り、人々ももう起き出して忙しく動き出している時刻だ。

「さて、時期を逃してなかなか話せなかったが、俺達のことを言っておこう。こうしてゆっくり話せる機会もないと思うしな」

ローズとエンナの馬と並ばせて、シエルがエンナに声なき声を掛ける。待ってましたと言わんばかりの勢いでエンナは素早く反応した。気になって気になって仕方なかったエンナにはありがたい申し出だ。

「まずは俺達のことだが……俺達は軍人だ。軍人でも精霊騎士という身分の」

「精霊騎士……ってあの精霊騎士!？」

シエルの言葉を反芻して、エンナは目を丸くした。

精霊騎士は、この国、フェアデルフィア切つての精鋭騎士だ。他の兵や騎士達と違い、精霊術を駆使しながら剣を振るう国の守護者。王室を守る近衛部隊も精霊騎士達で編成されていることが少なくない。要はエリート中のエリート。

しかし、精霊騎士と言っても精霊使いには変わりなく、人々から畏怖される存在だった。それは精霊使い以上に、ある意味魔物以上

に、恐れられ、敬遠される。

が、ここ近年では、彼らは人々の憧れの的になりつつもあった。何故なら、とある小説の影響だ。ディアナ・アクリーネという作家が精霊騎士を題材に書いた『精霊騎士物語』と『妖精の花園』という小説が原因である。そのロマンス溢るるストーリーと心を揺さ振る描写は、人々の心、特に女性の心を鷲掴むのに十分だった。

はじめは貴族間だけに読まれていたものだったが、あまりの人気っぷりに一般人にも出回るようになった。そして今、前者は乙女のバイブル、後者は裏乙女のバイブルとまで言われる程の爆裂的な人気を誇っている。

エンナもディアナ・アクリーネの熱狂的なファンの友人に前者の方を借りて読んでみたが、面白すぎて出版されている巻まで一気に読んでしまった。後者の方は、嵌ったら本当にこれはヤバいから、と何故か友人は貸してくれなかったので読むだことはないが、こちらも『精霊騎士物語』に負けず劣らず凄いらしい。

「ええ、嘘でしょそれ!？」

あの小説のおかげで、少なからずエンナも精霊騎士に憧れを抱いている一人である。それが正に目の前にいると言われても信じがたい事実だった。目をぐるぐるさせて額を押さえる。

「ここで嘘を言っても仕方ないだろう」

「だ、だってそんな、信じられない。そんなどえらい人達がなんで「リユーリが言ってただろう? とある方の頼みだと。これからエンナが大変なことになると予見してな。それから救い出さねばと考えた結果、俺達に守るよう命じられたんだ」

エンナは混乱している頭で必死に考える。

「それがまたわからないわ。そのとある方ってというのは、聞いてると結構偉い人そうだけど、その人がなんでわたしを？ わたしその人のこと知らないし、接点なんてないと思うんだけど」

シエルはそこで無言になってしまふ。

「ちょっと、何その気になる間は」

「いや、まあそれについては本人に聞いてくれ。俺達も口止めされているしな……自分で正体を明かしたいそうだ」

納得のいかないエンナは、目を据えて「ふん」と相槌を打った。何だか物凄く怪しい。

エンナが疑わしく思っていることに気付いて、シエルは少し考える素振りを見せた。そして、言葉を選ぶように口を開く。

「ただ、そうだな……明かせるとしたら、国一の占い師、ということくらいだな。それ以上は俺達の口からは言えない」

「へえ、国一の……なんか益々わからなくなっただわ」

エンナは頭痛を覚えてこめかみの部分を押さえた。エンナに占い師の知り合いなんていない。

「因みに、なんでわたしが」

「すまないがその質問には答えられない」

エンナが言い終わる前にシエルはきつぱりと断った。何を聞くとしたのかわかったのだらう。それでも、そんな言い方はないではないか。エンナは口を尖らせた。

「聞き終わらないうちにそんな風に言わなくてもいいでしょ」

「別に聞かなくても予想はできる。何が大変なのか、何故狙われているのか、それが聞きたかったんだろう?」

全くその通りでエンナは言葉に詰まった。

「そこところは、易々と言える問題じゃないんでな。申し訳ないが諦めてくれ」

「狙われている当事者なのに……?」

シエルは無言で頷く。

狙われているのにその理由すらわからないまま逃げ続けなければならぬのか。そう思うと、また不安と恐怖と苛立ちがエンナの中で募った。

「酷い話ね」

八つ当たり気味にエンナがシエルを責めるが、彼は何も言わず只目を少し伏せるだけ。シエルの静かで落ち着き払った態度が逆にエンナの気を逆撫でさせてまた焦心する。

「貴女……!!」

シエルを睨んでいると、見かねたローズがエンナの方へ振り返って咎めようとした。

「いい、ローズ止める」

「しかしシエル様……!!」

「確かにエンナの言う通りだ。自分は狙われているのに、その理由も明かされないままこのまま逃げ続けると言っているんだからな。責められて当然だ」

そのシエルの大人な対応が更にエンナの苛立ちを増長させた。まるで、全てを受け入れるという、その余裕さ加減が気に食わない。

「アンタも、それからリユーリも、本当にむかつくわ」

ローズが息を呑むのがわかった。

こうなったらローズに責められようが鞭で叩かれようが知ったことか。

「えーっと、まあ兎に角さ」

重い空気の中、どうにか流れを変えようとスラッツが無理矢理話に入ってきた。スラッツは一度咳払いをして言葉を続ける。

「そんな感じでオレ達は精霊騎士なわけです」

かなり無理のある結び方だった。

「なんですの、その締めくくりわ」

「いいじゃん。結局はそういうことなんだからさ」

でも、スラッツのおかげでその場の雰囲気は和らいだような気がした。

不機嫌に睨むローズにスラッツは戯けて笑う。

「ってなわけでエンナ、ついだし守護使について説明してやるよ。宿で答えてあげられなかったし」

気になってたろ？ と人懐っこい笑みを浮かべてスラッツはエンナに問うた。

「そうね、お願いするわ……」

流石のエンナも少しの罪悪感を覚えていたので、スラッツの申し出はありがたかった。この煮え切らない自分の気持ちを紛らわせる意味も含めて快く受ける。

スラッツはエンナの答えを聞いて満足気に笑みを広げた。

「宿で税金の話をしてただろ？」

「ああ、うん。あそこの町長が税を払わないだのっていう」

「そつ、本来ならその仕事は、文官である税務官達のものなんだ」

と、スラッツは話し出す。

軍人は、大抵税吏が地方に訪問する際の護衛をすることが仕事で、介入するなんてことは滅多にない。ましてや精霊騎士なんかは普通の兵士、騎士よりも税務なんてものには関わり合いがなく、魔物が多く出る危険区域には護衛として一緒に行くこともあるが、それでも付き添いの人数は一人か二人くらいだという。でも、今回は税吏抜きで、しかもスラッツ達、精霊騎士だけで徴収しに行ったらしいのだ。

「ふ〜ん、そしたら今回のつてなんか特殊なのね」

「その通り！ 精霊騎士が督促するつてことは、政府の最終手段でもあり、最終警告を意味する。これ以上納めるのを遅らせると、どうなるか知らねえぜつてな感じで。こんな風に精霊騎士が介入して派遣されることを守護使つていうんだ」

適当に相槌を打ちながら聞いていると、ローズは気に入らなさそうに鼻息を荒くした。

「全く不愉快ですわ。只でさえ精霊騎士は人手不足ですよ？ そ

のようなことに手を回している暇なんてありませんのに。税務官達で解決すれば良いものを……ハンデル様もハンデル様ですわ。本当に人使いが荒いというか、落ち着かないというか」

「それは仕方ない。あのお方は仕事ができる分ちよつこのことでも見過ごせないからな。特に今回は公租が絡んでたわけだから神経質になるのもわかる」

シエルがハンデルという人のフォローを入れるが、ローズは納得のいってなさそうな顔だ。

「それにしましても、そう軽々しく守護使制度を使わないで頂きたいものですわ」

「確かにな」

シエルもその意見には同意のようで軽く頷いた。

どうやら、精霊騎士の彼らにしてみると、守護使制度は良い迷惑といったところで、あまり快く思われていないようだ。

エンナには遠く離れた話すぎていまいちピンとこないが、それくらいはわかった。

「にしても、あの町長の慌てようは滑稽だったなあ」

と、先日のことを思い出してスラッツが空を仰ぎつつ言った。

急に話が変わったので、ローズもエンナも眉を潜める。シエルは表情を崩さず、ちらっとスラッツを見ただけに終わった。

「いきなりなんですの」

「いやさあ、あそこの町長さん。オレ達が突然現れたもんだからスナゲー顔青くして、腰まで抜かしちゃってさあ。仕舞には化け物呼ばわれまでされちゃって……まっ、本当に化け物だから仕方ないけ

ど」

スラッツは皮肉の混じった笑みを浮かべた。スラッツの発言に口
ズの色が少し悪くなる。

「スラッツ、貴方なんてことを……！！」

「だって実際そうじゃん。オレ達、人であって人でないんだから」

嘲笑気味にスラッツは口にする。

それは一体どういう意味なのだろう。

精霊使いが“化け物”と表現されることは知っていた。しかし、
エンナはどうしてそのように言われるのか詳しくは知らない。エン
ナが暮らしてきた教会や近くの村、町では、精霊使いに対してそこ
まで嫌悪を示してはいなかったし、彼女自身そこから他の所へ出掛
けたことがないので知らないのも無理はなかった。

それに例の小説。精霊騎士を題材にしてはいるが、精霊騎士につ
いても、精霊使いがどういうものなのかということさえ記述はあ
まりされてはいない。恋愛が主体だけあって、その辺りは不自然
じゃない程度に省いているのだろう。または、自分なりにアレンジ
を加えているか、だ。

だから、他の地域で色々と悪く言われているのは、漠然的に彼ら
が普通の人とは異なる力を持っているからだろうとエンナは思っ
ていた。

が、彼らの反応からして、もっと深い何かがあるのかもしれない。

「スラッツ、言葉が過ぎるぞ。ここでは控えておけ」

シエルは至って冷静に、そして静かに窘める。スラッツは頭を掻
きつつ気のない返事をした。スラッツの態度にローズはむっと顔を
顰める。シエルはそれに対して気にしていないようで、前を向いた

まま何も言わない。

「ところでシエルさん。聞いてなかったんですけど、リユーリさんは？ それに、今どこに向かってるんですか？」

スラッツはローズの反応には気付かないふりをして、シエルと馬を並べた。

すると、益々ローズの機嫌は悪くなっていく。また今朝のような変な気を纏い始めて、スラッツを見ていた。エンナはそれが怖くて、できることなら馬から降りてローズから距離を置きたいと思った。

「ああ、リユーリとは別行動だな。二日後に口口の噴水の前で落ち合う約束をしている」

「そうだったんですか。成る程」

が、それでもスラッツはローズの不穏な空気に素知らぬ顔で、シエルの答えにただ納得と頷いた。

誰か助けて下さい。

エンナは、ローズにまわりつく黒い気にあてられながら、切実に願った。

4・変調 (2)

* * *

その日は、微妙な空気のまま目的地に向かった。時折休憩を挟みながら、会話もそこそこに道を進んでいく。結局、四人の間で生まれた微妙なヴェールは払拭できぬまま、この日の夜は野宿することとなった。

森の中で適当な場所にシエルは地面に円陣と何かの文字列を描いて、四方に魔物除けの魔法道具を置いていく。そうして出来た円の中心に焚き火を作り、エンナとローズ、スラッツは火を囲って座った。シエルは、また一人で周囲の見回りに行ってしまったている。

「シエル様とリユーリ様のこと、誤解なさらないで下さいませね」

揺らめく炎越しにローズはエンナに話しかけた。

「何よ、いきなり」

急に話し出した話題が二人のことで、エンナは不機嫌に眉根に皺を寄せる。それをちらっと見て、ローズは視線を火の頂上へ戻した。

「あのお二方が何も仰らないのは、貴女を守ろうとしてのこと」

「でも、何も教えてくれないのもどうかと思うわ。わたしにも知る権利があるのよ」

「そうですね」

「ねえ、アンタ達も事情は知ってるんでしょ？」

「勿論ですわ」

「教えては……くれないか、やっぱり」

「ええ、申し訳ないですけど。わたくし達がここで明かすということは、お二方の思いを踏みにじること……それは、お二人を、そしてあの方を裏切るも同然。できませんわ」

ローズは目を伏せて首を横に振る。

それは、完全な拒否反応。

「そうよね」

エンナは虚しさを覚えて、枝が赤い熱で軽く弾けて踊るのを瞳に映した。

なんとなく、ローズなら教えてくれるかもしれない、と淡く期待していたのだ。出会ったのはつい昨日のこと。彼女のことを知っているわけではないが、なかなか周りに心配っていること、世話焼きなことは一日でよくわかった。今だって、エンナのことを気に掛けて言ってくれたのと同時に、リユーリとシエルのことを思い違いないように配慮している。

「別にオレは教えてやってもいいと思うけどな」

エンナはその言葉に勢いよく顔を上げた。ローズは驚愕の表情で無責任なことを口走るスラッツに視線を走らせる。

「だってそうだろ？ エンナはその身を狙われているんだ。何も知らないってのは酷だ」

「スラッツ！」

厳しいローズの声が焚き火の炎を揺らした。

「貴方、本気で言っておりますの……」

ローズは眉睫を吊り上げて、下から険しくスラッツを睨め付ける。

「うん。知るも知らないも、どっちを選ぶかはエンナが決めることだとオレは思うね。そして、当の本人は知りたいて言ってる。エンナにも教えてやるべきだ」

「それこそ愚行ですわ」

「愚行？ どっちが愚行なんだか。本人が選んだことにどうこう言う権利はオレ達にはないと思う。エンナの行為を阻むオレ達の方こそ、愚かなこととしてんじゃないの？」

二人の間にピリツとした緊張感が駆ける。どちらか一方が口を開いたら、それを合図に一戦を起こしそうな雰囲気だ。

エンナは何も言えず、息を呑んで二人のことをただ見守る。今、エンナが割って入っても、火に油を注ぐようなものだろう。

「やめんか、愚かな人の子らよ」

そこへ、上空から声が降ってきた。聞いたことのない声にエンナは首を傾げるが、ローズとスラッツは我に返ったようにハツとなつて上を見上げる。

「トウグル！」

スラッツが驚いたように声の主の名を呼ぶ。エンナは、「え、」と目を点にさせた。トウグルは、確かシエルの精霊、大鷹の名ではなかったかと。

スラッツに呼ばれたトウグルは、大きな翼を羽ばたかせて三人の

傍に降り立った。

「全く、シエルの心配した通りだ。シエルが様子を見てこいと言うから来てみれば、案の定とは……」

呆れたようにやれやれと首を左右に振るトウグル。ローズとスラツツはばつが悪そうに顔を背けた。

「鳥が喋ってる!？」

一方、エンナはこの信じられない光景に身体を震わせた。鳥が喋っている。しかも流暢に。

世の中には、確かに喋れる種類の鳥は存在する。しかし、それはオウム返しというものだし、鷹は喋る鳥の種では決してない。なのに、目の前の大鷹は喋っている。

驚きに自分を見ているエンナをトウグルは呆れたように鼻を鳴らした。

「契約を交わした精霊は、人語という言葉を理解し、更にそれを操れるようになるのだ。ワタシの場合は契約云々に関係なく人語を操れるがな……ふん、そんなことも知らないのか、小娘」

馬鹿にしたように口角、ではなくこの場合嘴角と言えばいいのか、兎に角吊り上げてトウグルは笑った。

上から目線で、しかもこの言い方。エンナの気持ちに驚きから苛立ちに変わり、どうしてローズがトウグルのことをあんな風に言ったのかわかった瞬間だった。成る程、確かにこれはむかつくかもしれない。

「あーなんか思いつきり気が削がれたー。オレもう寝よ」

スラッツは頭をがしがし掻いた後、エンナ達に背を向けて横になっ
てしまう。まだ話は終わっていないとローズが気色ばむが、スラ
ッツはそれにひらひらと手を振って答えるだけで、それ以上の反応
は示さなかった。

そのスラッツの態度にこれは駄目だと諦めたらしく、ローズは深
い溜め息をついて切り上げる。

「貴女、この話はここで終わりですわ。何度聞かれても、それにお
答えできることはありません」

エンナは頷くことしかできなかった。

きつとこの話はシビアなのだ。あの二人が話さないのも、ローズ
とスラッツが言い争うのも、そういうことなのだろう。それに余計
不安を覚えるが、この話題はもう出さない方が良さそうだ。またこ
の二人が喧嘩でも始めたら、こちらもたまったものではない。

ローズは立ち上がって、彼女の馬に近付いて言った。

「わたくし達も寝ることに致しましょう」

* * *

エンナは、目をそっと覚ました。

まだ、日は昇ってはいない。薄闇が森を支配している。

早起き体質とはいえ、まさかこんな早くに起きてしまうとは。か
といつて、二度寝する気にもなれず、エンナはローズから借りた寝
袋から這い出た。肌寒い外気に触れて身体が身震いする。

ローズとスラッツの方を確認すると、二人はまだ夢の中のような

シエルは、見回りをずっと続けているのか姿がない。

これからどうしようかと考えて、エンナは少し辺りを散策してみることにした。この時刻なら、危険な魔物もそんな活発に活動してはいない。万が一、何かあったらここに駆け込めばいいだろう。寝ている二人には申し訳ないが。

そうと決まれば行動あるのみ。エンナは歩き出す。朝露に濡れた雑草の絨毯を踏んで、木々の間を通っていく。少し進むと、せせらぎの音が耳に入ってきた。そちらへ足を向けて低木の垣根を越えれば、小川に辿り着いた。さらさらと水が流れて、心地良く耳を擦る。

「誰だ？」

エンナが情緒に浸っていると、小川の上流から声を掛けられた。ハツとなつてそちらに目を向ける。そこには、全身黒尽くめな上、髪まで黒い青年が一人片膝をついていた。この川の水を飲んでいたのでろう。口から顎にかけて水で濡れてしまっている。彼は、濡れていない手の甲でぐいっとそれを拭った。

そして、彼は立ち上がってエンナに近付いてくる。エンナは驚きのあまりその場がちっと固まってしまって、身動きができなかった。

「ああ、お前は……」

彼はじつとエンナを見た。水色の硝子玉の中に銀盤を器用に入れたような、不思議で綺麗な瞳をしていた。そんな目で見つめられたものだから、エンナはもつと身を固くする。そして、彼はふつとその整った顔に優しげな微笑みを浮かべた。

「まさかこんなところで会えるとは。これも巡り合わせか。偶然とは恐ろしいな」

「あの、アナタは……」

「私か？ 私は、自由の人、とても言うところか」

訳がわからない。エンナが訝しく眉根を寄せると、青年は可笑しそうに笑った。

「そうだな、リベラとでも名乗っておこう」

「リベラさん？」

「ああ、“さん”はいらない。あんまり畏まった呼ばれ方は得意じゃないんだ。できれば呼び捨てで呼んでくれ、エンナ」

リベラと名乗った青年は肩を竦めた。

エンナは自分の名前を呼ばれたことに目を剥く。

「あの、わたしとアナタって初対面のはず、ですよ。どうして、わたしの名前を……」

「さあ、どうしてだろうな」

リベラは悪戯っぽく笑う。はぐらかされたエンナは、落胆して肩を落とした。

「アナタもそうやって隠すのね……」

エンナは、何だか哀しくなって俯いた。

あの四人も、初対面の人でさえこうして自分に蔽う。どうしてこんなに秘め事が多いのだろうか。皆が必死になって秘し隠す程、まさか自分は危険な存在なのだろうか？

自分は……一体何者なのだろう。

悶々と自分の中に引き籠もっていると、リベラの焦ったような声
が上から降ってきた。

「気を悪くさせてしまったようだな、すまない。私は自分の身をあまり大つぴらに言えないんでな」

リベラは、少し困った顔で微笑んだ。

「そうなんですか？」

「ああ、だから気にしないでくれ」

と言われても、余計に気になってしまるのが人間の性というものだ。

「もしかして、エンナが過敏になっているのは、あの精霊騎士四人が原因か？」

浮かない顔でいると、リベラが問いかけてくる。

エンナは目を数回瞬かせた。

「リユーリ、シエル、ローズにスラッツのことだろうか？」

驚いた。

エンナは誰と一緒にいるかなんて話してもいないのに、リベラはそれをピタリと言い当てた。

どうしてわかったのだろう。事情を知っていなければ知り得ないことだ。リベラは敵なのだろうか。そうでなければ、リユーリ達の仲間か。

いや、しかし、リベラはスラッツのことまで知っていた。スラッツは飛び入り参加のようなものだったし、事前に知っている関係者

でもこれは知り得ない情報だろう。それを知っているということは、ずっと見られていたということになる。まさか尾けられていた？
不信任が募り、警戒してリベラを見つめる。身構えるエンナを見てリベラは笑んだ。

「安心しろ。別に怪しい者じゃない」

「色々と十分怪しいんですが」

エンナは目を据えて、不信の視線をリベラに向ける。

言葉を返されたリベラは、確かに、と声を抑えて笑った。何が可笑しいのかとエンナは口を曲げる。

「なあ、エンナ」

一頻り笑い終えて、リベラはエンナに優しい微笑みを向けた。

「エンナには何か信念にしているものはあるか？」

突然そのようなことを聞かれても思い付くはずもなく、エンナは眉間に皺を寄せた。

「騎士の連中、特に精霊騎士達はそれぞれ強い信念を持っている。一体どんな信念を胸に秘めているかはわからないが、リユーリ達は忠誠心が強い上、“守りたい”という念が人一倍強い者の部類なんだ」

「そうなんですか？」

思わず聞き返すとリベラは點頭した。

「でも、他者を守るといふのは、その対象が一人であったとしても

「困難なことだ」

片膝を着いて、リベラは小川に手を晒して話を続ける。

「どんなに細心の注意を払っていても、この水のように指の間を擦り抜けていってしまう」

川の水を手で掬って、澄んだ水がリベラの指の間から流れ出て川に戻っていく様子をエンナは目で追った。

「大きな力を手に入れてもそれは変わらない。いとも簡単に自分の手から離れてそして……儂く行ってしまう」

最後の言葉を口にした時、リベラの瞳が少し憂いに揺れた気がした。過去に何かあったのだろうか。遠くを見るような目で自分の掌に視線を注いでいる。

「だからとは言わないが、ほんの少しでも良い、彼らを信じてやってくれ。特にリユーリとシエルは、この件についてどれ程の思いで事を進めていることか……心中察する」

「そんなに？」

「ああ、きつと思ひ悩んでいたはずだ。それは勿論今もな。どうやったら一番エンナに良いのか、そして守れるのか」

それを聞いてエンナは疑問に思う。

「だとしたら、どうして彼らが自分にそこまでするのだろうか。」

確かに“とある方”の命令があるからかもしれないが、それにしただって彼らが自分に何かを配慮する義理はない。

「でも、あの二人がそこまでする理由って何？ 普通、突然知り合

ったような相手に思い入れるようなことってないと思うんですけど」

「……本当に？」

「え？」

「本当にあの二人とは面識がないのか？」

二人の間に微風が通り抜けていく。髪が、服の裾が、僅かに揺れ動いた。

まるで誰かがエンナに、リベラと同じく本当に？ と静かに問いかけているような。

「何言つて……そんなの当たり前じゃないですか」

そう、あの二人とは今回初めて会ったのだ。記憶の中を探ってみても、思い当たる節はない。第一、あんな美形な二人と以前に会ったことがあるとしたら、印象に残って覚えていそうなものだ。

エンナがうんうん唸りながら考え込んでいると、上空から地鳴りのような咆哮が轟いた。

エンナはぎょっとなって空を見上げる。

青が戻りつつある空に黒い点が一つ、動いていた。それは遙か天空を飛んでいるようで、姿形がはつきりとはわからないが、鳥の形に似ている気がする。が、それにしても尾の部分が随分と長い。

「迎えが来てしまったか」

リベラも黒い点を目で追いながら呟いた。

「エンナ、お前もそろそろ戻った方がいいだろう」

そう言つてリベラはエンナの腕を掴む。エンナは驚いたが、リベラは無言を言わずに何かを掌に乗せてぎゅっと握らせた。

「これは錢別だ。会えたことを記念して」

エンナは掌をそつと開いてみた。それは黒くて硬い、鱗のような形をしていた。表面が艶やかで、傷が一つもなくとても綺麗だ。

「ペンダントヘッドにでもして身に着けておくと良い。何かの役に立つだろう」

それだけ言って踵を返し、リベラは森の中へ去って行くこととする。エンナはそれを呼び止めた。

「あ の つ」

「いつかまた、こうして会えることもあるだろう。それまで、さらばだ」

リベラは外套を翻す。

その時、リベラの前髪で隠れていた額が見えた。髪の間から垣間見えた額には、黒い模様が描かれているようだった。一瞬のことだったので、どういう形だったかまではわからなかったが。

そうして、リベラは木々の向こうへと姿を消していく。

リベラの後ろ姿をただ呆然と、エンナは見送るのだった。

* * *

「エンナ、エンナ」

揺蕩う意識の中で軽く肩を揺さ振られ、エンナは薄く目を覚まし

た。まだ夢の中に浸っていたいエンナは、不機嫌に自分を現実へと引き戻そうとする犯人を探して目を動かす。

探す間もなく眼前一杯に広がるスラッツの顔。そして一瞬、彼の肩に何か、黒い何かが乗っていたような気がした。

「ぎゃっ」

夢現を行き来していたエンナは、それに吃驚して目を見開く。休んでいた頭も覚醒を果たし、意識が一気に現実へ帰ってきた。

「おっ、起きた起きた」

目を覚ましたエンナに満足して、スラッツは満面の笑みを向けた。

「エンナ、もう朝だぞ。そろそろ出発するみたいだから準備しないと」

「えっ！」

スラッツの肩にいた黒い何かのことを頭から吹き飛ばすくらいに驚いてエンナは飛び起きた。

陽は大分昇っているようで、地上に朝の優しい光を降り注いでいる。

こんな時間まで眠りこけてしまうなんて、正直方ぶりだ。教会でもこんなことは一、二回程度のこと、寝坊なんてしたことはなかったのに。不覚だ。

スラッツはエンナが完全に目を覚ましたとみて、ローズ達の方へ出発の準備を手伝いに行ってしまう。

スラッツの後ろ姿を追いながら、エンナは早朝リベラという青年に会ったことを思い出した。

今思うと、現実味を帯びている感じがしないのだ。どうにも記憶

が変に曖昧で、思い出す会話も何故か反響している。幻想的な世界へ迷い込んでしまったような、そんな風にさえ思った。

もしかしてあれは、リユーリ達に対する不信感から生み出した自分の夢だったのだろうか。

エンナは夢なのかそうでないのか考え込んで、頭を抱えようとしたその時、掌から何かが地面に転げ落ちた。「あつ」と声を漏らす。それは、あの青年から貰った黒いペンダントヘッドだった。これがあるということは、つまり……

夢じゃなかったんだ。

* * *

エンナが起き出すと、四人は早々に野営を後にした。朝食は軽く馬上で済ませる。

四人の間にあつた気まずい空気もなく、この日は平和な旅路であった。

昨日のこともあり、エンナは特にスラツツとローズのことが気掛かりだったが、二人共そのことについてはすっかり良いようだった。昨日の出来事などまるでなかったかのように、みんなに向かつて楽しそうに喋るスラツツにローズが突っ込みを入れている。こうしている、なかなかの良いコンビである。

只、道中気になったのは、シエルがエンナに誰かに会わなかったかと聞かれたことくらいだ。

エンナは思わず、会っていないと答えた。そうやって言い切ってしまうと、あとで訂正するのもし辛いもので、訝しむシエルにエンナは会っていないと言いつつ通す。

やはり、シエルはそれで納得がいかなかったようだ。確かめるようにエンナを見る。が、やがて諦めたのか、彼はそうかと呟いた後は何も聞いてはこなかった。暫しの間思案を巡らせている様子ではあったが。

嘘をついたことでエンナは少しの罪悪感を覚え、馬に揺られながら悶々と物思いに耽った。基本的に正直者なエンナ。人を欺いたりするのは苦手だし、彼女自身誰かに嘘をつくのは好きではなかった。それは子供の頃、『嘘つきは泥棒のはじまりだ』と神父様に言い含められたせいもある。子供心に泥棒と呼ばれるのは嫌だったので、努めて正直であろうとしていた。勿論それは今も。それ故に、嘘をついてしまった自分自身にエンナは叱責する。

いや、しかし彼らも自分に隠し事をしているのだ。だから、これくらいの嘘は許されて当然、お相子だと思ふことで、自分のついた嘘を正当化させる。

割合のんびりと平穏な旅路を進みながら、立ち寄った町でエンナはこのままでは忍びないと服と靴を購入して貰った。気が進まなかったが、今着ているのはローズの借り物であるし、これをずっと身に纏っているのも悪い気がしたのだ。何より、如何にも高級そうで汚してしまったらと思うと怖くて仕方なかった。その点、今の服装ならそこまで気を遣わなくて良い上、何より動きやすい。

そうして、この日はリユーリとの合流に備え、辿り着いた宿場町で宿を取った。月が夜空に浮かんでいる内に出発するというところで夕陽が沈む時刻にはシエル以外、皆早々に床に着くこととなったのだ。

しかし、次の日、リユーリとの待ち合わせ当日、それは来た。

「なんてことですよ……」

ローズは、その事態に言葉を失って口を押さえた。
呆気にとられてエンナは只気の抜けたような顔でいる。
起きてみたらエンナは見えるようになっていたのだ。
実体を持たない、精霊という存在を。

5・目覚め (1)

それは突然にやってきた。

夜中、エンナは目をうつすらと覚ました。横のベッドに視線を移すと、どうやらローズは既に起き出しているようで、ベッドの中はもぬけの殻だった。そろそろ出る時刻なのだ。

エンナも身を起こそうとした時、眼前にとても小さい女の子がいた。不思議なことに宙にぶかぶか浮きながらじつとエンナのことを見ている。エンナは思わず動きを停止して固まってしまった。

大きさは手の平位で、くりっと大きな赤い目が可愛らしい。耳は尖っており、短髪の髪は緑色で、着ているワンピースも緑色だ。左右の手首にはトゲトゲしたブレスレットを身に着けている。

その小人さんは、ぱちくりと瞼を瞬かせた。

「もしかして、見えてる？」

小さなお手々を振って、小人さんは確認を取る。エンナはぎこちない動きで首を縦に振った。すると、途端に小人の瞳が興味津々にキラキラと輝きだして、エンナのことを穴が空く程見詰める。どうしたらいいかわからないエンナは、動けないまま見詰め返した。

小人さんと睨めっこをしていると、唐突にドアが開く。そこから顔を覗かせたのはローズだった。

「あら、もう起きてましたのね」

既に目を覚ましているエンナに目を止めて、彼女は部屋の中に入ってきた。

「ロニコニー！」

ローズの姿を目にして、その小人さんは勢いよく彼女のところへ飛んでいった。

「あのねあのね、あの子ね、ニコンのこと見えてるみたい！」

ニコン。

よく魔法を発動させる時にローズが口にする名前だ。ということは、あの子は精霊……？ と、変に冷静な頭の片隅でエンナは判断した。

そんなエンナとは裏腹に、ニコンはかなり興奮しているようだ。エンナに指を指して、熱が沸き立つままにニコンはローズに報告する。ローズは眉間に皺を寄せた。

「ニコン、悪い冗談はお止しなさい。そのようなことがあるわけないでしょう」

「だって本当のことだもん。ニコン、嘘つかないもん」

相手にしないローズにニコンは頬をぷくうつと膨らませて拗ねてしまう。それを見てローズは一度溜め息をつくど、ニコンの服の裾を掴んでエンナのところに近付いてきた。掴まったニコンは「やん」と身を振ったりして嫌がるが、為す術もない。

「貴女、これが見えております？」

ローズはずいっとエンナの目の前にニコンを掲げた。これ呼ばわ

りされたニコンは、これじゃないもん、ニコンだもん！ と文句を言うがローズは無視している。なんだか可哀想だ。

何も反応を示さないエンナを見て、ローズはニコンを彼女の顔の方へと持つて行くと目を据えた。

「ニコン？」

「ふにゆうう、ニコン嘘ついてないもん。本当だもんっ」

まだ言つかとローズが睨みをきかせると、ニコンは今にも泣き出しそうな顔で必死に自分が正しいと訴えた。

「見えてる……」

少し落ち着きを取り戻し始めてきたエンナは、静かに言った。このまま黙ったままだと、あの愛らしい小人さんがあまりにも可哀想だと思ったのだ。

「は？」

「見えてる、わたし、その子……その、小人みないな緑色の子」

エンナが言葉辿々しく伝えると、ローズは一瞬固まった。が、すぐに平静を取り戻してエンナに問い返した。

「見えているというのは、わたくしが手に掴んでいるものですか？」

「うん。詳しくその子の容姿言ったら信じてくれる？」

ローズは暫し思索した後、ニコンに視線を戻した。

「ニコン、あなたまさか実体化しているのでは……」

「してないもん！ それはロニだってわかってる癖に！」

じたばたと暴れるニコンを尻目に、今まさに起こっている事態にローズは衝撃で動けないようだった。ニコンから手を放して、口を覆う。やっと解放されたニコンはプリプリ怒りながら、ロニのバカバカと文句垂れる。しかし、当のローズはそれどころではないようで、それが聞こえていないようだ。

「なんてことですよ……」

そう呟いたローズの顔は、少し青ざめていた。

* * *

そして、今に至る。

ローズはこの事態が相当衝撃だったようで、静止したまま微動だにしない。それが少し居心地悪くてエンナは身動いだ。そんなに自分が見えるようになったことがいけないことだったのだろうか。

しんと静まり返ってしまったこの部屋だけ、まるで時間が止まってしまったかのような錯覚を覚える。暫しの間、いや、数秒のことかもしれない。兎に角、刻が過ぎるのを待っていると、ローズがやっつと重い口を動かした。

「貴女……精霊が見えることは、絶対に誰にも言っってはいけませんわよ」

どうしてとエンナが問う前に、ローズは膝をついてエンナの肩に手を添えて言った。

「いいですか、このことは他言無用のこと。誰にも知られてはいけません……特にリユーリ様とシエル様には……わかりましたわね？」

諭すローズの表情は、深刻に眉根が寄っていた。

なんでとか、どうしてとか、疑問がエンナの頭に浮かぶ。本当ならすぐに聞きたかった。しかし、ローズの真剣な顔を目にしたらそれを言葉として紡ぐことはできなかった。

「うおーいお二人さん、そろそろ出るぞ〜？」

ローズの忠告に否定も肯定もできずエンナが反応に困っているといきなり部屋の戸が開いた。そこからひよこつとスラッツが顔を覗かせる。

「スラッツ……！」

緊張がローズに走ったのがわかった。勢いよくスラッツの方へ振り返って、ローズは驚駭している。

「いや、そこまで驚かなくても……」

スラッツが少し傷ついたように目を細めて苦笑する。が、エンナに視線を移した時、彼は、ん？ と首を傾げた。そして、ずかずかと部屋に入って二人のところまでやって来ると、スラッツは何かを吟味するようにじろじろと不躰にエンナのことを見る。

「あの」

無遠慮に見回されて、エンナは半眼でスラッツに不満の視線を送

った。が、スラッツはこれまた遠慮もへつたくれもなく、突然エ
ナの髭谷部分をガツと掴んだ。ローズが止める間もなく。

「ちよっ……！」

流石に吃驚して、エンナはスラッツの手を振り払った。

「何すんのよ!!！」

失礼だとばかりにエンナはスラッツを非難するが、スラッツは聞
いていないのか彼の反応は全く違うものだった。

「エンナ、もしかして見えてる？ 精霊」

どうしてわかった。

エンナは「え、」と呆気にとられ、ローズに至っては頭が痛そ
うに額を押さえている。

「ランダー」

「ほいな」

スラッツが誰かに呼び掛けると、彼の肩に忽然と黒い物体が姿を
現した。エンナは目を剥く。一体何処から湧いて出てきたと言いた
くなるが、きつとあれも精霊なのだ。蜘蛛に似たその姿。だが、蜘
蛛と言うには随分と大きい。拳一つと半分はありそうだ。

「エンナ、今オレの肩に乗ってる奴のこと見えてる？」

「う、うん」

「姿は？」

「黒くて、蜘蛛みたい……」

エンナが素直に答えると、スラッツは「あちゃ〜」と片手で後頭部を掻いた。

「こりゃ、完璧に見えるなあ」

「どうしてわたしが見えるようになったってわかったの？」

エンナが訝しく視線を送って疑問をぶつけるとスラッツは答えた。

「特殊能力つてやつかな。精霊と契約すると、みんなつてわけじゃないけど、オレみたいに特殊な能力を得られることがあるんだ。オレの場合は人体内に流れる気とは異なる力の動きとかがわかる」
「異なる力……」

と、回答を得ても、よくわからなかったエンナだった。

「スラッツ、このことは……」

言い淀むローズに、何を言おうとしているのか察したらしいスラッツは力強く頷いた。

「わかってるって。これは内密にしとく」

それを聞いてローズはほっと胸を撫で下ろした。

エンナが精霊を視認できるというのは、そんなに問題ありなのだろうか。

「さつてと、兎に角さ、そろそろシエルさんのところに行こう。待たせちゃってるし」

スラッツの最後の“待たせている”発言にローズは血相を変えた。

「そうでしたわ……！！ 貴女、早くお起きになって！ これ以上シエル様をお待たせしてしまっただけじゃありませんわ！！」

今までの深刻さは何処へやら。そちらの方が由々しき事態だとばかりにローズはエンナを急かす。

なんとというか、この四人の関係がよくわからない。エンナは首を捻るのだった。

エンナは蟠りを抱えたまま、月が空に浮かんでいる内に四人は出発した。冷たい夜風が身体に凍みる。

森の中にある街道を皆黙々と馬を進ませていたわけだが、旅路の間エンナはとても困ったことがあった。精霊が見える。これに他ならない。

ローズに隠せと言われたが、これがどれ程難しいことが痛感した。あちらこちらにニコンのような精霊を見かけるし、普通の動物かと思っただけなのに急に姿を消したりして、そこではじめて精霊だったのだとわかったりと、そういうことが多々あったからだ。まだ、人の姿をした小人なら良い。どんなに物珍しくて反応しようとも、あれは確実に精霊だとわかるので、どうにかこうにか見なかったことにすれば良いだけの話だ。

しかし、動物の姿をした精霊は、普通の動物達との見分けが全然つかない。何処をどう見たら精霊だとわかるのか。ローズやスラッツに見分け方があればそれを聞き出したいところだったが、シエル

がいたので耳打ちすら憚られた。

なので、エンナは兎に角、目に映るもの全てを無視することにした。そうすれば、少なくとも、動物と見せかけて実は精霊でした、とボロが出ることは格段に減る。

無視！ 無視無視！ 何も見えない何も無い！！

エンナは、それを呪文のように心の中で唱え続けた。

* * *

朝焼けで空が明るみ始めた頃、 Rond という大きな町に辿り着いた。寝静まった町が起き出していることを象徴しているかのように煙突から白い煙が出ている。

エンナ達は馬から下りて、その手綱を引きながら本道ではなく、薄暗い裏路地を通って目的の場所へと向かっていた。建物の合間にある馬が一頭通れるくらいの細い道なので、煉瓦の冷たさが肌に伝わってくる。

裏道を縫うように歩みを進めていくと、開けた場所に出た。裏の小広場のようなそこは閑散としていて、中央に申し訳程度の噴水が設置されている。水は枯れているらしく、只そこにこのオブジェのような噴水の縁に誰かが腰をかけていた。鮮やかな赤い髪。まだ陽が昇りきっていない朝の中、そこだけ色付きハッキリと存在を主張している。

「やあ」

紛う事なきリユーリだ。

エンナ達に気付いたリユーリは、綺麗な微笑みを称えて片手を挙げた。

「追われている中、遅刻もなく無事着くなんて素晴らしいね」

「リユーリ様……！」

声を上げたのはローズだった。リユーリの無事な姿を目にして安堵の息をついている。

「リユーリさんこそ。ていうか、一人で行動してたのに無傷なんて流石ですね」

スラッツが感心して褒めると、リユーリは「まあね」と肩を竦めた。

「スラッツも災難だったね。守護使なんてやらされてさ」

「あれ、知ってたんですか」

「勿論、その辺りはシエルから報告済みだよ」

リユーリは立ち上がって、座って着いた埃を叩き落として四人に近付いてきた。

「エンナは、会った時より随分元気が良さそうだね」

「おかげさまで……」

皮膚の交じった笑みを口端に表して、エンナは視線を逸らした。顔を合わせて早々、どうして嫌味紛いのことを言われなければならない。いや、もしかしたらリユーリなりに気を遣ってくれているのかもしれないが、彼は裏で何を考えているのかわからないので、一々勘ぐってしまう。

と、リユーリの肩から何か飛び上がった。その何かはシエルの肩に飛び乗ると、彼の頬に擦り寄ってくる。イタチのような姿だが、にしては鼻が低い。

これは、精霊なのだろうか。興味深そうにエンナはその生き物を観察していると、リユーリは口を開いた。

「ヒン、シエルにようやつと会えて良かったね」

ヒンと呼ばれたイタチみたいなその動物は、リユーリの方へ顔を向けて鼻をひくつかせた。そうして、また喉を鳴らしながらシエルに擦り寄っていく。嬉しいという表現なのだろう。なんとも可愛らしいではないか。

少時の間、シエルに身を寄せて満足したのか、ヒンは空気に溶けるようにその姿を消していった。エンナは目を丸く見開く。やはり、あの動物も精霊だったのだ。

そこでローズに言われたことをはたと思い出す。ここで今起こったことに反応していると、リユーリ達にエンナが見えるようになっていたことがばれてしまう。エンナは心中慌てて平静を装った。そして、リユーリとシエル双方の反応をちらつと伺う。幸い、二人共気が付いていないみたいだ。

しかし……

「シエル、ヒンがいてくれて色々助かったよ。ありがとう」
「そうか」

言葉を交わす二人の様子が少し変なような気がした。何故か違和感を感じる。ローズやスラッツも様子がおかしい。ちらちらと周囲を気にし始めている。ピリツと肌に突き刺す二人の緊張感が伝わってきた。

「ねえ、そろそろ出てきたら？」

リユーリは誰にともなく言葉を掛ける。リユーリの涼やかな声は建物の壁に跳ね返って反響した。一体何事？

「それとも、こっちから手を出した方が良いかな」

にやりと口元に怪しい笑みを浮かべて、リユーリは後方にある建物へ視線を投げた。

エンナはリユーリの目線の先を追ってそちらを見やる。その建物には、外壁に二階の戸へと続く石造りの階段があった。その戸から人が一人、姿を現す。するとローズとスラッツは、素早くエンナを守るように陣を取った。

建物の中から現れたその人は、壮年の男だった。鎧とその上に外套を羽織っているが、それでも尚、鍛え抜かれた立派な体格だとわかる。男は憎々しげに蔑つい顔を歪めた。

「怪異者め」

「怪異だつて？」

リユーリはぶつと吹き出した。

「一流の教育を受けてきた人の発言とは思えないなあ。しかも、苦学を共にした君にそう呼ばれる日が来るとはね、ディック」

「黙れっ、この化け物風情が！ 気安く私の名を呼ぶな！！」

ディックは荒々しく怒鳴った。顔を赤くし肩で息をして、リユーリを睨み付ける。まるで敵を前に威嚇する猫のようだ。

やれやれとリユーリは肩を竦めた。

「そついつところは昔とちっとも変わってないね。すぐに頭に血が上って、高ぶった感情のままにことを進めるからいつも為損じてばかり」

「御託はいい」

声を振り立てて叫んだお陰か、ディックは少し落ち着きを取り戻したらしい。リユーリの挑発には乗らず、吐き捨てるに終わった。

「単刀直入に言わせて貰う。その娘、大人しくこちらに渡して貰おうか」

呼吸を整え、リユーリとそしてシエル達を見据えると、ディックは語調を強めて言った。

その娘とはエンナのことだろう。エンナは反射的に身を固くさせた。一方、ローズはディックを鋭く見て、スラッツは懐に手を突っ込み臨戦態勢に入っている。

反して、リユーリとシエルは落ち着いたものだった。リユーリは満面の笑みを浮かべているし、シエルなどは腕を組んで動向を見守っている。

「答えは聞かずとも、わかってるでしょ？」

「ということは、渡さない。そういう解釈になるがいいか」
「勿論」

リユーリの答えにディックは瞑目した。そして、徐に手を挙げる。すると、道から、建物の裏口から、潜んでいた衛兵が続々と姿を現した。これだけの数を一体どうやって潜ませていたのかと思う程だ。四人を包囲するように取り囲み、剣を構える。まさに袋の鼠という言葉がぴったりだ。緊迫感が一気に押し寄せてきてエンナの身に駆

けるように襲った。

そんなエンナを守るようにリユーリ達は彼女を中心に陣を組んだ。そして、それぞれ構えの型をとる。シエルは剣を抜き、ローズは茨の鞭を手にして、スラッツは苦無くないを構える。

「ならば問答無用でその娘、奪わせて貰う！」

「奪えるものならね！」

言い様にリユーリは帯びていた細身の剣を抜き放った。刀身は炎が揺らめいているかのような波型をしており、フランベルジュの刃渡りを短くしたような剣だった。

「かかれええええっ！！！」

ディックの掛け声で戦いの火蓋は切って落とされた。

獲物に群がっていく蟻のように兵士達が一斉に襲い掛かってくる。斬り掛かってくる兵士と刃を交え、一振り一振り無駄なくリユーリとシエルは攻め返していった。ローズは常にエンナの側で彼女の身を棘の鞭で守り、スラッツは身軽々に苦無を走らせて二人に近づけさせまいとしている。

この乱闘に馬達は驚いて、甲高く嘶くと分け目も振らずに逃げていった。この密集した中だ。馬が暴れたらその犠牲者が出るのは当たり前前で、兵士の数名かあるいは数十名か、正確な人数はわからないが、確実に負傷者が出た。

「その娘は生かして捕らえる！！ 他はどうなるかが構わん！！！」

ディックは階段の上から兵士達に指示を出すと、彼は自らも剣を抜いてこの乱闘の中へ身を投じた。

「リユーリさん！ このままじゃ埒明かないですよ！！」

スラッツは苦無を振り切り様に叫んだ。

「言われなくてもわかってる！」

敵の剣を流れるような動きで躲して、リユーリは相手の首目掛けて剣柄を喰らわせる。やられた相手は堪らず呻き声を上げて、そのまま卒倒した。

リユーリとシエル双方は、敵の刃を退けながら周囲に目を走らせる。そして、同じ所に視線が止まった。二人は目を一瞬だけ合わせ、それだけで互いの考えを理解したようだ。

「あそこの橋下の道を使うぞ！！」

シエルの声が頭の中で強く響いた。

あそこと示された橋を探すと、小道を間に挟んだ建物同士を繋ぐ橋が三階くらいの高さに架かっているのが目に映った。きつとあれに違いない。

「はいっ！」

シエルの指示にローズは鞭を撓らせながら答えると、エンナの肩を抱いて庇いつつ一歩一歩前に歩み始めた。その先頭をリユーリが切り、スラッツがエンナとローズの側を、シエルが後方を守る形で徐々に進んでいく。

「これではどうしようもない。トゥグル！」

なかなか先へ進めず痺れを切らしたのだろう。シエルが天に向か

って彼の精霊の名を呼んだ。

空から一声、拡散するように、だが鋭く空気が震えた。その直後、上空からトウグルが急降下してきて舞い降りる。リユーリと兵士の間に割って入る形で、勇敢にも敵の目の前へ立ちはだかった。リユーリは素早く身を引き、対峙していた兵士の男は、一瞬何が起こったのか判断が付かなかったようだ。が、トウグルがくわつと嘴を開けるとやつと目からの情報が脳へ行き渡ったようだった。

「風の鷹……！！」

その男の他に兵士数名もトウグルの姿を見て、顔を青くさせた。どうやら、恐れ戦いているらしい。一步後退って躊躇している。

「ふんっ、この愚か者共め」

自分を目前にして震え上がる兵士達を一瞥して、トウグルは心底馬鹿にしたように吐き捨てた。

そして、トウグルは眼光鋭く兵士達を睨み付ける。蛇に睨まれた蛙の如く、兵士達は逃げることも出来ず身体を竦ませた。

「邪魔だ。道を空けて貰うぞ」

一度大きく羽撃いて、相手の目線まで飛び上がると、トウグルは二、三度両翼を広げて強く打った。

すると、何の前触れも無しにいきなり兵士の一人が吹っ飛んだ。後ろにいた数名の兵達を巻き込み、石造りの壁に強く叩き付けられる。まるで目に見えない空気の弾丸が発射されたような感じだ。トウグルは何回かそれを繰り返して、道を塞ぐ兵士達を次々になぎ倒していった。

5・目覚め (2)

「今だ、走れ！」

やがて一直線の開けた道が出来ると、トゥグルは他の兵士と剣を交えていたリューリ達に向かって叫んだ。

「ローズ！ エンナ！」

リューリは剣を合わせていた相手を後方へ押し返して駆け出した。ローズもリューリに続いて、エンナの手を引つ張りながら全力で駆け抜ける。その後をスラッツが追って、最後にシエルが敵兵を牽制しながら走った。

「シエルーーッ！！！」

シエルが小さな石橋の下を通り抜けようとした時、気合いと共にディックが後方から斬りつけてきた。それをシエルは難なく避けると、ディックと剣を激しく交える。

「シエル様！！！」

「ここは俺が食い止める！ お前達は先に行け！！！」

ディックの剣を思い切り押し返して後ろへ跳び下がらせてから、シエルはそう言い放った。ディックは堪らず「ぐっ」と呻いてシエルを睨め付ける。

「仕方ない、シエル！ そこは任せたよ！」

視線は眼前の敵に向けながら、シエルはリユーリの言葉に頷いた。

「さあ、愚図つてないで走って！」

リユーリはエンナ達、特にシエルを心配そうに見ているローズに向かつて逃げるよう煽った。

リユーリの声に促されてローズは唇を引き結ぶと、再び前を向いて走り出す。

その時、リユーリの肩に何か飛び乗ってきた。イタチのようなその姿。しかし、鼻が低くイタチにしてはとても丸顔だ。

「折角シエルのところへ帰れたのに、早々また離れさせることになってごめんね、ヒン」

自分の肩へ乗ってきたヒンに向かつて、リユーリは謝った。

「良いつてことよ！」

ヒンは可愛い姿とは裏腹に話し方はなんともべらんめえ口調。その姿から発せられた言葉とは思えない程不釣り合いだ。

「それよりもリユーリの旦那。何人か敵が待ち伏せてますぜ。数は大体五人つてところ。その内の一人は精霊使いやす」

それだけ告げると、ヒンの身体は半透明になって跡形もなく消えていった。

「へえ、まさか精霊使いを連れてくるなんて。アイツもそういうところは進歩したんだ」

感心だとリユーリは笑った。

「いやいやいや！ リユーリさんそこ感心している場合じゃないですよ！ それってかなり厄介ってことじゃないですかっ！！」

リユーリの随分と楽しそうな声音にスラッツは慌てふためいている。

そりゃそうだ。エンナもスラッツと同意見で、この状況をなんでそんなに楽しそうにしているのかわからない。

「何情けない事言ってるのさ。仮にも精霊騎士とも在ろう者が精霊使いの一人や二人に怖じ気づいてどうするの」

「そうなんですけど」

スラッツは愁傷的な声を発した。気の毒に。

一本道を走り抜けて行くと整備された小川に出た。この町の生活用水になっているのだろう。水の流れは極めてゆったりしている。

その川の脇道を走ってすぐ、前方に敵と思しき兵士四人とローブを身に纏っている人物が一人いた。

「来たっ、奴らだ！」

疾走するエンナ達に気付いた彼らは道を塞ぐように立ちはだかる。その後ろに精霊使いらしき男が控えた。ローブ姿の男は高々と命じる。

「くかの者達を捕らえる大蛇となれ！>」

それを合図に川の水の一部が大きな蛇となってエンナ達に襲い掛かってきた。

「成る程、火に水の判断は間違つてないよ、ディック」

リユーリは不適な笑みを浮かべた。

「でも、この程度じゃ僕は止められない！ <灼熱の業火 炎球>」

リユーリの手には直径三十センチの炎の球が瞬時に構築された。球の中央は赤黒く、熱が赤色を帯びているのか、それともそれ自身が炎なのか、透明なガラス玉の中で逃げられずに蠢いている。

リユーリはその赤い球を水の大蛇に投げつけた。水で出来ている大蛇は、炎の球を呑み込もうと口を大きく開ける。しかし、炎球とぶつかり合った途端、そこからじゅわつと蒸発していつてしまう。

高温の球を受け止めることも、消すことも出来ず、水の大蛇は呆気なく頭から激しい音と泡を立てて消えていった。

その大量の水蒸気が辺りに立ち込め、視界の先が真っ白になってしまう。途端に敵の姿まで見えなくなった。それは向こうも同じように、兵士達が術者に対しての罵声が聞こえてくる。

スラツツはチャンスとばかりに走る速度を上げ、エンナ達を追い越していった。両手には、苦無が握られている。濃くて白い霧の中へ突っ込んで行くと、程なくして兵士達の悲鳴が上がった。

エンナ達も白に支配された霧の中へ入っていく。肌に纏わり付く水滴を感じながら、そこを駆け抜けた。

白の世界から出た先には、兵士達が皆倒れていた。その中心にスラツツがいる。どうやら、彼が全て片付けたようだ。

リユーリ達は倒れる兵士達には目もくれず通り過ぎる。

目指すはその先にある石橋。

小川に架かったその橋を渡って、ローズに引つ張られるままエンナは走って、走り続ける。

そこでエンナはシエルのごことが心配になり始めた。あんな大勢の

敵を一人で相手にするなんて大丈夫だろうか。

思わずリユーリに尋ねてみると、彼は声を立てて笑った。

「そのことなら心配いらぬよ。シエルの強さは半端ないからね。なんていったって、この国で五本の指には入る程の剣技と精霊術の使い手。僕達があそこにいることの方が足手まといってものだよ」

そんなにあの人が強かったのか。

エンナは感心してただ「へえ」という簡素な返事しかできなかった。

どんなに強くても多勢に無勢。数には勝てない。でも、そんなに強いのならきつと大丈夫に違いない。と、根拠もなくそんな思いが湧き上がる。

いや、根拠ならある。リユーリの自信に満ち溢れたこの態度だ。心配どころか、シエルが負けるなんて微塵も思っていないようだ。リユーリはシエルに絶対的な信頼を寄せているのだろう。それがリユーリの表情から、言葉の端々から伝わってきた。

リユーリがそこまで言うのなら、寧ろ心配している方がお門違いも甚だしいのかも。

それにシエルは一人じゃない。トゥグルという頼もしい相棒がいる。

そう思っつて、エンナはシエルのことは頭の隅に一旦追いやることにした。再び逃げることに専念する。

その逃亡の途中途中、待機していた数名の兵士達と遭遇、戦闘になったが、リユーリ達の敵ではなく、何の障害にもなりはしない。

やがて町の出口と思われる境目が見えた。リユーリはすぐに出でいかず立ち止まると、小道からそつと外の様子を伺う。すると、案の定兵士が五人待機していた。彼らの側には馬が控えている。リユーリはしめたと口元を吊り上げた。

「あいつらの馬を拝借しよう」

後ろにいるエンナ達に向かって、リユーリは作戦を述べた。

「僕とスラッツであいつらを惹きつける。その間にローズ達は馬に乗ってこの町を出るんだ」

そのあとすぐ僕らも、と手短に言つと、ローズとスラッツは頷いた。

「じゃ、準備は良い？」

「いつでも良いです」

スラッツが苦無を構える。それを確認して、リユーリは行くよ！と飛び出していった。

兵士達の怒号と悲鳴と、鉄が擦れてぶつかり合う音が角の向こうから聞こえてくる。

ローズは静かにその一戦を目で追いながら、出る間合いを計っていた。

リユーリ達の誘導で、彼らは馬から離れていく。

そして、この瞬間という時にエンナに向かって号令をかけた。

「行きますわ！」

力強く言い放ち、エンナの手を引っ張って走り出す。

馬達が木の幹に繋がれているその向こうで、リユーリ達と兵士達の戦闘が見えた。

何も目もくれずに馬へと駆け寄って、ローズは馬を繋げている縄を全部解くと、その内の一頭にエンナに乗るように言った。エンナ

はローズの手を借りながら馬に乗ると、ローズもその前へ乗ってくる。

「しまった！ 奴ら馬をつ……！！！」

戦っていた兵士の一人がエンナ達に気付いたようだった。こちらへ走り出そうとするが、その道をリユーリが阻んで止める。

「縄は解いておきましたわっ！ リユーリ様達もお早く！！！」

ローズは二人に告げて早々に手綱と自らの足で馬に走れと命じる。馬は嘶いて、一回前肢を上げた。身体が後方へ傾いて、エンナは慌てて落ちないようにローズの身体にしがみつく。馬の足が地に着く振動の後、馬は風を切って走り出した。

「スラッツ！」

リユーリは流れるような剣捌きで戦いながら、スラッツに先に行くように促す。スラッツは頷いて、彼は一步跳び下がると精霊ランダーに言った。

「<ランダー アイツらを拘束する！>」

すると、スラッツが手を突きだしたところから、白い糸が吐き出されるように何本も出てきて、敵の動きを封じ込めた。身動きがとれなくなった兵士は、なんだこれはと文句を言いながら藻掻く。だが、取れるどころかそれはどんどん身体に絡み付いていく一方で、ついには地面に倒れてしまった。

スラッツは踵を返して馬へ駆け寄り、跳び乗るようにして鞍上に跨ると、もう一頭の馬の手綱を引きながら駆け出した。

「リユーリさん!!」

リユーリは三人の衛兵の剣を流れるような動きで受け流しては避けていた。スラッツの呼び声に反応して、リユーリは二、三步後方へ跳ぶと手を天に掲げて唱え始める。

「炎よ」

すると、兵達はその仕草と“炎”という単語に素早く反応した。顔に恐れで血の気が引いてしまっている。彼らは慌てて各自思い思いに離散していった。

「我が声に応えて 敵を焼き払えー!」

リユーリは両手を挙げて高々に終止符を打った。

が、おかしなことに何も起こらない。

相手にしていた兵士達の姿はもうない。市民を守る兵士とは思えない程、見事なまでのとんずらだ。

戦場に取り残されたリユーリは、舌を出した。

「……なーんちゃって」

あれはリユーリの真っ赤なはったりだったのだ。

「リユーリさん!」

またスラッツが彼の名を叫ぶ。振り返ると、スラッツが馬の足を止めてリユーリのことを待っていた。

今行くとリユーリは走り寄って、スラッツが連れ出した馬に跨る。

そして、スラッツから手綱を受け取ると、二人はエンナ達の後を追って馬を疾駆させた。

* * *

エンナ達は、インディという町にいた。

もう日も沈みかけ、空は赤色から紫、紺へと徐々に移り変わってきている。

何処に向かっているかはわからないが、何やら豪華な家、つまり貴族や富豪が暮らすようなお屋敷が建ち並ぶ住宅街を馬で闊歩していた。薄暗くなっても外観の豪華さがわかる屋敷群。一体、これ一つ建てるだけでどれだけのお金を投資しているのだろう。エンナは気が遠くなつて考えるのを止めた。

そんな風に、室内灯が灯し始めた街並みを楽しんでいると、馬がとある屋敷の前で止まった。

そのお屋敷は、どの屋敷よりも質素で、飾り立てのないもののように感じた。外見だけでもケバかった群衆の中で、不釣り合いなのではと思う程だ。でも、エンナはこちらの方が断然好感が持てた。素朴で、温かくて、しかし目につくところには嫌味のない装飾が施してある。とても上品なお屋敷だとエンナは思った。

リユーリ達はそこで馬を降りると、手綱を引きながら黒い門を勝手に開けて入っていく。

良いのかと一瞬思っただが、ローズが早く入るよう促してくるので、恐る恐るエンナはその門を潜って、敷地内に足を踏み入れた。近くで見れば見る程、質素なお屋敷だ。

リユーリは馬の手綱をスラッツに預けて、両開きの少し大きめな扉についている、取っ手のような黒い鉄のドアベルでトントンと軽

く叩いた。すると、あまり間を置かずに中から「はい」という声が聞こえ、こちらに足音が近付いてくる。

「どちら様ですか？」

と、扉越しに尋ねられた。

「リユーリアス・サラマ・アルベインだよ」

「……合言葉は？」

「水鏡に誓いを立てる者。月に歌を、太陽に旋律を」

朗々とリユーリが答えると、片方の扉がそつと開いた。隙間からリユーリ達の姿を確認しているようだ。

リユーリの姿をきちんと確かめて、納得したらしく、ようやっと扉が開かれた。

「やあ、アン」

アン、と呼ばれたその人は、エンナ達とそう変わらなさそうな年頃の女の子だった。ぱさついた赤茶毛の髪を後ろで三つ編みに一つで束ね、両頬には愛嬌のあるそばかすが点々としている。目が悪いのか、丸い眼鏡を掛けていた。

ここの侍女なのだろう。頭に白いボンネットを被り、腰にエプロンをしている。

アンはリユーリ達を招き入れるように扉が閉まらないよう押さえた。リユーリは遠慮無く屋敷の中へ足を踏み入れる。その後が続いて、エンナとローズが中に入っていった。

エンナは物珍しく、ぐるっと室内も見回した。外観と違わぬ上品さだ。床に敷かれたカーペットも、壁紙も、カーテンも、天井も、嫌味のない絢爛さで、寧ろ温かさみtainなものさえ感じる程だ。

「馬はそのままです。私が馬小屋まで連れて行きます」

スラッツが困ったようにちらちら馬を気にしていると、アンがハキキとした口調で言った。

それならばと手綱から手を放し、馬を置いてスラッツも屋敷の中へと入室する。全員中に入ったのを確認して、アンは扉を静かに閉めた。

「リユーリさん」

その直後、右手にある戸から声が掛かる。

そちらに目を向けると、青年が一人、柔和な微笑みを称えてこちらに近付いてきていた。

ストレートの鳶色の髪に、穏やかな縁取りの目は灰色とあり得ない色。この人もきつとリユーリ達と同じ精霊使いなのだろう。

青年はリユーリの側まで来ると、労うように彼と握手を交わした。

「まずは無事で良かった」

「ありがとう、ソード」

リユーリはほっと胸を撫で下ろすソードに笑みを浮かべた。

「ローズも無事で良かった。心配したんだよ、飛び出すように二人の後を追っていくから」

ソードの言葉にローズは「うっ」と言葉を詰まらせる。

「申し訳ありません、ソード様……その、わたし」

もごもごと言葉を濁すローズにソードは優しく笑いかけた。

「いいよ、ローズ。気持ちはわからないでもないから」

ソードの気遣いにローズは逆に恐縮してしまっているようだ。強気な彼女が肩を少し落として、視線を彷徨わせている。ソードは居心地が悪そうなローズにただ朗らかな笑みを浮かべていたが、ふとスラツツに目がいった。ソードは数回瞬きをして、不思議そうに小首を傾げた。

「というか、どうしてスラツツがこんな所に。途中で合流した口かな？」

「はい、まさしくその通りです。派遣先でたまたま」

そうかとソードは頷くと、彼はスラツツにも労いの言葉をかけた。そして、今度はエンナにソードの視線が止まる。

「それで、この方が……」

「そう、エンナだよ」

リユースが答えると、ソードは點頭してエンナに手を差し伸べてきた。

「お初にお目にかかります。貴女のごことは我らが敬愛する方から伺っています。私はソルアード。気軽にソードと呼んで下さい」

にこっと気さくな笑顔でソードは自分の名を名乗る。エンナは「はあ」と溜め息に似た曖昧な返事をして、おずおずとソードの手を握った。なんていうか、本当に名前が長い。

エンナとソードが挨拶を交わした後で、リユースはあの方は？

と彼に問うた。

「二階の一室でお待ちしてますよ。それはもう今か今かと待ちきれないご様子で」

微笑ましいことだとソードは口元を綻ばせた。

「ソード様」

振り返ると、アンが所在なげに扉の前に立っていた。

「ああ、ごめんアン。あの方のところへは私が案内するよ」

ソードの言葉を聞いて、アンは安心したようだった。彼女は宜しくお願い致します、と綺麗な一礼をしてみせると、外へ出て行く。それを見届けてから、ソードはこちらだと“あの方”がいる部屋へ歩き出した。

ついに、会えるのだ。“あの方”に。

エンナは期待と不安の混ざった感情の波を抑えるように、ごくりと生唾を飲んだ。

ソードの案内で階段を上り、二階の廊下を進んで屋敷の奥へ向かう。廊下の窓には既にカーテンで締め切っているが、室内灯のお陰で昼間と違わぬ明るさだった。

「そうそう、リユーリさんに言わなければいけないことが……」

ゆっくり歩を進めていたソードは、途中で立ち止まって後に続くリユーリ達の方へ振り向いた。その顔には、困ったような笑みを浮

かべている。

「何？」

「いえ、その、非常に言いにくいんですが、実はですね……」

ソードは言い辛そうに言い淀んで、目を泳がせる。ソードの挙動不審な態度にリユーリは首を傾げた。が、はつきりしないソードに何かを察したらしい。リユーリはまさかと眉を潜めた。

「ええ、そのまさかです」

ソードはまた困ったように笑う。

「マリABELさんも一緒にです」

なんだか先頭を行くリユーリが怖かった。

別にリユーリが怒ったとか、そういうわけではない。寧ろ、彼は目映いばかりの満面の笑顔でいる。見知らぬ人々がリユーリを見たら、何がそんなに楽しいのだろう？ とこちらまで笑みを浮かべてしまいそうな、そんな表情だ。

しかし、それが返ってエンナには不気味だった。

それを象徴するかのように、ソードはリユーリの様子に微苦笑して、彼の斜め後ろに控えながら案内をしているし、スラツツなんかはなるべく彼を見ないように視線を逸らせ、何か違うことを考えようと必死に意識しないようにしている。ローズも何だか少し様子が変だ。

そういうことを含めて考えると、もしかしたら、リユーリは実は怒っているのかもしれない。

なんでなのかはよくわからないが、“マリアベル”という人の名前が出た時から様子が一変したので、この人が原因なのだろう。

どんな人なのか。エンナは少し不安を覚える。

怖い人だったら嫌だなあ。

それに、リユーリ達の言う“あの方”。

ついに会えるのかと思うとドキドキと緊張した。

リユーリ達に自分を助けてと頼んだ人。そして、自分を助けてくれようとしてくれた人。

国一の占い師で、リユーリ達の上に立っている偉い人。

どんな人だろう。

占い師、というからには、きっと神秘的で、それでいて妖艶な人なのかもしれない、と妄想する。

エンナがあれこれと“あの方”について輪郭を勝手に形作っていると、幾つかある扉の前でリユーリ達は止まった。

リユーリは張り付かせた笑顔のまま、扉を軽く叩く。すると、中から返事と共に入っていいとの許可が出た。吃驚するくらい柔らかく穏やかな声に、それが逆に恐ろしく感じてエンナの身体は震える。先程よりも心臓が倍早く拍動して、破裂してしまうんじゃないかという錯覚を覚えた。緊張しすぎて目眩が起きそうになるのをぎゅっと手を握って耐える。

すると、軽く肩を叩かれた。スラツツだ。彼はエンナを安心させるようににっと笑う。まるで向日葵が咲いたみたいだな、そんな笑顔。エンナはそれを目にして、少し勇気付けられた。

そうだ、大丈夫。別に噛み付かれるわけでもない。それどころか、かの人は自分を救おうとしてくれた恩人とも言える人だ。何をそんなに怯える必要があるのだろうか。

エンナは元気づけてくれたスラッツにありがとうと、口パクで伝える。スラッツは良いよと答えるように肩を一度だけ叩いた。

扉の前に立っていたリユーリは、ソードに笑顔で訴える。開けて。何も言わずその満面の笑みだけで自分に命じるリユーリに、ソードはただ苦笑を零して扉を開けた。

「失礼致します。リユーリ隊長達をお連れしました」

ソードはエンナ達を招き入れるように扉を押さえ、どうぞと促した。リユーリ達は中へ入室する。それに背を押されるようにしてエンナも一歩、部屋の中へ足を踏み入れた。

そこにはエンナの想像とは程遠い少女が二人、窓際の猫脚の椅子にテーブルを挟んで座っていた。

一人は、栗色の髪を綺麗に結い上げた女の子で、エンナと同年代くらいだろう。ナチュラルメイクだが、逆にそれが彼女の温和で優しい面差しを引き立てている。ゴールドドレスはそんな彼女に似合っており、肩にシヨールをかけていた。彼女はリユーリを見ると眉尻を下げ、困ったように笑んだ。

そして、もう一方の少女。

エンナは思わず頬を上気させ、見蕩れてしまった。

蜂蜜のような金色の髪は甘く波打ち、結い上げずに後ろに流している。年の頃は十歳かそれくらいだろう。その少女の瞳は、見る者を全て魅了するガラス玉のような青い色をしていた。華奢な身体は、大切に扱わないと壊れてしまうんじゃないかとさえ思ってしまう。まるで日差しを知らないかのような白い肌は透き通っており、クリーム色のドレスがうっとりしてしまう程よく似合っていた。

まさしく、天使。

地上に舞い降りた天使だ。

天使のような少女は、エンナに目を止めると勢いよく立ち上がった。瞳をキラキラと輝かせて、だがその後感情が高ぶったかのように涙で潤ませる。そして、両手で口元を覆うと感極まったようにあっと呻いた。

「エンナお姉様……！！！」

鈴を転がしたような、可愛らしいソプラノ。

何処かで聞いたことのある声音。

頭の片隅でふとそんなことを思っていると、彼女は極上の微笑みを浮かべて、駆け寄ってくる。そしてその勢いのままエンナに飛び付くように抱きついた。

いきなりの抱擁にエンナはただただ驚いて、自分の胸に飛び付いてきた少女を抱き止めることもできず、その場に尻餅をついてしまふ。

「お会いしたかった……！！！」

いたたつとお尻の痛さに顔を歪めていると、少女は嬉しそうにそう言っつて、エンナの身体に回す細い腕にぎゅっと力を込めた。

一体全体、何だというのだ。

6・先見（1）

「リユーリ様、ありがとうございます。とても、感謝します……」

半ば混乱しているエンナを余所に、美少女は涙を滲ませながらリユーリに謝意を表す。が、エンナからは決して離れない。リユーリはそんな少女に微笑みを浮かべた。

「勿体なきお言葉です」

リユーリが恭しく頭を垂れると、ソード、ローズとスラッツも彼に倣う。

熱烈な歓迎をその身に受けエンナが戸惑っていると、もう一人の少女がこちらに近寄ってきた。

「ルージュ様、まずはお座りになりましょう？ エンナ様達もかなりお疲れのはず。それに、今のままでは落ち着いてお話もできませんわ」

少女は膝を床について、ルージュと呼んだ美少女の両肩にそっと手を添えて優しく言葉をかけた。

ルージュは、エンナに引っ付いていた身体をやっと起こして、少女の方へ顔を向ける。くりっとした目を瞬かせて、ルージュはとんでもないことをしてしまったといった具合に両頬に手をやった。

「あぁっ、そうですわねっ。すみません、エンナお姉様。わたくし

「つたらつい嬉しくて……はしたない真似を」

しゅんつと顔を俯かせて、沈んでしまっている。
なんて愛らしい子なんだろう。

初対面なのにも関わらず、思わず、その頭を撫でたくなる衝動に
かられる。

「わたしなら別に大丈夫だし、そんな気にしないで」

「エンナお姉様……なんてお優しいお言葉」

ていうか、“お姉様”って？

エンナが訝しんでいると、ルージュはふわっと花が咲くように笑
った。

ヤバイ、この子無茶苦茶可愛いわ。

エンナもルージュの笑顔につられて、締めりのない笑みを浮かべ
た。

「さあ、お二人共お立ちになって。こちらでお菓子でも食べながら
お話し致しましょう」

栗毛の少女が二人をそう誘って、やっとエンナは我に返る。

しまった。今物凄く締めりのない顔でいた。

無防備な姿を周囲に晒して、エンナは恥ずかしさのあまり頬を赤
らめる。

栗毛の少女はそれを微笑ましく見て、こちらですよと先程ルージュ
と一緒に座っていた席へ、エンナと彼女二人を導いた。

窓際の椅子に腰をかけ、エンナの向かいの席にルージユが座り、二人の隣に栗毛少女が席についた。

リユーリ達は立ったまま待機している。ルージユが座るように促したのだが、彼らは大丈夫だと立ち続けた。ローズとスラッツは、部屋から出て行ってしまっていてここにはいない。

「まずは、自己紹介をしなければいけませんね」

栗毛の少女は、バスケットやクッキーの入ったバスケットをエンナの方へどうぞとそっと差し出しながら続けた。

「私はマリアベルと申しますわ。宜しくお願い致します」

この人がマリアベル。

エンナはちらりとリユーリの方を見た。

リユーリはピンと背筋を伸ばし、マリアベル達の言葉に耳を澄ましている。

ふと、リユーリがエンナの視線に気付いた。リユーリはにこっと笑顔を返してくる。先程までのリユーリは何処へやら。その表情から彼の不穏な様子は跡形もなく消え去っていた。

「そして、こちらの方が……」

エンナはその声にハツとなって目をマリアベルの方へ戻す。マリアベルはルージユの方へ視線を送っていて、彼女のことを紹介してくれようとしていた。

だが、ルージユが自分ですと言い出す。マリABELは嫌な顔一つせず、穏やかに承知しましたとそつと控えた。

ルージユは始め恥ずかしそうにもじもじしていたが、やがてまっすぐエンナを見つめて口を開いた。

「わたくしはウルディアージュ、と言います。皆さんからはルージユと呼ばれてます。エンナお姉様もどうかそのように呼んでくださいね」

「うん、わかったわ。そうやって呼ばせて貰うね。で、わたしは…
…あー、名乗った方が良い？」

エンナは視線を少し逸らしながら微笑する。だって、やはり皆エンナのことを同然のように知っているのだ。正直なところ、自分が自己紹介することに何かの意味があるのか、と疑問に思ってしまう。

ルージユとマリABELは瞼をぱちぱちと瞬いたが、やがておかしそうにクスクスと笑った。二人共エンナの心情が何となく伝わったのだろう。

「そうですね、お願い致しますわ」

マリABELが朗らかに促したので、それならとエンナは手短かに名乗った。

「わたしはエンナ。宜しくお願いします。えーっと……」

何処からどう話を切り出そう。

エンナが困ったように口籠もっていると、マリABELが助け船を出すように口を開いた。

「エンナ様、今回のことはルージユ様がリユーリ様達に貴女様を助けて欲しいとお頼みになったのですよ」

「えっ」

「この子が？」

「ということは、リユーリ達の尊き方、“あの方”ということ？」

“あの方”は占い師と聞いていたし、エンナはもっと大人で妖しい感じの女性か男性かと勝手に想像していた。

それがまさか、こんな幼い子だったとは思わなかった。

しかし、だとすると余計に疑問が残る。何故、ルージユがエンナのことを助け出してくれようとしたのか。何から助けてくれようとしたのか。

エンナが逡巡していると、どうやら何を考えているのか伝わったらしい。ルージユはその疑問に答えるように話し出した。

「エンナお姉様、実はその……」

言い辛そうに目線を忙しなく動かしていたが、ルージユは意を決したらしい。エンナの目をじっと見て決して逸らさない。ルージユのその澄んだ青い瞳に吸い込まれるようにエンナも見つめ返した。そして、ルージユは口を開いてハッキリと言った。

「わたくしは、お姉様の妹なのです」

突然の衝撃告白。

「……は……？」

一瞬、何を言われたのか理解できなかったエンナは、間抜けな声を上げてしまった。

何、この子今なんて言ったの。

「ごめん、もう一度言って貰える？」

「あ、はい。わたくしはお姉様の妹なのです」

「妹って、誰の？」

「えと、エンナお姉様の……」

「わたしの、妹……？」

ルージュはこくりと頷いた。

「えっ、待って。ちょっと待って。妹って、えええええ？ 妹おおお？」

エンナは混乱して目を白黒させた。

妹？ この子がわたしの？ こんな天使のようできて、これぞまさしくお姫様！ みたいな子が？

「正確に言うと半分だけ血の繋がった姉妹なのですが……あつ、半分っていつのも語弊がありますね」

「いや、いやいやいやつ、待って待って。でもわたしは孤児なわけ……」

「あら、孤児だからとそれは関係ありませんわ。寧ろ、だからこそ可能性もあるのではないかしら」

マリアベルは、エンナの言葉に何を言っているのだろうと不思議そうに頬に手を当てた。

「可能性でしょ？ 可能性！ だって、こんな可愛い上にどっからどう見てもお姫様みたいなこの子がよ？ わたしの妹だなんて信じられるわけないじゃない！」

ルージュははじめ褒められて頬を赤らめていたが、エンナの最後の台詞に肩を落として哀しそうに顔を俯かせた。まるで悪いことをして叱られてしまい、怒られたことや自分がしてしまったことを思っ
て落ち込んでいる感じで、エンナはそれに罪悪感を覚える。

だがしかしだ。ずっと自分には血の繋がった家族、ましてや親戚などいやしいと思っていたエンナ。教会から出たら自分一人の力で生きていかなばならないと決意を固めていた。ところがどっこい。似ても似つかない人から何の前触れも無しに突然、自分の妹だ、などと告げられても何の信憑性も感じられない。そんなこと、信じられるわけがなかった。

「でも本当なのです。わたくしとエンナお姉様は確かに、血の繋がった姉妹なのです。お母様が亡くなる間際、教えてくれました」

「お母さん？」

「はい」

ルージュは何処かに思いを馳せるように一度瞑目した。

「お母様は亡くなる直前、病に伏した床の中からわたくしに教えてくれました。お母様にはわたくしの他にもう一人娘がいて、血の繋がった姉妹がいるのだと。最後に一目で良いから会いたかったと」

声が、出なかった。

喉がカラカラに渴いて上と下が張り付くような感じがする。

つまり、これはどういうことなのか。ルージュの母、エンナの母親でもあるその人のこともどう受け止めればいいのか。

どんな風に話を繋げて、解釈すればいい？

エンナは混乱に混乱して、呆然とルージュのことを見つめた。

「エンナお姉様、わたくしが混乱を招くようなことを言っているのはわかっています。すみません……でも、これは本当のことなのです」

ルージュは瞳を潤ませながら切望した。

「それは、でも……」

戸惑いを隠せず、エンナは狼狽えた。

そんな重大事実を突き付けられて、簡単に受け入れられる人は何人いるだろうか。受け入れられる人、受け入れられない人の比率が五分五分であれ、偏りがあつたとしても、エンナは後者の“受け入れられない人”の類だ。そんな容易に頷けるわけがない。

「わたくしの……妹の存在を認めて、とは言いません……」

自分のことを否む発言をしたルージュの声は震えていた。声だけではない。身体の方も少し身震いをしていた。

「ですが、どうか、どうか、ほんの少しでも良いです。信じてください」

ルージュは必死の表情で言い募る。その瞳は不安に潤んで、哀色に沈んでしまった。ルージュの苦悲が伝わってきて、エンナは罪悪感と哀切を覚える。

こんな幼い子になんてことを言わせてしまったのだろうか。

自分を否定する言葉を自ら口にするなんて、どれ程辛楚な思いか。他者にそんな言葉を投げられたら、刃物のように鋭利な凶器になつて心が傷つく。なのに、それを自分で言語として口に表現してしまつたら？ 自分では気付かない意識していない心の奥底で、きつ

と何かがひび割れて、それが続けばいつかきつと崩れてしまうだろう。

呪術にも似た言をさせてしまったことにエンナは酷く後悔し、己自身を譴責した。

「ごめん、違うの。わたしはそんな難しいことじゃなくて、いきなりこのことで実感というか、自分のこととは思えないというか……」

上手く自分の考えを説明できない上、その後が続かない。

酷いことを言わせて、思わせた張本人がむやみやたらに言葉を並べ立てたら、逆に傷つける種になる。

あまりにも言葉も知らず、経験も浅い自分自身にエンナは呪いたくなった。

でも、これだけは伝えなくてはいけない。

「兎に角、わたしはルージユを信じるわ」

ここまで言ってくれて、喜色を称えながら瞳を涙で潤すルージユが人を騙すような嘘をつくとは到底思えない。

第一、この子は恩人なのだ。面識もないのにエンナがただ“姉”だからという理由で助けてくれようとした。

それだけで十分ではないか。疑う理由なんてどこにもないし、なにに等しい。

ルージユは嬉しそうに表情を綻ばせると、ありがとございます、と小さく呟く。ルージユの健気な姿にエンナも自然と微笑みを浮かべた。

ああ、この子は純真でとても優しい子なのだろう。きっと、いや、間違いなく皆から慕われ愛し愛される子だ。だからリユーリ達は、ルージユのことを尊いと表現し、敬愛しているのだ。エンナもルージユのことをこのほんの少しの会合にも関わらず、愛しいなと心の

片隅で蠟燭の光が灯るように温かく思えた。

ルージュになら、何だか安心して次の疑問も聞けるような気がする。

「それで、ルージュは一体わたしを何から助けてくれようとしていたの？」

「それは……エンナお姉様、どうかお気を悪くなさなさいくださいね」

ルージュは神妙に顔を曇らせる。彼女の意味深な言葉にエンナは静かに頷いた。

「実は、お姉様は……二日前に亡くなってしまはずでした」

エンナは、あまり動揺はしなかった。大体、何を言われるのか予想はできていたのだ。今までの経緯から自分の命が狙われているのは明白だったし、きつと生死に関わることだろうと思っていた。だから、自分が二日前に死ぬ予定だったと言われても、モヤモヤと思いを悩んでいたことがハッキリ見えてスッキリする程だ。

勿論、それで怖いという念が拭えたわけではないが。

「それは他殺ってことよね」

「はい……もし、わたくし達が何も行動を起こしていなければ、確実にお姉様の命は奪われていました」

となると、森の中を逃亡している時に遭遇したグラなんとかって人の一味に殺されていたのかもしれない。

そう思ったら一瞬、背中に悪寒が走った。リユーリ達にあそこで助けて貰わなければ、エンナは今この時、既にこの世にはいなかったことになる。指先から身体の体温が一度ばかり下がったような気

がした。

エンナはその恐怖心を拭い去るように首を振って喋り出す。

「で、それをどうやってルージユは知ったの？ 国一の占い師って聞いたけど、やっぱり占いで？」

国一だなんてと照れながら、ルージユは頭を縦に振って肯定した。

「エンナ様、ルージユ様の占いは本当に凄いですよ。何せ、占った結果は百発百中ですから」

「そ、そんなマリABEL様、そんなことありません……」

更にマリABELが褒め称えると、ルージユは顔を真っ赤にさせて縮こまってしまふ。その反応が初々しくて、何だか可愛らしかった。エンナも、マリABELも、リユーリヤソードも、皆微笑ましく口元を綻ばせている。

そこで、マリABELは良いことを思い付いたといった具合に手を合わせた。

「ルージユ様、今エンナ様の占いをして差し上げては如何でしょう？」

「今、ですか？」

「はい、やはり実際に見て頂いた方が一番良いと思いますわ。それに今後のことも気になりますし」

「そうですね、それは良いかもしれません。えと、エンナお姉様が宜しければ、ですが……」

遠慮がちにルージユがエンナに視線を送る。エンナは数度瞬いてから言った。

「わたしは一向に構わないわよ。占いつて結構興味あるし」

エンナも他の女の子達同様占いは好きな方だった。よく女の子同士の話題にもなっていたし、特に恋愛ものの占いは面白い。自分はいいとして、他の子の話を聞くのは楽しかった。

「それでは決まりですわね」

マリアベルは両の掌を合わせウキウキと楽しそうにしている。エンナと同じく、彼女も占いが好きなのだろう。

話が纏まると、見計らったかのようにソードがお菓子の入ったバスケツトを退けた。そこへ、リユーリがテーブルの上に水盤を置く。直径三十センチ程度で底が浅く、水が張ってあった。ルージュはリユーリとソードにお礼を言うと、どこからともなく円状の鏡を取り出す。それを水盤の中へそっと静かに沈めた。

マリアベルはリユーリに部屋の明かりを消すように頼む。リユーリは一つ頷いて、パチンと指を鳴らした。部屋の中が一瞬のうちに薄暗くなる。

部屋が暗くなるとルージュは目の前のカーテンをそっと開けた。外はもう夜が支配していて、星がキラキラと輝いている。月が水盤の水面に映り、水と鏡に反射して淡く煌めいた。

月の光が水面に浮かんでいるのを確認して、ルージュは両の手を水に浸す。

今から何が起こるのかと、エンナは興味津々に見守った。こんな風に本格的に占って貰うなんて初めての経験なのでドキドキする。ルージュは目を閉じた。

「アルディ、ミラ」

ルージュの掛け声に答えるように、彼女の側に少女のような姿の小人と見たこともない動物がエンナの目に映った。でも、それはほんの瞬間のことで、幻だったのではないかと思う程すぐに空気と同化して消えていってしまった。

その後、ルージュの髪が、ドレスの裾がふわつと揺れ動く。風なんて吹いていないのにも関わらず、そこだけ下から微風が吹いているように、ふわふわと動いた。形容しがたい不思議な光景だ。

ルージュはそつと蕭しよやかに半分だけ目を開けた。その瞳は虚ろで、焦点があつておらず何処を見ているのかわからない。

「 周囲を欺き潜む者 ついに刃を向けて 背を向ける

駆け抜けた先 沢山の闇の中 かの入 隠れた真が告げられよう
月輝く夜 それは優しく包むでもなく ただただ冷たく心傷つける
でも どうか絶望しないでと 寄り添うように花が頬撫でる時

かの入 それを信じて手を取れば 檻の中から抜け出せるだろう

「

まるで、ルージュではない人が彼女の中に入って喋っているようだった。声も若干低くなつて、随分と大人びて聞こえる。

そこまで言つて、ルージュの顔が曇りだした。手が震い始め、水面が細かく波紋している。

「ああ、そんな……いや、いや……」

ルージュは喘ぐように声を漏らし、悲痛に顔を歪めて首を振って嫌がる。一体どうしたと言うのか。

「マリABELもルージュの様子が心配で、ルージュ様？ と呼びかけている。」

「いやー！」

「ルージュ様!？」

ルージュは濡れた手のまま顔を覆うと、金切り声で叫んだ。

「エンナお姉様ー!!」

ふつり、と糸が切れたみたいにルージュの身体から力が抜ける。彼女の身体が傾いて倒れ込んでしまうところをすんでの所でリユーリが受け止めた。マリアベルは血相を変えて、椅子から立つとルージュの肩を軽く揺さ振って彼女の名を呼びかけ続ける。

ソードは、これは大変だと部屋の外へ出て行った。きっとローズ達に知らせるためだろう。案の定、すぐにスラッツが部屋に入ってきて、慌てた様子でこちらに駆け寄ってきた。

「ルージュ様どうしたんですか？」

「悪い夢を見てしまったんだと思う。大丈夫、只の失神だから。兎に角、ルージュ様を急いで寝室へ」

リユーリはルージュの横抱きにして、軽々と持ち上げる。ルージュの身体は華奢で小さいとはいえ、まさかリユーリがこんなに力持ちとは思わなかった。やはり、彼も見た目に反して男なのだ。

エンナは何をどうすれば良いのかと、突然のことについていけず、ただ呆然とルージュが連れて行かれるのを見守っていた。

6・先見（2）

* * *

もう皆が寝静まった頃、リユーリは一人屋敷のバルコニーにいた。手すりに腕を寄せ、夜空に浮かぶ月を見上げる。暗夜に包まれた世界を淡い金に輝く月が優しく照らしていた。

リユーリは先刻の出来事を思っただ溜め息をつく。今日は騒動があった。

占いの最中、ルージュが倒れてしまったのだ。皆大変だと慌ただしく動き、呆然としてしまっているエンナを口イズとスラツツに任せて、リユーリ達はすぐにルージュを寝室へ連れて行った。ルージュを寝台へ横たわらせたのだが、その時、彼女は一瞬だけ意識を取り戻して、リユーリの服の袖を掴むと必死にこう言っただのだ。

『“救い”がない、“救い”が視えませんでした……このままではエンナお姉様は……』

息継ぎの後、ルージュは泣きそうな顔で告げた。

『死んでしまいます……』

それだけ言っただけでルージュは意識を失ってしまった。

ルージュが見た未来は、絶望的なものだったのだろう。

しかし、それでも未来は一つだけではない。本来、未来というも

のはそれこそ数え切れない程のパターンがある。それをルージユは、辿るであろう一番確率の高い未来の他に、確率の高い方から順に違う道筋をいくつか垣間視ることのできる、凄い能力の持ち主なのだ。だが、そのルージユが一つしか未来の最終的な結末を視ることができなかった。

救いがない

とはそういうことだ。

それが何を示しているのか。それはどんなことをしても、確実にエンナが死するということの意味している。

シエルに速く知らせなければならぬ。これは一大事だ。

「ヒン」

「はいよ、リユーリの旦那」

リユーリがヒンを呼ぶと、シエルの精霊は彼の肩にその姿を現した。

「シエルと通信したいんだけど、あつちは平気そうかな」

ヒンは鼻をひくつかせてから頷いた。

「へい、大丈夫そうですぜ」

「ん、じゃ頼むよ」

リユーリが頼むと、ヒンは「はいよ」と一つ返事をして、若草色をした瞳が一瞬目映く光って淡く輝き出した。

『リユーリか？』

「そつだよシエル」

程なくして、ヒンを通してシエルの声が頭に伝わってきた。心配はしていなかったが、案の定シエルは大丈夫そつだ。それを満足げに感じてリユーリは笑みを浮かべた。

「あの多勢を相手に全然へっちらそつだね。やっぱり“風鷹”と名高いだけある」

『……頼むから、そう呼ぶのは止めてくれ』

「なんで？ 別にいいじゃないか」

『いや、良くない』

「なんでそこまで嫌がるかな。良いと思うのに」

と言つても、シエルからの返事はない。きっとシエルは口をへの字に曲げて、眉を潜めているに違いない。それを想像してリユーリは肩を竦めた。

「本当シエルって見た目によらず照れ屋さんだよね。顔は仏頂面なのに」

『……切るぞ』

リユーリは笑いを堪えながらごめんと謝った。意外にシエルはからかい甲斐があるから面白い。しかし、少し言い過ぎてしまったよつだ。

『お前、全然自分が悪いだなんて微塵も思っていないだろう』
「うん」

リユーリは満面の笑みで元気よく答えた。何を当たり前のことかと思う。だって、からかって遊べるならそれを存分に楽しまないと

損というものだ。

ヒン越しにシエルの溜め息に似た息を吐く音が聞こえる。シエルの呆れている顔が目には浮かんだ。

「まあそれは兎も角として、シエルに知らせとかないといけないことがあってね」

『何だ？ そつちで何かあったか』

「まあね」

と、リユーリは今日起こったことをシエルに話し始めた。シエルはそれを静かに聞いて、たまに相槌を打っている。

説明し終わった後、少しの間を置いてシエルは呟いた。

『それは本当か？』

「冗談でこんなこと言うと思う？ 本当だよ」

リユーリもこれが冗談だったらと何度思ったか。だがこれが現実であり真実だ。目を逸らしたところで何にもならない。

『救いがないか。まいったな……』

「そうなんだよね」

リユーリは手すりに背を向けて寄り掛かると夜空を見上げた。銀色に光り輝く満点の星々が、まるで“どんなに知恵を絞ったところで不可能だ、星の軌跡は変わらない”と嘲って言っているみたいだ。これは単なるリユーリの妄想にすぎない。しかし、普段は綺麗だと眺める星達も、今は意地悪に思えてリユーリは失笑してしまいそうになった。きつと、シエルも今頃そんな思っていることだろう。

『兎に角、今は俺達の成すべきことする。それだけだ』

全くシエルの言う通りだ。例え、先の結果が絶望的であったとしても、所詮は“未来”だ。占いなんて不確かで未来は今この時の選択で変わっていくもの。そう、先見を行ったのがあのルージユであったとしても、未来はまた別の終着点になるかもしれない。可能性はないわけではないのだ。限りなく零に近いとしても、変えることだって可能。ならば、自分達の望む結果になるように全力を注げばいいのだ。

「そうだね」

リユーリはシエルの言葉に同意した。

『それで、リユーリ。そつちは人手等大丈夫そうか？』

「うん、全くもって問題なしだけど」

なんで？ と聞きながら、リユーリには何となくシエルが何を言おうとしているのか、何を考えているのかわかった。だが、敢えて問うたのは一応確認の意味を含めてのことだ。

『俺は暫く別行動で動きたいと考えている。少し気になることがあってな。駄目か？』

案の定。

リユーリはただ満面の笑みを称えた。今、自分が気になっていることとシエルが気になっていることは同じだと確信を得たからだ。前々から可笑しいとは二人で話していた。今までの逃亡時を見てそれは明らか。

そして今回、ルージユの占いの結果だ。

『 周囲を欺き潜む者 ついに刃を向けて 背を向ける 』

この一節が二人の考えを証明しているも同然。

「うづん、良いよ。寧ろ僕もシエルに頼もつって思ってたところだつたんだ。好きに動いて」

だからここで意思確認しなくてもこれだけで良い。シエルには伝わったはずだ。

シエルならば上手くやつてくれるだろう。

シエルはわかった、と短く答えた後、言葉を続けた。

『それからリユーリ。お前に言わないといけないことがあるんだが

……』

「ん、何？」

『いや、もしかしたらお前も気付いているかもしれないが、実は…

……』

言い辛そうに言葉を切るシエル。

リユーリはハッキリしないシエルに首を傾げたが、彼が何を伝えようとしているのかわかって「ああ」と呟いた。

「それってエンナが精霊を視認できているんじゃないかってこと？」

『やっぱり気付いてたんだな……』

「そりゃまーね。あれで気付かない方がどうかしてると思うよ。寧ろこっちが気付かないふりをするのに一苦労だったくらいさ」

リユーリは肩を竦めた。

そうなのだ。エンナは絶対に精霊が見えている。

それに気付いたのは、シエル達と待ち合わせしたあの口口の噴水

の前でのことだ。

ヒンがリユーリからシエルの肩に跳び移った時、エンナの目がその後を追っていた。その上、暫くの間じっとヒンのことを興味深そうに見ているのをリユーリは視界の片隅でしつかりと確認している。

「全くこのタイミングで覚醒しちゃうなんてね」

まるで見計らったかのようなタイミングだ。

「因みにシエルはいつそれに気付いたの？」

『リユーリと待ち合わせする当日の朝だ』

「となると、きっとその辺りだろうね。完全に目覚めたのは」

『どうする？』

「どうするって、生かすかどうかのことだよな。まあ、現状維持かな。今ここで僕達がどうこうしたところであまり意味がなさそうだし、先走ってやってもそれは得策とは思えない。エンナをこのまま国外へ逃がす計画は続行するよ。シエルもそう思ったから、何もしなかったんじゃないの？」

リユーリの問いかけにシエルは肯定に短く答えた。でもそれは、何処か遠くの方へ意識を飛ばしているような、そんな呟きにも似た返事だった。

シエルはあまり言葉にしない。他の人達に比べれば無口な方だ。決して変な意味ではなく。

でもその変わりに、シエルは彼なりに沢山のことを考えている。勿論、何をどのように考えているのかは詳しくはわからないが、漠然的にならわかることもある。

それは、今リユーリと同じような気持ちでいるのではないかということ。

しかし、リユーリの考え通りだったとしても、その思いはもしか

したら彼よりもシエルの方が重く深いかもしれない。

「本当、困った子だね」

だから、遠回しな言い方でシエルの思いを代弁する。それはリユ
ーリの思いも含んでのこと。そこは全く同じだったからだ。

『そつだな』

シエルの声なき声は、頭の中で静かに響いて、憂いに似た思いの
余韻が残るようだった。

* * *

明くる次の日。

エンナ達は、今居る屋敷で一日休むこととなった。どうやらこの
屋敷はルージユのもので、取り敢えずは安全らしい。と言っても、
ずっとここにいるわけにもいかないの、一日だけということみた
いだが。それでも、エンナにとって一日休めるというのは大きく、
非常に助かった。

あの裏組織に捕らわれてから休むことなく逃げ続け、心安まるこ
となんて殆どなかったのだ。

たった三日、されど三日。

正直しんどいかそんな程度のものではない。精神的にも肉体的
にも大いに疲労困憊だった。特に精神的なものは、徐々に徐々に磨
り減って大分ギリギリのところまでできていた気がする。でも、こう

していると昨日のことまでがまるで嘘のようだ。

因みに今はお昼過ぎ。満腹に美味しい昼食を食べて大満足。身体の方もエンナが寝たことのない豪華なふかふかベッドのお陰か、旅の疲れが全て取れている。やっと本当の意味で休めたという実感が沸いた。

しかし、エンナには気掛かりなことがあった。

「あの子大丈夫かな」

あの子とは勿論ルージュのことだ。

昨晚の占いの最中、ルージュが突然失神してしまったのである。いきなりのもので動けなかったエンナの目の前を慌ただしく皆が動く。それをただ呆然と目で追っていた。そこヘローズとスラッツがエンナの側へやってきて、夕飯の準備は出来ているから、それを食べたらもう休めと言い放つ。その後の二人の行動は素早く、あれやこれやと引つ張られる感じ食事を済ませると、用意された寝室に追いやられるように入れられたのだ。ルージュのことが気になって彼女のことが聞きたがったがとりつく島もない。

ルージュが倒れてしまつて皆その対応に忙しいのだ。明日になったら聞いてみようと思ひ直して、エンナは大人しく床へと就いた。

そして、今日に至るわけだがルージュは朝も昼にも、皆が集まる食卓の席に姿を見せなかった。エンナはルージュのことを心配して、侍女のアンに彼女の状態を尋ねたところによると、今は落ち着いて寝台で横になっているらしい。それを聞いてひとまず安心したエンナは、試しに面会できるかとアンに聞いてみた。が、それはまだ駄目だとキツパリ断られてしまった。

ルージュが何を視たのかはわからない。

だが、あの様子からとても恐ろしい未来を垣間見てしまったに違いない。

そして、その対象者は紛れもなくエンナである。エンナは知らず知らずのうちに溜め息をついていた。

そんなこともあって、気が落ち着かなかったエンナは屋敷探検と決め込んで屋敷内をブラブラと歩いている。屋敷の内なら自由に歩いても良いと言われたのだ。

屋敷の中に陽の光が差し込んで夜とは違った姿が見られた。新築のように綺麗で、汚れたところは一切なく、隅々まで掃除が行き届いている。屋敷を飾っている品もそこかしこにあるわけではなく、ここと思ったところにあって、逆にそれが屋敷もその品々さえも引き立てているような気がした。

暫く気ままに歩いていると、屋敷の中庭らしきところに出る。そこには円状の花壇があって、その中心に女神らしき白い彫像が優しい眼差しで花達を見下ろしていた。

エンナは何気なくその女神の像へと足を進めた。女神像の側までくると、彼女は慈愛に満ちた微笑みを称えてエンナと見つめ合う。

神様が本当にいる、とはエンナには思えない。

例え、教会で育って神の教えだなんだと諭されても、エンナにはどうにも信じ切れなかった。皆が「神様、神様」と崇め称える中で、エンナは一人蔑んだ心根で神の彫像を睨んでいた。もし、本当に神様がいて、神様からの救いなんてものがあるのだとしたら、この世界に住む人々は皆幸せになっているはずだ。

でも、そうじゃない。少なからず、エンナも、エンナの義兄弟達も、捨てられたり事故で一人になったりなんてことはなかったはずである。

確かに親代わりの神父様もいて、義兄弟達も沢山いて幸せだったけど、皆心の何処かにポツカリと穴が空いていた。目では見えない、心の目でも確認できない、癒えない穴が。

「お母さんか」

女神の彫像を見上げながらエンナはぼつりと呟いた。

ルージユの母にして、エンナの母親。

どういう人だったのだろうか。この女神様みたいに慈愛に満ちた優しい人だったのだろうか。

でも、そんな人だったとしたら、どうして自分は捨てられてしまったんだろう。

そんなに自分は邪魔な存在だった？ 疎ましい存在だった？ 存在しない方が、生まれぬ方が良かった？

エンナの中でドロドロと黒いものが渦を巻いて、吐きたい衝動にかられる。自分はこんなにも“家族”というものに対してトラウマを持っていたのかと気付かされた。

そこでエンナはなんとなく、自分の胸に掛かっている首飾りを服の襟口から取り出して掌に乗せた。あのリベラと名乗った青年から貰った鱗みたいな飾りだ。エンナはアンにこっそりいらぬ紐はないかと聞いて、それを譲って貰ったのだ。鱗型の飾りは角に小さな穴が空いていて、そこに紐を通してこうしてペンダントにしている。なかなか洒落た首飾りになった。

エンナはそれをまたなんとなく、黒い色をした鱗を太陽に翳してみる。鱗から光が透け、薄黒い世界をエンナに見せた。

それはまるで、自分の心の目がどんな風に世の中を映しているのか、再認識させているようだ。

この鱗の飾りは、まさに今の自分の中を形として表しているかのようだ。堪えかねてエンナは首飾りを服の下へと戻した。

「キユウ」

エンナが苦辛に耐えて、歯を食い縛り足下を睨んでいると妙な鳴き声が聞こえた。

訝しんで荒んだ目のままそちらへ視線を向ける。そこにはなんと

……

エンナは目を丸くした。花壇に植えられた花々の間から、何か物凄く可愛いのが顔を覗かせていた。三角型の輪郭に低い鼻。アーモンド型のくりくりつと円らな瞳でエンナのことをじっと見ている。

何これ。なんか凄い可愛いのに見つめられてるんですけど。

黒い感情を吹っ飛ばされたエンナは、乙女心を攪られ目線を合わせるようにしゃがみ込む。よく見るとその何かの動物らしき生き物の瞳は、瞼を閉じる度に色が違っていた。青かと思ったら緑に、緑にと思ったら今度は左右が赤と黄色と違う色に変化していく。

わかった、これは精霊なのだ。こんな風に瞳の色が様々に変わる生物なんていやしないのだから、間違いない。

エンナは好奇心を抑えられずそうつと手を差し出してみた。逃げてしまいかもと心配したが、その生き物は少し警戒を示したものの、鼻を寄せてくんくんとエンナの匂いを嗅いで頻りに首を傾げている。

可愛い！！

その仕草は見事エンナの乙女心を射止めた。胸がキュンキュンしっぱなしだ。

そうなるとう度は触ってみたいという衝動にかられるのは当たり前のこと、エンナは恐る恐るといった具合に精霊と思われる生物の白い頭を撫でようとした。しかし、手はするつと精霊の身体を擦り抜けてしまう。

「あれ？」

もう一度、触ろうと手を伸ばしてみても指は空を切るばかりでその精霊に触れることはできなかった。

どうして触れないのだろう。そういえば、ローズが契約すれば実体のどうのこうの言っていたのを思い出す。

それによくよく考えたら、精霊は普通の人間には目で確認することはできない。前までエンナもそうだった。幽霊とは違うが、霊は触ることなんかできやしないのと同じで、実体のない精霊もまたそれは変わらない。触れないのは当然だ。

エンナはがっくりと頂垂れて肩を落とした。ふさふさして気持ちよさそうな白い毛並みをしているのに、それを感じることができないなんて悔しいにも程がある。

自分の膝に腕を置いて、両手に顔を乗せるとエンナは溜め息をついた。

というか、どうしていきなり自分は精霊が見えるようになったのだろう。そこに何か意味がなくても、こう色々なことがあると勘ぐってしまう。第一、エンナが精霊を見えるようになったことを何故隠さなくてはいけないのか。そんなにいけないことだろうか。

それに、結局うやむやになってしまったが、自分がどうして狙われているのか聞けなかったし、ルージユ達の正体もちゃんと明かされていない。いや、ルージユがエンナの妹というのはわかったが。

6・先見（3）

でも、その他は？ リューリ達は精霊騎士だ。城に仕える者の中でもエリートな人達がどうしてルージユをあんなに敬って従っているのか。国一の占い師、というからルージユも城に仕え、リューリ達より身分が高いのかもしれない。が、それにしても腑に落ちない。エンナが難しい顔をして考えに耽っていると、足下で「キュウキユウ」という甲高い声が聞こえる。そちらを見やると、先程の精霊が花壇から抜け出してエンナの隣にちょこんと座っていた。

花達に囲まれてわからなかったが、この精霊の耳は随分と長く、垂れ耳の兎みたいな形をしていた。尻尾は狐のようなフサフサもっふりな白い毛で覆われて、何故か先端だけ虹色だ。

益々不思議な動物の姿だったか、可愛さは満点だった。これで尻尾をふりふり振りながら首を傾げて見上げてくるんだから殺人級である。

くっ、これで触れないだなんて……！！

あまりの悔しさにエンナは拳を握り締めた。

「ああ、こちらにいらしたのね」

エンナが口惜しさに身を焦がしていると、ローズがやってきた。彼女の側にはニコンの姿が見える。

ローズの変わずハキハキとした態度にエンナは若干安心した。どうにもここへ来てから、ローズの元気がないような気がしていたのだ。

エンナのそんな心配には気付きもせず、ローズは彼女の近くに来ると「あら」っとあの白い精霊の姿を目にして瞬いた。

「珍しいですわね、この花の精がルージュ様以外に懐くなんて」

「花の精。この子、花の精霊なの？」

「そうですね。この精霊はとても気難しくて、ルージュ様以外全然心を開こうとしませんの。同じ花属性のわたくしやニコンにでさえ、威嚇して近づけさせようとしませんのよ」

「そうなのそうなの！」

ニコンがローズの周りを飛び回りながら頷いている。

それは意外だった。エンナが近付いた時には、全然そのような態度を取らなかつたので驚きだ。

「……まさか貴女、この花精かせいの名を聞いたりなんてしていませんわよね？」

神妙な面持ちでローズは唐突に聞いてくる。この子の名前？ とエンナは何のことかわからず首を捻った。

「そんなの聞いた覚えはないけど……」

「そう、なら良いですわ」

ローズは肩の力を抜いてほっと胸を撫で下ろした。

「あつ、そうですね。貴女、リユーリ様がお呼びですわよ」

「リユーリが？」

「ええ、これからのことをお話ししたいみたいですわ」

「わかった、今行く。それじゃあね、花の精霊さん」

エンナは立ち上がると、非常に名残惜しいが花の精霊に別れを告げる。すると、花の精霊は行かないで、と言っているみたいに尻尾

を地に着け上目遣いでエンナを見た。エンナは「うっ」と詰まったが、今歩き出さないとずっとここに居座ることになりそうだ。

後ろ髪を引かれるようにエンナはローズの後を追う。

花精は一匹、立ち去っていくエンナ達の後ろ姿を見送りながら、「キユルル」と寂しそうに鳴いた。

* * *

白い花の精霊と別れた後、ローズの案内でエンナはダイニングルームへ来た。既にリユーリ達は席に座っている。だが、そこにマリABELの姿はない。彼女はルージユの側に付き添っているのだろう。エンナ達が姿を現すと、リユーリは適当に席へ座るよう二人を促した。

言われた通り、エンナはリユーリの向かいの席へ、ローズは彼女の隣の席に着く。そこを見計らったかのように、アンではない侍女がエンナ達に紅茶の入ったカップを配ってしずしずと控えた。

「さて」

リユーリは紅茶を一口飲んでから、話を切り出した。

「今後のことをエンナに話しておこうと思ってね。こんな風にゆっくりできるのも今の内だから」

エンナは重々しく頷いた。エンナもそれについては気になって仕方なかったのだ。追っ手から逃げ惑ってはいるが、ずっとこのまま逃亡するのは些か無理がありすぎる。彼らがどのように考えているのか確認しておく必要があった。そして自分自身にも、場合によっ

ては覚悟を決めなければならぬ。

リユーリはカップをソーサーに置いた。音もあまり立たないような置き方だったのに、陶器がぶつかり合う硬い音が静まりかえった部屋に響き渡ったような気がする。

「ここから出発したら、エンナを国外へ逃がす」

ぎゅっと、エンナは手を握った。

やはり、この国には止まれないのか。

「隣国のライジニアにいる僕の知り合いに匿って貰う算段になっているんだ。もし、何かあってもそこならそう簡単には手出しできないから」

ライジニアは、フェアデルフィアと友好関係を結んではいるものの、あまり仲が良いとは言えない国だ。それにはお隣同士、いざこざが絶えず、言い合いも絶え間ない故、政治家同士、国民同士もお互い好敵手視している。言わば、良くも悪くも競争相手という関係なのである。

「知り合いつていうのは？」

「クリスつていう僕とシエルの昔馴染みでね。こう言えばわかるかな。リッツエ商会会長の実子なんだ」

少し心を落ち着けようと、エンナは出された紅茶に口を付けた瞬間噴きそうになった。

「リッツエ商会つて、あの大商会の！？」

「うん、あの大商会の」

爽やかな笑みを浮かべてリユーリは首を縦に振った。

エンナが驚くのも無理はない。リッツェ商会と言えば、ライジニアの大手商会だ。ライジニアは勿論のこと、フェアデルフィアのみならず近隣諸国にもその名が知れ渡り、幅広く事業を展開している。エンナはあんぐりと口を開けて愕然となった。本当にリユーリ、そしてシエルは一体何者なのだ。精霊騎士とはいえ凄すぎる知り合いではないか？

いや、いやいや、精霊騎士ならば貴族や王族との交流だってあるだろうし、あり得ないことではない。きっと、多分。

「なんかこの話をしたら本人がかなり乗り気でき。そういうことから任せなさいって言うてくれたんだ。僕らとしても、クリスのところなら安心してエンナを預けられるんだけど」

「どうかな？ とリユーリは聞いてくる。どうかなもそうかなもない。」

「いやあの、寧ろこちらが恐れ多いんですけれども……ていうかわたしが行って迷惑かけちゃわないの、それ？」

「ああ、大丈夫大丈夫。万が一エンナがリッツェに匿っているってのがばれても、国外な上にライジニアってのが大きな障害になるからね。それだけで手が出しにくくなる。それに、なんて言っただってあの天下のリッツェ商会。下手な手出しをすることは命取りだ。あそこを敵に回したらどうなるか、考えただけでも恐ろしい」

「そんなに？」

「うん、リッツェは自国にかなり貢献しているからね。あそこがあんなに発展して裕福な国になったのもリッツェの力が大きい。だから、ライジニア王家もリッツェ家をかなり気に入っているんだ。もしリッツェ家に何かあって、それが王家に伝わったらライジニアの国王陛下、怒るだろうな。それじゃなくても王家云々以前に外交

問題に発展することは必至だろうね」

そこで一旦紅茶を飲んで喉を潤すと、リユーリはそれにと話を続けた。

リッツエはかなりの情報通のようで、それこそ色々な話を知っているらしい。国内外の情勢に関わらず、取引先の内輪話に王族貴族連中の黒い裏話まで色々。エンナ達を追っている先方の、それこそ外には知られたくない情報をリッツエ家が掴んでいるという可能性もなくはないだろう。

「そ、そうなの……？」

リッツエ家のあまりの大物っぷりにエンナは思わず聞き返してしまった。

「うん。そりゃ、色んな国を股に掛けちゃってるから当たり前なことに違いないけど、流石にお客さんの個人情報までは知る由もないでしょ？ でも、彼らは何処から仕入れてくるんだか、掴んでいるんだよね。だからまあ、僕達の国だって例外じゃないよ」

何そのヤバそうな組織。

エンナは一抹の不安を覚えて身体を震わせた。

「ああ、そんなに怖がらなくても平気だよ。今の話だけだとかかなり危ないところに聞こえるかもしれないけど、単純に人望が熱いだけだから」

「嘘。だってなんかすんごい真つ黒な何かが渦巻いてそうじゃない」「それは否定しないけど。彼らは商業を営んでいるわけだし、そういうこともなくはないよ」

エンナは益々怯えて固まってしまふ。エンナの震え上がる様子にリユーリは可笑しそうに笑った。

「本当、そんなに怖がる必要ないって。リッツエ家の当主は気持ちの良い程快活なお人だ。その嫡子であるクリスとクレスも良い奴だよ。それは保証する。決してエンナを悪いようにはしないさ。まあ、クリスはちよつとばかり問題あるかもしれないけど、面白くて楽しいよ」

涼しい顔で言ってくるリユーリ。エンナは思わず頭を抱えた。ちよつとばかり問題があるって、どんな問題を抱えているというのだ。全然何処も楽しくない。大問題過ぎる。

「ああもうなんでわたし、こんな大変なことに巻き込まれてるのよ」
「あはは、それは仕方ない。そもそもこれはエンナの問題だから、エンナが中心、全てエンナに繋がっているのは必然だよ」

エンナは恨めしさのあまりキツとリユーリを睨んだ。が、それもすぐに萎んでしまい、諦めに似た深い溜め息をついた。

リユーリにそんなことをしたって意味がないし、それで彼が心苦しく感じることをなんて絶対にないと思うからだ。

案の定、リユーリに目を向けると、彼は何にも悪びれた風もなく口元を綻ばせている。どう見たってこの状況を楽しんでいるようにしか見えない。シエルに色々と悪態をついてしまったエンナだったが、リユーリを目の前にすると真摯に受け止めてくれた彼の方が幾分かマシだったかもしれないとさえ思った。

「そんなわけで、ここから出たらまずリッツエ商会の拠点があるイリコットへ向かう。イリコット支店からライジニアへ向けて定期的

に出ている荷馬車があるんだけど、それに同伴させて貰って、ライジニアへ向かう手筈になってるんだ」

「成る程ね、段取りはわかったわ。でもイリコットに入出するためには関所を通らないといけないでしょ？ その辺り心配なんだけど」「それについては僕らに考えがある。リッツェ商会も惜しみなく協力してくれるだろうから心配はいらないよ」

そこまで聞いて、エンナはまた溜め息をつきそうになった。リッツェ商会がかなり凄いとところであると知ってはいたが、まさかここまでやっちゃんのような組織とはてんで思いもよらなかった。

「まっ、今後の予定はこんな感じだよ。明日は日が昇らないうちにここを出発するから、エンナもそのつもりでいてね」

エンナは少し気怠さを感じて、生返事と捉えかねない返事を返した。

話を聞いたただけなのにどっと疲れを感じる。

今後のことを憂えて、ついにエンナは溜め息をついたのだった。

* * *

日は沈んだが、明日のこともありまだ寝るには随分と早い時刻にエンナは就寝することにした。
なのだが。

「眠れない」

寝るには時間が早かったというのもある。しかし寢床に入ってから

ら数時間、もう寝ていても可笑しくないのにエンナは眠れずにいた。明日のこと、それ以降のことが不安で眠れないのか、それとも興奮が冷め止まぬのか、よくわからない。

エンナは水を飲もうと寢床から起き出して、ナイトテーブルに設置されている魔法道具の一種、ベッドランプに光を灯した。そして、ベッドランプのすぐ側にある水の入った水差しからカップに水を注いで飲んだ。喉を水が通って少し安堵に息をつく。

そこでエンナはふと逃亡一日目の夜のことを思い出した。あの不安の最中にいた時に聞こえた声。誰かに似ている気がしてならないのだ。

答えが喉元まで迫り上がっているのにそこから抜け出せない。

最近、何処かで聞いたのだ。しかし、それがどうも思い出せない。コップを棚の上へ戻すと、エンナはベッドの上で胡座をかき、うーんと唸って腕を組んだ。

丁度その時、遠慮がちにドアが数回叩かれた。

「エンナお姉様。まだ起きていますか……？」

ドア越しに尋ねてくるソプラノの声は、ルージュのものに相違ない。

「ルージュ？」

どうしてこんな夜遅くに？ もう身体は大丈夫なのだろうか？

エンナは急いでドアに近付いて開くと、思った通りネグリジェ姿のルージュがそこにいた。ルージュは申し訳なさそうに眉を下げて、エンナの様子を上目遣いで伺っている。

「お姉様、こんな夜更けにすみません」

「そんなこと別に良いわ。それよりルージュの方は大丈夫なの？」
「はい、大丈夫です。ご心配をおかけしてしまつてすみません」

更に申し訳なさそうに縮こまるルージュの顔色は、薄暗くて判断できないがその雰囲気からあまりよくないような印象を受ける。まだ、本調子ではないだろうにどうしたというのだろう。

エンナはルージュの体調が心配になつて、兎に角中へ入るよう促すと二人でベッドの縁に座つた。

「駄目じゃない、倒れたのにこんな時間に出歩くなんて」

エンナは開口一番に窘めると、ルージュはしゅんとなつてすみませんと呟いた。

「てか、マリアベルさん達は……」

「こつそり抜け出して来ちゃいました」

ぼそぼそと言うルージュにエンナは思わず額を押さえそうになつた。内緒でここまで来てしまったのかこの子は。マリアベル達も随分心配していたのに、こんなことされてはたまつたものではない。

「なんでそんなことしたの？」

とはいえ、ルージュがそれをわからないわけがないだろうし、軽はずみな行動はしなないと思うのだ。きつと彼女なりの理由があるに違いない。

エンナは極力優しい声音で尋ねた。

「それは、その……」

ルージュは顔を俯かせたままもじもじと身動いだ。

「エンナお姉様と、一緒に寝たく、て……」

訥々と告げるルージュは、顔を上げられずもつと頭が垂れてしまふ。エンナは「へ？」と気の抜けた声を発して目が点になった。

つまり、ルージュは自分と寝たいがために体調が優れないのを押し、マリABEL達に内緒でここまで来てしまったというのか？

なんとも幼い子供らしい考えというか、なんというか。

エンナは何だか可笑しくなってしまうて、思わずぷつと吹き出してしまった。笑い事ではないのはわかっている。きつとここは怒るところなのだ。でも、それがとても微笑ましくて仕方ない。それに、たったそれだけのためにここへ来てくれたことが何だかくすぐったくて嬉しかった。

エンナがくすくす笑っていると、ルージュはやっと顔を上げる。多分、彼女は相当これを言うのが恥ずかしかったのだろう。暗くてよく見えないが、顔は相当真っ赤に違いない。

「わ、笑わないで下さい……！」

ルージュは少し拗ねたように訴えた。しかし、それが返ってエンナの笑いのツボを刺激してしまう。先程よりも肩を揺らして笑うエンナに、ルージュはついに両頬を膨らましてそっぽを向いてしまった。

「そんなに笑うだなんて酷いです」

「ごめつ、だって可笑しくて」

流石にこれ以上は不味いと思い、エンナは必死に笑いを収めようとした。

なんだろう。こんな風に笑ったのは久し振りの気がする。あの人身売買の裏組織に捕らわれて、逃亡してからまだ数日しか経っていないのに、お腹を抱える程笑うのは随分と昔のように感じられた。

「いいよ一緒に寝ても」

一頻り笑った後、目尻に溜まった涙を指で拭いながら返答を返した。教会にいた時もまだ小さい義兄弟達とよく一緒に寝ていたし、別に添い寝くらいどうってことはない。

ルージュは勢いよく顔を上げてエンナの方へ向いた。さっきまでふて腐れていたのに、エンナの一言で吹き飛んだようだ。拗ねた様子は微塵もなく、目をキラキラと輝かせている。

「本当ですか？」

「うん、勿論」

ルージュは、それはもう嬉しそうに笑った。まさにこちらが天に昇ってしまうような笑顔である。

ルージュが血の繋がった自分の妹という実感はまだ湧いていないが、もし本当にそうだとしたら、こんなに嬉しいことはないと思った。

でも、実感が湧く前にルージュとはこれで最後になるかもしれない。

エンナはこれから国外へ逃げるのだ。簡単に会うことはできない。いや、会うことすら一生叶わないだろう。

だからその前に、自分には血縁者がいて、それも可愛い妹がいるということ早く実感したかった。それを強く心に留めておきたかった。孤児にとってしてみれば、血の繋がった親戚がいるというこ

とがわかっただけでも幸せなことなのだ。

なのに、エンナは妹がいるということがわかった。それだけではいい。こうして手を伸ばせば触れられるところについて、この子がどういった子なのかほんの少しでも知ることができた。これ程までに幸運に恵まれるなんて、自分は幸せ者だとエンナは信じもしない神様に思わず感謝したくなる。

面識もないのにエンナの命を助けてくれたルージュ。

話したこともないのに自分を姉と慕ってくれるルージュ。

泣きたくなかった。

そう思ったら無性に大声を上げて泣き出したくなかった。

途端に涙腺に熱が帯び始めてくる。

エンナは咄嗟に泣きそうな顔を見られまいと手で顔を覆った。

「エンナお姉様？」

それを不審がつて、ルージュが心配そうに声を掛けてくる。

「ごめん、なんでもないから。気にしないで」

心配かけまいと言ったエンナの声は寂しさと哀しさで震えていた。

ああ……

折角、折角自分にはこんなに可愛い妹がいるとわかったのに、明日になればもうさよならだなんて嫌だ。色んな話をして、色んなことをして、本当はもっともっと一緒にいたい。血縁者がいるということがわかっただけでも幸運なのに、なんて我が儘なんだろう。頭ではわかっていても、心が願って止まなかった。

「大丈夫、大丈夫ですから……」

ルージュはそっとエンナを抱き締めた。エンナの不安も哀しみも、優しく包み込むように。

ルージュの温かさが伝わってきて、余計に激情の渦が目から雫となつて流れ出そうになる。ぐっと堪え頑張つて耐えようと努めたが、一粒二粒、エンナの頬を涙が伝った。

エンナはぎゅっとルージュの小さな肩を抱いた。そこでふと、心が哀哭に暮れている片隅で気付く。

逃亡一日目の夜に慰めてくれた声。

あれはきつとルージュだったのだ。どういう原理で聞こえたのかはわからないが、魔法の一種だったのだとしたら納得できる。あの時の声音も、抑揚も、ルージュのものと一致するのだ。間違いないだろう。

エンナは感謝の気持ちで一杯になった。言つても言い尽くせない程だ。ずっと自分のことを心配してくれていたのかと思うと、胸に熱いものが込み上げてきて、それが更なる涙へと変わりそうになる。

「ありがとう」

エンナは溢れ出しそうな気持ちを必死に抑えるように、ただ一言、言葉として吐き出した。ルージュへの感謝の思いをそこに全て乗せるように。

7・欺瞞(ぎまん)の刃 (1)

まだ月が世界を支配している時刻にルージユ以外の全員が屋敷の門の前にいた。ルージユはまだ夢の中にいる。エンナ達は、ルージユが眠っている際に出発することにしたのだ。エンナはそれに異論はなかった。だって、あんなに名残惜しくなるとは思わなかったし、もし見送りにだなんてして貰っていたらそれこそエンナの決意が揺らぎそうで嫌だったのだ。だから隣ですやすや眠るルージユを起さないように、エンナはそつと抜け出てきたのだった。

「ベル、本当に大丈夫？」

「リユーリ様、心配のし過ぎですわ。先程他の騎士の方がこちらに来て下さいましたし、何も心配することはありません」

リユーリは少し不安そうに眉根を潜めながら、マリアベルと話し込んでいた。

何故、二人がこのような話をしているかと言えば、

「あの、やはり私はここに残りましょうか？」

ソードは馬車の御者台の上からリユーリとマリアベルに提案してみた。

実は、マリアベルの提案でルージユと彼女の護衛をしていたソードも、リユーリ達と一緒にエンナの逃亡を手助けしたらどうかという事になったのだ。それも出発直前になって。

ソードもリユーリも、マリアベルの案に難色を示していたが、時

間の問題とマリアベルの強い意志に負けて一旦は了解した。だが、リユーリはやはり乗り気にはなれないらしくこうして渋っているのだ。

「そうだね、是非ともそ」

「いいえ、ソード様。どうかソード様もエンナ様のことを守ってさしあげて下さい」

リユーリを遮ってマリアベルがソードに言い放つ。リユーリは不満の視線をマリアベルへ投げた。

「ベル……」

「リユーリ様、貴方はルージュ様から頼まれましたよね？ エンナ様を守って欲しいと。貴方はそれを了承しました。騎士として、隊長として、何よりリユーリアスとして、引き受けた任務は優先して遂行させなければ」

「それはそうだけど」

あのリユーリが。

あの口減らずで人の揚げ足をとるリユーリが言葉をぐつと詰まらせて、眉根を寄せたまま黙ってしまう。

マリアベルはふつと表情を和らげると、不機嫌そうなりユーリの頬に手を添えた。

「心配なさって下さるのはとても嬉しいですね。でも、まずはエンナ様を確実に国外へ逃がすことを優先してお考え下さい」

暫くの間二人は、無言のまま見つめ合う。その様はまるで恋人同士が別れを惜んでいるかのようにエンナの目には映った。

優しく諭すマリアベルにリユーリはやっと諦めがついたようだ。

深い溜め息をついた後、わかったよと少しふて腐れ気味に言った。

「んじゃ、話がついたところでそろそろ」

「エンナお姉様!」

スラツツがソードの隣で出発! と号令を掛けようと息を吸った時だ。鈴を転がしたような可愛らしい声がマリアベルの後方から今暁前の空に響いた。皆驚いてそちらに注目する。なんとルージュが寝間着姿で息を切らしながらこちらへ走り寄ってきていた。

「ルージュ!!」

エンナは思わず馬車から身を乗り出した。

なんで……折角ルージュのためにも、自分のためにも黙って別れようと思っていたのに。

ルージュは一驚するマリアベルの隣まで来ると、肩で息をしながら呼吸を整え息絶え絶えに言った。

「エンナ、お姉様……これをつ、これをお持ちになって下さい」

肩を上下に動かしながらルージュは小袋をエンナに差し出した。

「これは?」

「何かあった時、きっとこれがお姉様のお役に立つはずです。宜しければお持ち下さい」

エンナはルージュから小袋を受け取って手にしてみると、それは随分と軽いもので、中に何も入っていないんじゃないかと思う程だった。

「ありがとうルージュ」

エンナはぎゅっと小袋を両手で包み込むように大切に握った。自分の気持ちが揺らめきそうでルージュと顔を合わせるのは躊躇われていたが、これがあれば寂しくなんかない。いつでもルージュのことを思い出せる。

大丈夫だ。

エンナはルージュから貰った小袋に勇気を貰って、自ら行こうと皆に出発を促した。

それを満足そうな笑みでリューリは見、他の仲間達もエンナの決心に感心して頷く。

それじゃあとリューリが馬車に乗り込む素振りを見せたが、

「ベル！」

振り向き様にリューリはマリアベルの腕を掴んで驚く彼女を引き寄せた。リューリの突発的な行動にエンナまで驚いてしまう。

リューリはマリアベルの耳元に口を寄せると何事か囁いているようだ。マリアベルは徐々に大きく目を見開いて、口元に手を添える。動転しているマリアベルを真正面から見据え、リューリはにんっと悪戯な笑みを浮かべた。

「リューリ様……！！！」

戸惑っているような、焦っているような、動揺を隠せずマリアベルはリューリを咎めるように声を上げた。するとリューリはマリアベルに何か言われる前にさっさと馬車に乗り込んで、ソードに出すよう指示を下す。その表情は、してやったりと満ち足りた顔をして

いた。

ソードはそんなリユーリに微笑を溢しながら、この場から逃げ去るように手綱を鳴らした。

エンナはぎゅっと手を握る。

動き出す馬車。それと同時に動き出す自分。

一体この先、自分が何処へ向かうのかわからない。でも、何処へ行こうが自分には困難が待ち受けているだろう。だからといって、ルージユに救われた身の上、絶対に命を無駄にするようなことは、墮とすようなことはしない。

「ありがとう!!」

揺れる馬車の上でエンナは身体を後ろへ向けて、ルージユとマリアベルに大きく手を振った。その手にはルージユから貰った小袋が握られている。

別れの挨拶は言わない。言ったら本当にこのまま会えなくなってしまうそうで嫌だった。もう会うことはないだろうと頭ではわかっていても、一縷の望みを乗せ感謝の言葉を残すだけにする。

ルージユとマリアベル、その場に残り、馬車が見えなくなるまで見守っていた。

* * *

馬車の上で揺れに揺られて数時間、空はすっかり青一色の世界に支配されていた。見事に本日は快晴だ。その一方、エンナは晴れ晴れとした天とは違って暗雲がドロドロと立ち込めていた。胸がムカムカして喉の奥で異物がつっかえているような不快感。そこから気を逸らそうと上を向いたり、景色を眺めたりしたが返って腹の底か

ら迫り上がる圧迫感が増すばかりだった。

エンナの隣に座るローズは落ち着かない彼女を横目でちらちらと気にしている。そして、徐々に顔色が悪くなるエンナを心配して声をかけた。エンナは気丈に大丈夫だと言い張っていたのだが、

「気持ち悪い……」

とうとう堪えかねて、快晴な空の色と同じ色をしながら絶え絶えに訴えた。

教会で過ごしていた時は荷馬車に乗って出かけたなりしたことがあったが、乗り物酔いなどしたことはなかったのに。

って、なんか随分昔のことみたい。

うつぶとエンナは口元を手で押さえた。

「ソード、馬車を止めて」

リユーリは御者台にいるソードに急いで言うと、彼は頷いて道を塞がないよう脇へ馬を誘導させた後にそこへ停止させた。

「エンナ大丈夫？」

ソードの隣に座っていたスラッツが顔をこちらに向けて心配そうに声をかけてくれるが、エンナはそれどころではなくただただ口を手で覆い、首を横に振るので精一杯だった。

「ちよつとこの辺りで休もう」

リユーリの提案に皆頷いて馬車から降りる。

「ほら、しっかりなさい」

申し訳ないと思いつつもエンナは気分の悪さをどうすることもできなくて、ローズに支えられながら馬車から降りた。その途端ぐらぐらと頭が揺れ、エンナはその場にしゃがみ込んだ。ローズは立ってられないエンナの背中を優しく擦った。

無理。くらくらする。

「スラッツ」

ローズは彼女の代わりにエンナの背を擦るようスラッツに頼む。スラッツは了解とエンナを預かって介抱し始めた。

「この辺りに小川か何かないか調べますわ」

ローズは薔薇の種を地に植える彼女の精霊、ニコンを呼んだ。ニコンはすぐローズに応えるように現れた。

「ニコンやりますわよ」

「はい、お水探し〜お水探し〜」

ニコンは楽しげにローズの周囲を飛び回る。

「お〜みずさん、お〜みずさん、一体どこにいるのかな。あっちかな、こっちな。どこに流れているのかな？ それともどこかでニコンたちを待っていてくれるのかな〜？」

歌でも歌うようにニコンは種の植えられた付近でくるくると弾む

よつに踊った。

「ニコンと同じ植物の精霊さんたち、どうかニコンとロニに教えて教えて」

ニコンはぴたりと止まると両手を広げた。

微風のせいか辺りがさわさわと木々や草がざわつき始めた。まるでここにいる皆に何かを語りかけていようだ。

暫くローズが森に囁きに耳を傾けているとスツと指を前方へ指した。

「リユーリ様、見付けましたわ。太陽に向かって真っ直ぐ少し歩いたところに小さな湖があるようです」

「真っ直ぐね、ありがとうローズ。ここでは何だからソード、スラツツ、エンナを連れてそこへ。ローズは」

「わたくしは荷物と馬達が心配ですので、守備を施してからそちらへ向かいますわ」

リユーリは頷くとエンナに気を配りながら連れて行くソードとスラツツのあとを行った。

* * *

スラツツに支えて貰いながら少し森の中を歩いていくと、ローズの言った通りすぐ小さな湖に辿り着いた。リユーリは念のため周辺を見回つてくると言つてここにはいない。

エンナは湖畔に膝を着くと、水を両手で掬い上げて飲んだ。冷たい水が喉を通つて身体に染み渡る。少しつつかえが和らいだような

気がした。

「エンナ、少しは落ち着いた？」

スラッツは心配そうに眉尻を下げてエンナの顔を覗き込んでくる。

「うん、ちょっとは」

生気の抜けた笑顔ではあったが、笑みを向けるとスラッツはちょっと安心したようだ。なら良かったとほっと息をつく。

「乗り物駄目だった？」

「そんなことはないと思うんだけど、こうなる前はよく荷馬車に乗ってたし。多分慣れないことしてるから気分が悪くなったんじゃないかしら」

「いやいや、こんな逃亡劇に慣れてるのもどうかと思うけど」

エンナとスラッツは顔を見合わせて笑った。確かに、こんなことに慣れてるのも微妙だ。一体どんな輩だとエンナも自分自身を勘ぐってしまう。

一頻り笑い合って、スラッツはもう平気そうみたいだなと、にこっと口端を上げた。エンナは息を大きく吸って吐き出してみる。先程より大分気分は違うようだ。笑う余裕も出てきて、エンナは元気に返事をしてみせる。

「んじゃあ、リユーリさんが戻ってきてちょっとここで休んだら」

と、スラッツが日溜まりみたいな笑顔でエンナに話している途中、彼の表情が陰しく一変した。

「エンナ危ない!!」

へ? とエンナが理解できるのを待たずスラッツは彼女を突き飛ばした。エンナは抵抗もせず、寧ろ何をされたのかわからないままに吹っ飛ばされた方へ身体を倒してしまふ。

刹那、鉄と鉄とがぶつかり合う独特の濁音が空気を震わせ響き渡った。

「ぐっ」

エンナが慌てて身を起こすと、目に飛び込んできたのはスラッツとソードが刃を交える光景だった。何が起こっているのかついていけずエンナは固まってしまふ。

何? どうなってんの?

スラッツは歯を食いしばって上から掛かる圧力に耐えている。そして、渾身の力でソードの剣を弾き返して、苦無くぬい彼の腹へ斬りつけようと走らせた。ソードは素早く後方へ跳躍してスラッツの反撃を躲すと剣を構え直す。

「ソードさん、まさか……」

スラッツは信じられないという目でソードを見ていた。

「えっ、どういうこと?」

「その質問今答えないとダメ?」

スラッツの凄みの利いた声に負けてエンナはたじろいだ。

ニコニコと人懐っこい笑みを絶やさないあのスラッツが、目尻を

吊り上げて鋭くソードを睨んでいる。敵意に満ちた眼差しは威圧的で、スラッツから発せられる敵愾心に圧倒されエンナまで震え上がりそうになった。

スラッツはゆらりと立ち上がると、両の手に握られた苦無を持ち直してソードと対峙する。自分に刃を向けるスラッツに、あの穏やかで物腰の柔らかいソードとは想像もつかぬ程の冷眼を送った。その瞳からはソードが何かに怒っているような、私憤が込められているような気がした。

二人は無言で睨み合ったまま微動だにしない。いや、寧ろ動けないのかもしれない。

指一本でも動かしたら、先に動かした方が敗者だ　　という掟でもあるかのように。

スラッツとソードと対峙しているわけでもないエンナでさえ、この張り詰めた空気に飲まれ息をするのも忘れてしまう程だった。

息苦しい間の後、先攻を仕掛けたのはスラッツだった。

スラッツは低い姿勢のままソードとの間合いを一気に詰めると苦無を横薙ぎに振るう。それをソードは難なく剣で弾き、迫り来るもう一つの苦無は身体を逸らして避けた。振り抜いた勢いを殺さずにスラッツはしゃがむと足払いを仕掛ける。しかし、それを予想でもしていたのか、ソードは跳び上がってそれを回避した。

黙然と休むことなく繰り返し広げられる戦いにエンナはただ身動き一つできなくなっていた。まるで劇のちゃんばらでも演じているかのように、二人の動きは先に打ち合わせでもしていたみたいに洗練されている。

「どっつしてっ、どっつしてですかソードさん！」

スラッツの苦無とソードの長剣が鉄の擦れる嫌な音を鳴らしながらち合う。スラッツは苦痛に顔を歪ませて訴えた。

ソードは何も言わない。沈黙を守ってスラッツを睥睨するのみ。
悔しそうに下唇を噛んだ。

「信じてたのに　　！！」

今にも泣きそうな叫びを上げると、スラッツの攻撃に激しさが増す。機敏に苦無を操り、ソードに反撃の隙を与えない。スラッツの猛攻にソードは流石に「くっ」と声を漏らした。

しかし、ソードも負けてはいない。ある程度受け止め、紙一重のところでも苦無の切っ先を逃れながら、ソードは一瞬の隙をみてスラッツの脇腹を狙って剣を突き出したのだ。スラッツは危険を察し、後方に跳び退きソードの反撃を寸での所で躲した。

ソードへ攻めていくかと思いきや。何故かスラッツは苦無を地面に突き立てたのだ。訝しく眉根を潜めたソードだったが、スラッツの手にもう一本在るはずのものが無いことに気付いてハッと後ろを振り返る。

そこには、もう一本の苦無が地に立っていた。

「しまっ」

「<糸縛くはく！！>」

スラッツの精霊術が発動する。

地に突き立てた苦無から糸が幾重にも吐き出されるようにソードの口から首、腕、足を、ソードの剣を絡め、苦無が杭の役割でも果たしているのか動けなくしてしまう。苦無は地面に突き刺しただけで引つ張ればすぐ外れそうなものだが、ソードが腕を動かしても不思議なことにビクともしないようだ。

エンナが呆気にとられその場で座り込んでいると、スラッツは彼女のところへ駆け寄った。

「エンナ、ここから逃げよう」

エンナの腕を掴んで急かすように引つ張る。だが、エンナは展開の速さについていけなくて、呆けたままスラッツに尋ねた。

「逃げるって何処へ？」

「今は何処でもいいからそんなの！ 速くここから離れないと危ない」

「でも」

エンナは戸惑ってソードの方へ視線を投げた。精神統一でもしているのか、ソードは目を閉じて身動き一つしない。しかし、気のせいだろうか。確かにソードは石像のように動かないが、彼の剣が僅かに振動しているように見えた。若干、光を放ち始めているような気もする。

それに気付いたスラッツが慌てた様子で強引にエンナの腕を引つ張った。

「エンナ兎に角ここから逃げるんだ！ あとでちゃんと説明するから！！」

半ば途方に暮れたエンナだったが、説明して貰えるならとおずおず立ち上がる。スラッツはやっと耳を貸してくれたエンナに安堵して、彼女の腕を掴んだまま走り出した。

スラッツに腕を引つ張られながらソードの方にもう一度目を向けると、彼は灰色の瞳をこちらへ厳しく投げていた。

7・欺瞞(ぎまん)の刃 (2)

* * *

木々の間を駆け抜けけると、エンナ達の馬車を停留させている所へ出た。

そこで見た光景にエンナは目を丸くする。馬車や馬を木に繋いでいる縄には、なんと茨が全体に巻き付いて、何人たりとも触れさせないという具合に覆われていたのだ。しかも、茨には意志が宿っているのか蛇のようにうねっている。これはローズの仕掛けに違いない。

正直気味が悪かった。もし、ここを通った通行人がいたら、この光景をどのように思うだろうか。

スラッツとエンナが近付くと、茨は二人を確認するように髪を一房持ち上げたり、額を突いたりしてくる。どうにもあまりいい気はしなかったエンナは、何すんのよと目を据えた。

暫くそのまま好きにさせておくと、茨は満足したのか二人を弄っていた枝を引つ込めて大人しくなった。どうやら、敵ではないと判断してくれたようだ。

スラッツは馬を繋ぐ木に近付き、幹に括り付けられている縄と馬車を繋ぐ紐を解いた。四頭のうち一頭を茨の檻から連れ出し、スラッツはその馬に乗るようエンナに促す。エンナは言われるがままにスラッツの手を借りながら跨り、彼女の前にスラッツが乗馬した。

「はっ」とスラッツの威勢の良い掛け声と共に彼は思いつきり馬の腹を蹴る。馬は嘶いて走り出した。

「ねえ！ リュウリ達を置いて行っちゃって良いの？」

風を切る音を耳にしながらエンナは前に跨っているスラッツへ声を張り上げた。

「大丈夫、リュウリさんもこのことは承知していることだから。もしなんかあったら、この近くにあるオレの知り合いの屋敷で落ち合うことになってたんだ」

「そうだったの？」

スラッツは、視線は前を向きながら頷いた。

「てか、一体全体どうなんてんのこれ？ なんでソードが……」

「……ソードさんが裏切り者だったんだ」

スラッツは歯を食いしばって悔しそうに答えた。

「裏切り者って、どういふこと？」

「言葉の意味そのままだよ。前々から可笑しいとは思ってたし、リュウリさんやシエルさんもずっと言ってた。こちらの動きが漏れてるって」

信じられない。

あの温和そうで気周りの良さそうなソードが皆を裏切っていただなんて……

エンナは言葉もなく、どうその事実を受け止めればいいのかわからなかった。

「ソードさんはオレ達の仲間を装いながらこちらの情報をウルさん

達に伝えていたんだ……！」

「ウルさんって？」

「エンナはリユーリさん達に裏組織から助けて貰った後、グラウさん達に襲われたんだよな？」

「うん、そうだけど」

「グラウさん達はエンナの存在を快く思っていない一派の人達で、その筆頭がウルさんなんだ」

「成る程ね、だから襲ってくるわけか。でも、どうしてわたしみたいな一庶民を？ 全然そこが理解不能なんだけど」

それはつとスラッツが喋ろうとした時だ。彼はハツと何かに気付いて警戒に身を固くさせた。鋭く眼光を辺りに走らせて、スラッツはエンナへ声を張り上げた。

「噂をすればなんとやら……エンナ、しっかり捕まってるな！！」

言うやいなやスラッツは更に馬の走行を加速させる。地を駆ける地響きが激しくなった。エンナは振り落とされまいと必死にスラッツにしがみつくが、こうも揺れが激しいとバランスを取るのも難しい。ローズが如何に自分を気遣って丁寧に馬を操っていてくれたのか、ここではじめて気付いた。

ちよつとの間もなく異変はすぐに現れる。

森の様子が変なのだ。いや、森というよりは木がと言った方が正しいかもしれない。ザワザワと葉同士が擦れる音が妙に耳について気になるのだ。

唯ならぬ空気を感じてエンナはスラッツにしがみつく手に力を込めた。敵がすぐそこにいる？

馬が一步走り抜ける度に葉音は徐々に大きくなり、木々の枝が軋む音まででした。

「こりゃ一戦は免れそうにないな」

チツと舌打ちして、スラツツは苦虫でも& a m p ; # 2 2 1 6 9 ;
み潰したような顔をした。

「追っ手?」

「その通り! しかも相手は……」

ビュツと風を切り、折れてしまっじやないか思ってしまっ程の
固い皮が割れる音がすると、なんと木の枝がエンナ達襲い掛かっ
てきた。上から馬諸共押し潰すように来て、スラツツは手綱を操りそ
れを難なく避ける。枝が獲物を捕らえられず空振って地を叩き付
けた。

「ウルさん!」

正解とでも言うように、それを合図に木々の枝が次々と猛撃を仕
掛けてくる。

スラツツはひいひい悲鳴を上げながら、巧みな馬術で避けていっ
た。エンナは落馬しないように兎に角しがみつくので精一杯だ。

「くっそ、オレの精霊術じゃ全然太刀打ちできないっのに!」

「こんな時にそんな不安になること言わないでよ!」

「だって仕方ないじゃん! オレは糸、あっちは木、どう考えたっ
て不利!! エンナ頭伏せて!!」

間髪入れず頭を狙って枝が横薙ぎに振るってくる。エンナは反射
的に頭を俯せた。

「こうなりゃ、時間稼ぎにしかならないけど……」

スラッツは小さな車型の手裏剣を何刀かさつと取り出す。その動きは素早くてどうやって用意したのかエンナには目で確認することができなかった。

小型の手裏剣をどんどん前方にある木々の幹や枝に投げ付け、襲ってきた枝や根へ避け様に獲物を投じていく。

ある程度投擲して、スラッツは精霊に唱えた。

「<大々柵網！！>」

手裏剣から一斉に糸が紡がれ、そこから吐き出される糸同士が絡み合い、木々の枝を引き寄せるように拘束する。糸が張り巡らされた光景は巨大な蜘蛛の巣のようだ。

糸に絡め捕られた樹木は束縛を解こうと樹皮が割れて避ける小気味良い音を立てながら抵抗する。

「この隙にウルさんの発動可能範囲から抜け出す！！」

馬の走る速度が更に加速する。風がエンナの頬を掠めていき、髪や服の裾を攫っていった。

激しく揺れる馬上で身体全体に力を入れる勢いで必死にエンナは耐える。しかし、そんなことはお構いなしに数十年は生きている木達が自らの腕と足を駆使しながら襲い掛かってきた。

スラッツは攻撃の軌跡を読んで全て華麗に躲していく。もう見事としかいえない。だが、エンナにはその勇姿を見届ける程の余裕はなかった。

攻防を続けていくうちに、徐々に樹木の攻撃が鈍く、攻めを仕掛けてくる木の本数も減り始めてきた。ウルの特容距離範囲から外れてきているのだ。

スラッツはしめたと馬をそのまま疾走させる。

そして、ついにあるところを境に木々の猛攻がなくなった。拍子抜けする程ピタリと。エンナは顔を上げ様子を伺うが、森には静けさが戻っていた。

「よっしゃ、逃げ切ったー！ わははっざまあみろー！！」

拳を握って高らかに振り上げる。スラッツはウルの手から逃れられたことが相当嬉しかったようだ。頭おとがいを解いて腕を振り回す。

エンナはスラッツの喜びように呆れてしまった。こちらは逃げ惑っていただけでまともに戦ったわけでもないのに、と。

「そんなに喜ぶこと？」

「当たり前だろ！ 逃げるが勝ちって言うし、こっちが勝ったも同然じゃん！」

このまま突っ走るぞー！ とスラッツは嬉々として馬を飛ばすのだった。

* * *

ローズは馬車に茨で守りを固めると、駆け足で皆が休んでいるであろう湖へ向かっていた。

胸騒ぎがしたのだ。

気が落ち着かず、言い知れぬ不安感がローズを襲う。

別に何かがあったとは思わない。エンナの守備は万全だと思っし、魔物があまり出てこない道を選んでいるからそこは心配しなくてもいいはずだ。一番気掛かりなのが追っ手の存在だが、この辺りに敵の気配は感じられないから危険はそんなにないだろっ。

それに万一何かあってもリユーリが側についている。彼は切れ者だから不測の事態にもすぐ勘付いて対処するはずだ。

だのに、何だというのだ、この胸のざわめきは。

兎に角急いで行かなければとローズは走った。彼女の不安が杞憂であることを祈りながら。

森に住む植物の精霊達の言う通り、すぐに小さな湖のある開けたところへ出た。そこでローズが目当たりにしたのは、

「ソード様!？」

全身に絡み付く糸をソードが解いているところだった。

ローズに気付いたソードは、まだ顔に巻き付いている糸を払い落とすと苦く視線を落とす。

膝を着いている彼へ近付いて、ローズは糸を取り去るのを手伝った。

「一体これは……何があったのですか」

彼女が心配そうに聞いてもソードは答えてはくれず、奥歯を噛み締めた。

ソードの頑な態度に疑問を感じたローズは、周囲に目を走らせる。何故かエンナ達の姿が見えない。彼女達は何処へ行ってしまったのだ。それに地に突き立てられた二刀の苦無くぬい。これはきっとスラッツのものだろう。それがどうしてこんなところにあるというのだ？

「ソード様、ここで何が起こったのですか？」

ソードはこれにも何も言ってはくれない。不安が更に募って、ローズの瞳が心許なく揺れた。

「やっと本性を現したか」

そこへリユーリが低木の垣根を越えてこちらに近付いてきた。今の今まで何処へ行っていたというのか、ローズは思わず彼の名を呼んだ。

「あのリユーリ様、それはどういう意味ですか？」

リユーリの意味深な言葉にローズは眉を潜める。彼は厳しくも見える固い表情でローズ達のところまで歩み寄ってきた。冴えた瞳でリユーリは射貫くように見下ろす。背筋が凍る程の恐怖を感じて、ローズは思わず生唾を呑み込んでしまった。

「裏切り者」

凍えるような言葉と口調に、ローズはえっ？ と目を見開き、ソードは苦虫でも噛み潰したような表情でリユーリの視線から逃れるように顔を逸らした。

* * *

森を馳せ幾つかの村々を通り過ぎ、陽が落ち始め空に赤みが差し掛かってきた頃、どうやらスラツツの知り合いの屋敷へ着いたようだったが。

エンナはぽかんと頭上を見上げ、どう鑑みても屋敷とは思えない石で出来ているお城の門前に突っ立っていた。

「ねえ、これの何処がお屋敷？ わたしには立派なお城にしか見え

ないんだけど」

「確かに。でもこの持ち主がそう言ってんだから、そうなんじゃない」

スラッツの口調は何故か尖っていた。

「そ、そう……」

エンナはスラッツの突っぱねるような態度に戸惑う。

ここへ来てからスラッツの様子が変になった。はじめ緊張しているのか思ったが、どうやらそうではないらしい。ピリツと殺気立っている感じだ。感情豊かな彼の表情は消え去り、目元も鋭利な刃物のように鋭くなって、人が変わったような気さえする。

エンナはスラッツの急な変貌ぶりにどう接しようか困っていると、そんな彼女に気遣うこともなく彼は門番に近付いていった。

門の左右に控えていた門番達は、警戒して槍の先をスラッツに向け何者か強気に聞いてくる。スラッツは怯むこともなく、堂々とした態度で言い放った。

「精霊騎士のスパラッツだ。ベンドール様に伝える。スラッツが花を連れて参上したと」

門番はそれを聞くと態度を一変。不遜だった身構えがピンと背筋を伸ばして姿勢を正し、随分慌てた様子で門の向こう側にいる者達に向かって開門の指示を出す。すると両開きの大きな門が重い音を鳴らしてゆっくり開いた。

スラッツは馬の手綱を引いて中へ入っていく。エンナは慌ててその後を追った。

木製の門の向こうには、やはり屋敷には見えない城のような佇まいの石の塊が聳え立っていた。エンナは感嘆してそのお城のような

屋敷を見つめる。圧迫するような冷たさを感じるお屋敷だ。

「おお、これは、これは」

贅肉のついた太った男が数人の兵士を引き連れてやってくる。脂肪の塊みたいな男は、如何にも位の高そうな服を身に纏っていた。スラッツはその男が姿をみせると、エンナの後ろで彼は跪き頭を垂れる。

太った男がエンナとスラッツの姿を目にして丸い顔を輝かせた。

「スラッツ、このむす……ではなく、このお方が」

「はっ、ベンドール様。左様に御座います」

スラッツはハッキリ肯定すると、ベンドールと呼ばれた男はとても満足そうな笑みを顔中に広めた。

「うむ、それで力の方は……」

「既に覚醒おきめめておられます」

「そうか、でかしたぞスラッツ！ 褒めて遣わそう」

「お褒め頂き有り難き幸せ」

何これ。二人して何の話してんの？

二人のやり取りが理解できず、エンナは脳内に沢山の疑問符を浮かべた。

片眉を器用に上げ、エンナが首を傾げているとベンドールは彼女の面妖に考えているのに気付いたようだ。これは失礼を致しました、と口調は至って丁寧なベンドールは謝意を表す。しかし、その口元と瞑った目尻は気色悪く綻んでいた。エンナは思わず変に顔を歪

ませてしまつ。

「私、ベンドール・シュペッセと申します。エンナ様を心より歓迎致します」

彼は恭しく礼を服するが、何だかエンナには白々しく思えた。

「そろそろ陽も落ち肌寒くなってくる頃ですので、ここではなんですから詳しいことは中でご説明させて頂くことに致しましょう」

だらしなく目元を下げて、ささっこちらですとベンドールはエンナを導く。エンナは戸惑いながら、スラッツに助けを求めるように後方へ視線を投げた。すると彼は……

エンナは息を呑んだ。

スラッツは笑っていた。

その笑顔は、いつもの日向のような明るく温かいものではなく、背筋がぞつとしてしまうような表情だったのだ。薄ら笑いを称え瞳には不敵な光が宿っている。あの天真爛漫だった彼だとは到底思えないような冷たい顔付きをしていた。

目の当たりにしたエンナは、混乱した頭でベンドールに促されるままついて歩いて行くことしかできなかった。

* * *

エンナは屋敷に入った途端、ここの侍女達に囲まれた。何事だと思つた矢先にベンドールの合図でエンナは彼女らによって連行され

る。

エンナの展開についていけないことをいいことに、あれよあれよという間に身包みを剥がされ、お風呂に放り込むように入れられた。

かと思つたら、お風呂から上がって早々、エンナはコルセットで身体をきつく締め上げられた。

「いたたっ、痛い！ 痛いって！！」

「くっ、これでは駄目ですわね……エンナ様、もう少し辛抱なさつて下さいませね。ちよつと手荒な真似をしていますが、すぐに終わらせますから！！」

侍女が二人がかりでえいやつとコルセットの紐をきつく引つ張り上げてくる。エンナはあまりの痛さに悲痛の叫びを上げた。

しかし、このお陰でやつと頭が働いて状況を呑み込み始める。どうやら自分はこの侍女さん達によって着飾られているらしい。

コルセットがどうにかこうにか装着できると、仕立ての良い温かみのある黄色いドレスに着替えさせられた挙げ句、装飾品まで飾られたのだ。

その装飾品を飾る時、エンナは元々身に着けていた首飾りと腕飾りを取り上げられそうになった。必死に拒むと侍女達は今の姿では似合わない粘り強く外すように言ってくる。それは向こうの都合であつてこつちに関係のないことだ。

頑なに外そうとしないエンナに結局侍女達は渋々と諦めた。が、そしたら肌の手入れをされた後化粧までしてきて、もうされるがまだ。

それでもなんとか自分を保って、エンナは先程まで着ていた服を返してくれるように言った。しかし彼女らは、洗濯するから今は無

理ですと言ってくる始末。エンナは血相を変えて、ならせめて服のポケットの中に入れていた小袋だけでも返して欲しいと頼んだ。すると、それには快く侍女達は了承してくれ、小袋と首飾り、腕飾りを死守することができた。

が……

一体なんだつてのよ!?

全てが終わると謁見の間らしき部屋に連れて行かれた。今エンナは何故か一つ上段の椅子に座らされている。コルセットの息苦しさからもあって、彼女は不機嫌に顔を歪めた。お腹周りがきつくて仕方ない。

ベンドールは壇上に座るエンナの姿をご満悦な様子で見上げ頻りに頷いていた。スラッツはと言えば、後頭部に両手を乗せ、壁に寄りかかり我関せずと在らぬ方へ顔を向けている。

「うんうん流石はエンナ様。よくドレスがお似合いで」

「あの、一体これはどういことなんですか？」

誰がどう聞いたってお世辞にしか思えない台詞をエンナは容赦なく遮った。

イラツと蟀谷の部分が動いて仕方ないのだ。どうもこの男、エンナに媚びているようなのだが、自分にどうして阿るのかわからない。

「そうですね。エンナ様もご自身の正体がわからず、さぞや不安な気持ちでおられたはず……僭越ながら、私目をご説明させて頂きませう」

大仰な仕草で恭しく一礼する。エンナの眉と蟀谷がピクツと動いた。

「まずは貴女様のご出生についてお教え致します。実はエンナ様は……」

咳払いをして大きく息を吸う。勿体振った話の切り方にエンナの苛立ちは蓄積していくばかりだ。

「だあぁっ、もう焦れたい！
さっさと言いなさいよ！！」

心の中で悪態をついてエンナは齒噛みした。

「今は亡き前国王陛下、エイブラム前国王陛下の御息女、エンナ・テイル・フィアデル様。それがエンナ様、貴女様なので御座います」
「は………？」

エンナは、あまりにもぶっ飛んだ話に一瞬何を言われたのかわからなかった。

8・月輝く夜に（1）

「ちょっと待って下さい」

頭痛を起こしかけている頭を押さえ、エンナは片手を挙げた。

前国王陛下の息女ってつまり……王女？ お姫様？

しかもエイブラム前国王と言えば、悪名高い王様ではないか。とどのつまり、その娘ということになる。

誰が？ 私が？

意味がわからない。どうしてそういうことになるのか。

「あの、それってわたしがこの国の元王女、ということになってしまってますが」

「ええ、まさしくその通りに御座います」

「何故そんなことになるんですか？ 全然納得できないんですが…

…」

にわかには信じがたい事実だ。疑惑の視線をベンドールに送ると、彼は頬に流れた汗をハンカチで拭った。

「いえいえ、これは真です。嘘偽りでは御座いません。エンナ様は正真正銘、エイブラム前国王陛下の御息女であらせられます」

ベンドールは順を追って説明し出した。

約十六年前、フェアデルフィアでは大きな内乱が巻き起こっていた。“国内戦争”と言っても過言ではない程、かつてのフェアデルフィアは酷い有様だったらしい。

その話なら、エンナも育ててくれた神父様から聞いていたので知っていた。前国王のエイブラムは歴代国王の中でも暴君と名高く、彼が国を治めていた当時、国民は圧政に苦しんでいたという。それに耐えられなくなった国民は乱を起こし、エイブラムの弟であるアラディンがとうとう自ら軍を率いて、血の繋がった兄である彼を討ち取った。そのおかげで、この国はエイブラムの恐怖政治から脱することができたのだ。

そして、現在ここフェアデルフィアの王は国王討伐に立ち上がったあのエイブラムの弟、アラディン国王陛下である。

彼の統率力は兄エイブラムを超え、優れた王としての素質を持っていた。彼が治めてから徐々にこの国は平和を取り戻し、豊かになっていったのだ。

しかし、ベンドールの話ではエンナが今まで聞いていたのとは整合性が合わない。

何故なら、彼は逐一エイブラム前国王のことを持ち上げてくるのだ。エンナがいる手前なのは知らないが、どんなにご聡明で素晴らしい勇ましかった。また優れた才能の持ち主であったかと褒め称えてくる。

一方、アラディン現国王の名前が出る度に、直接的ではないにしても貶していると思えない発言をするのだ。

まあ、兎に角彼が言いたいことを簡単に要約すると

「要するに、わたしはその乱世真っ直中に生まれて、わたしの命が

危ないと思つた当時王の側室として王宮にいた母がまだ赤子だったわたしを人知れず教会へ引き渡すようにしたと……」

長々とまだ説明を続けようとするベンドールを遮ってエンナは言つた。

「ええ、ええ、まさしくその通りに御座います。いやはや、流石はエイブラム前国王陛下の王女様。お父上様に似てご聡明でいらつしやる」

何言つてんだこのおっさんは。

褒め言葉にもなっていないベンドールのお世辞に、エンナは呆れてしまつて何も言えなかつた。スラツツまでも「へっ」と馬鹿にしたような一笑を溢している。

「当時は本当に酷い荒れようでした。エンナ様の異母兄弟に当たる兄君様や姉君様方は全員あの反乱で殺害され、正室のレオノーラ様も……」

ベンドールはうつと言葉を詰まらせて、身も世もないように溜まつた涙を流れないようにハンカチで押さえる。その芝居がかった仕草にエンナは唇をへの字に曲げた。

「兎に角、エンナ様の母君様、エメリナ様は貧困層の救済運動など国民への援助を惜しみなく執り行つておられた方で、国民からも慕われておりました。この方は助けてくれという声が大きかったので助かりましたが……エイブラム様が討たれ政権がアラディン様に移つても、反乱分子が動いておりましたので、何年かは予断を許さない状況が続いております」

「成る程ね」

エンナは腕を組み背もたれに身を預けると天井を仰ぎ見た。シャ
ンデリアの光が色々な形を作って天井の壁に映っている。

そういう事情があつて、自分は教会へ捨てられたのか。

しかし、そんな風に告げられても自分のことなのだとは到底思え
なかつた。違う誰かの話のようだ。

大体いきなり、自分は王女様でしたあ、テへ。なんて、そんなも
ん信じられるか。

あまりにも現実からかけ離れすぎている。

それにしてもこのベンドールという男。

「随分詳しいんですね。エメリナ様はご自分の腹心で側近の方にし
か、わたしを教会へ預けるといふことはお伝えしていなかったとそ
う言つてたのに。ベンドールさんはエメリナ様の側近だったんです
か？」

「私目はそのような立場ではありませんでしたが、調べていけばわ
かることです」

エンナの指摘にベンドールは額に浮かんだ汗を手に持っているハ
ンカチで拭き取つた。そんなに汗が出る程熱いかここは？

益々怪しい。あの答えに窮するような締めまりのない作り笑顔とい
い。怪しすぎる。

疑心暗鬼を隠そうともせずエンナは目を据えた。すると、それを
感じ取つた途端にベンドールは当惑して必死に言い募る。

「ほ、本当に御座います！ エンナ様は正真正銘、エイブラム様の」
「それはわかりました」

エンナはベンドールの言葉を切り捨てるように突っぱねる。

そう、それはもうわかった。多分それは本当のことなのだろう。でも、やはりエンナにはピンとこない話だった。突然この国の元お姫様だったとか、どこぞの小説じゃあるまいし。

それにエンナはこの話を受け入れられないもう一つの理由がある。それは、エイブラムの娘であるということ。

正直、あの悪王とまで詠われるあのエイブラムの実の娘だなんて信じられない。信じたくない。

「そうですか、おわかりになって頂けて嬉しい限りです」

ベンドールは脂ぎった頬と額をキラリと光らせた。かなりご満悦のようだ。

「長旅でお疲れでしょうから、お話はこのくらいにして今日はもうお休み下さいませ。また明日、詳しいことをお話しさせて頂きます」

ベンドールは手を鳴らして侍女を呼ぶと、部屋まで案内しエンナを世話するように言いつける。エンナは納得できず顔を顰めていたが、視界にスラッツがちらりと入った。気になってそちらへ注目する。スラッツは相変わらず壁に寄り掛かって天井を見ていた。

一体これはどうということなの？

エンナはドレススカートの裾をぎゅつと握る。

彼にこの場で問い詰めたかった。でも、それはできなかった。

聞いたらもうそれで終わりのような気がして、怖くて彼に駆け寄ることすら足が竦んでできなかったのだ。

やがてエンナの視線に気付いたスラッツは、こちらへ目線を向けると……

口端を吊り上げて皮肉っぽく笑った。

* * *

やっとあの息苦しい拷問に使われる道具のような下着から解放され、ドレスからゆったりとしたネグリジェに着替えたエンナは、案内された一人用にしては随分広い部屋で、一人ぼつんと椅子に腰掛け考えに耽っていた。

自分の出生のこと。両親のこと。教会へ捨てられたわけ。ようやとそれがわかった。

そしてエンナの母のこと。

エメリナは決してエンナをいらなくなつて教会へ置いていったわけではなかった。寧ろ、エンナの身を案じての行動だったのだ。それがわかっただけでも、エンナは少し救われたような気がした。ずっとずっと、自分はいらない子だから捨てられたのだと思つて生きてきた。でもそれは大きな勘違いで、逆にずっとずっと守られていたのだ。

お母さんごめんなさい。

心の中で、もうこの世にはいない母に向かって謝る。

恨んで、ごめんなさい……

エンナはその時、ルージユが「最後に一目で良いから会いたかった」と言っていたことを思い出す。そうだ。会いたかったと言葉を残してくれていたではないか。エンナはそのことを失念していたことを酷く後悔し、もう一度エメリナに向かって深く謝った。

しかし、そこでわからないことがある。

「どうして迎えに来てくれなかったんだろ？」

国勢が落ち着いてきたのなら来てくれても良かったはずだ。でも彼女はそうしなかった。

やはり自分が暴君の娘だからだろうか？

それにリユーリ達のこと引つかかる。彼らは決してエンナに彼女の素性を明かそうとはしなかった。頑なだったと言ってもいいかもしれない。

話す機会がなかったとか？

いや、ないにしてもこんな大切な話を時間がなかったからといって後回しにするだろうか。普通ならそんなことはしないだろう。

では生い立ちが生い立ちなので明かしにくかったのだろうか？

でも、それもどうもしつくりこない。

考えても考えても疑問が思い浮かぶばかりだ。

「さっぱりわからないわ……」

エンナはお手上げとテーブルに肘を寄せ、両の掌に顔を預ける。窓から入る月光が頼りの暗い部屋にエンナの溜め息が虚しく霧散した。

それにしても、こんな状況にも関わらず随分と肝っ玉がすわったものである。自分でも感心してしまうくらいだ。リユーリ達とのデンジラスな冒険が肥やしになっているのかもしれない。そう思うと、ある意味感謝の念すら抱く。

いやしかし、あの屋上から飛び降りるのはどうかと思うが。

エンナは深く深く息を吐いた。

「思いの外落ち着いてるなく、吃驚。もっと慌てふためいて頭ん中ぐるぐるさせてるもんかと思ったけど」

エンナがこれからのことを憂えていると、いきなり後方から声を掛けられる。ぎよっとなって勢いよく振り返れば、そこにはスラッツが窓際の壁に寄り掛かっていた。

「流石はエイブラムの娘ってか？」

スラッツは嗤笑をエンナへ向ける。

「スラッツ、アンタ……」

思わず椅子から立ち上がってエンナは数歩後退った。

「どうやってここへ入ってきたの？」

部屋のドアからではない。彼女はずっとそちらの方面を向いて座っていたし、誰かが来たらすぐに気付く。だとすると窓から？ しかし、この部屋は四階にあるため、そう易々と侵入できる場所ではないはずだ。

「ウけるな、その反応。如何にもどうやってここに？ って顔に出てるよ」

壁に預けていた身体を起こして、スラッツは薄ら寒い笑みを浮かべながらこちらへ近付いてくる。背筋に寒気が走るような感覚がエンナを襲って、彼女は一步後ろへ下がった。

「答えは簡単。エンナ、オレとはじめて会った時のこと覚えてる？」

「ええ、とてつもなく印象的だったからよく覚えてるわ」

「なら話は早い。やったことはあの時と全く同じだよ」

話しながらスラッツはどんどん近付いてきて、とうとう二人の距離は一人分の間合いになる。

エンナはスラッツと距離を置きたかったが、今ここで後に引くのも負ける気がして嫌だったので歯を噛み締めてぐっと堪えた。

「スラッツ、これは一体どういうことなの？ アンタ、ここでリュリー達と落ち合う約束だって言ってたわよね。随分と話が違う気がしてならないんだけど」

「それはそうだ。だって、それはオレの真っ赤な嘘だから」

「嘘……？」

「そう、嘘」

スラッツはにっこりと笑った。いつもだったら人懐っこく見える表情も、今では返って薄気味悪くて怖い。

「ソードさんが裏切り者だったんじゃない。オレが裏切り者だったんだよ、エンナ」

何処までも屈託のない、笑顔。

どくんと心臓が大きく波打つ。スラッツが裏切り者……？

「何それ、どういうこと？ ソードが裏切り者じゃなくてスラッツって……」

ハッキリと告げられたせいなのか、急に足下がグラグラした。目もグルグルした。

一体、どちらのせいで身体の平衡感覚がなくなっているのかすらわからない。

どこもかしこも回ってて、床が揺らいでいる気がする。

「その言葉通りだよ。あの時ソードさんはエンナに斬り掛かるうとしたんじゃない。オレだったんだ」

ただ驚きと衝撃でエンナはスラッツから視線を逸らすどころか、身体を動かすことさえできなかった。

「まだわかんないの？ エンナって結構頭が回る方だと思ってたけど、意外とシヨックに弱いんだな」

「だってそんな……」

「なんか必死で信じてくれようとしてくれてるみたいだけども、それ、無駄だよ。オレが裏切り者ってのは事実だし、ここまでエンナを導いたのも紛れもなくオレだから。大体、ソードさんが裏切り者だって言った辺りから怪しいと思わなかったのか？」

ってあの時はそんなこと考えられなかったかとスラッツは笑う。

一瞬、足の力が抜けそうになった。胸も針で引っ搔かれているみたいに痛くなる。

しっかりしろ、わたし。

エンナは頰ほほれそうになる己を叱咤し、足に力を入れて踏ん張った。

「それじゃこっちは」

「ああ安心してよ。ウルさん達と違ってこっちはエンナを殺そうとは決してしないから」

「こっちは？ どういう意味よそれ」

訝しげに片眉を吊り上げる。スラッツはニコリと作ったような笑みを顔に貼り付けた。

「エンナには詳しくまだ話されてないけど、今王宮では大きく三つの派閥に別れてるんだ。前国王派と現国王派、そのどちらの派閥にも属さない中立派。前国王派も現国王派も、名の通りそれぞれの国王を支持している。で、ベンドールは前国王派の一人、ウルさんらは現国王派なんだ」

「そういうこと。でも、そこでどうしてわたしがこんな目に遭わされなきゃならないのよ」

「ここまで言っつてわかんない？」

馬鹿にしたようにスラッツは鼻で嘲笑う。エンナはスラッツの不快な態度にむかっつと腹が立ってキツときつく睨め付けた。しかし、彼は怯むこともなく、寧ろエンナの強気な目を面白そうに見つめ返して話を続ける。

「前国王派にとっては、エンナという存在はまさに神様から与えられた賜物。利用価値は色々ある。だから現国王派からしてみれば、アラディン国王陛下並びにその一族の驚異的な弊害にしかならないエンナは、邪魔な存在に他ならないんだよ」

そこまで聞いてエンナはやっと気付いた。いつの間にか握り締めていた掌に嫌な汗がじわつと滲む。

「まさか、前国王派はわたしを盾に何かするつもりなの？」

「ご明察。前国王派は欲深な奴らの集まりだ。だから、エンナを前国王派の傀儡にして女王にすることができれば、自分達の将来が約束されたも同然。でもこの国の王になるためにはある条件が必要なんだ。その条件を満たしていなければ、王族であっても継承権は得られない」

「条件？」

「なあエンナ、不思議に思わなかった？ どうして急に精霊が見えるようになったのか」

エンナは自分の問いとは違うもの、寧ろ問いに問いが返ってきて片眉を吊り上げる。それは一体どういう意味だろう。エンナは自分が目覚めたのは自然に目覚めたのだと思っていた。

しかし、スラッツの口ぶりからエンナが目覚めたのには実は何か裏でもあったのだろうか。

「エンナが精霊を見えるようにしたのはオレなんだ」

「スラッツが？ そんなまさか、どうやって」

覚醒させるのにそんな故意的なことが可能なのだろうか？

「オレには力の動きがわかるって話したことあったよな。オレは動きがわかる他にできることがあるんだ」

「何よ、そのできるところって」

「相手に触れることで自分の精霊力を送り込み、相手の力を強くしたり、弱めたりすること」

スラッツはニヤツと口端を上げる。ごくりとエンナは生唾を呑んだ。

「だから、相手に精霊使いの素質が備わっていれば、目覚めさせることもできるんだ」

ということはつまり。

「オレがエンナに会った時、エンナの背中を強く叩いたのを覚えてるか？ あの時、オレはエンナに自分の精霊力を注ぎ込んだ。まあ

エンナは元々それなりの精霊力を持っていたから、オレが手を加えようが加えまいがそのうち覚醒してただらうけど」

でもこの時期に覚醒する切っ掛けを作ったのは自分だとスラッツは告白する。

頭の頂点から足の付け根まで、エンナは電撃が走ったような感覚に陥った。

始めからスラッツは裏切るつもりだったのだ。それも計画的な犯行。

彼はよく自分の肩を叩いてきたりしていた。今までエンナは、人懐っこいスラッツの自然なスキンシップだと思っていたが、それもきつと違っていたのだ。スラッツは力の動きがわかるようだから、もしかしたらエンナの力の動向を観察し、その後もそうやって力を注いできていたのだろう。

そして、その行き着く先は王になるための条件。

「もしかして条件って、精霊が見えること？」

エンナの導き出した答えにスラッツは満足気に頷いた。

「覚醒した今、王族のエンナにも王位継承権が発生することになる。そうすれば前国王派は、エンナを国王にと押すことができるんだ。そして、反対する奴らと前国王派は血の流れる戦争を起こすつもりだよ。そこでアラディン国王陛下の首を取って、事が円滑に進めばエンナは晴れてこの国の女王陛下に。前国王派は地位と財産を手に入れられると同時に、この国を自分達の手で動かす力をも手に入れることができる」

「そんな……！」

あまりのことにエンナは口元を覆った。

つまりこの連中は、自分達の欲のためにエンナを人形に仕立て上げ、利用しようとしているのだ。

しかも、それにより支払われる大きな代償を全く気にも掛けていない。この国にまたあの酷い反乱を巻き起こすつもりなのか。

なんて浅はかな。

エンナは怒りに打ち震えた。

「冗談じゃないわ！」

ネグリジエの裾を翻し、足を床に踏み締めながら部屋の戸へ駆け寄る。

そんなことのために一生操られ、苦しみの中で生きていかなければならないなんて絶対に嫌……！！

しかし、ドアノブを回そうとするのだが、手だけが回ろうと押すだけでビクともしない。まさか、鍵を掛けられている？

「無駄だよエンナ。折角捕らえた獲物をそう易々とベンドールが逃がすと思うか？」

スラッツの冷たい言葉にエンナは振り向いて思い切り睨んだ。

「アンタ、アンタって男は……！！ このことを知っててわたしをここへ連れてきたの……どうしてこんなことを」

「そうだなあ、まずは金かな。協力すれば多額の報酬が貰える約束だから」

「お金って、そんなもののために」

エンナは爪が掌に食い込む程拳を握った。そんな汚いお金のために自分が売られたのかと思うと屈辱的だった。

「それはオレにとっておまけみたいなもんだけど」

「おまけ？」

「そつ、本当の目的は他にある」

口元に冷笑を浮かべスラツツは近付いてきた。

「復讐だよ」

8・月輝く夜に (2)

「復讐？」

「オレはジャパルカ族っていう一族の一人だな。東の森、フォトラの奥でオレ達はひっそりと暮らしてた。森を愛し、精霊を愛し、森と精霊の恩恵に感謝しながら静かに……」

スラッツは昔を思い出すように瞑目の後、厳しい目付きで話す。

十七年前、エンナの父親、エイブラムは軍を使ってスラッツの一族を突然襲ったのだという。

理由は、ジャパルカ族が国の驚異となるから。

ジャパルカ族の特徴は、彼らの殆どが精霊を視認できること。それがエイブラムの危険視した理由だ。

しかも、ジャパルカ族は反エイブラム派だと言われていた。確かにその通りだった。エイブラムのあまりの横暴な政治にジャパルカ族はついに見切りをつけ、今までの交流を断ち切ってしまったのだという。

そのためかエイブラムはジャパルカ族が恐ろしいと感じていた。いつかこの者達が自分に牙を向け、襲い掛かってくるかもしれない。そんな妄想に囚われて、彼はジャパルカ族が火種になる前に摘んでしまおうと考えた。

そして、十七年前の森に冬が訪れた時期、エイブラムはジャパルカ族の虐殺を決行したのである。

しかし、ジャパルカ族にしてみたらそれは身に覚えのないことだ。確かに反エイブラム派だったが彼の命を奪おうなどは微塵も考えていなかったのだ。ただ、彼らは平穩に暮らしていたかっただけ。

「なのに、エイブラムは自分の愚かな妄想でオレの父さんや母さん、

弟たち、親友、女子供も容赦なしにオレの目の前で一族の大半を殺しやがった」

スラッツはギリツと奥歯を噛み締める。

なんて残虐行為。あまりにも酷すぎる。

酷い惨劇が頭に浮かんで、エンナは思わず息を呑んだ。

しかし、彼の話は少し変なような気がした。まるでスラッツはそれを目の当たりしているかのように喋っているが、その虐殺があったのは十七年前。スラッツは見た目、十六、七歳くらいに見受けられるのに

「だからオレ達は誓った。エイブラムに必ず復讐すると」

鋭利な刃物を思わせる視線をスラッツはエンナに射た。その逸らしたくなるような鋭い目をエンナはなんとか受け止める。しかし、スラッツの威圧に気圧されて指が少し震えていた。

「エイブラムが死んだ今、それは達成されない。でもエンナ、お前がいる。アイツの血を引き継ぐお前が」

「で、でも、わたしには」

「関係ないとは言わせない。エイブラムが殺人という罪人なら、エンナは自分の素性すら知らなかったことこそが罪だ」

そんなことを言われてもエンナにはどうしようもなかった。

自分の素性なんて知る術もなかったし、知っていたとしても親子の縁を切られたも同然のエンナには父親なんて関係ないと。

「オレはずっとどう復讐しようか考えてた。もしエンナがエイブラムみたいな奴だったら、現国王派に差し出すか、オレの手で苦しませながらじっくり殺そうと。でもエンナはアイツとは違った。少し

一緒に過ごしただけでわかったよ。エンナは良い奴だったな。だからこそ、前国王派に束縛され操られながら、国民が奴らの圧政に苦しむところを何も出来ず眺めているだけってのはどんなもんかってきつとエンナにとって耐え難い程の苦しみだらうな」

スラッツは背筋に悪寒が走るような薄ら寒い笑みを向けた。

スラッツの末恐ろしい計画にエンナは全身が震えそうになる。エンナは拳を握り、足を踏ん張ることで必死に堪えた。

「でも、例え前国王派が何かしてもそう上手くいかないかもしれないじゃない」

「そうだな。確かにそう簡単にはいかないだろうけど、それが上手くいこうがいかまいが、確実にエンナの人生は狂う。困難と狂乱が待ち受けているだろうな」

スラッツは嘲笑う。これから襲うであろうエンナの重苦を想像してなのか、随分と楽しそうな響きだった。

どっちに転ぼうがエンナの人生に暗雲が立ち込めることに変わりはない。それすらも彼は見越していたのだ。

狂ってる。

異常者を見つめるような目をエンナがスラッツに向けていると、彼はピタリと笑みを止めて怨恨に滾る瞳で彼女を貫いた。

「我が恨みは深いぞ、エイブラムの娘」

ドスの利いた声で厳しくエンナを差す。

エンナはスラッツの目から逸らすことも、息をすることもできず、金縛りにあつたみたいに茫然自失となった。心の何処かで何かがガラガラと音を立てて崩れ落ちていくのがわかる。エンナは下唇を噛み締めた。

「このっ、人でなし！」

思わず口から出た言葉だった。何か言って吐き出さないとエンナ自身が狂ってしまいそうだったのだ。

「人でなし？ それを言うならお前の親父の方が人でなしじゃないか。それに比べてオレは優しいと思うね。一応こうして生かしてやってるわけだし」

「何が一応よ。一番えげつない方法で苦しめようとしている癖に……！」

これが精一杯の抵抗と自分への防衛方法だった。

それをスラッツはくくつと声を抑えながら確かになと笑う。

「でも死ぬよりはマシだろ？ それにオレは、形はどうであれお前を助けてやったんだ。その点は感謝して欲しいくらいだな」

「助けてやった？ どういうことよそれ」

スラッツは笑う。怪しく、何処までも怪しく。まるでそうエンナが聞くように謀ったような。

エンナは酷く後悔した。きつと、いや確実に彼は何か企んでいる。それもエンナを陥れるような何かがあるのだ。

「なあ、エンナ。リユーリさんとシエルさんがどういう立場にいるか知っているか？」

「知るわけないじゃない、そんなこと」

ここで無視すればいいのに、エンナはその興味深い問いかけについて返答を返してしまう。

スラッツはまた笑う。だからわかる。彼の手によってどんどん自分が泥濘に引きずり込まれ、嵌っていくのが。

「リユーリさんとシエルさんは何処の派にも所属はしていないんだ。リユーリさん達なりの考えがあつての行動なんだろうけど、無所属を貫いている。でも、無所属とはいえ結局考え方は現国王派寄りだ。エイブラムは本当酷い王様だったからな。リユーリさん達もあいつの二の舞だけは起こしたくないと考えている」

「何が、言いたいんだよ……」

もういい。聞きたくない。

そう思うのに自分の気持ちとは裏腹な言葉が口から勝手に出た。

「エンナは精霊が見えるようになった。きっとあの二人もとつくに気付いている。もしあのままあの二人のところにいたら、エンナは殺されていただろうって話」

「なっ」

そんな、あの二人が……？

エンナは蹠跟けそうになるのをドアに寄り掛かることでどうにか座り込むことだけは避けられた。

「だって、リユーリもシエルもあんなに……」

「必死に助けてくれようとしてたって？ でも事情が変われば話は違ってくる。あの二人は国への忠誠心が強いから、エンナがこの国の弊害になるとなれば剣を向けることに躊躇わない」

心臓が一度大きく波打った。その後早鐘のように拍動する。今にも自分の胸から飛び出してしまいそうだ。

絶望に打ち拉がれているエンナを見て、スラッツはただ笑った。

「可哀想にな。エンナの味方は誰もいないようなもんだもんな」

狂ったような笑いを上げながらスラッツはエンナに背を向けて歩き出す。

スラッツの冷笑が耳に痛い。

耳を塞いでしまったかった。もう何も聞きたくない。

「あ、そうそう」

スラッツは窓辺に手を掛けてエンナの方へ振り返った。

「折角だからエンナにはオレの本当の名前を教えておいてやる」

「本当の名前……？」

「そう、オレはスパラッツなんて変な名前じゃない。オレの本当の名は、シラク。シラク・シイナだ」

シラク・シイナ

変わった名だ。フェアデルフィアでもあまり聞いたことのない響き。これが民族の違いというものなのだろう。

「覚えておくといい。エイブラムの血を受け継ぐお前に復讐する者の名だ」

月の光を背中に浴びながらスラッツ、いや、シラクは冷たく宣告する。

シラクが凍るような嗤笑と共に窓から夜空の中に消えていくと、エンナは気が抜けてその場にへたり込んだ。

* * *

どのくらい経っただろう。

あれからエンナは座り込んだまま動けずにいた。ドアを背に膝を抱えてじっとシラクが去っていった窓の向こうを見つめる。

まんまと自分は騙されていた。

あの日溜まりみたいな笑顔に。

あの心地良い励ましの言葉に。

あの陽に似た温かい気遣いに。

エンナはぎゅっと服の裾を握った。

一体、どれだけ彼に助けて貰っていたことが。

エンナが困った時や苦しい時、彼はいつも気を配ってくれたり、時には背をとんと優しく押してくれていた。

ルージュと面会する前も、不安で一杯のエンナに勇気付けてくれたのは彼だった。どれ程心強かったことが。

でも実際は、彼の行動はエンナに気を遣ってくれていたわけでも、勇気付けていたわけでもない。その裏では彼の思惑があったのだ。

信じてた。

信じてたのに。

エンナは下唇を噛み締めた。

この時はじめて、エンナはスラッツだった少年のことをどれだけ信頼していたのかがわかった。

そして、リユース達のこと

『エンナがこの国の弊害になるとなれば、剣を向けることに躊躇わない』

スラッツの告げた言葉がエンナの心に突き刺さる。

エンナはリユーリ達のことを彼女が思っていた以上に信頼しきっていたのだ。

もう嫌、こんなの……

信頼していた者達に裏切られ、エンナの心はズタズタだった。もう誰を信じて良いのかわからない。

エンナは目頭が熱くなるのを感じて、泣くまいとぎゅっと目を瞑って必死に堪える。

決して泣き虫ではないはずなのに、たった数日の間にエンナはよく自分が泣いていることに気付いた。今だかつてこんなに涙を堪えたり、泣いたりしたことはなかったなのに。

じわつと胸元が熱くなる。湧き上がる感情から自分が熱を帯びているのかと一瞬勘違いしたが、そうではないようだ。

エンナは鼻を嚙りながら首に掛かる紐を手繰って、熱源と思われるものを襟から取り出した。

リベラから貰ったあの黒い鱗だ。

どうやらこれが発熱しているようで、掌に乗せるとそこを中心に熱が広がっていく。

何が原因で熱くなったのだろう。何か仕掛けがあるのかと思っただが、エンナには到底見当も付かない。それに、薄闇のせいかもしれないが、鱗の色が濃くなっているような気がした。黒だからそれ以上もそれ以下もないのは重々承知している。でも、黒の純度が増している気がするのだ。

益々不思議な飾りだ。

見ていると何故か落ち着いてくる。まるでこの鱗がエンナの哀しみも絶望も吸い取ってくれているような気がした。だが暫くそうしている、心の感覚が鈍感になって、夢心地な気分になってくる。恐怖は感じなかったが、ふわふわと世界が揺れてそれが心地良くなってきた。

「キュウ」

取り憑かれたように鱗に魅入っていると、何処かで聞いたことのある鳴き声が耳元でした。現実へと引き戻されて、そちらを見遣れば

「あれ、アンタは」

「キュルル」

ルージユの屋敷で出会ったあの花の精霊が宙に浮かんでエンナの様子を伺っていた。

「えっ？ どうしてこんなところに……まさか、ついてきちゃったの？」

「キュウウ」

出会って時と同じ、花精かせいは左右の瞳の色を変えながらエンナを目に映している。花精の移り変わる瞳には心配の色が浮かんでいるような気がした。

それに思わず微笑んでしまう。

「もしかして心配してくれてるの？」

「キュルウ」

エンナは花精にありがとうと笑んだ。あんなに荒ぶっていた激情が嘘だったかののように自然と笑うことが出来た。

エンナが笑顔を見せると花精は空中を飛び回って嬉しそうに鳴く。素直に喜んでくれる花精が可愛くて、エンナは口元を綻ばせた。

一頻り動き回ると、花の精霊はエンナの眼前に顔を近づけてじつと彼女の目を見つめてきた。

なんだろう。

不思議に思っただけでエンナは花精を見つめ返す。すると、移り変わる花精の瞳が淡く七色に輝いた。

フラン・フラワー

頭に言葉が伝わる。

驚いてエンナは頭を押さえた。

シエルのように頭に響くのではなく、直接文字が送り込まれた感覚だ。

一体何処からと言うまでもない。きっと犯人は……

「フラン・フラワー？」

脳内に浮かんだ文字を声に出して紡ぐと、花精の瞳がより一層目映く輝く。虹の光がエンナにかかった。

その時、突然瞬間的にくらっと目眩が起きる。ぐるぐると身体を回転させた後のように目が回った。身体が傾きそうになるのを手で支えることで、床に倒れることだけは逃れられたが。

何、貧血……？

しかし、貧血にしたってなんだか不自然に感じた。

「キユウ」

花精の鳴き声が耳朵の奥で木霊する。

前景が歪んで何処か違う世界と混ざるように景色が変わる錯覚を覚えた。

そして、目に映るのは断片的に流れる映像。

キラキラと光る禍々しい赤い瞳がエンナを睥睨している。
獰猛な目から何かを守るようにエンナは腕を広げていた。

危ない！

誰の叫びだっただろう。

誰かがエンナへ叫んで、違う誰かが迫り来る魔物を吹っ飛ばす。
少年の目映い金髪が風に舞った。彼は果敢にも魔物に立ちはだかつて戦っている。紫の稲妻が迸り、景色が白に支配され爆風が砂を巻き上げた。

そこへ少女がエンナに駆け寄ってくる。呆然としているエンナに彼女は言った。

大丈夫だよ

少女はエンナを安心させるように綺麗な微笑を浮かべた。

必ず守るから

顔は何故か陰っていてわからない。けれども、その少女がとても綺麗な人だったということはハッキリわかっていた。

「キュルル」

エンナは、そこで唐突に現実へ引き戻される。

「何今の」

片側だけ顔を手で覆って、エンナは首を左右に振った。

どうやら、小さい頃の記憶のようだったが……

しかし、今この時にどうして映像が流れるように思い出したのだろうか。

「って、今はそんなことより、まずはここからどうやって脱出するか考えなきゃ」

先程のことはそれからだ。

エンナは胡座をかいて腕を組む。

部屋のドアには鍵が掛けられている。脱出できるとしたら窓しかない。しかしここは四階にあつて、上も下もバルコニーなど壁から突き出たところはなく石の壁一直線だ。となると、カーテンやベッドのシーツを結んで、それを綱代わりに窓から垂らすのが脱出作戦で多く取られる方法だが、それを見越してかこの部屋の窓にはカーテンがついていなかった。ベッドのシーツだけでは四階から下まで長さが足りない。

「なんかこう布とかじゃなくて、綱の代わりになるようなものってないかしら」

「キュルウキュルル」

エンナが唸りながら考え込んでいると、いつの間にか瞳の光が収

まった花精が彼女のすぐ脇で伏せていた。頻りに彼女のポケットを気にしている。

なんだろうと疑問に思っ、あることに気付いたエンナはネグリジェのポケットから掌サイズの袋を取り出した。ルージュから貰ったあの小袋だ。それを目にした途端、花精が忙しなく動き出す。

何かこれにあるの？

そういえば、ルージュが何かあった時に役に立つと言っていたのを思い出す。

落ち着かない花精。エンナも気になってきて、袋の口を絞めている紐を解いて中を確かめてみた。中身は暗くてわからないが、何も入っていないのではと感じる程物影がない。

エンナは手の真上に袋の口を逆さにして二、三度振ってみる。その反動で袋の中から何か黒い粒が数個エンナの掌に転がり落ちた。小さいその粒を一つ摘んで顔に近付けてみる。

「種？」

花精が忙しく動いて鳴く。

どうやら花精はこれに反応していたようだ。

エンナは試しに花精にそれを差し出してみた。すると、花の精霊ははじめ黒い粒の匂いを嗅いでいたのだが、さっと目にもとまらぬ速さでエンナの手からそれを取り去った。

そしてなんと花精は、奪い取った種らしき粒をエンナがあっという間もなくコクンと丸々呑み込んでしまったのだ。

「ああ！」

呑んじゃった！

「じ、こら！ 駄目でしょ食べちゃっ」

と、叱っている間に、花精は掌に転がる種も器用に尻尾を使って全部掻っ攫う。エンナは慌てて花精を捕まえようと手を突き出した。しかし、尽くその手を華麗に避けて花精はシラクが出ていったあの開け放たれた窓に向かって飛んでいく。エンナは必死で追い掛けた。

折角、ルージュがくれたものなのに！

窓辺に手をかけると花精が彼女を待つように空中で浮いていた。

そして、エンナに見せつけるように尻尾のふさふさの毛で絡め取った数粒の種を宙へ放り投げる。種は花精の真上に落ちていき、精霊は上を向いてぱっくりと口を開けた。そこへ吸い込まれるように全ての種が花精の口の中に消えていく。花精はそれをごっくんと呑み込んだ。

8・月輝く夜に（3）

「あゝあゝあゝあゝっ！！」

エンナの無情を訴えるかのような叫びが響き渡る。

折角ルージユがくれたのに……

エンナはショック過ぎて膝をつき、額を窓の縁へ乗せた。

まさか食べてちゃうなんて。

その状態のまま唸っていると花精がまた鳴き始める。エンナは恨めしそうに顔を上げた。

しかし、その表情は一変して目を丸くする。

花精の瞳がまた七色に輝いていたのだ。花の精霊が尻尾を左右に二、三度振る。そこからキラキラと星の欠片のような何か落ちた。それは輝きを失わず、まるで雪のように地に向かって降っていく。

エンナはそれを興味深そうに目で追っていると、花精が一際甲高く鳴いた。

エンナがその声に気を取られ、花精に視線を戻した刹那、下の方から何かが鬨せめぎ合うような音が響いてくる。何だろうと訝しく思っ
て窓から顔を出し、下を見やれば沢山の蛇が凄いで壁を這って
迫り来ていた。

「なっ、ちよつとえー！？」

エンナは目を剥いて慌てて顔を引つ込めた。尻餅を着いたまま後
退ると、何匹もの蛇がついに窓辺から顔を出す。そして、奴らは暫
く蠢動うごめした後、窓の縁にへばりついて動かなくなった。

恐る恐る近付いてみると、蛇と思っていたそれはエンナの勘違い

で植物のようだった。所々に花をつけている。種類はわからないがツル植物には違いない。

「どうなってんのこれ……」

エンナは壁にへばり付いている植物を、窓辺から草の生えていない地面にかけて目を流す。

「アンタがやったの？」

エンナは理解できないであろうと思いつつも、つい花精に質問する。すると、まるで花精はエンナの言葉がわかっているかのようにあの可愛らしい鳴き声で答えた。

しかし、どうしてこのようなことを。

「もしかして、これを伝って逃げろってこと……？」

「キユウ」

そうだよ、と言わんばかりに花精は鳴く。

エンナは花精と植物を交互に見た。

花精が本当にエンナを逃がしてくれようとしてやったことなのか、それともただの悪戯の一端でたまたまなのかはよくわからない。しかし、これを使う手はないと思った。このままじっとしていたって仕方ないし、それでは現状は何も変わらない。この状況をどうにかしたければ、足掻けるところまでとことん動いて自分の力で切り開かなければ。

エンナは一応花精にお礼を言ってからツルに手をかける。

木登りは得意だ。昔は、よく木登りをして神父様に叱られていたのを思い出す。しかも、屋上から飛び降りた経験を持つ今の彼女に

怖いものはない。ツルを使って降りるなど容易いことのように感じた。

エンナはツルがすっかり壁にへばり付いているか、茎が切れない程丈夫か確認してから、梯子の要領で茎の間に足をかけて降り始める。花精は付かず離れずの距離を保ちながらエンナの側で浮遊した後をついていった。

丁度一階くらいの高さまで降りきると、エンナはえいっと手足をツルから離して宙に身体を躍らせる。ヒラリとネグリジエの裾を閃かせて華麗に着地してみせた。

今のちよつと格好良かったかも。

なんて、自画自賛をするのも束の間。

さつと視線を走らせて周囲に誰もいないかどうか確認する。一つも人影はなく、無人であることに少し安堵して、エンナは石の塀の側にある茂みまで走ってそこに身を隠した。

「問題はここからね」

そう、ここまでは良いがここからどう脱出するかが問題だ。

この小城のようなお屋敷は、四方を石の壁で覆われている。抜け穴が何処かにあるかもしれないが、探しても無駄な気がした。押し寄せるような圧迫感を感じるこの壁に欠点なんてなさそうな気がするのだ。それは緊張のあまり焦っているからそう感じるのかもしれないが、兎に角今は時間が惜しかった。

が、かと言って隙をみて門から抜け出すというのも無理な話だ。

あとは。

エンナは聳える石の壁を見上げた。

あとは、ここをよじ登って脱出するか。それが一番手っ取り早い。

しかしこれには問題がある。

まず一つは、花精がまたあの技を披露してくれるかどうか。

もう一つはこの見張りに見付からないか。これが一番の問題だった。門から死角になっているとはいえ、見回りがここへ巡回に来てよじ登る彼女の姿を目撃される危険が非常に高い。

しかし、名案が浮かぶ程の考える猶予はない上、今の彼女にはそれしか思い付かなかった。脱出作戦には、ある種の大胆さもなければと、無理矢理自分の良いとは思えない作戦に頷く。

それに誰も巡回に来ていない今しか、この作戦は実行できないのだ。

しかしだ。まず花精がまたあれをしてくれないと始まらない話でもある。

「ねえ、ここの石の塀を登って向こう側へ逃げたいんだけど、さっきのあれ、またできる？」

と、試しに聞いてみる。花精は「キュル」と一つ鳴いて、石壁へと飛んでいく。やはり、あの花の精霊はエンナの言葉が理解できているようだった。エンナは花精の後をついて石の塀の側まで近付く。花精は、クルクル回って尻尾からまたあのキラキラした光の粒を蒔いていった。そして、先程と同じように甲高く鳴く。すると、そこからツルが一齐に湧き上がって石壁の天辺まで一気に昇っていった。

「なかなかやるじゃない」

「キュルルツキュル」

エンナが褒めると花精は誇らしげに胸を張り、尻尾をピンと伸ば

した姿勢をとった。その様子を可笑しそうにエンナは忍んで笑ってから、茂みの向こう側をもう一度見渡して誰も来ていないことを確認する。

よしつと息巻いて、エンナはツルを登り始めた。石壁は多分六階分くらいはありそうだが、そのくらい登ってしまえばお茶の子さいさいだ。エンナは足場をしっかりとツルの隙間にかけてながらスイスイと登っていく。

「ちよろいちよろい」

鼻歌でもしてしまいそうな程順調によじ登っていくと、下方から人の声が聞こえた。ピタリと動きを止め、エンナは恐る恐るそちらへ視線を向ける。どうやら見回りの兵士が二人程、ここへやってきてしまったようだ。二人は部屋の開け放たれた窓にツルが不自然に伸びているのに気付いて、何か話している。

「ヤバイ……」

脱走がバレた。確かに、こんな大胆な脱走が簡単にいくわけがないとエンナ自身も思っていたことだったが、ごくりと固唾を飲み込む。

こっちに気付くな、気付くなと祈るように心中で呟いていると、二人のうち一人がこちらに目を向けた。

その兵士とエンナの目がバツチリかち合う。

兵士の男は言葉も出ないようで、視線はエンナに向けたまま傍らにいる仲間の肩を叩いて必死に訴えた。もう一人の兵士が五月蠅そうに「何だよ」と振り返る。「あれ」と指差す彼の指を目で追いながら石の壁を登るエンナにやっと気付いた。

少時、エンナと兵士二人は固まって、お互いを見つめ合い、

「だ、脱走だあああつ！！」

それだけを言うのに精一杯だったのだろう。

あとからエンナに気付いた方の兵士が叫んだ。

その声にエンナの身体が動き出す。エンナは必死になってツルで出来た綱をよじ登った。急いで石壁の頂上までくると、ツルはそこから更に下まで伸びているようだ。これは助かる。エンナはしっかりとツルを掴んだまま、塀を跨って反対側へ出た。決して下は見ないように、慎重に。見付かったことへの緊張と石壁の高さへの怖さが相俟^{あいま}つて、足が竦んで震えた。そこをなんとか叱咤して、エンナはツタを今度は降り始める。

あと地上まで一階と半位までというところで、エンナは焦りからツタで降りるのも焦れったく感じてそこから飛び降りた。着地と同時に走りだそうとしたが、それなりの高さがあったために勢いがつきすぎて走り出すのに失敗しつんのめってしまう。

「待て！！」

なんとか体勢を立て直すと、塀の天辺に兵士がいた。きつとあのツタを伝ってきたのだろう。

見上げながらヤバイと汗を流す。そこへ視界一杯に何か景色を遮った。

花精だ。

花の精霊は一際甲高く鳴く。花精の鳴き声は空気を振るわせて夜空を貫くようだ。

すると、それを合図にツタがどんどん痩せ細り、茶色く変色し始める。

急速に衰えたツタに興味を持って、瑞々しくついていた葉に触れ、軽く摘んでみた。

「枯れてる」

小気味の良い音を立てて葉は崩れ壊れた。

程なく兵士の困惑に似た悲鳴が上から振ってくる。どうやらツタが枯れてしまつて降りられなくなつてしまつたようだ。

「ご愁傷様。

塀の天辺に取り残されてしまつた兵士に哀れみの視線を送っていると、壁の向こうが騒がしくなつてきた。

速くここから離れなければ。

エンナは助けを求めて叫んでいる哀れな兵士を残して、月明かりが木の葉で遮られている森の中へと走つた。木の根に足を取られないように気をつけながら、薄暗い樹木の間を縫うように駆け抜ける。

一体、自分が何処へ向かつているかなどわからない。でも、速く離れないとという危機感に急かされるままに兎に角走つた。

走り始めて少しすると、月の光が入る開かれた所に出た。エンナは呼吸を肩で荒くしながらそこを眺め、茂みの中からそこを突つ切るうとした時、彼女は冷たい空気を呑み込んだ。

向こうの背の高い木々の間に、何か黒い塊がいた。二つの禍々しい紅の光がエンナを見ている。

魔物……！

妖しい光を宿しながら、魔物は月光の下にその姿を現した。

犬よりも身体は大きく、体格がガツシリとしていて、毛並みは灰色より黒寄りの色をしていた。

狼の魔物だ。

それも姿を見せた一頭だけと思つたら、案の定というかそうではなかつた。赤光の数が増え、二つだったのが十、いや十二にはなつ

た。

魔狼は鼻頭を中心に皺を寄せ、犬歯を覗かせながら唸っている。目を逸らすこともできず、まして後ろへ振り返って逃げ出すこともできず、エンナは相手を睨み付けた。ここでエンナが顔を向けてしまつたら、それこそ命取りだ。奴らは確実に襲い掛かってくるだろう。

エンナは魔狼へ視線を送りながら、ゆっくりと後ろへ下がった。しかし、エンナの様子を伺いながら魔狼もジリジリと躍り寄ってきているので、それ程距離は縮まらない。いや、寧ろ縮んでいる気がした。しかも、他の仲間は少しずつ左右から囲うように移動し出している。

どうしよう……こんな時どうしたらいいのよ。

拳を握る掌に冷や汗が滲んでエンナは睨みを利かせながら後退ると、花精がエンナを守るように前へ出て魔物に威嚇する。

しかし、花精の威嚇はあまり効果はないようだった。魔物は花精の姿が見えているのか見えていないのか、出していた前肢を止めたがそれも一瞬のことであつたこちらへ向かつてくる。

「アンタ……」

エンナが花精に気を取られたその瞬間、魔物達が一斉に駆け出して襲い掛かる。

エンナと睨み合っていたあの魔狼が花精も巻き込んで彼女達に覆い被さるように跳び上がった。月が隠れて視界一杯に魔物の身体が広がる。

もう駄目だ

「<茨槍シバヤ!!!>」

間髪入れず空を跳ぶ魔物の身体が何かに貫かれた。赤が飛び散ってエンナの頬を掠める。魔物が突き出した茨の大輪のようにエンナを影で覆った。

「貴女、無事ですわね!?!」

エンナが急所をやられ絶命している魔狼を呆然と眺めていると、横からローズが飛び出してきた。

「ローズ」

一体どうやってここを？

ローズは庇うように彼女の背後にエンナを押しつけた。

「全く、エンナも良い度胸してるよ、脱走してくるなんて。手間が省けたとはいえ、ヒンがいなかったら探し出すのは難しかっただろうね」

いつの間にかリューリがエンナ達を背にして立っていた。手にはあの揺らめく炎のような刀身の剣が握られている。リューリはさつと目を走らせて、彼を警戒して足を止める魔狼達を確認した。

「数は五か。ローズ、エンナを頼んだよ」

背中越しにリューリが言うと、ローズははいと頷いた。

「さて、こっちも悠長にはいらんないから、さっさと終わらせ

て貰おう。〈火焰宿〉」

リユーリが剣を一振りすると、細身の刀身がまるでそれ自身が炎であるかの如く赤く輝いた。

魔物達は牙を剥いてリユーリを威嚇している。それでもリユーリは怯まない。自分に敵意を向ける魔狼を面白そうに構えている。挑発的ともいえる態度に魔狼達の標的は完全にリユーリへ移ったようだ。魔狼達の気がエンナの時よりも数倍殺気立つ。

しかし、魔狼達はすぐにリユーリに襲い掛かろうとはしなかった。人よりも五感が働く彼らは、リユーリが徒者ではないと察知しているようだ。

リユーリの様子を伺うようにうろつろと逡巡して、一斉に飛び出してきた。リユーリはそれをじっと待って迎え撃つ。

手始めに左右から来た魔狼にリユーリは剣を走らせた。赤い軌跡を残しながら薙ぎ払うように二体に深い傷を負わせた後、下から狙ってきた魔狼にリユーリは剣で牙を受け止める。

「〈我が炎熱に藻掻き苦しめ 炎魂滅波〉」
えんめつ

そこをリユーリは間髪入れず精霊術を発動した。リユーリの剣が一際赤々と光ると、魔狼は目を剥いて刀身を放し、身体の中の異物を追い払うように咳き込んでいる。そのうち耐えられなくなったのだらう魔狼は、その場に身体を擦り付けながらのたうち回って、事切れた。

魔狼の身に何が起こったのか？

ローズに守られながらエンナは穴が空く程横たわる遺骸を見る。肉が焼ける匂いを鼻腔に感じた。

もしかして、焼け死んだの？

リユーリは絶命した一頭に目もくれず、遠距離から魔術を発動しようとして口内に魔力を集めている魔狼に向かって走り出す。それを阻もうとリユーリの前に負傷したあの二頭と無傷の魔狼が前と後ろから襲い掛かってきた。リユーリは紙一重で背中からきた魔狼の爪を躲すと、その後肢を骨ごと切断する。あんな体格の良い魔狼を骨まで断ち切ってしまうなんて、男にしては華奢なリユーリの身体は一体全体どうなっているのだ。

エンナが絶句している間にも、リユーリは休むことなく動く。今度は同時にではなく時間差で跳びかかってきた魔狼達に彼は余裕で躲しながら、もう一撃炎の刃を喰らわせた。

「<延火業>」
えんひのこつ

更にリユーリの精霊術が炸裂する。魔狼達は斬り付けられたところから炎が上がり燃えた。茫々と音をさせながら魔狼の身体と空気を焼いていく。狼の魔物達が地に着く頃には消し炭と化していた。

「リユーリ様っ……！！」

ローズの切羽詰まった呼びかけにエンナはハツとなる。リユーリのずば抜けた身体能力に呆気にとられていたが、まだ魔狼は倒しきってはいない。

魔術を使おうとしているあの魔物だ。

「わかってる」

リユーリが他の魔狼と戦闘している間に着々と完成形に近付かせていたようだった。

「ここではなるべく術を使いたくないんだけど、仕方ない」

急いで近付いても間に合わないと判断したのだろう。リユーリは即座に手を翳し、精霊術を展開する。

「<炎の粒子をかの者に集わせ 猛る狂う灼熱の地獄を見せよ>」

リユーリの声に応えるように数十個の赤い光の粒が魔狼に集まりだした。まるで、赤い蛍のように漂い、魔狼の中へ吸い込まれるように消えていく。

「<炎魂滅衝>」

終止符の言霊をリユーリが発すると、あと一息というところで魔狼の魔術が一瞬にして消え去った。

そして、苦しみながら死んでいった魔狼と同じく、涎をダラダラと流し泡を吹きながら暴れ出した。先程の魔狼と違うのは、こちらは体毛に篝火のような小さな火が幾つも点いていたことだ。魔狼は火の粉を撒き散らしながらのたうって、自分に迫る死に足掻くように足をひくつかせて、息を引き取った。

リユーリは、静かにそれを見届け、剣を一度振って赤を纏う刀身を元の状態に戻してから鞘に収める。剣がカチリと鞘の中へきつちり収まった頃には、魔狼の体毛や芝生に引火した篝火はいつの間にか消えていた。

「さてと」

一息ついてからリユーリはこちらに振り返った。思わずびくりと身体を震わせて後退る。

そうだ、助けて貰ったとはいえ、リユーリ達も……

シラクの言葉が頭の中を過ぎる。

『エンナは殺されていただろう』

エンナは顔を強ばらせた。

彼女の不審な様子に気付いたローズが眉を寄せた。

「貴女？」

「こないで！！」

リユーリはピタリと動きを止め、ローズはエンナの言葉に驚いている。リユーリ達を睨み上げながらエンナは肩で息をした。

今となつては彼らも信用できない。今まさに、自分を殺害しようと考えているかもしれないのだ。

「貴女、一体どうしたと」

「わたし本当馬鹿だわ。アンタ達のこと、いつの間にか信じて、信じ切つて、頼つてた……」

言つてて目頭が熱くなつてきた。これは怒りからきているものなのか、悔しさからきているものなのか自分自身でもわからない。それでもリユーリに泣き姿なんて見られたくなくて、エンナは彼らを睥睨することで抑えた。

エンナの彼らを拒絶する態度にリユーリは「ふむ」と顎に指を添える。

「僕達のことについて何か言われたみたいだね」

「リユーリ様、そんな落ち着いている場合ですか」

冷静に分析するリユーリにローズは呆れ返っている。リユーリはそんな彼女に肩を竦めてみせた。

「兎に角、今時間が惜しい。エンナ」

「だからこないでって言ってるでしょ！！」

リユーリが近付こうとするとエンナは声を張り上げ、鋭い視線をリユーリに向けたまま一歩後ろへ下がった。リユーリはそれが気に食わなかったよう眉根を寄せる。

そこへ花精が割って入ってきて、エンナを守るように立ちはだかった。花精は耳と尻尾をピンと立たせ、まるで猫が威嚇しているみたいに毛を逆立たせるとシャーッと鳴く。

ローズが驚いて「まあっ」と口元を手で覆った。

「あの花精ではありませんか！ どうしてこのようなところに」

「エンナのが気に入ってるからじゃない。そんなことよりも」

リユーリはスツと冷たいとも受け取れる目付きで花精を見据え、何事か喋り出した。

しかし、エンナには何を言っているのかさっぱりわからない。エンナ達の普段使っている言葉とは全然違う言語で話しているらしいが、一体何語？ と言いたくなる程、一欠片も理解できなかった。

が、どうやら花精やローズには通じているらしい。花精の勢いは徐々に静まってきたが、耳と尻尾を下げて首を窄めてしまっている。リユーリに対して花精は怯えているように見えた。

「スタナダネドラ」

リユーリは最後に語尾を上げて花精に冷やかな視線を送ると、花精はとうとう彼の迫力に負けてしまったようだ。「キュウウ」と

情けなくも可愛く鳴きながらエンナの背後に隠れてしまう。

一体何を言われたんだろうか。リユーリの言語が理解できているらしいローズが「リユーリ様っ」と咎めるように彼の名を呼んだことから、相当この花精を怖がらせるようなことを言ったのだろうと推測はできるが。

「あまり悠長にしている時間はない。頼むからエンナも僕らの手を煩わせないでくれないかな」

それは高圧的で有無も言わせない程の圧力。顔は愛らしくも見える笑みを浮かべているにも関わらず、この迫力はなんなのだろう。エンナは身を固くさせた。

もはやこれは、頼みではなく命令と大差ない。いつものリユーリであれば、こんな上から押さえ付けるような態度にエンナは反発していただろうが、そういう気にすら起こらない気迫があった。

リユーリは歩き出す。エンナの横を通り過ぎ際に彼は目線を流した。ついてこい、ということなのだろう。こうなるとエンナには逆らうことなどできるはずもない。

もしかしたら、この後自分は殺されてしまうのかもしれない。

そう思うと怖くて心臓が早鐘を打つが、身体が震える程ではなかった。まだ、心の何処かで彼らを信じているのだ。本当に、自分は阿呆者だと思う。

後ろでローズが心配の色を乗せて声をかけてきた。

その後押しされるようにエンナは唇を引き結んで覚悟を決める。

兎に角、今はリユーリの後をついていく他ない。

エンナは緊張で身体が揺らがないよう地にしっかり足を踏み締め

て歩き出した。

馬に乗せられ疾走すること数時間。

敵や魔物に遭遇することなく、ヒンの案内で東の空が明るくなってきた頃にエンナ達は湖が広がる場所にいた。湖から立ち上る水蒸気が湖面や地を這うように乳白色の膜を張っている。どうやら、ここでシエルと落ち合うつもりらしいのだが……

エンナはぶるつと身を震わせた。

朝の水辺は肌寒い。ローズが気を利かせて彼女のコートを借りているとはいえ、寒さを禁じ得なかった。

来るなら早く来い。

念しながら自分の身体を擦って寒さに耐える。

「来たみたいだね」

エンナの願いが叶ったのか、リユーリが顔を向けている方へ注意深く耳を澄ませてみる。確かに、微かだが蹄の音が聞こえた。

「エンナは無事か！」

茂みから一頭の馬が飛び出してきた、それに跨っていた彼の第一声がそれだった。

シエルだ。

彼は乗っていた馬が止まらぬうちに飛び降りてこちらに駆け寄っ

てくる。それも、あの無愛想な彼にしては随分と慌てた様子で、だ。シエルはエンナの無事な姿を目にすると、ほっと安心したようだった。

「良かった。何処も怪我をしていないようだな」

一瞬、シエルの表情が和らいで、ほんの少しだけ微笑んだ気がした。エンナはそのことに驚く。彼はあまり感情が表に出ないタイプかと思っただが、そういうわけでもないようだ。

「リユーリとローズは」

「僕達をご覧の通り」

リユーリは肘を曲げ、手を少し挙げてみせる。

二人も大丈夫そうだとわかると、はじめは先程と同じく安堵の息をふっと溢したシエルだったが、途端に表情が険しくなった。

「リユーリ」

「言いたいことはわかるよ。別にエンナをどうこうするつもりはなかったんだけど、結果こうなった以上仕方ない。ソードも自分の失態を挽回しようと罠を買って出してくれたんだ」

二人が話す最中、エンナは呆つと物思いに耽った。

早く来いとは思っただが、シエルがいるということとは自分の命が残り僅かということを示すのと同じことなのだ。逃げようにもこの面子からは到底逃げ切れるとは思えない。

意識の遠いところから考えているせいか、リユーリとシエルの会話がばやけて聞こえる。

また、首にかかるペンダントが……熱い。

「う、これは……！」

ローズの驚きの声が量かされた界を切り裂くように突っ切って、エンナの耳に届く。意識が引き戻されたエンナははっとなって、ローズの方を振り向いた。彼女は野放しになっているシエルの馬を連れてこようともしたのか、シエルの馬の近くにいた。だが、ローズの手には薔薇の鞭が握られており、厳しく眉尻を上げて馬を警戒している。

「シエル様！ この馬は魔物ではありませんか！？」

エンナが豆鉄砲でも食ったような顔をしていると、シエルは何かを思い出したかのように「ああ」と呟いた。

「道中魔馬の群れに出会してな。普通の馬では間に合わないから、群れの中で孤立していたコイツを捕まえて乗ってきたんだ」

と、シエルは事も無げに言っただけだが、とんでもない話だ。

確かに、魔馬はとても役に立つ魔物だ。魔馬は通常の馬より夜目も利けば、魔術を使っているのか力もあるし、足も速い上持久力にも優れている。このタイミングで手に入るのは非常に運が良い。

しかし、草食動物であるとはいえ、魔物である以上危険なことに変わりない。まだ肉食の魔物よりは獰猛ではないにしろ、草食獣であつても凶猛だ。易々と人に懐くなどない。

だから、人にとってかなり便利な逸材になるであろうはずの魔馬が、家畜として多く出回することは決してなかった。足も速い上魔術を使うため捕らえにくいというのもあるが、その辺りは魔犬と同じである。

それをこの人はあつさりと……

「ローズ、警戒しなくてもコイツは大丈夫だ」

シエルが「おいで」と手を差し出すと、魔馬は導かれるように近付いてそつと彼の掌に鼻先を寄せる。それを満足そうにシエルは魔馬の鼻筋を撫でてやった。その光景はまるで、劇の一場面をみているかのようだ。

これには皆が目を丸くして、リユーリは感慨深そうに顎を撫でた。

「シエルって本当動物にも好かれるよね。いつそ騎士じゃなくて獣使いにでも転職してみたら？」

「冗談はよせ」

「さっすがシエル様ですわ〜！ 凶暴な魔物をこのように手懐けてしまっなんて。シエル様の何者も慈しむお心が、凶暴な魔物さえも虜にしてしまったのですわ！」

ローズは頬に手を添えて黄色い声をシエルに送っている。彼女の周りだけ、ハートや花が乱舞していそうな程の勢いだ。

そっだ。この子はこういう子だった。

彼女のミーハーっぷりを思い出して、エンナは思わず乾いた笑いを溢した。

ローズの賛称に笑いを噛み殺しながら、リユーリは「さて」と話を区切る。

「面子は揃った。そろそろ本題に入るとしよう。エンナ、奴らになんて言われたのか教えて貰える？」

リユーリの言葉を合図に皆の注意がエンナに集まる。
エンナはいきなり注目されて息を呑んだ。

「ア、アンタ達に話すことなんて何も無いわよっ」
「……エンナ？」

リユーリの笑顔の圧力。

エンナは「うっ」と言葉を詰まらせて、視線を泳がせた。

そうやって無言を守っていると、更なる重圧がのし掛かる。今リユーリと目を合わせたら、瞬殺されるような気さえた。いや、目が合わなくても、このまま黙りこくっていたら同じ事だ。

結局、リユーリの放つ異様な空気に負けて、エンナはぼそぼそと喋り始めた。

実は自分がエイブラムの娘であり、王女なのだということ。

精霊が見えるようになったこと。それを誘発したのが裏切り者のスラツツ……シラクだったこと。

覚醒したことで王位継承権が発生してしまったこと。

それらを話し終わると、リユーリは「ふむ」と顎に手を添えた。

「前国王派に連れて行かれたから、自分の正体は教えられているとは思ってたけど、はてさて、これで選べる選択肢も本格的に限られてしまったわけだ」

「選択肢？」

「そう、エンナはもう何も知らないただの女の子ではなくなってしまったからね」

リユーリはやれやれと首を振った。

「事実を知っているのと知っていないのでは、周りの対応に大きな差が出る。エンナが何も知らないままだったら、僕達も事を進めやすかったし、前国王派は別にしても現国王派は身動きが取りにくい。」

あくまでエンナはフィアデルフィアの“国民”であり国が守る対象だから、数多くの騎士がいる現国王派は下手に大きく出ることができないからね。本来、国の守護者たる騎士が守らなければならぬ国民をその手にかけるなど本末転倒。絶対に他に知られてはならない。そうになると、必然的に動き方が制限される」

「なるほど、ね。だから現国王派のあのウルとかいう人達は、人が多く集まるようなところでは襲わず、森の中で始末しようとしたわけ」

その通りとリユーリは満足そうに笑った。

「でも、自分が元々この国の王女だったということを知った今、エンナのことをただの“国民”として見過ごすには、あまりにも危険すぎる。このまま計画通りに国外逃亡したところで、何かしらの手段で追ってくるだろうね」

「それなら、わたしが知ってるってことを隠しておけば良いんじゃないの？」

「いや、それは無駄だな」

と、エンナの意見を否定したのはシエルだった。

「現国王派も前国王派に間者を潜ませているはずだ。エンナが前国王派に捕まった時点で、その話はあちらに伝わっているだろう。となれば、既にエンナが自分の正体を知っていると考えた方が良く。欲に塗れた貴族が多い前国王派は、エンナがこの国の女王として君臨するのが目的なのだから、自分が王族だと伝えるのは当たり前だ」

「からな」

シエルの最後の言葉に、エンナは媚びへつらうベンドールのことを思い返した。あんなのが他にもいるのかと思うと吐き気がする。

エンナが不快感を顔中露わにしていると、リユーリは肩を竦めた。

「事を一番厄介にさせているのは、力が覚醒してしまったことだね。王位継承権を持つエンナを双方共にあらゆる手を尽くして必死で追ってくるだろうから、流石の僕らでも最後まで守り切るのは難しい」「守る?」

エンナはリユーリの言葉にはっと失笑した。

この期に及んで、まだそんな戯れ言を言えるのか。

「……やっぱり、あいつらに何か言われたんだね。一体何を言われたのか教えて貰えるかな」

なんて白々しい。本当はわかっている癖に、自分の口から言わせようとするなんて。

不愉快だ。

不快すぎて堪らない。

「別に、あの時は魔物と遭遇して気が動転しただけで」

「エンナ?」

リユーリの満面の笑顔が怖いです、神父様。

でも、確かにここで話を逸らそうにも、どのみち先は見えている。だったら、ここはハッキリと言ってやって、罵声なりなんなり思う存分言いたいことを吐き出してから死んでいって方がお得だ。

エンナはキツとリユーリ達のことを睨み付けた。

「わたしは今の王家にとって危険な存在だから、アンタ達が掌ひっくり返して殺すだろうって教えて貰ったのよ」

半分投げやりになりながらも早口に捲し立てると、エンナはふんと鼻息荒くそっぽを向く。リユーリは目を瞬かせた。

「僕達がエンナを殺す、だって？」

ぷつと吹き出した後、なんと彼は声を上げて笑い始めた。

「なぐんだ、そういうことか。何かと思えば」

くくつと可笑しそうに笑うリユーリ。

エンナはそれが不愉快で眉頭に皺を寄せた。

これは真面目な話だ。それをこんな風に笑い飛ばされるなんて。もしかして馬鹿にされているのか？

シエルはそれを見かねて、窘めるようにリユーリの名を呼んだ。

「ごめんごめん。だって笑うしかないじゃないか。なんとなく予想していたとはいえさ」

目に涙が溜まる程一頻り笑い終えたリユーリは、濡れた目尻拭う。何、違つても言いたいの？

エンナは片眉を吊り上げ、口を曲げた。

「勘違いしているみたいだけど、別にエンナを殺そうだなんて微塵も思っちゃんないよ」

それを聞いて、エンナはなんとなくローズの方に視線を向ける。すると瞼をぱちくりしている彼女とぱちり目が合った。

エンナに精霊使いとしての素質が覚醒した時、彼女はリユーリとシエルには絶対に悟られるなと忠告してきた。だから、彼女も二人がエンナを殺すかもしれない、ということを知っていたからだと思っただが、どうやらその通りらしい。

ローズは戸惑いがちにリユーリへ視線を戻した。

「リユーリ様、あの、それはどういう……？」

彼女の反応も予測していたようで、リユーリはやっぱりかと言わんばかりにローズを見ていた。

「僕達がまさかエンナを殺すはずがないだろう？」

「そうは思ってはいましたが、しかし……」

「多分、僕とシエルの会話を何処かで聞いてそんな風に思ったのかもしれないけど、命に関わるようなことじゃないよ。ただ、ある意味そう言っても過言ではないから、そう表現したまでのこと。同じ精霊使いであり精霊騎士のローズなら、ここまで言えばどういう意味だったのか、もうわかるだろう？」

ローズはあつと口元を押さえた。どうやら言葉の裏に隠された意味がわかったようだ。

「リユーリ様、シエル様、申し訳ありません。わたくしつたらとんでもない思い違いを……」

「それは仕方ないだろう。俺達も勘違いさせるような言い回しをしていたんだ。そんな風に思われて当然だ」

すまなかつたと寧ろ謝るシエルにローズは慌てた。

成る程、ローズの“気が利く方”という賞賛には賛成できないが、シエルが案外といい人なのかもしれない。というのは、ようやくと理解できそうな気がした。

が、しかしだ。

それはいいとして、ローズが“言葉の裏”をわかってても、エンナにはそんな説明で通用するはずがない。彼らのことをよく知らないエンナに裏側の真意なんて察することなどできるわけもなく、首を捻るばかりだ。

「で、どういうことなの？ “ある意味そう言っても過言ではない” ってことは、結局のところ」

「エンナ、これから話すことをよく聞いて」

リユーリはエンナの言葉をいつになく彼の真剣な眼差しに、エンナ思わず居住まいを正してしまった。

「予定通り国外逃亡を遂げたところで先は見えているし、かといって前国王派に靡けば一時の命は保証されるけど、今よりも困難がエンナを待ち受けているだけ。両者の手を退け、生き延びるための方法は一つしかない」

「方法？」

ちらりとリユーリとシエルが互いに視線を交わした。告げるのを躊躇ってでもいるようで二人は無言でいる。

暫くそうしていると、覚悟を決めたのかシエルがエンナの方へ顔を向けてきた。そして、静かに彼独特の声のない言葉で告げる。

「エンナが精霊騎士になればいい」

「……は？」

エンナの目が点になった。
まるでその時だけ時間が止まったような錯覚を覚える。
わたしが、何になればいいって？

「精霊騎士？」

「そうだ」

「誰が？」

「エンナが」

数秒の沈黙が降りてから、エンナは驚愕して今までにないくらい顔の形を崩した。

「ちよっ、はああ！？ 精霊騎士って、何がどうしたらそうなるのよ！」

精霊騎士といたら、あの一流の騎士達のことだ。しかも、その階級の人達が目の前にいる。

「王位継承への条件が精霊の視覚認識なら、権利を放棄するためにはどうしたら良いと思う？」

二人の会話が繋がらず、エンナは首を捻った。一体、シエルは何が言いたいのだろう。

「精霊と契約し、精霊使いになるんだ」

「精霊使いに？」

エンナが反芻するとシエルは頷いた。

「でも、それだけじゃ権利を放棄するには弱い。歴代の王の中には

精霊使いだつた王がいた事例があるからな。完全に放棄するためには、精霊使いとなって精霊騎士になるしかない」

あまりにも突拍子もないことでエンナは言葉を失った。

ただの孤児だつた自分が、元王女から今度は精霊騎士。色んなものを飛び越えすぎて展開についていけない。

「いや、いやいやいや、精霊騎士だなんて……一般庶民のわたしがそんな大層なお役目に就くなんて無理に決まってるじゃない」
「……良かった」

心底困って首を横に振っていると、シエルの少し安堵したような声が伝わってきた。

何がどう良かったのか。

ムツとなってエンナは眉頭に皺を寄せた。

「ちょっと、それどういう意味よ？」

「ああ、すまない。別にエンナを馬鹿にして言つたんじゃないんだ。精霊騎士、精霊使いになるには、相当な覚悟が必要だからな。もしここでエンナが“はい、じゃあやります”と軽く引き受けたらどうしようかと……」

「あのね、精霊騎士つつつたら国の一流騎士で、国中の乙女達の憧れなのよ？ 軽はずみに首を縦に振るわけじゃないじゃない！」

「エンナ、シエルが言いたいのはそういうことじゃないよ」

じゃあ、何が言いたいのだ。

エンナは横から口を挟んできたリューリに目を窄めた。

「精霊使いになるといふのがどういふことなのか、エンナは知っているかい？」

「そりゃあ……よくは知らないけど」
「精霊使いになるってことは、只の“人”という存在ではなくなるんだ」

人ではなくなる？

「それってどういう……」

「エンナ、僕やシエルが何歳にみえる？」

「は？」

「何歳にみえる？」

いきなりリユーリは何を聞いてくるのだ。

話の筋が繋がらず、エンナは片眉を上げたが、取り敢えず聞かれたことに答えておくことにした。

「リユーリは十六、七くらいで、シエルはまあ二十歳前後ってところじゃないの？」

「違うよ」

「違うの？」

「全然ね」

リユーリはにっこり笑うと言った。

「僕達、こつみえてもつ齡三十四なんだ」

「へえ、齡三十……」

リユーリの言葉を反芻して、はたっとエンナは動きを一時停止させた。

今、とんでもない数字を反復しようとした気がする。

リユーリ達の歳がもう三十代って、そんなまさかまさか……

エンナは、ふっと口元に笑みを浮かべた。

「何、その子供騙しな大嘘。悪いけどそんな見え見えな嘘に引っかかる程、私は馬鹿じゃ」

「本当だ。嘘じゃない」

シエルがエンナの否定を更に否定した。

エンナは訝しそうにシエルを見つめる。シエルの表情は変わらな
いが、翡翠色の瞳は真剣に感じた。まあ、リユーリと違って彼はま
だ裏表なくて信頼できる……と思う。

ということは。

エンナに衝撃が走った。

9・精霊騎士（1）（後書き）

【作者からのお知らせ】

いつもお世話になっております。執筆者の水海翠です。

大変お待たせしております。

すみません……こちらにはサイトの小説を置かせて頂いている状態ですので

サイトの方に続きが溜まり次第、こちらにまた続きを載せさせて頂こうかと思えます。

長らくお待たせしてしまうかもしれませんが、気長にお待ち頂けると嬉しいです。

もし、どうしても続きが気になるという方がいらっしやいましたら、サイトの方もご利用頂ければと思います。

ご迷惑をお掛け致しますが、何卒宜しくお願い致します。

なお、サイトへのリンクは目次ページに繋げさせて頂こうかと思えます。

9・精霊騎士（2）

「ええ！ 本当に三十四歳!？」

「だからそう言ってるじゃないか」

驚きのあまり、失礼にも指をさしてくるエンナにリユーリは可笑しそうにしている。

「だって、どう見たって十代そこらにしか……」

「精霊と契約を交わした人間、精霊使いは老いるということから解放され、不老長寿の身になるんだよ」

「長寿？ それって一般の人よりもってこと？」

「うん、どれくらい生きられるかはまだ不明なだけだね。取り敢えず、実証されている最高年齢は三百歳かな」

「三百歳！」

そんな不老や長寿などと、かなりありえない話だ。

人は他の動植物と同じ生き物。生き物は時の流れで老いては朽ちていくものであり、それが定めだ。生きている限り、生きているからこそ、時間は生きている者達の身体に刻まれていき、やがては果てていく。

「そ、そんなことがありえるの？」

「この世に“ありえない”ということの方がありえないと僕は思うよ。それにありえない以前に実在しているからね」

ぐつとエンナは言葉を詰まらせた。

しかし、もし二人が真に三十四歳なのだとしたら……

エンナの疑心に満ちた視線は自然とローズへ向く。

それに気付いたローズが「まあ！」と声を上げた。

「失礼ですわね。わたくしはこう見えてまだピッチピチの二十歳ですわ！」

機嫌を損ねたローズは、腕を組んでふんつとそっぽを向いてしまった。

でも二十歳なんだ……

シヨックだ。大分シヨックだ。ローズのピッチピチという死語に反応ができなかった程度には、二十歳という事実の方が衝撃だった。同じ年くらいだろうと思っていたローズまでも、エンナより五歳も年上だったのだから。

二人のやり取りを見ていたリユーリがくすくすと笑う。

「瞳のこともそうだけど、精霊使いが化け物呼ばわりされる最大の理由は不老長寿ってところと魔法が使えるってところだね。明らかに普通の人とは逸脱した存在だから」

笑みを浮かべたまま言うリユーリ。

なんだかその言葉は、エンナには哀しく思えた。

だからって、彼ら精霊使いを化け物と偏見で呼んで良い理由にはならない。

「精霊使いだろうが何だろうが、人は人だわ。同じ人であることに変わりないじゃない」

彼らは一瞬驚いたように目を見開いた。

いくら普通の人と違うからって、それがなんだとエンナは思う。

精霊使いもそうじゃない人も、同じ血が通い、心を持った“人”であることになんら変わりはない。

それはきつぱりと断言する。
するとふつと皆の表情が和らいだ。

「皆がエンナのように考えてくれていたら、嬉しいんだけどね」

さて話を続けようと、リユーリは気を取り直すかのようにニッコリと笑った。

「実はね、人と精霊が契約を交わす時、人は身体中に痛みを伴うんだ。痛み方に個人差はあるけど、酷い人はそれで一、二週間は寝込む」

「えっ、そうなの？」

「うん。精霊使いになると瞳の色が変わったり、不老になったりと、色々身体の構造が変わるわけだからね。それは当然の代償だよ」

確かに、そう言われればそうなのだが、しかし少し不安になってきた。

そんな長い期間寝込んでしまう程の痛みとは、どれだけの痛さなのだろう。大きな病気も怪我もしたことのないエンナには、想像することすらできない。

「あの、リユーリは契約を交わした時はどうだったの？」

エンナは恐る恐るリユーリに問うてみた。参考にはなるはず。

「僕かい？ そうだなあ、僕は軽い方だったと思うよ。高熱が出たり、激しい耳鳴りに襲われたり、節々が痛くて起き上がれなかったけど、四日くらい経ったらなんとか起きられたし」

さらりとリユーリは答えた。

それを聞いてエンナは益々不安になってくる。リユーリでさえそんな風になってしまふのだから、身体にかかる負荷は相当なのだ。

「まあでも、契約に際しての痛みなんてのはそんな大した問題じゃない」

いや、問題すぎるでしょ。

エンナが目を窄めていると、リユーリは肩を竦めた。

「精霊使いになれば精霊術が扱えるようになるし、一般の人より身体能力は上がる上に年をとらなくなる。病気にだって強くなる。見ようによっては、契約時の痛みさえ乗り越えられれば良いことだらけさ。でもね、実際はそんな良いことばかりでもないんだよ」

エンナは首を傾げた。

一体身体への痛みの他に、何が問題だというのだろう。

「シエルがどうしても喋れないのか、わかる？」

エンナはシエルの方へ視線をやった。シエルは目を静かに閉じている。もしかして……

「もう察してると思うけど、身体の一部が機能しなくなることがあるんだ。シエルやローズみたいに」

「えっ、ローズもなの？」

「ええ……わたくしは左の小指が動きませんの」

ローズは右手で左手を庇うようにさすった。それは気付かなかつた。

「と言っても、それは生活に支障のない範囲でだからまだ良いんだけど」

「いや、全然良くないでしょ。シエルなんか支障出まくりじゃないの」

それをそうでもないと言ったのはシエル本人だった。

「別に目が盲目なわけでも、耳が聞こえないわけでもない。自分の意志を伝えるくらい幾らでも方法はあるからな」

「そりゃそうかもしれないけど……」

しかし、喋れないということだって大変なことだ。実際、シエルとこうして会話が出来なかった時、エンナは彼への対応に困っていたものだ。

「それにこれは場合によりけりなんだ。こういう風になるのは元々健康だった者が多い。逆に何か身体に障害を持っている者は、精霊使いになることで治ったりするしな」

「へえ……」

裏を返せば、エンナも精霊と契約したら何かあるかもしれない、ということだ。

「でも、まだこれは良い。どうにかなることだからな。もっと深刻に考えるべきなのは……」

シエルはそこで言葉を止める。他に何かあるのというのだろう。身体に障害が出る可能性がある他に。

「子供が出来にくくなるんだ」

シエルは少し言い辛そうに言葉を続けた。「えっ」とエンナは溢す。

「子供が……？」

シエルもリユーリも、そしてローズも皆ゆっくり頷いた。

「精霊使いになると、子供が出来にくい身体になるのさ。出来る人もいるけどね。でも、明らかに普通の人達よりは出来ないし、出来たとしても身体が弱い子が生まれることが多いんだ」

リユーリの話に愕然となる。確かにそれは深刻な問題だ。

やはり皆子供は欲しいと思うものだ。エンナだって例外ではなく、将来的には沢山の子供が欲しいと思っている。そして、質素でも可愛い子供達に囲まれた幸せな家庭を……

「精霊使いになるってことがどういうことなのか、これで少し分かって貰えたかな」

エンナはリユーリの問いに只頷いた。シエルやリユーリが何を言わんとしているのか、ようやくとわかった。

精霊使いになるのは、良いこともあるが大変なリスクも伴うということが。

「それでもわたしが助かる道は……」

「精霊使いでもある精霊騎士になる他ない」

シエルの言葉が更に重い。

「で、でも、精霊使いになるっていったって、わたしと契約してくれる精霊がいればの話でしょ？」

精霊使いになることを避けるようにエンナは提案した。肝心の精霊がいなければどうしたって精霊使いにはなれない。

逃げられるなら逃げ果せたい。

いや、無理なのは承知の上なのだが、しかし、契約をしてくれる精霊がいなければもしかしたらということも……

「そのことなら心配ない」

エンナの願いはあっさりシエルによって打ち砕かれた。

恨めしくシエルの方を向く。彼はエンナの視線の意味がわかっていないようで、きょとんと目を瞬かせている。この人、鈍いんだかそうでないんだか本当によくわからない。

エンナが更に目を細めてじっとシエルを見ると、彼は少し困ったように見つめ返してきた。

リユーリのくすくすと笑う声が聞こえてきて、そこでエンナはハッと我に返る。

「と、兎に角、なんで心配いらないのよ」

何故だか気恥ずかしくなって、エンナはシエルから視線を逸らした。なんで自分が赤くならなくてはいけないのだ。

「エンナにはその花精かせいがいるだろう？」

シエルは何を今更と言うように小首を傾げている。

そして、タイミング良くまるでシエルの疑問に答えるように花精が鳴いた。

いや、ちよつと待った。

「確かにこの子には何故だか懐かれてるし、ここまでついて来ちゃったけど、契約してくれるかどうかなんて」

「何を言ってるんだ。もうエンナとその花精は仮契約を済ませている仲なのに」

「そう仮契約をって、はあ？」

仮契約とは何だろう。花精とそんなものをした身に覚えはないのだが。

「エンナ、僕らと会う前にこの花精から名を聞かなかったかい？」

「名前……？」

「うん。言葉として言われたんじゃないやなくて、例えばそうだね。直接頭に文字が浮かんだような感覚、かな」

言われてみれば、胸くそ悪いあそこから脱出する前、文字を直接頭に送られてきたようなことがあった。

「フラン・フラワー」

確か、こんな感じの……

リユーリは笑顔を張り付かせたまま続けた。

「因みにその後、身体に異変はなかった？ 目眩が襲ったり、頭痛が起こったり、気分が悪くなったり」

エンナは黙り込む。

「あるんだね」

リユーリの的確な問いにエンナは頷くしかなかった。
そうその直後、フラン・フラワーというものが頭に浮かんだら急に貧血のようなものに襲われた。その時エンナは床に座っていたし、別に倒れる程でもなかったので平気だったが。

「エンナ、それが仮契約つてもものだよ」

「へ？」

「精霊が名を明かし、その名を明かされた者が言葉として復唱すれば、それで仮契約は成立する。仮契約が成立すると、瞬間的にだれど人の身体に何かしらの異変が起こるんだ」

「じゃ、じゃあつまり……わたし、この子とその仮契約つてやつを

……」

「したつてことになるね」

リユーリはなんとものんびりにエンナの後に続く台詞を付け加えてくれた。

エンナは開いた口が塞がらず、只もう啞然とする。

仮契約というものがどういうものなのかよくわからないが、「仮」と「契約」。仮の契約だつてことは理解できる。それはつまり、ある意味契約している状態ともいえるわけで……

「まさかあれがそういう意味だつたなんて……」

「良かったじゃない。契約してくれる精霊を見付ける手間が省けて」

エンナがショックに打ち拉がれていると、そこへリユーリの痛快な言葉が振ってくる。

くそ〜この男おおお。

エンナは恨めしく彼を睨み付けた。

リユーリのなんとも楽しそうなこの表情。

それを目の当たりになると、実はこの男、ドのつく程のサドなんじゃないかとさえ思い始める。いや、きっとそうに違いはない。人がこんなに困っているのに、それを面白がっているのだから。

腹黒な上にサド。

最悪すぎる。なんだこの性格の濃ゆさは。どうやってたらこんな人格が出来上がるのか、聞いてみたいものである。

そんなこと死んでも本人には聞けないが。

しかし、なんでシエルはエンナと花精が仮契約をしているとわかったんだろう。エンナは疑問をそのままシエルに尋ねてみた。

「俺の声が聞こえているだろう？」

「そりゃまあ勿論」

そうでなければ、エンナがシエルに受け答えることなんてできない。

「だからだ」

だからと言われても。

エンナはよくわからなくて片眉を上げる。すると、シエルはエンナに何かを見せるように手を差し出してきた。

シエルの行動に始め理解できなかったエンナだったが、彼の掌に乗っているものを目にして反射的に自分の左手首を握る。そこにあるはずのものの感触はなく、自分の体温が伝わるだけ。シエルの掌に載っているものと、握った手首を忙しなく交互に見ながらエンナは驚きの声を上げた。

「ブレスレッド！」

シエルの手には、彼がエンナにあげた腕飾りがあった。小さなエメラルドの石が朝の光を反射して輝いている。いつの間に！

「俺の声は普通の奴には伝わらない。俺から何かしらの手段を使わない限りは。でも、聞こえる奴らはいらる。俺が何もせずとも声を聞くことのできる奴らは……」

何かを媒体にしなくてもシエルの声が聞こえる者。そういえば、リユーリ達は何も装備していなさそうだったのに彼と意思疎通を図れていた。

「精霊使いならシエルの声が聞こえる……？」

シエルは頷いて肯定した。

「精霊使い、またはそれに帰する者、仮契約者なら俺の声は普通に聞こえるんだ」

「成る程、そういうことだったの」

だからリユーリ達はシエルと普通に会話できていたのか。やっと謎が解けたような気がした。

「あとねエンナ。本契約したら、人は今の名前を捨てなければならぬ」

「名前を捨てる？」

軽く首を縦に振ってからリユーリは話を続ける。

「精霊と本契約したら、人は契約の証とその精霊との絆を強めるために、契約を交わした精霊の名と自分の名を擦った名前に改名しないといけないんだ」

「えっ、そしたらリユーリ達の名前がみんな異様に長いのって」

そういうことだよとリユーリは點頭した。

「名前というのはとても大切だ。名はその人の本質さえも表している。それを捨てるってことは、今までの自分と決別しなければならぬ。過去の自分はもうそこには存在せず、新しく精霊の契約者として生まれ変わり、その道を歩んでいくんだ」

そうか。何となくだが、リユーリやシエルがどうして“殺す”などと揶揄していたのかがわかった。しかしそれにしただって、“殺す”なんて物騒な。もう少しマシな表現もあつただろうに、ややこしいにも程がある。

エンナは呆れた面持ちでいると、少時目を伏せていたリユーリはスツと瞼を開け、真摯な瞳でエンナを貫いた。

「エンナ、今の自分を全て捨てる覚悟はあるかい？」

エンナ達は暫く湖の側で休んだ後、早々にその場から出発した。一所に長いこといると各派の追っ手にすぐ見付かってしまい、追いつかれてしまうからだ。

特にリユーリ達が気にしていたのが現国王派のグラウ。

彼は土の精霊使いらしく、下手するともう居場所があちらにわかってしまっているかもしれないという。

そして、今エンナ達が向かっているのは予定していたイリコットではなく王都エティア。

精霊使いになるにしても、王族の前に膝を折り、誓いを立て王より許可を得なければならぬ。その上で、彼らとそしてそれを見届ける証人として、大臣や団長の目の前で契約の儀式を執り行わないといけないらしい。王位継承者が精霊使いまたは精霊騎士になるための仕来りなのだそう。なんと面倒な話だ。

兎に角、一刻も速くアラディン国王陛下に拝謁し、エンナが精霊騎士になることを宣誓しなければ。

そして、その日の夜。

彼女達は洞窟の中で夜を明かすことにした。

今日は運悪く満月。満月の日は魔物がより活発に、且つ凶暴性が増す上魔力も高まる日なので、夜動くのはかなり危険なのだ。

シエルは魔除けとグラウの探査除けの結界を張って、彼を除いた三人は洞窟の中で身体を休めている。

それにしても、またシエルが周囲の見回りなのか。

エンナ達と一緒に行動を共にしていた限りでは、いつも彼が周囲

を見張っていた。シエルはいつ休んでいるのだろう。

仮眠を取っているローズの隣で、エンナは眠れずにそんなことを考えながら外を見やる。月の灯火が森の中を優しく照らしていた。

「シエルのことが気になる？」

いつ何が起きても動けるように剣を持って、洞窟の入口の縁で腰掛けていたリユーリがエンナの方へ視線をやった。

この人の勘の鋭さには驚かされる。リユーリには、他人の考えが手に取るようにわかるのではないだろうかとさえ思う。

「気になるっていうか、いつも見張りとかしてて身体壊さないのになって」

「それは大丈夫だよ。シエルには三体の精霊がついているからね。いつも彼らと交代しながら見張ってるみたいだから、そんなに身体への負荷はないみたいだし、ねっヒン」

リユーリの肩に小さな旋風が出来て、そこからヒンが現れる。リユーリの赤い髪が風に攫われて、月光を反射した。

ヒンはリユーリの肩に乗ると、元気よく「へいっ」と答える。

「今はスーと一緒に見回ってるんで、心配はご無用ですぜエンナのお嬢」

「お、お嬢……」

なんだか極道の女みたいな呼ばれ方だ。

「心配ならシエルと直接話してみやすかい？」

「話すつて、そんなことできるの？」

「へい！ スーとあっしは双子の風精霊。あっし達が繋がれば遠く

にいる相手と話すことが出来るんです」

「そんなこともできるの。凄いわね」

素直に賞賛すると、スーはそんなことはない、照れを隠すように小さなお手々で顔を擦った。

あつ、可愛い。

「んで、話してみやすかい？」

そこでハツと我に返る。ヒンの愛らしさに胸をときめかせている場合ではない。

「い、いいっ、いい！ あっちも悠長にお喋りしている場合じゃないと思うし」

慌ててヒンの申し出を断る。シエルと二人で話すって、一体何をだ。しかもあまりにも唐突すぎる。

ヒンはエンナの慌てぶりに首を傾げた。

「そうですかい？ 今は向こうも落ち着いてるみたいですが」

「うん！ 大丈夫だからホント！」

エンナは両手を振って必死に断ると、ヒンは益々首を横に傾げながら、やがてわかりやしたと頷いてくれた。

ほっと胸を撫で下ろすエンナを見て、リユースはくすくすと笑う。

「わ、わたしちょっと水飲んでくるっ」

居心地が悪くなって、エンナはそそくさと外へ出た。確かすぐ側に小川があったはずだ。

「遠くには行かないようにね。結界があるとはいえ、何が起るかわからないから」

「そんなことわかってるわよっ。結界からは出ないようにするし」

背後からリユーリがそう注意すると、エンナはツンと返す。またリユーリの可笑しそうな笑い声したが、聞こえないふりをして目の前にある小川へと向かった。

洞窟と森の間に境目を作るようにしてあるその小さな川は、月の光を浴びてキラキラと輝いていた。膝について手を器代わりに水を汲む。水は冷たくて、喉へ流し込めば冷気を放って身体の中を潤した。

そこでふと、エンナは今朝のことが頭に過ぎる。

突然、精霊騎士になれと言われたって、すんなり受け入れられるはずもなく。第一、精霊使いになること事態がまず大変なことなのだと教えられたら、余計に受け入れがたかった。

思わず、深い溜め息をついてしまう。色んなことが唐突すぎて頭が破裂してしまいそうだ。

エンナ……姉……ま

そこで突然、エンナの耳が涼やかなソプラノの声を捉えた。驚いて周囲をさっと見渡すが誰もいない。いや、しかしこの声には聞き覚えがある。あの時、エンナが不安で眠れなかった夜に聞こえた……

「もしかして、ルージュ……？」

恐る恐る誰もいない周囲に問いかける。すると、か細く「はい」と返事が返ってきた。

「どうしてルージュの声が？ 何処にいるの？」

「エンナお姉様、川を。小川を見て下さい」

「川？」

エンナは先程水を飲んでた小川へと視線を下げた。そこにはな
んど。

「ルージュっ」

今生の思いで別れたルージュの姿が水面に映し出されていた。お
月様のお陰でハッキリ彼女の姿を捉えることが出来る。

心底驚いているエンナに、ルージュは控えめに笑った。

「すみません、驚かせてしまつて……」

「いやいや、別にそんな謝ることなんてないんだけど、ルージュっ
てこんなことも出来るのね」

「はい。水とお月様の力があれば、こうして意思疎通を図ることが
できます」

「へえ、精霊術って本当便利なのね。てことは、やっぱりあの時の
声もルージュだったんだ」

ルージュは一瞬目を瞬かせたが、何のことを言っているのかすぐ
に分かつたらしく「はい」と微笑んだ。

「そっか。あの時は本当にありがとう。ルージュがあの時声を掛け
てくれなかったら、わたしどうにかなってたかも」

色んなプレッシャーに押し潰されそうだったエンナ。もし、ルー
ジュの言葉がなかったら、そのうち心が発狂していたかもしれない。

「い、いえっ、わたくしは大したことでませんから……」

ルージュは照れ臭そうに顔を綻ばせた。

優しいルージュ。こうして顔を合わせているだけでも、純真無垢な彼女に癒される。

そこでふと、エンナはルージュに聞いてみたくなった。

「そういえばさ、ルージュはどうしてわたしを助けようとしてくれたの？」

ルージュはきよとんと目を瞬かせた。

自分が意地悪な質問をしているのはわかっている。でも、ルージュからその答えを聞いたら、リユーリから問われたことへの答えが自然と見出せる気がするのだ。

自分が助かる道。

それだけじゃ足りない。精霊騎士になりたいと、なると強く思える確固たる何か

そしてきつとルージュなら、エンナが欲しい言葉をきつと……

「エンナお姉様はわたくしの大切なお姉様ですもの。それに、もし血の繋がりがなかったとしても、誰かが危険に晒されているのだと知ったら、その人を助けたいと思うのは当たり前です」

それが当然とばかりに言うルージュ。彼女はどうしてエンナが突然そんな当たり前のことを聞いてきたのかわからず、ただ首を傾げた。

エンナは微笑んだ。

人間というものは、言葉ではいくら言い繕っても、實際目の前で何かが起こったら自分に関わらない限りは手を出さないものだ。でもルージュなら、何の関わりがなくとも本当にそうするだろう。

この子の心は純粹で穢れもない。でも、だからこそ危うい。世の中、それだけで通れる程綺麗な世界ではないのだ。

『エンナ、今の自分を全て捨てる覚悟はあるかい？』

リユーリにそう問われた自分の答え。

エンナの中で、確かな決意が固まった。それは絶望でもなく、希望に充ち満ちた光。エンナの未来を照らす道標。自分自身を縛り付けるでもない、その決心は寧ろ精霊使いになることへの恐怖心をも吹き飛ばして、幸福感と温もりをエンナにもたらしてくれた。

もしかしたら自分は、ルージュに背中を押して貰いたかったのかもしれない。一歩踏み出す切っ掛けが欲しかったのだ。

うん、出た。

私の答え……

「ルージュ、ありがとう」

自分を導いてくれたルージュにお礼を言うと、彼女は益々首を捻った。

不思議そうにしているルージュを見て、エンナはただ笑う。

でもその顔には、何処か吹っ切れたような、晴れやかで希望に満ちていた。

エンナの首にかかるあのペンダントが揺れる。エンナは服の上からペンダントをぎゅっと握った。

その胸に、新たな強い思いを秘めながら。

10・決意の光（1）

洞窟で一夜を明かしたエンナ達は、明け方すぐに出立した。

エンナはシエルの魔馬に乗せて貰っている。魔物の背に乗るのは大分気が引けたのだが、驚く程普通の馬より乗り心地が良く、疲れを感じない。お陰で、流れる風は清々しい。森を抜け、木々が疎らになってきたこともあり、暖かい陽の光が心地良い。

そうしているうちに、周りに気を配る余裕もできてきた。辺りにいる精霊を観察したりして楽しむ。まさにその時だった。

「……先回りされているな」
「えっ？」

エンナは後ろに座っているシエルの方を振り返る。彼は目を鋭くさせて先を見据えていた。

「ウル殿とグラウ殿か」

「ああ、それも第八隊勢揃いのようだ」

「戦いは避けられないようだね。戦えそうな場所はある？」

「この先に広い平原がある」

「よし、そこで迎え撃とう。ローズもそれで良いね？」

「はい、勿論それで異論ありません」

三人の会話を聞いて、エンナは目を剥いた。

「迎え撃つの!?!」

「エンナには悪いけど、こうなつてはどつやつても逃げられない。戦うしかないよ。だから、戦いやすい場所をこちらが先に選んでおいた方が良さだろう?」

「でもそれって、向こうも戦いやすいってことなんじゃ」

「ゴチャゴチャ言っていると舌を噛むぞ」

エンナがシエルの言葉に反応するより速く、馬が走る速度を急に上げた。いきなり上下に激しく揺れた馬に、エンナは掴まっていた鞍の前部つけられているグリップを握り締める。風を切る音を耳が捉え、髪をかつ攫つていった。

縦横無尽に駆け抜ける馬に振り落とされないように必死にエンナは鞍に掴まる。

やっと馬の動きが止まって、エンナが何か言おうと顔を上げた時には、芝生が生い茂る野原にいた。どうやら、彼らが選んだ戦場に着いてしまったようだ。

周囲を見渡してみる。成る程、確かに思う存分精霊術を使えそうな所だ。

エンナは乾いた笑いを溢した。

「これはまた、思いつきり戦えそうなところね……」

「まあね。でもそうでないとこちらの分が悪い」

「リユーリ、後方からベンドールとディック達がこちらに来ている。まだ遠くにいるとはいえ、もしかしたらここで追いつかれるかもしれない」

「前国王派の……! 魔犬を使いましたのね」

風から伝わってきた情報をシエルが伝えると、ローズが忌々しそくに眉根を寄せた。

「混戦もあり得る、か……」

リユーリは考え込むように手を顎に添える。そして暫し黙考した後、ちらりとローズの方へ目を流した。

その視線にエンナは一瞬違和感を覚えたが、すぐにリユーリが真剣な面持ちでローズに向き直った。多分、何か思うところがあったのだろう。

「ローズ、エンナのことは任せた。エンナはローズの馬へ移って」

言いたいことは色々あったが、エンナは大人しくシエルの馬から降りると、ローズの後ろへ移った。

「来たな」

そうこうしているうちにシエルが小高くなっている所に目を向ける。すると、そこからゆっくり姿を現したのは十一人の騎馬隊だった。その中には、はじめにエンナ達に襲い掛かってきたあのグラウの姿もある。

リユーリとシエルはエンナ達を庇うように前へ出た。

「待ち伏せするつもりがこちらが待たせてしまったようだな」

そう言ったのは、丁度中央にいたプラチナブロンドの髪を一括りに結っている身綺麗な青年だった。馬に乗った姿も様になっている。彼は悪かったなと固い表情を崩さずに、高見からリユーリ達を見下ろした。

「いえ、ウル殿をお待たせしてしまうのはこちらの礼節に反しますので」

どうやらこの青年がウルという人のようだ。リユーリは彼と反して柔らかい笑みを返す。

「礼節か。礼儀を重んじるといふのなら、その娘……いや、そこにおられる方をこちらへ引き渡して貰おうか」

「誠に申し訳が御座いませんが、それはできません」

「この期に及んで……！」

リユーリの笑顔に逆撫でされたらしいウルの隣で控えていたグラウは、我慢ならんと怒りを露わにする。それを静かに制したのはウルだった。

「成る程……ここでもし私の言うことを素直に聞いてくれれば、貴公らのことは見逃してやろうと思ったが、穩便にはいかないな」

「それはそうでしょう。このような重大なことを穩便に運ぶ方が至難の業かと」

終始笑みを絶やさないうり。

しかし、リユーリが何を考えているのかわからないにしろ、エンナには彼らを挑発しているようにしか見えなかった。それは向こうも感じているようで、敵側の数名は明らかに態度が剣呑だ。グラウなんかは険しい顔でこちらを睨め付けている。

どうしてリユーリはこうも人を逆撫でするのだろう。彼の何か裏がありそうな笑顔がいけないのか。それとも彼の日頃の行いがいけないのか。それとも両者共か、悩ましいところだ。

なんだかもう聞いているこちらが冷や冷やする。冷や冷やしすぎて、エンナは頭を掻きむしりたい衝動にかられた。

「では、これで終わりにしよう、精霊騎士団第十一隊隊長リユーリアス殿」

「そうですね、精霊騎士団第八隊隊長ウルーディ殿」

リユーリとウルが静かに剣を引き抜く。それに倣うように他の面々も一斉に己の武器を構えた。

一気に高まる緊張感。ピリピリと突き刺すような張り詰めた空気が辺りを支配する。

いつ、何が切っ掛けで戦闘が始まるかわからない。

エンナはその様子に固唾を呑んで、思わずローズの腰に回している腕に力を込めた。

微風が敵対する者達の間を駆け抜ける。空の遠い所から鳥の鳴き声が聞こえた。

そして突然に、戦いの火蓋は切って落とされる。

ピンと引き延ばした糸が弾けたように、リユーリ達は一斉に動き出した。その場にいた皆の呼吸がピツタリと一つになったような。

そう思う程に動くタイミングが同時だった。それはローズ達も例外ではない。しかし……

「て、わたし達逃げちゃって良いの!？」

なんとローズの馬は真逆に方向転換して走り出したのだ。

「何を馬鹿なことを！　ただし距離をおこうとしているだけですわ！　貴女のこともありますから、わたくしは後方よりお二人の支援をっ」

あ、成る程。そういうことだったのね。

「グラウ様の精霊術が厄介ですわね」

馬を走らせながら、ローズは種を数粒ばらまいて精霊術を展開す

る。

「<ニコン 他精霊の力を借りて 大地を縛める鎖を作りなさい！
>」

ローズの言葉と共に大地に根を生やす植物達に変化が生じる。何がどのように変化したのか説明するのは難しいが、空気の流れのよ
うなものが変わった気がするのだ。

「これで少しは時間が稼げるはず……」

そう呟いてローズは馬を走らせた。

剣戟と幾重もの怒号が少し遠くから聞こえるところでローズは適
当なところに馬を止めた。

「ここからあの方の精霊術を封じ込めるため、植物の根で覆います」

戦場を見据えるエンナに何故か打診してくるローズ。別に申告し
なくても、速くグラウの精霊術を封じれば良いのに。

「始めに戦った時と違って強力な術を使うはず……わたくしの精霊
術だけでは心もとありません。貴女、少し協力なさい」

ローズは後ろにいるエンナへ少し顔を向けながらそんなことを頼
む。

エンナはチラリと向こうの様子を窺ってみる。グラウは戦闘開始
前とそう変わらないところにおり、手を掲げながら何事が呟いてい
るようだ。確かに、何だか凄そうなことをしようとしている雰囲気
は察するが……

「協力？ 協力って何をどうすればいいの？」
「ただ力を貸して欲しいのです。貴女も一応は精霊使いの端くれ、わたくし達のような精霊術は使えずとも、簡単なものならできますわ。しかし、今は説明している時間も惜しいので、貴女の花精を呼んでわたくしの茨に力を貸すよう頼んで下さい。今できる限りのもので結構です。」

早口にローズは捲し立てると、腕を地面と平行に掲げて精霊術の準備に入る。

エンナは言われたことに戸惑って狼狽えた。

そんないきなり言われても……

兎に角、あの花精を呼んでみるしかない。

「えっと、フラン……？」

精霊の名前らしきものを恐る恐る呟いてみる。すると、すぐさまあの花精が姿を現した。

真っ白な毛並みにふさふさの尻尾。しかしその尻尾の先端は、綺麗な七色をしている。

花精、フランは相も変わらず、虹のように美しい不思議な瞳にエンナを映した。

フランはエンナに呼ばれて嬉しかったのか、キュルッと可愛く鳴きながら尻尾をパタパタと振った。

「フラン、ローズの茨に力を貸すことってできる？」

フランの愛らしすぎる仕草に気を取られそうになるのを必死に引き戻しながら問うてみる。フランは勿論！ と言うように元気に一

声鳴いた。

エンナがローズに大丈夫そうだと伝えたと、彼女は一つ頷いた。

「<我が精霊にして 薔薇の化身ニコン 我が声に応えよ>」

ローズが精霊術を発動させる詠唱に入る。それは今までのものは違って、とても堅苦しいものだった。まるで、リユーリから助け出されたあの日の夜、彼が使った言い方と似ている。

「<大地に眠るは愛の花 魔の力が宿ろうとも

深き情愛は変わらず 灼熱無垢な蕾をつけ

花が咲き乱れれば 高貴な姿となるだろう>」

ローズの周りが真紅の光に包まれていく。しかし、それと時を同じくして、大地が振動し始めたのを感じた。きっと、グラウの術も徐々に完成してきているのだ。

エンナは心配になってローズを見るが、彼女は向こうのことなど気にも留めずに呪文に集中している。

「<しかし忘れてはならぬ 愛は時として

強靱な刃にも 堅牢な鎖にもなるのだ>」

ローズは自然な動作で腕を天へ上げて続けた。

「<大地に眠る子ら 薔薇に眷属けんぞくする子らよ

我が願いを聞き届けよ!>」

高らかに唱えるとローズは腕を振り下げた。

それと同時にフランが一際高く鳴く。

ローズの周りに纏わりついてきた光とフランの力が合わさって、

二つの精霊力が地面へ一気に流れ込んでいった。ローズの赤光とフラン独特の七色の光球が地中へ消えていくと、大地が少し盛り上がり亀裂が入る。その行く先は戦場に向かって走った。

地鳴りが低く響き、小刻みに地面を揺らす。馬が怯えて錯乱しそうになるのをローズは見事な手綱捌きと叱咤する声で落ち着かせた。落馬しないようローズにしがみついていたエンナは、少し安堵して息をつけようとしたが、間髪入れず次の攻撃が差し向けられる。なんと、ローズ達を囲うように四方から地面が縦に盛り上がり、彼女達に襲い掛かってきたのだ。

「<心無き者よ 我が愛の戒めを受けるがいい 茨羈束！>」

エンナが悲鳴を上げるより先にローズは素早く精霊術を展開した。大地から一斉に茨の鎖が迫り来る大地の手に縛りつく。植物と土塊が力比べとばかりにミシミシと対抗し合っている。

その隙にローズは馬の腹を思い切り蹴って土の檻から抜け出した。それでも尚その後を追うように次々と水柱のように土が盛り上がる。

「やはり広範囲ですと抑えきれませんわね」

砂塵を巻き上げながら襲い来る土塊の魔の手から上手く馬を操りながら逃げる。しかし、逃れても平原に出来た土柱は、エンナ達に土の弾丸を撃ってくる。それはとても大きく、まるで戦争で使う投石機の砲丸のようだ。

ローズは忌々しげに「くっ」と息を漏らし、彼女の精霊の名を呼ぶ。すると、ローズ愛用の茨の鞭が彼女の袖口から姿を現した。

茨の鞭を縦横無尽に撓しならせながら、ローズは軌道的に避けきれない土の弾丸を粉碎していく。その際土砂が飛び散って、エンナ達に降り掛かった。

そのせいで、振ってきた砂埃が目の中に入ってしまふ。エンナは突き刺すような目の痛みに瞼を閉じて呻いた。その時だった。

「しまつ……!!」

ローズの息を呑む声と共に馬が前肢を上げて急に立ち上がる。

「っ!?!」

その反動でエンナはローズから手を離してしまい、エンナは馬から宙へ投げ出された。

受け身も取ることもできず、背中から地面に強く打ってしまい息が漏れる。

ローズは急いでエンナの方へ近付こうとするが、グラウの精霊術に阻まれて助けに行くことができない。

痛みを堪えながらエンナは身体を起こした。

「貴女っ!」

ローズの悲痛な叫びでエンナはハツとなる。エンナを取り囲むように大きな影が彼女を覆う。エンナは顔を上げ、自分が土の手の中にいることを認識した。迫り来る太い指に似た土塊に悲鳴を上げることでもできず、エンナは頭を庇うように手で抱えて丸くなった。

「<力場障壁!>」

頭上から不思議なことにそんな叫びがエンナの耳に飛び込んできた。

* * *

一方、ベンドールらは兵士を引き連れて、駆けていく魔犬の後を追っていた。魔犬にエンナ達の行方を追わせているのだ。

「忌々しい剣の精霊使いめ……あやつのせいだ……」

あやつが邪魔しなければなどと、ブツブツ呟きながらベンドールは貴重な魔馬を走らせる。その後にはディックとシラクが続いていた。贅肉のついた肉の塊を横目にシラクは鼻を鳴らす。

このベンドールという男は本当に使えない。金銭面での悪知恵はよく働くくせに、その他のことに関してはまるで駄目な男だ。

普段の彼でさえ見ているだけでも気分が悪いのに、苛立ちを辺りの兵士に当たり散らす姿はシラクをもっと不愉快にさせる。シラクは五月蠅い騒ぐなど心の中で悪態をついた。

「ベンドール様どうか落ち着いて下さい」

「落ち着けだど！？ 現国王派の連中に先を越されているかもしれんのだぞ！ これが落ち着けるか！！」

必死にベンドールを宥めるディックだが、それは逆効果だった。ベンドールの機嫌は今や底辺以下。下手に言葉をかければ神経を逆撫でにするだけで、状況は悪化するばかり。

しかし、このディックという男も哀れなやつだ。妻子を人質にとられ、従いたくもないやつに頭を下げなければならぬのだから。心の内ではベンドールへ怨念の籠もった罵声雑言を投げているに違いない。

それにしても……

シラクはちらりとベンドールを横目で見る。

耳障りだ。肥えた豚が耳元で騒ぐのは耳に痛すぎる。

ジャパルカ族の諺という心理的表現に『触らぬ神に祟りなし』とあるように、我関せずと無視していたがそうもいなくなってきた。そろそろコイツを本気で静かにさせなければ、主にシラクの精神的なものが宜しくない。

それに、このままにしておけばストレス発散とばかりに誰か一人やってしまいそうだ。特に今日の前にいるあの豚。

その直後、シラクは精霊力の僅かな波動を感じ取った。この感じは間違いない、リユーリ達だ。魔物に襲われたか……

いや、他にも別の力を感じる。現国王派の連中と戦闘をおっぱじめているのだろう。

兎も角、これでベンドールのご機嫌取りができるとみて、シラクは仕方なく口を開いた。

「ベンドール様、辺りの空気が変わりました。あと少しで向こうと接触できるかと」

「何っ、本当かスラッツ！」

「はい、精霊力の余波を感じました。そう遠くはないかと思われま
す」

「そうかそうか！ でかしたぞスラッツ！」

ベンドールの機嫌は急上昇。高らかに笑うと彼は声を上げた。

「エンナ様！ このベンドール・シュペツゼ伯が今お助けに参りま
すぞ！」

気分の乗ったベンドールは、兵士達に続けー！ と指示しながら
魔馬を疾駆させる。

シラクはベンドールの斜め後ろに追従しながら、睨みつけるように前を見据える。口元には凄惨な笑みが浮かんでいた

* * *

馬上で剣をいくつも噛み合わせながら、リユーリはチラリと横目で後方を気にする。やはりグラウだとローズー人だけでは厳しそうだ。

「こんな時に余所見とは随分余裕だな！」

ウルが刃が振り下ろされる。リユーリはその重い一撃を炎の力が宿ったフランベルジュで受け止めた。エンナ達が心配だが、こちらも向こうに手を貸してやる余裕がない。

流石のシエルも精霊騎士相手では苦戦を強いられているようだ。それでも、リユーリと違い六人も相手にしているのだからかなり健闘している。

「こつ見えても手一杯ですよ！」

火花を散らせながらリユーリはウルが剣を押し退けた。そして、次の一手が来る前に音声による言語詠唱を省いて、精神思想による精霊への直接干渉で精霊術をすかさず発動させる。

瞬時にいくつもの炎の矢が空中に出現し、ウルや他の連中へ撃ち出された。

「そつはさせるかっ！」

そこへウルของทีม員アライセが氷の矢を展開し、飛来してくる紅蓮の矢を全て相殺させる。

あわよくばグラウに当たればと思ったが、やはりそう上手くはいかない。

リユーリは後ろから袈裟懸けに振り下ろされた斬撃を紙一重で躲した。

「<水刃烈波!!>」

躲した隙をつくように隊員の一人、ヘイセルより放たれた水の刃がリユーリに襲い掛かる。リユーリは剣で水の精霊術を受け止めて、刀身に付加している炎の力で瞬時に蒸発させた。

「流石は“紅焰の華”と謳われるだけある」

リユーリの立ち回りに、ウルは固かった表情を崩して口の端を吊り上げた。

「それ程でもありません」

それに対して、リユーリは一合一合、又は精霊術で対抗しながらニコリと笑ってみせる。

さも余裕そうだが、実際は心中焦りが募り始めていた。どうにかエンナだけでもと思うが、厳しいのが現実だ。

頼りのシエルは他の面子を先へ行かせないよう足止めするのに今は手一杯。何とか一人、二人と徐々に昏倒させつつあるものの、手を離せない状況が続いているのが現状だ。時折、エンナ達のことを考え、隙をみてはグラウに精霊術を喰らわそうとしているが、それは彼本人に防御されてしまっている。

10・決意の光（2）

一体どうしたものかと頭の片隅で思案していると、

「リユーリ、シエルーっ!!」

自分達を呼ぶ声にハツとなる。その叫び声はよく聞き覚えがあるものだ。

「フレン！」

剣戟を繰り広げながら一人気絶させて、聞こえた方角を確認する。思った通り、自分の見知った者が馬を駆ってこちらに疾走してきた。

焦げ茶色のツンツン頭に、あのだこの不良ですかと言いたくなる三白眼の目。間違いない。あれはリユーリの隊員、フレンだ。

勇ましい雄叫びを上げながら突進してくるその様は、さながら暴走した猪のそれだ。

そのフレンを食い止めようとアリィセが動く。

「<氷結陣!>」

氷の霧が辺りに立ち籠めて、フレンの行く手を阻んだ。

小さな氷の粒がフレンの身体に纏わりついて、彼と彼の馬の身体を凍らせていく。

「しゃらくせーっ!!」

氷を振り払うように棍を振り回し、フレンは気合いと共に精霊術

を発動した。

「<爆風火!!>」

フレンの周りが氷の霧を巻き込んで突如爆発する。霧は爆風によって吹き飛ばされ、爆煙の中からフレンが飛び出してきた。

「オルアアああああっ!!」

気合いと共にアリイセに向かって突撃する。棍に渾身の力を込めてフレンは重い一撃をアリイセに喰らわせた。アリイセはそれを難なく剣で払いのける。金属同士が激しくぶつかり合って、甲高く耳の中へ突いた。

フレンはその反動を殺さずに、そのままリューリの馬の隣に並んだ。

「随分到着が遅いじゃないか、フレン」

リューリは剣を構えたまま、横目で意地悪く言う。

「そんなご無体な！ こちとら守護使でかり出されていた拳げ句、シエルみたいな探査術持ってないんだぞ！？ どんだけここまで来るのに苦労したと思っただんだ！」

非難するリューリにフレンは鋭い目付きを更に吊り上げて抗議した。

「そついえばそうだったっけね。このタイミングで守護使なんて間が悪いというか、フレンらしいよね」

お疲れとリユーリは労いの言葉をかける。因みに輝いた笑顔つきで。

フレンは悔しそうに「くそぉっ」と呟いた。

「これが終わったら、絶対色のついた特別手当貰ってやるっ！！」

悔しさを握っている棍に乗せてフレンは先端を眼前の敵に向けた。ウル達は改めて陣形や体勢を整え、リユーリとフレンに対峙した。

* * *

エンナは来るであろう衝撃がいつまで経ってもやってこないのを不思議に思い、恐る恐る瞑っていた目を開ける。覆っていた腕をそっと解いて見上げた先には、制服のようなかつちりした服を纏った一人の少年が、盾を頭上に向けて襲い掛かる土塊を受け止めて歯を食いしばっていた。

しかし、彼の持つ盾の幅では明らかに太い上に数体ある土塊を防ぎきることは不可能だ。

その時盾の周りにヴェールのような何かが見えた。それは光の角度で見えたり見えなくなったりしている。不可思議なそれが盾のリードを広めているようだ。

「く茨羈束っ！！！」

そこへローズの茨の土塊達に絡み付いて拘束する。

すると、土塊は途端に身動きが取れなくなった。少年にかかる圧力が緩む。その隙に彼は強引にエンナを立たせ、土の檻から抜け出した。

「あの、大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？」

腕を引きながら少年はエンナの方へ振り返る。

茶系の金髪に、心配そうに揺れる瞳は銀色だ。彼の人柄を表すように目縁は優しいアーモンド。だが今は、戦闘中ということもあって緊迫した鋭さがあった。

「うん、お陰様で……」

「貴女っ、アーメル!!」

ローズがこちらへ駆け寄ってくる。その表情には恐怖と安堵とが混ざったようなものだった。

「ローズさん、すみませんがこの辺り一帯に茨の結界をもう一度張ってくださいませんか？ 次に精神式無言語術で強力な精霊術を使われたら厄介です。僕がローズさんの茨を強化しますから」

アーメルと呼ばれた少年は、近寄ってきたローズに開口一番で告げる。ローズは慌てた様子で頷いた。

「詠唱中ですが」

「それなら先程応急処置程度ですが、網を張りましたわっ」

「では、今の内に」

ローズとアーメルは頷きあうと、即座に詠唱に入った。

「く高貴なる花 気高き愛の化身達よ

聖も魔も その象徴は等しくある

我が愛しき 美と情熱の同胞達よ

「我が願い　どうか聞き届けたまえ」

「く我が力　破壊するためにあらず

ただ守りたい　その思いこそが

秘めし力を示すことができよう

今こそ燦めけ　我が守護の力よ」

二人の呪文が重なり合う。真紅の光と純白の光が螺旋を描きながら地中の中へ注がれ、大地を抑えるように地鳴りが低く響き渡った。

「これでグラウ副隊長の術は暫くの間は防げそうですね」

「アーメル、助かりましたわ」

「いえっ、助かったも何も助太刀が遅くなってすみませんでした」

アーメルは申し訳なさそうに後頭部を手で押さえた。

「それより速くここから離れましょう。この精霊術も時間の問題」

「ハハハハハハッ！！」

突然、後方からアーメルの言葉を遮るように高らかな笑い声がした。視線をそちらに見やると、

「追いついた！　追いついたぞ！！」

ベンドールだ。ベンドールが沢山の兵士を引き連れて追ってきたのだ。

彼はエンナの姿を見付けると、それはもう目を輝かせた。

「エンナ様〜！　今すぐその下賤な輩の手からお救い致しますぞー
！！」

「くっ、あの肥え豚。ふざけたことを！」

ローズが吐き捨てるように言った。彼女がそう言いたくなる気持ちには十分わかる。

そのベンドールだが、彼はリユーリ達が戦っているのを見てニンマリと笑った。恐らく今ならエンナを奪取できる、と考えているのだろう。

ベンドールは兵士達が配置につくと、手を挙げ威勢良く号令をかけた。

* * *

シエルは内心で舌打ちした。

風から伝わる情報でわかってはいたが……

フレンとアーメルの登場で戦況は変わりつつある。

しかし、状況は最悪だ。あの前国王派のベンドール達までもが着いてしまったのだから。

いや、あちらはエンナに手を掛けるつもりはないから、その辺りに関しては安心だ。それにトウグルに頼んだ件もある。あちらが間に合ってくれば……

「向こうを心配している暇なんてないですよ、シエル副隊長！」

ウルの隊員、ハロルドが剣を振りかぶる。シエルは剣の軌道を風で逸らし避けた。が、その隙に他の者がここを突破してエンナのところへ向かおうとする。シエルはそれを風の精霊術で壁を作り行く手を阻んだ。風の障壁に手を拱いている間にシエルは前へ回り込んで、押し返すように強い風を全体に起こす。

速くエンナのところへ行かなければ。

しかし、だからといって事を急いで強力な精霊術を使い精霊騎士達を殺すわけにもいかないし、何処か遠くへ吹き飛ばしても、その後回り込まれたりしたら厄介だ。

だが、そんなことを気にしている猶予もないのも確か。

脳裏に過ぎるのはリユーリから聞いたルージユの予言

『交差する人々の思い 願い それが混じり荒れ狂ったその時
冷たき矢が かの者の生を氷凍より寒き世界へ送るであろう』

シエルは焦れつたさに歯噛みした。兎に角、今日の前にいるこの者達をどうにかしなければ。

「<疾風刃>」

シエルは精霊に命ずる。いくつもの細かい風刃がハロルド達の足に襲い掛かった。四肢を狙われ、傷つけられた彼らの馬達が驚きと痛みで嘶く。前肢を上げるものもいれば、前肢後肢を交互に上げて暴れる馬もいた。そして、ついには全員馬から振り捨てられてしまった。そこを彼らは苦もなく地面へ綺麗に着地してみせる。

間髪入れず、精神式無言語術でシエルは瞬時に風の精霊術を展開。鋭い刃物のようになった風が彼らの周囲を囲って旋回し、身体中に傷を刻んでいった。

「覚悟おおおおっ!!」

しかし、シエルの術から間一髪回避した者が左横から跳びかかってきた。シエルはそれを難なく剣で軽く叩いていなすと、精霊術を使って上空から烈風を浴びせる。強烈な風圧を受けた彼は、何の抵抗も出来ず思い切り地面へ叩き付けられた。相手の喉から空気が途切れるような息が漏れる。

そこへ今度は他の者から反撃が繰り出される。それをすんでの所で受け止めたが、シエルは若干目を瞠った。真正面から紫色の霧が突如発生したのだ。
毒だ。

この青年は毒の精霊騎士だから間違いない。名をダルテイエ、通称ダルトと呼ばれている。

何の毒かはわからないが、これを吸ったら死ぬことだけは確実にしろ。

シエルは反射的な速さで判断するとあとは身体が勝手に動いた。毒々しい色の霧とともに毒の使い手ごと風で吹き飛ばす。

だが、僅かに毒気にあてられてしまったようだ。目が少し痛む。シエルは奥歯を噛み締めた。

* * *

エンナ達は兎に角走り回っていた。
波寄せるディック率いる兵士の群れ。

ベンドールが連れてきた精霊使いとグラウによる精霊術。

戦場が奏でる怒号のような呻り声はエンナの耳から様々な音を拾っては掻き消していった。

エンナのことをローズとアームルの二人が守ろうと立ち回るが、それもいつまで保つか。

ディック達がローズ達に襲い掛かり剣を交え、エンナはその手から逃げ惑う。グラウの精霊術はベンドール側の精霊使い達が立ちほだかっていた。

「大人しく娘をこちらに渡せ！」

「そういうわけにもいかないんですよ」

ディックが横薙ぎに剣を振るうと、アーメルは盾で防御しつつ腹部目掛けて剣を突きだした。それをディックは数歩後ろに飛んで回避する。ディックは苦汁をなめたかのように顔を顰めた。

「死にたいのか」

「その言葉、そのまま貴方にお返しします」

アーメルとディックが睨み合う。そんな二人を取り巻くように配置についた兵士達は、二人の気迫に気圧されて身動きが取れずいた。

ローズの方は兎に角大勢の兵士達を相手に立ち振る舞った。茨の鞭が風を切つて、兵士達を薙ぎ倒していく。が、次から次に斬り掛かってくる兵士。これでは切りがない。多勢に無勢だ。

ローズの焦りがどんどん募つて、精神が不安定になっていく。それを証明するように彼女の動きが徐々に乱れつつあった。

「貰った！」

その一瞬の隙を突かれた。

いつの間にかローズ達の背後に回っていた兵士の一人が剣を振りかざしていたのだ。

ローズとエンナが息を呑む。咄嗟に鞭を振ろうとするが間に合わない。

斬られる

そうローズが覚悟を決めた時だった。

ローズに剣を振り下ろした兵士がその姿勢のまま倒れ伏したのだ。

「ローズ、エンナさん！」
「ソード様!？」

兵士の後ろから姿を現したのは、ソードだった。リユーリからベンドール達を足止めしてくれていたと聞いていたが、無事だったようだ。身体中に泥や擦り傷を負ってはいるものの、それ以外は特に大きな外傷もない。

「良かった、ご無事でしたのね！」
「なんとかね。つと、再会を喜んでる場合ではないよ」

複数の兵士達がローズ達を取り囲んだ。ローズとソードはエンナを背に庇いながら、己の武器を構えて対峙する。

「まずはここを突破する！」
「はい！」

二人が同時に動き出す。ローズの茨が踊り狂い、ソードの剣が光の軌跡を残しながら走っていった。次々と兵士が倒れ、狭かった輪がどんどん広がっていく。そうしていくうちに、人垣の合間に一カ所だけ隙間がみえた。人の層が薄い、溢れ落ちた隙。

ローズはこの好機を逃すまいと隙間に精霊術を発動させる。彼女の薔薇が地面から伸びて兵士達を押し退けた。

「走って!!！」

ソードが剣で兵士達と応戦しながら叫ぶ。エンナは考えるよりも先に足が動いて、開かれた穴へ走った。その後をローズが続いていくが、ソードはエンナ達を追おうとする兵士達を押し止めるためにその場で剣を振り続ける。

エンナは気になって後ろを振り返ろうとしたが、ローズによってそれは阻まれた。ローズがエンナの腕を強引ともいえる勢いで引って張って走り抜けたのだ。

「貴女は自分の身のことだけを考えなさい！！」

茨の鞭を唸らせながら、周りの音に掻き消されないようローズが声を張り上げて叱る。

「う、うんっ」

エンナはただ頷くしかなかった。何もできないエンナがソードやアーメルのことを気にしても、彼らの足手まといになるだけ。

もし、自分に力があつたら。

自分の身くらいは守れることができたのなら。

エンナはぎゅっと拳を握る。なんだかとても、悔しかった。

ずっとずっと、エンナはリューリ達に守られて、自分のことなのに当の本人は逃げ惑ってばかり。

何もできない。何もすることができない自分。

悔しさと情けなさがごっちゃんになった。

いや、今はそういうことを考える時ではないのだ。まずは、自分はここを逃げ切らなければならない。そうでなければ、エンナのことを守るために戦ってくれているリューリ達の思いも、姉と慕ってくれているルージュの思いも、そして、自分の中で芽生えた思いも、全部踏みにしてしまうことになる。

それだけは、絶対に阻止しなければならぬのだ。

エンナはぐっと気持ちを抑え込んで、前を見据えようとした瞬間。

「っ!？」

地面が大きく揺れ動いた。地震かと思ってしまうような振動は、エンナとローズの間を簡単に引き裂く。揺れる地面に足を取られたエンナは、その場につんのめって四つん這いになってしまふ。ローズは吹き飛ばされるように前へ倒れ込んだ。

ずんと重い地鳴りが身体に伝わってきて、兵士達の悲鳴がエンナの耳を支配した。

「エンナ!！」

叫びのような大きな衝撃が頭を強く打つ。

声ではなく、ハッキリと言葉で伝わるそれは、シエル独特の

エンナは鳴り響いた声に頭を抑えながらゆるゆると顔を上げ、視界に入ったものに目を見開いた。

何かの塊が矢となって、凄い速さでエンナに向かって飛来してきていたのだ。

思わず、身体を引こうと動く。が、身動きが取れない。驚いて手足を確認すれば、木の根が逃がすまいと絡み付いていた。

駄目……

それでも容赦なく矢は迫ってくる。

まだ死ねない。死ねないのに……

エンナは目を瞑ることもできず、彼女の命を奪おうとする矢を絶望と生の渴望がまぜこぜになった瞳で見ている。

死ぬ

途端。

閃光が走った。一際目映い光はエンナの視界を奪い、あまりの強烈な白光に思わず目を瞑る。

一体何が起こったのか理解できなかった。

もしかしたら、あの光は神様からの天国へのお導きだったのでは？ そんな考えが脳裏を掠めたが、そんなわけがないと否定する。

瞼を通して光が収まるのを感じてから、エンナは現実を確認しようとして目を開けてみた。

エンナの周りを何か半透明な膜のようなものが張っていた。それはシャボン玉みたいに光の角度で七色に変わる。

「何これ」

その膜を突いてみると、水面に雫が落ちたように小さく波紋した。

周り見渡せばあの草原。沢山の兵やすぐ近くにはローズがいる。

皆が一樣に驚愕してこちらを凝視していた。

なんだかよくわからないが、どうやら自分は助かった……らしい。

気付けば手足に絡み付いていた木の根が取れているし、もしかしてこの膜がエンナのことを守ってくれたのだろうか？

そしてふと視線を下にした時に、視界に白光が飛び込んできた。

それはエンナの胸辺りから服越しに光が漏れているようだった。まさかと思い、襟元から例のものを手繰り寄せてみる。

エンナはそれを見て目を見開いた。

「光ってる」

あのペンダント、リベラから貰ったペンダントヘッドが光り輝い

ていたのだ。あんなに真っ黒だったものが今ではエンナの掌の上で白く煌めいている。

「もしかして、この膜みたいなのって……」

興味深く鱗型のペンダントヘッドを指で触れようとすると、ピシッと亀裂が入った。それはあっという間もなく罅ひびが広がって、破片がエンナの手からスルリと通り抜けていく。欠片となってしまった鱗は、ハラハラと落ちて、まるで雪が溶けてしまつように霧散していった。

ペンダントが跡形もなく消えると、エンナを守るように半球状に張っていた膜は、時同じくして消失する。やはり、あのペンダントがエンナの命を救ってくれたのだらう。

「あ、貴女！」

我に返ったローズが血相を変えてこちらに走り寄ってきた。

「お怪我はありませんこと!？」

「う、うん。全然平気、みたい……」

身体をぺたぺたと触って確認してくるローズに放心状態のままエンナは答えた。

* * *

「今のはまさか、アンチマジックワールド魔法禁止領域……?」

そんな馬鹿なとリユーリは自身の考えを否定して頭を振った。

魔法禁止領域は魔術の一種で、魔法を完全に遮断、防御するものだ。しかし、現代では魔術というものは失われたも同然で、魔法禁止領域は魔術の中でも高等魔術。そんな代物を発動させるなんて無理に等しい。

だが、あの防御形状、威力。間違いない。

一度それを間近で見たことがある自分が見間違っはすがないのだ。

それが何故……

ルージュの先見では、多分今のがエンナに死をもたらすはずだったのだ。ルージュの予言が外れるなんてことは考えにくい。かの方の占いは、多岐に渡る道筋から見出された結果なのだから。

しかし、実際に目の前で起こったことは紛う事なき事実である。なら、今のが死の原因ではなく、これから起こるのだろうか？

いや、そもそも魔法禁止領域が発動するなど窺わせるような詩はなかったはず。詩に加える程のことでもなかったということなのだろうか。

そんなまさか……

では、あの魔術事態に何かあるのか。
考えてもわからない。

「怯むんじゃない！ 今を逃すな！！」

ウルが自分の隊員を叱責して奮い立たせている。
わからないことを考えても仕方ない。今はそうして思案を巡らせている場合ではないのだ。

兎に角、エンナは生きている。

生きているのだ。

今はそれでよしとしておこう。

リユーリは瞬時に思考を切り替えると、後れを取らぬよう柄を握る手に力を込めた。

11・緑の羽に抱かれしワイバーン（1）

我を取り戻したらしい周囲がそれぞれ目的を果たさんと動き出す。エンナはローズに支えられながら急いで立ち上がった。

「エンナ！」

シエルが剣を振るい、風の衝撃波で周りを蹴散らしながらこちらに走り寄ってくる。いつの間になんか近くにきていたのだろう。回らない頭でエンナは、若干青く見える顔で駆けて来るシエルをぼつと眺めていた。

「エンナっ、怪我は……！」

側まで寄るとシエルはエンナ達を庇うように剣を構え直し、肩越しに声のない声で彼女に叫ぶように問う。彼にしては、今までの見えてきた中でかなり感情的なんじゃなかるうか。

「だ、大丈夫。何処も怪我はしてない」

シエルの啖呵に若干気圧されながら答えると、それを聞いた彼は少し落ち着いたらしい。

そうかとシエルの言葉が静かに脳裏に響いた。

そして、その束の間。

「その戦、待ったーっ！！」

動き出した戦場に響き渡る制止の声。

再び時が止まり、戦いを止める無粋な言葉が聞こえた方へ各々が視線を投げる。

そこには青年が一人、白馬に乗ってこちらを見ていた。

鮮やかな金の髪は太陽のように煌めき、晴天を思わせる瞳は今も鋭く煌めいている。身に纏っているものは青と白を基調としたもので、羽織っている外套も服に合わせたデザインをしていた。その姿はまるで、お伽噺に出てくる王子様だ。

後ろには従者らしき者達が馬に跨って控えており、皆同じ制服のようなものを着込んで鎧を纏っていた。両端にいる二名はその手に旗を掲げている。旗の色はロイヤルブルーからエメラルドグリーンへ変わる綺麗なグラデーション。描かれる紋章は、精霊の羽を模した風と蔓に優しく抱かれる楯だ。楯の中にはワイバーンが描かれ、上にアーチのない冠が乗っていた。

あれはこの国の……

「ま、まさか……！！」

彼の姿と旗を目にしたベンドールの表情が驚愕と恐怖で一変する。それはウル達も同様で、愕然となっていた。

「シエル、連れてきたぞ」

「トウグル」

トウグルが突如、前触れ無しに天空から舞い降りてきてシエルの肩に留まった。

エンナは驚いて目を丸くする。

そういえば、トウグルは今まで何処に行っていたのだろう。昨日からずっと姿がなかったことに今更気付いた。

「どうやら間に合ったようだな」

「ああ、おかげで助かった」

「シエ、シエル様っ。あのお方は……!!」

ローズも他の者達と同様かなり驚いているようで、その声は上擦っていた。

「えっ、何？ あの人は何？」

エンナは周りの狼狽ぶりに自身も混乱しながら思わず問う。

あの旗は間違いなく……いや、きつとエンナの見間違いだ。あんな身分の高い人がこんなところにいるはずがない。

「あのお方は、エンナの従兄に当たる方だ」

シエルが白馬の王子様に視線を逸らさないまま、エンナの疑問に答えてくれたがいまいちピンとこない。

「はっ、従兄？」

「第二王子殿下、アルベルト・フェル＝フィアデル殿下。アラディン国王陛下とコルネリア王妃殿下のご子息に在らせられる」

シエルが片膝を折り恭しく頭を垂れる。目を見開いて呆けているエンナの横で、我に返ったローズが急いでシエルに倣った。

周りが戸惑いでざわめき始めると、見計らったようにアルベルト殿下の背後に控えていた者の内の一人が一步前へ進み出る。

その人は、なんととも慈母を思わせるような女の人だった。春風を連想させる柔らかな茶色の髪は高い位置で一つに纏められ、顔には柔和そうな笑みを浮かべている。白鳥のような色の制服が後ろの者

達と異なり非常に目立つ。それに拍車を掛けるように整列している彼らより身なりが立派な気がした。

そして、極めつけは彼女の耳。エンナには彼女の耳が尖って見えるのだが、気のせいだろうか。

「アルベルト殿下の御前ですよ。いつまでそうしているおつもりですか？」

彼女は笑みを浮かべたまま、子供に言い聞かせるかのようにゆっくり、それでいて上品に告げる。その声は穏やかで静かなのに、この広い平原にとてもよく通った。

告げられた言葉に周囲は雷が走ったかのように慌てて跪く。

エンナも弾かれたように額が地面に擦り付けんばかりに平伏した。

って正真正銘、この国の王子様じゃないの！！

「精霊騎士団第八隊、隊長ウルーディ・テリス・ジエディス！」

「はっ、ここに」

ウルは顔が見えるくらいまで急いで走っていくと、すぐにその場に跪いた。

「一体これはどういうことだ」

「それは……」

苦しそうに言い淀むウルに、アルベルトは溜め息をついた。

「勝手に動くなと言っただろう。どうしてこんな軽率なことをしたんだ」

呆れ交じりのアルベルトにウルは勢いよく顔を上げた。

「ですかアルベルト様っ！ 事が事です！ 放置するにはあまりにも危険と」

「言い訳は聞かないぞ、ウル」

ウルは言葉を詰まらせると、ショックを受けたのか頭を下げる。

ウルの消沈する態度にアルベルトはもう一度深い溜め息をついた。

「ウル、お前が私達のことを思っていることは分かっている。今回の件も、心配しての行動だということもだ。しかし、やり方が目に余るぞ」

「……………」

「……………第八隊隊長ウルーディは二週間の謹慎、副隊長グラデウス及び隊員は一週間の謹慎処分とする！」

彼らに科せられた罰にウルは勢いよく顔を上げた。

「アルベルト様！」

「父上も、勿論私も、お前やお前の隊員だからこそ信頼しているんだ。これからも頼むぞ」

「勿論に御座います……………！！」

アルベルトの言葉にウルは感極まったようだ。高ぶる感情を抑え込むように再びアルベルトへ頭を垂れる。

アルベルトはウル達の態度を満足そうに頷くと、今度は目を鋭くさせた。

「ベンドール・シュペッセ伯爵！！」

「は、はいっ、ここに」

ベンドールは急いでこちらに近寄ってきていたようだ。息を切り、顔や首からは滝のように汗を噴き出している。彼は荒い息のままその場に膝をついた。

「ベンドール伯、貴様の弁明など聞く余地もない。陛下への反逆行為は明白であり、その他に罪を犯していることも既にわかっている。よって陛下に代わり、陛下の名の下、この場で私が貴様に沙汰を下す。ベンドール伯はこの時より爵位を剥奪、全財産の没収と共にガルヘルド行きとする！」

「そ、そんな……」

ベンドールは真つ青になりながら、恐怖で身体を震わせた。

ガルヘルドは北の海に存在する監獄孤島のことだ。この世の地獄とも表されるこの牢獄は、無期有期問わず送られてきた囚人達の殆どを死に追いやる。何故そのようなことになるのかは、詳しくは知られていない。が、皆の推論では、何らかの原因で囚人達が精神崩壊してしまい、そのまま死んでしまうのではないかと言われている。

兎に角、この牢獄へ送られるということは、ある意味死刑宣告をされたも同然なのだ。

「ディック隊長、並びに兵の皆さん。一体何をしていらっしゃるのです。早くその者を引っ捕らえなさい」

傍らに控えていたあの女性が慈愛の微笑とは裏腹なことを皆に促す。

ディックやベンドールの側にいた兵士達は、すぐさま行動を起こした。あまりの恐怖にガクガクと震えることしかできないベンドールを逃げられないよう捕らえる。

「待て、ディック隊長」

兵士と共にベンドールを連れて行くこうとしていたディックを止めたのはアルベルトだった。呼ばれたディックは姿勢を正し、神妙な面持ちでベンドールと兵士達を背に膝をつく。

「……お前の妻も娘も無事だ」

ディックはハッと顔を上げる。その表情には驚きで目が思い切り見開かれていた。

ていうか、この人。奥さんと娘さんを人質にとられていたのか。その事実にはエンナも驚いた。

「シエルに感謝するんだな」

次にディックが視線を送ったのは当然シエルの方だった。しかし、シエルはじつと頭を垂れたままで微動だにしない。ディックは、悔しさが喜びできているのかわからない顔で、きつく瞼を閉じて再び俯いた。

「処分は追って出す」

アルベルトはそんなディックにもう行って良いとこの場を去ることを許すと、彼は礼をとって走り出した。

連行されるベンドールの情けない後ろ姿を暫し蔑むでから、アルベルトは「さて」と態度を改める。

そこで間抜けな顔でいたエンナとアルベルトの目がばちつと合ってしまう。エンナは慌てて顔を伏した。

「リユーリ、シエル。この娘が」

はっきりと返事をするリユーリの声がすぐ後ろから聞こえてきた。いつの間に。

「今は亡き先の王エイブラム様が王女、エンナ・テイル＝フィアデル様で御座います」

「ほづ……」

興味深そうな眩きとともに、ビシバシとアルベルトの視線を感じる。その刺さるような彼の目からエンナはこの場から逃げ出したいとさえ思った。

衣擦れと草地を踏む音がして、どうやらアルベルトが馬から降りたらしいということが伺えるが。その音が近付いてきているのは気のせいだろうか。更に、足音がピタリと腕一本分の距離ほど近くで止まったのは、幻聴だろうか。

「エンナ、面おもてを上げよ」

頭上からアルベルトが命じてくる。エンナは恐る恐るといった具合に顔を上げてみせた。

そこには凜々しく立っているアルベルトの姿がある。間近で見ると、これぞまさしく王子様！ といった容貌だ。エンナは、眩しい彼に感嘆として見惚れてしまう。

しかし、それも一時の間だけで、先程からアルベルトの視線が痛い。まるで品定めでもするかのように、まじまじとエンナを観察している。エンナは珍獣にでもなった気分だった。居心地が悪くて、顔を背けそうになるのを必死で我慢する。

「なんだ、どんな女かと期待していたが……」

残念だとばかりに憂いのある溜め息をつくとき、アルベルトは肩を落とす。

エンナはアルベルトの物言いにガチツと凍りついた。
なんだそれ。どういう意味だ。

確かに、自分は綺麗なわけでも可愛いわけでもない。ごくごく普通の何処にでもいそうな町娘だ。美形に囲まれて、余計見劣りしているのも理解できる。

しかし散々人のことを見ておいて、挙げ句年頃の娘にそれはあまりにも失礼すぎやしないだろうか。

「殿下、女性に対してそのような言い振る舞いは失礼ですよ？」

特徴的な耳をしているあの女性が傍らにきて、やんわり王子を窘める。アルベルトは彼女の言葉に肩を軽く竦めた。

「だってそうだろう。ルージュの姉、つまりはエメリナ様の娘だぞ。期待しない方がどうかしている」

そんな勝手に期待されても。こちらとしては心外だ。

多分、エンナとルージュの母、エメリナは美しい人物だったのだろうが、だからといって勝手に想像を膨らませて期待されても困る。すると、彼女はあらあらまあまあと口元を手で覆った。

「エンナ様は十分可愛らしい方ですね。アルベルト殿下の目はとても節穴ですね」

「おい待て、アテリア。お前だってその言い草は王族に対して無礼だぞ。大体、そうしてずっと目を瞑ったままのお前に何がわかるっていうんだ」

アルベルトの言う通り、アテリアはずっと目を瞑ったままだが、どうしたのだろうか？ 目が盲目なのだろうか。でも、それにしては随分と普通に立って歩いているような。

「あら、こうして目を閉じていようと、わたくしには手に取るようにわかるのです。ね？ エンナ様」

アテリアは柔和な微笑みをエンナへ向け、小首を傾げた。

が、そんなことを尋ねられても困る。エンナは曖昧に「はあ」と答えることしかできなかった。

「アルベルト殿下はエメリナ様のことを慕っておいででしたから、無理ないかもしれませんが、私も殿下の目は節穴と思います」

と、アテリアに同意を示したのは意外にもシエルだった。耳にしたアルベルトも、エンナでさえ面食らって動けなくなる。

アテリアは嬉しそうに両手を合わせてた。

「そうですね。エンナ様は誰が見たって、とても可愛らしい方だと言いますわ」

「なのに殿下ときたら……」

二人して同時に嘆くような溜め息をつく。シエルに至っては米神まで押さえて。

アルベルトはそこでハッと我に返った。

「二人共！ 王子に向かって失敬にも程がある。アテリアはまあ良いとしてシエル！ お前は不敬罪に問われても文句は言えないぞ」

「その心配はありません。私の声は半径四メートル以内の者にしか聞こえぬよう限定させて頂いているので、今の会話はアルベルト殿

下、アテリア団長、リユーリ隊長にローズ、そしてエンナ様以外には伝わっておりませんので」

抜かりありません、とキリツと至極真面目に答えるシエル。アルベルトは驚いて目を見開いた。

「い、いや、しかしだな……そのうちの誰かが証人として」

「それは無駄かと。この場にいる者達がそのような殊勝なことをするとは思えません」

シエルの助言を証明するように、アテリアは「まあまあ」とほのぼのしい笑みを浮かべているだけ。リユーリなんかは、胡散臭い爽やかな笑顔で完全に傍観を決め込んでいる。

エンナは辱められていた張本人なので数から除外されているらしく、見向きもされない。アルベルトは最後の希望とばかりにローズへ目を向けるが、彼と視線があつた瞬間、気まずそうに彼女はサツと顔を背けた。

アルベルトの身体がわなわなと震え始める。

11・緑の羽に抱かれしワイバーン（2）

「お前ら！　いくら僕相手だからって遠慮がなさすぎるぞ！」

興奮気味のアルベルトは、一人称が私から僕に変わったことにも気付かず叫いた。

「落ち着いて下さい殿下。いいことではないですか、部下に慕われているという何よりの証拠なのですから」

「良いわけあるか！　一応ここは公共の場なんだぞ！？　少しは僕を立てろっ！」

「なら、ちゃんと私共が殿下を立てられるよう振る舞って下さい」

追い打ちをかけるシエルにアルベルトは、何も言えなくなって息を詰まらせる。

エンナはシエルの態度に心底驚いてしまって、ただ啞然と二人の掛け合いを聞いていた。

シエルがまさかこのような態度を取るなんて。しかも、相手はこの国の王子様。いくらシエルが精霊騎士だからってこのような非礼普通は許されないことだ。

この二人がそれ程までに仲が良い、ということなのだろうか……

「まったく……お前からの助けと聞いてすっ飛んで来てやったのに、この扱いは酷いんじゃないか？」

アルベルトは拗ねてしまったのか、少し唇を尖らせた。

「それにつきましては何と申し上げたらいいか……感謝の言葉もありません」

低頭するシエルにアルベルトはわざとらしく溜め息をくつ。

「まあ別に、お前に礼を言われなくてやったわけじゃないし、ルージュのこともあるからな。今回は大目にみてやる……そのかわり、今度剣の稽古に付き合え」

「はっ、喜んで」

シエルの返事にアルベルトは満足そうに頷いた。

「それで殿下。どう致しますか？」

アテリアが手を頬にあてて首を傾げる。

「そうだな。リユーリ達の処分も後で下すとして、問題はエンナだな。エンナがどうするにしても一度城に来て貰わないとならないが……結局その辺りはどうなってるんだ？」

アルベルトはスツと目を細める。その瞳には冷たい光が宿っていた。

答え次第では、きっとアルベルトと敵対することになる。

「エンナ様には、王位継承の件等のご説明はさせて頂きました……結論として、精霊騎士に、と」

エンナの代わりにリユーリがアルベルトへ彼女の意思をゆっくり伝える。

アルベルトは小さくそうかと呟いた。その呟きは、安堵しているのか、それとも哀しんでいるのか、よく掴めない。しかし、アルベルトの目からはもうあの冷たさは感じられなかった。

「そういうことなら話は早い。話は僕から直接父上に通しておこう。そうとなれば長居は無用だな」

エンナが呆然としている間に、ぱぱっと決めたアルベルトはさつと愛馬に騎乗した。

「リユーリ、エンナのことは引き続き第十一隊に任せても良いか？」

「はい、お任せを」

「それから、後始末もお前に任せる」

良いよな？ と背を向けたアルベルトがリユーリへ振り返った。

リユーリは微笑みを絶やさぬまま、ただ「御意」と短く返して低頭する。

「よし、城へ戻るぞ！」

アルベルトのそのたった一言で、周囲が忙しく動き出した。

「それではエンナ様、またお城で」

アテリアはにこりとした笑みをエンナへ向けて、彼女もアルベルトを追って馬を走らせる。とうとう、エンナはアテリアの瞳を知ることができなかった。

暫くその場でエンナ達がじっと跪いていると、ようやくと周りが静かになってきた。エンナがそつと頭を上げてみると、アルベルト達や兵士達の姿はもうない。

リユーリはやれやれと立ち上がって、服についた埃を叩いた。

「リユーリ！ シェル！」

そこへリユーリ達のところ走り寄ってきたのは、アメルと見知らぬ人。

ツンツン頭のその人は、こちらに手を振って駆けてきた。

「一時はどうなるかとヒヤツとしたけど、なんとかなって良かったな。おいアンタ、命拾いしたぜ」

歯を見せて彼はニツとエンナに笑いかけた。

「ちよつとフレンさん！ アンタだなんて失礼ですよっ」

一拍遅れてやってきたアメルは、フレンの態度を注意する。フレンは少し面倒臭そうに「ちえっ」と舌を鳴らしてそっぽを向いた。

「エンナ、紹介するよ。僕が率いる隊の隊員で、左の温和で人好きされそうな方がアティメール。右の如何にも元ヤンさが抜けない方がフレンデルね」

あんまりな自己紹介をされたフレンは、黒と白がマールブルみたいな混じり方をしている不思議な色彩の瞳を見開いた。

エンナは心の中で納得する。

フレンには悪いが、リユーリの簡潔ながらも的確だと思った。しかし、もっと他にも言葉があるだろうにどうしてわざわざ……流石、リユーリだ。

「リユーリ！ なんだよそれ！！」

案の定フレンは怒ってしまって、ただでさえ目付きが悪いのに更にそれが三割り増しになっている。

「あれ、ごめん。何か間違ったこと言ったかな」

リユーリはさも驚いた顔で目を瞬いた。

「このっ、なんだその顔は！ わかってやってるだろー!？」

「フレンさんっ」

今にも跳びかかっていきそうな勢いのフレンをアーメルは慌てて羽交い締めにする。

「止めるなアーメル！ 今日という今日はもう我慢できねえ！」

アーメルの腕から逃れようとじたばた暴れるフレンを、自分は関係ないとばかりにリユーリは「あっはっはっ」と楽しげに笑っていた。

「くそおっ。シエルーー!!」

と、悔しそうなフレンが叫んだのはリユーリの名ではなくシエルだった。

何故か矛先が自分に飛んできたことに虚を突かれたシエルは、軽く目を剥いた。

「ぼけっと見てないで、この！ 男なんだか女なんだかわからねー隊長を！ どうにかしろ!!」

シエルの目がぱちくりと瞬く。

そして、キラキラ輝いて見えるリユーリの笑顔と怒りで息が荒いフレンの顔を交互に見、黙考した後、

「フレン、なんでそんなに怒るんだ？」

シエルは軽く小首を傾げた。

「いやっ、あんな風に言われたら普通怒るにきまつてんだろ!？」

フレンの主張は尤もだ。

「そうか？ 元ヤンいいじゃないか」

「いやいや、何処が!？ 元ヤンの何処がいいんだよ!？」

「確かに聞こえは悪いかもしれないが、裏を返せばちよい悪の仁義をモットーとしている男の中の男っという風にもとれるぞ」

何処までポジティブ思考なんですか、それ。

エンナは突っ込みたいのを必死で堪えた。フレンも呆気にとられてしまつて、開いた口が塞がらないようだ。そんな二人の様子には気付かず、シエルは「それに」と話を続ける。

「フレンが気になつてるあの侍女の子だが……」

なんだかともんでもないことを口走り始めたシエルにフレンは瞠目する。

「おまつ、その話は!」

「えっ、もしかしてフレンさんつて気になつていいる女性がいるんですか?」

「ば、馬っ鹿! んなわけねーだろ!？」

驚いているアメールにフレンはぶっきらぼうに否定する。

このフレンの慌てっぷり。周りから見れば自ら肯定しているようなものだ。

「んで、そのフレンが気になってる侍女の子が何？」

リユーリは、“フレンが気になってる侍女の子”という部分を強調しながらシエルに先を促す。フレンはアームルに押さえられたまま、顔を赤くしてわなわなと拳を震わせた。

「なんでも彼女が言うには、普通の男よりも少し危険な香りがする方が魅力的に感じるらしいぞ」

シエルは人差し指を立てる。

小刻みに震えていたフレンの身体がピタリと止まった。

「そ、それ！ それ本当か!？」

シエルが無言で首肯すると、フレンの態度はガラリと変わった。もう大丈夫そうだと判断したらしいアームルが腕を放した途端、フレンは「おっしゃ」っと嬉しそうに拳を握る。

「シエル、そんな話何処で？」

リユーリはシエルの側へ寄って、フレンには気付かれないようにソツと問う。

「この間たまたま……運んでいた荷物が重そうだったんでそれを手伝ってたら、いつの間にか恋愛話になって……」

成る程とリユーリが納得する。

そんな会話を二人がしていることなどフレンは気付いていない様子で、とてもご機嫌だ。シエルの意思疎通は独特のため、フレンには聞こえないようアルベルトを弄っていた時と同じようなことをしたのだろうが。

しかし、エンナにはどうにも違和感を覚えて仕方なかった。何故なら。

シエルが恋愛話って……

エンナは噴き出しそうになるのを手で止める。
駄目だ。なんか笑える。

「ところで、ソード様のお姿が見えませんが……」

ローズは辺りをキョロキョロと見渡す。

そういえばソードを見かけないが、もしかしてアルベルト達と共に城へ戻ってしまったのだろうか？

「あつ、ソードさんならラジェット隊長への報告もあるので、先に戻ると言っていました。リユーリ隊長達には、挨拶もなしに申し訳ないとも」

「ん、それは仕方ないね。了解したよ」

リユーリは軽く頷くと、態度を改めた。

「そろそろこちらも動こうか。この近くに川が流れてるから、アーメルは水袋に水汲んできて」

「はい、わかりました」

アーメルはリユーリから空の水袋を受け取ると、命じられたこと

をすぐに行動へ移した。

「それから、フレンは人数分の馬の確保ね」

「は、何言ってるんだ？ 馬なんてさっきの戦いでみんな逃げ」

「確保ね」

リユーリはフレンを遮って笑顔で再度念を押す。

フレンの頬が引き攣った。

無理難題な注文を吹っかけられているフレンにエンナは同情の眼差しを送る。

「訓練されている馬なんだから、きっと何頭かはその辺に残ってるよ」

リユーリの笑みとフレンの鋭い視線が対立する。

「だああっ、もうわかりましたよ！ やりゃいいんだる畜生！！」

勝敗は結局リユーリの方に上がり、フレンは半ばやけくそに歩き出した。

それを何か思い出したらしいシエルが呼び止める。

「フレン、俺の馬は必要なさそうだ」

「なんで……」

シエルが無言で指を指す。その指先を辿っていくと、ずっと向こうに小さな影があった。よくよく見れば馬の姿をしており、こちらの様子をじっと窺っているようだ。成る程、どうやらシエルが捕まえたというあの魔馬が戻ってきたらしい。魔物にしては随分とらしい馬だ。リユーリなんかは感心して「へえ」と呟いている。

馬を見たフレンは盛大な溜め息をつく、気怠そうに手をひらひら振ってリユーリ達から離れていった。

「さて……こっちはこっちで後始末を済ませようか」

「後始末、ですか？」

ローズは不思議そうに首を傾げる。

そういえば、アルベルトも後始末を任せるとか言っていた気がするが、一体何のことだろう。

「そうだよ」

リユーリが振り向き様にニコリと笑う。

エンナの背中にヒヤリと何かが伝った気がした。

リユーリの浮かべた笑顔が酷く冷たく感じるのは、きっと気のせいではない。

彼の不穏な雰囲気はローズも察知しているらしく、問いかけようと口を開きかけた時、何かが空を切ってそれを止めた。

ローズとエンナが息を呑む。

リユーリが突然抜刀してきて、あっという間もなくローズの首にその剣先を突き付けたのだ。

「リュ、リユーリ、様……？」

ローズは何を……と小さく呟きながら、身動きも取れずにいる。

ローズは助けを求めるようにシエルの姿を探すが、彼はローズの背後に立っていた。

「はつきりさせようじゃないか」

リユーリはただ笑う。

しかし、その瞳には温情の欠片もなく、冷酷な光が宿っていた。

「ね？ 裏切り者のローズ」

言われた言葉にローズは凍り付く。

エンナは驚愕して「えっ」と声を漏らした。

12・? 魂(まいかい)の書に隠されたは…… (1)

「ローズが裏切り者って……」

どういうこと？

リユーリの言葉の意味を理解しかねて、エンナは誰にともなく呟いた。

いや、裏切り者という意味はわかっている。でも、それをわかりたくないという思いでいるから、その言葉に意味を見出すことができず、ただの文字の羅列でしかないように聞こえるのかもしれない。リユーリは戸惑うエンナに流し目で視線を投げた。

「ローズはね、前国王派の間諜だったのさ。それも二重スパイってやつ」

「二重、スパイ……？」

「前国王派、ベンドールに命じられて現国王派に与しつつ、僕達の仲間を装っていた」

エンナは混乱してしまって、訳がわからなかった。

だってそんな、ローズは、ローズは……

そんなことがあるはずがない。

エンナは救いを求めるようにローズの方へ視線を移す。しかし、エンナの期待を裏切るように彼女の表情がどんどん蒼白になっていた。

「僕達の中に裏切り者がいることはわかっていたけど、ローズのこととは確信までは持てなかった」

「わ、わたくしはっ」

ローズは声を絞り出して自分が裏切り者であることを否定しようとするが、リユーリがそれを剣で黙らせる。

「シエルがディックの家族を助け出した時、ベンドール側の奴を何人かとっ捕まえて吐かせている。残念ながらネタは上がっているよ、ローズ」

リユーリから突き付けられた事実によりローズの顔色が絶望に滲んだ。彼女は崩れるように力なくへたり込む。

「どうして……」

「切っ掛けはあの時、グラウが言った言葉だ」

彼女の問いに答えたのはシエル。ローズはその答えがどうにもしっくりこなかったようで、若干眉根を潜めた。

「グラウ様の……？」

「そうだ。エンナを助け出して山小屋から出た後、グラウ達に襲われただろう。あの時、グラウは俺にこう言ったんだ。“我らと同志ではなかったのか”と……」

シエルが言うには、それは言う相手が違うらしい。確かに、シエルもリユーリもアラディン国王陛下を支持しているし、考えようによっては同志に見られるのかもしれない。が、それは決して現国王派と同志であつたわけではない。

もし、ローズがベンドールの間諜であり現国王派にも通じていたのなら話は通じる。きっとウルからはリユーリ達の居場所がわかるよう、精霊術を使ってあちらに動きを伝えるように言われていたのだろう。

しかし、彼らの思惑はそうはいかなかったわけだ。それが二手に別れる人数配分や人選にも如実に表れているらしかった。

あちらは魔犬を使っていた。魔犬は魔術を使っているため、通常の犬なんかよりも断然鼻が利く。魔犬の能力を活かし、薔薇の香りの強弱か、それとも植物による伝達でなのかまではわからないが、何かしらの方法でローズに情報を伝えるよう指示していた。

が、ローズは場合によってはベンドールからウル達を攪乱するようかくらんに言われていた。そうでなければ、シエル側にもっと力が入っていたはずだ、と。

「お、お待ち下さい。それだけで、ですか？」

シエルは首を横に振って否定した。

「勿論それだけじゃない。俺がハッキリ確証を持ったのは、スラッツと合流した時だ。スラッツは元々怪しいとは思っていたし、ルージ様のお言葉からもう確定的だった。薔薇の香りでスラッツに俺達の位置を知らせたんだろう？」

ローズは俯いたまま黙り込む。沈黙を肯定ととってシエルは話を続けた。

「ローズが前国王派の協力者だったのだとしたら、俺達が怪訝に感じていたことに説明がつく……」

何かを堪えるようにローズはぎゅっと目を瞑った。

「けど、リユーリは初めから怪しんでいたけどな」

「えっ？」

驚く気力もないローズに代わってエンナが瞠目する。リユーリは軽く肩を竦めてみせた。

「僕がシエルとローズ二人にエンナの救助へ行かせなかった理由がそれ」

そうじゃなくても、きつと行かせなかったらどうだろうけど、とリユーリはニコリと笑った。

「しかし、不可解なことがあるんだよね」

リユーリは俯くローズへと再び向き直る。

「どうしてローズがこんなことをしたのか」

それは是非エンナも聞きたいところだ。

あのローズがそんなことをするなんて、よっぽどのがない限りあり得ない。

「ねえ、ローズ。ローズもあのディックって人みたいに誰かを人質に……」

縋る思いでエンナがローズに問う。どうかそうだと欲して欲しい。しかし、ローズは唇を噛み締め、きつく瞑目しながら辛そうに首を横に振った。

エンナの頭が真っ白になる。エンナはその場に座り込んでしまった。

自分がどう感じているのかわからない。哀しいのか、怒っているのか。自分は、今何処にいるのだろうか。

でも、これだけはわかる。

「じゃあ、なんで……」

エンナは小さく呟いた。

きつと、何か理由があるに違いないのだ。

ローズはリユーリやシエルのことをとても尊敬していた。二人と離れていた時は、いつもその身を案じていたし、何だかんだ言いつつもエンナをよく面倒を見てくれていた。

それを証明するように、きつとエンナを攫う機会だって沢山あったはずなのにそうすることもしなかったし、何よりも先程からローズはとても苦しそうだ。

そんな彼女が理由もなくこんなことをするはずがない。

「わたくしは……」

ローズはぎゅっと拳を握って、苦痛に顔を歪めながら懺悔でもするように話し始めた。

それは数週間前に遡る。

ローズが自室へ戻る道すがら、彼女は変わった格好をした少女に話しかけられたという。一言で表現すれば、“蝶”のような少女だったらしい。

何故そんな少女がこんなところにいるのか、警戒しながら足を止める。彼女は妖しい微笑みを唇に浮かべながら言った。

『ねえねえ、あの酷い王様の娘を助けるの？』

ローズは驚いて目を見開いた。酷い王様とは、エイブラムのことだろう。そして、その娘ときたら……

どうして彼女がそんなことを知っているのだ。

『あら、何のことですか？』

平静を装いながら、ローズは素っ気なく答える。

素知らぬ顔のローズを見て、少女は可笑しそうにクスクスと笑った。

『駄目だよ。見るからに怪しい人にそんな動揺した顔見せちゃ』

月光を浴びた少女の笑みは、より一層妖美さを増す。ローズの中で一気に緊張感が高まった。

この少女は、かなり危険だ

ローズは警戒心を露わにしながら、じりつと後ろへ後退る。

少女はただ笑っている。笑って……突然鋭い殺気が放たれた。背筋の凍るような感覚にローズは、急いで茨の鞭を出そうと

『おいたは、だぐめ』

ローズの息が止まった。少女の吐息が耳の側で感じる。少女の姿は目の前には既になく、いつの間にかローズの背後を取っていたのだ。

彼女は振り上げようとしているローズの腕にそつと手を添え、そのまま静かに下ろさせた。

少女はローズの耳の後ろ辺りに鼻を近付けると、恍惚とした溜め息をつく。

『うーん、流石は薔薇の妖精。すごく良い匂い』

『貴女、何者ですの……』

ローズは激しく脈打つ自分の心音を感じていた。

この少女、只者どころの輩ではない。もし戦いとなったら、精霊騎士のローズでも勝ち目はないだろう。

少女を恐れるローズに彼女はニコリと笑いかけた。

『別にそんな大した者でもないよお。あなたの隊長さんや副隊長さんにはきつと敵わないもん』

そこで少女は、何か思い出したように「あっ」と呟いた。

『そうそう、隊長さんと副隊長さんと言えば、可哀想な人達だよねえ』

『可哀想……？』

『だってあの人達って』

少女は唇をローズの耳に寄せて囁いた。囁かれた内容にローズは驚愕して目を瞪る。

何故、この少女がそこまで知っているのだ。

少女は薄く笑いながら話を続ける。

『ねえ、良いの？ 二人はいつも一生懸命で、王様にも民にも尽くしているし、沢山苦しいこともあっただろうねえ。それなのに、二人がこんな辛い思いをするなんて……良いわけないよねえ？』

少女の妖言がローズの耳朶を痺れさせる。

その心地良くも聞こえる少女の声が誘うようにローズから“感覚”というものを奪っていった。目に映るもの全てが曖昧になってきて、浮ついてくる。

だが、ローズはなんとかそこから自分を保っていた。この少女の
声に耳を傾けてはいけない。

しかし、その思いとは裏腹に視界には……

『シエル様？』

シエルがこちらに背を向けている。

ローズの目には、シエルのその後ろ姿が時折悲愴に思えて仕方な
かった。その肩には一体どれだけの重荷がのし掛かっているのだろ
う。ローズには到底想像することすらできない。

憂いと哀しみに揺れ動くローズに少女は囁いた。

『副隊長さんなんかは特にどういう心境だろうね？ 逃がしきれ
るかな。それができなかつたら、君達と同じ道を歩ませるのかな？
それとも……』

あの娘の命をいつそのこと、自らの手で奪うかな？

少女の声が頭の中で飽和するように反響する。

奪う

シエルがこちらに振り返る。その瞳には荒んだ鋭い影が宿り、頬
には赤い飛沫が流れていた。

ローズは小さく悲鳴を上げる。

違う、違う。これはシエルではない。この少女が見せているシエ
ルの幻なのだ。

騙されるてはいけない。騙されるな。

すると、シエルの向こうにリユウリの姿が現れた。シエルと違っ
てリユウリはただ静かに嗤っていた。炎を彼の剣に宿らせて、煌々
と赤がりユウリを照らす。

背景が黒と赤の空間に支配された。

その空間に劈^{つんぱ}くような悲鳴。

誰の悲鳴だろうか。

まさか……もしかして……

ローズは自分でも驚くような悲鳴を上げた。しかし、その声は空間を支配する黒と赤と、誰かはわかりたくもない悲鳴に掻き消されているようだった。

苦しむローズの姿を見て、少女はただ楽しそうに妖しく嗤う。

少女の嬌笑を耳に響かせながら、ローズはそこでぷっつりと意識が途絶えた。

そこから先は、まるで夢の中の出来事のように目まぐるしく日々が過ぎ去ったのだとローズは言う。

そして、夢現の世界から気付いた時には、もう手遅れだった。ベンドールと手を組み、彼の指示でウル達の仲間になり、彼らに言われた通り動いていた。

12・？魂（まいかい）の書に隠されたは……（2）

そこまで聞いたりユーリは顎に手を添えた。

「成る程、それは一種の洗脳だね」

「洗脳？」

「そつ、幻術を使った洗脳。ローズでさえ嵌ってしまったってことは、相当の手練れだろうね」

それを聞いたエンナは少し安心した。やはり、ローズは好き好んでこのようなことをしたわけではなかったのだ。

しかし、ローズの顔は一向に曇ったまま。仮にも精霊騎士という身でありながら、洗脳されてしまった自分を責めているのだろうか。

「でもそれって仕方ないことじゃない。まあ、もしかしたら精霊騎士の誇りとかあるんだろうけど、ローズがそこまで思い詰めることは」

「いいえ」

ローズを慰めるようにエンナが声を掛けると、彼女はもう一度「いいえ」と言って首を振った。

「それは違いますわ。確かに精霊騎士たる者、あのような輩に絆され利用されたことには甚だ恥ずかしく情けない話。でも、わたくし、わたくし……」

ローズはぎゅっと目を瞑り、拳をきつく握って何かに堪えるように言葉を続けた。

「わたくしが一番許せないのは、一瞬でもリユーリ様とシエル様のことを疑ってしまったことです」

ローズは感情の波を抑えるように話す。

自分はとんでもないことをしてしまった。

ローズはそれを寧ろ利用しようと考えた。一時はベンドールの仲間であるかのように振る舞って、あわよくばと。

彼女も必死だった。

リユーリもシエルも彼女にとってしてみたら、一番役に立ちたいと思って止まない、尊敬している人達なのだから……

しかし、ルージュ達と話した晩のこと。

ローズは聞いてしまったのだ。バルコニーでリユーリとシエルの話を。

ローズの脳内でフラッシュバックする。蝶の少女が見せたあの幻

もしかしたら、少女の言っていた通りだったのではないか？

リユーリとシエルは、場合によっては本当に殺してしまうかもしれない。

殺してしまったら、二人はどうなる？

恐怖がローズを襲った。恐れが心を蝕んで、正常な判断もつかない。

なんとかしなければならなかった。

そうなる前に自分がなんとかしなければ、と。

あの二人が手を下さなければならぬのなら、いつそのこと……

いつそのこと前国王派へエンナの身を渡してしまえば、方法はど
うあれ彼女は命を落とすことはない。

ローズは両手で顔を覆うと、震える声で痰を切るように言った。

「わたくしは耐えられなかったのです。お二人に再び身を切るよ
うな思いをしてしまうのではないかと思うと……それに、これがき
っかけで心までも壊れてしまわれるのではないかと思ったら、わた
しは恐ろしくて……どうしようもなく恐くて仕方なかったのです
っ！」

「ローズ……」

肩を震わせて訴えるローズ、にエンナはただ名前を呼びかけるこ
とくらいしかできなかった。

ローズはずっと、それを今まで一人で抱え込んでいたのだ。

どんなに辛かったことだろう。

きつとローズは今泣いている。顔を隠しているのでわからないが、
弱々しく頂垂れるローズを見るとそんな気がした。

エンナは痛い程伝わってくるローズの思いにぐっと涙を堪える。

そこへすつとシエルがローズの方へ近付いていつて膝を折った。

「ローズ、すまなかった」

「シエル様……？」

シエルの謝罪にローズは不安に揺れる瞳のまま顔を上げた。

「そこまで俺達のことを思っていてくれていたなんて……一人で全
部背負い込ませてしまって、それに気付いてやれなくてすまない」

詫びるシエルの声には、申し訳なさとローズを労る感情が伝わってくるようだった。

「でももう大丈夫だから、安心しろ」

シエルはぼんぼんとローズの頭を軽く撫でてやる。そのシエルの顔は、落ち着かせるように優しくローズへ向けられていた。

シエルの言葉で安心したのだろう。ローズの目から、ポロポロと雫が流れ落ちた。ローズはぎゅっと瞼を閉じると、それを隠すようにまた俯いてしまう。

小さく嗚咽を漏らして泣くローズにリユーリは溜め息をついて緊張を解く。リユーリの困ったような微笑みには、もうあの凍えるような冷たさは消え去っていた。

「やれやれ……部下をここまで追い詰めさせるなんて、僕達もまだまだだね、シエル」

「そうだな」

「ち、違いますわつ。これはわたくしが未熟で」

自分達の不甲斐なさを責めるリユーリ達にローズはたまらず声を上げる。それを遮るように、エンナはガバツとローズに抱きついた。

「え、ちよつ、あ、貴女？」

いきなりのごとで慌てまくるローズには構わず、エンナはぎゅうと抱き締めた。

「そんなこと気にしなくて良いから、今はローズは思いつきり泣いてればいいの。こんな辛い思いして、一人で戦ってたんだもの。当然の褒賞だわ」

こんなどうしようもない二人を気に掛ける必要なんて、今のローズにはないのだ。

そう思っ、エンナはリユーリとシエルをキツと睨み付ける。仮にも隊長たる者が隊員の精神面を察知できないでどうするんだと。

それが伝わったらしい。リユーリは「参ったな」と苦笑を零してシエルに至っては落ち込んでいるところをかなり沈ませてしまったようだ。明らかに凹んでしまっている。

沈め沈め。地中の中にも沈み込んでしまえ。

それでも、ローズはまだ何か言おうと「でも……」と口を開きかける。エンナはローズを抱く腕にまた力を込めた。

「リユーリもシエルも、そしてわたしも守ってくれようとしたんだよね……」

エンナはそつと優しくローズの背を撫でてやる。彼女は結局、三人のことを守ってくれようとしていたのだ。だから……

「守ってくれてありがとう、ローズ」

自分が一番言いたかったことを口にする。

まさかそんなことを言われるとは思わなかったのだろう。ローズは一瞬身体を硬直させて驚いた。

が、次第にローズの身体から力が抜けてきて、再び震え始める。

自分の肩に顔を寄せて嗚咽を漏らすローズを、エンナは優しく受け止めて背をさすってやった。

リユーリとシエルが顔を見合わせて、困ったような笑みを交わし、エンナ達のことをただ黙って見守る。

そこへ、フレンの威勢の良い声が遠くの方から聞こえてきた。

* * *

その頃、ベンドールは荒い息を吐きながら四つん這いになっていた。

身体中から汗が噴き出て、滝のように流れている。

「おのれ、おのれ……あの若造め。爵位剥奪だけでなく、私がガルヘルド行きだと……」

ふざけている。私はこれからもっと、もっと高みへ行くべき男なのだ。

「大丈夫で」

そこへシラクが背後から声をかけてくるが、それが引き金になって頭にカツと血が上る。

ベンドールは力任せに雑草を握り締めると、根っこごと引っこ抜いてシラクへ投げ付けた。シラクは「おっと」となんの苦もなく避ける。虚しく地面へと落下した怒りの球を見たベンドールは、更に逆上していった。

「この馬鹿者が！！ お前っ、あの戦いの時何処へ行っていた!？」

「はあ、何処と言われましても」

煮え切らないシラクの態度にベンドールは顔を真っ赤にしながら怒った猫のようにふーふーと唸る。

「いいか、私とお前は謂わば雇い主と雇われの身の関係だ！ なの

にお前ときたら、肝心な時に」

シラクはベンドールの言葉を遮るようにはあ？　　とわざとらしく皮肉の交じった笑みを浮かべる。

「何言ってるんだ。俺は契約したことはきっちり遂行させた。それ以外は俺の仕事の範疇外。捕まっていたアンタを助けたのだって俺の仕事じゃないぞ」

先程と打って変わってガラリと態度を変えたシラクにベンドールは戸惑ったが、今は怒りの方が勝っていた。ベンドールは生意気なシラクに対する怒りが益々上がり、罵声を浴びせようと口を開く。が、開こうとしたら瞬間に何かが頬を掠めて飛んでいった。すると、頬が熱を帯び始め、そこから生暖かい何かの流れているのを感じた。拭ってみると、手の甲が赤色に染まる。ベンドールは驚いて飛んでいった何かを確認するように後ろを見た。

振り向いた先の木の幹に、何か突き刺さっている。風車のような形をしたもの。確か、“手裏剣”などと呼ばれる武器だ。

ベンドールはぞっとして、真っ赤だった顔が青く豹変した。

「あゝあ、外れちゃったあ」

この場にそぐわぬ甘ったるい声が、した。

慌ててそちらへ目を向ければ、シラクの向こうにいつの間にか少女が一人立っている。

その少女は、黒を基調としたなんとも変わった服を身に纏っていた。半着を腰くらい幅のある布　　いや、紐なのだろうか　　で結び、袖はゆったりと絞っている。下はショートパンツを履いておりとても動きやすそうだ。

彼女は、耳上に少し高めで一つに結い上げられたカールした黒い髪を揺らしながら近付いてくる。

まるで蝶のような姿は可憐で優美だ。

「マユメ」

シラクは振り返って非難気味にその少女の名を呼ぶと、彼女は妖しい笑みを浮かべた。

「だって、その人が悪いんだよ。しいちゃんに泥の塊を投げ付けるなんてことするから」

「お前な……」

呆れ気味にシラクは溜め息をついた。

「おい、チアキ。いるんだろう？」

何処にともなくシラクが声を掛けると、上から人が振ってきた。その人物もまた、黒い髪と同じ色を基調としており、マユメと似たような民族的な衣装を身に纏っている。ただ彼女とは違い、こちららは随分とシンプルだ。

彼は立ち上がると、手にしている薙刀を持ち直した。

「なんだシラク」

「やつ、なんだじゃなくてお前、いるんならマユメを止めろよなー」
「それは無理だ」

即答するチアキ。

シラクは呆れて半眼になる。

「なら、もし同じ状況でシラクと俺の立場が逆だったとしたら、お前は止められたのか？」

チアキは素朴な問いに、シラクは一度マユメへ目を移し、

「無理、だな」

気まずそうに視線を逸らした。

「だろう？」

「ちよつとお、二人してなんか酷くない？ まるであたしが危険人物みたいなの」

マユメは不服そうに頬を膨らませた。

シラクとチアキはお互い顔を見合わせ、

「実際そうだよ」

二人同時に一字一句違えることなく同じ台詞を口にする。

マユメは眉尻を吊り上げると、「酷い」と何回も言いながらシラクとチアキを叩いた。

「まあ、兎に角」

切りがないと思ったのか、チアキが灰色の瞳をベンドールへ向けてくる。それに倣って、二人もベンドールへ視線を投げた。

三人のじゃれ合いを呆然と見ていたベンドールは、言い知れぬ恐怖を感じた。

シラク達の感情のない眼。

見えないのではない。ないのだ、一切。

先程三人でふざけあっていた様子が嘘のよう。まるで、心のない人形のような。

なんなんだ。なんなんだこやつらは！

ガチガチと歯を鳴らして、ベンドールは後退る。しかし、上手く身体が動かなくて、足が滑って進まない。

無様なベンドールを目にして、チアキは眉根を潜めた。

「どうしてコイツをあそこから助けたりしたんだ、シラク。あのまま放っておいても何も問題はなかっただろう？」

「そうなんだけど、マユメが」

シラクとチアキの視線がマユメに移る。マユメは二人に可愛らしく笑ってみせた。

「だってえ、ガルヘルドなんて行ったら、この人の苦しんで苦しんで苦しみまくって死んでいく姿が見れないじゃん」

忍び笑いをたてながら、マユメはベンドールに視線を落とす。そのアメジストのような瞳には、嗜虐的な光が煌めいていた。

「な、なんだつ。貴様ら、私に何をするつもりだ!？」

「あたし達のお父さん達にされたことと同じ事お。あつ、でもそれじゃ気が済まないから、倍に返させて貰うけどねえ」

甘ったるく言いながら、少女は唇に人差し指を添えて笑みを深めた。

「同じ事だと？ 私が一体何をしたと」

「おい、それ本気で言ってるのか？」

シラクは黒い瞳に強い憎しみを光らせながら、ベンドールを蔑視した。

ベンドールは恐怖で「ひっ」と悲鳴を上げる。

「ジャパルカ族」

チアキが静かに彼らの正体を告げる。ベンドールの顔から血の気が引いていった。

「ジャパルカ族、だと？ あの時の生き残りかっ？」

「そうだ。いや〜まいったな。チアキとマユメの格好を見ればすぐに察しがつくと思っただけど、手にかけて相手のことを全く知らないなんて……」

シラクは怯えまくるベンドールを睥睨した。

「ちよっ、ちよっと待て！ わ、私が手をかけたわけでは」

「お前もエイブラムに喜んで協力していただろう。かけたも同然だ」

チアキがハエでも見るような目でベンドールを見下す。ベンドールは恐怖に戦きながら必死に言い繕った。

「わ、わかった！ ならこうしよう！ まだ私には切り札があるっ。上手くすれば」

「ああ、それねえ無駄だと思うよお。切り札ってローズのことなんだろうけど、あの子、結構なかなかやる子みいだっただから、とつくのとうに正気に戻ってるだろうし」

容赦ないマユメの台詞に顔を真っ青にして、追い込まれたベンドールは唾を飛ばす勢いで口を更に開いた。

「なら金だ！ 金ならどうだっ！？ もしこのまま見逃してさえくれれば約束の倍は」

「うるさい、黙れこの下種野郎が」

と、強い口調でベンドールの言葉を断ち切ったのはシラクだった。ベンドールは短い悲鳴を溢して身を竦ませる。

「ねえねえ、しいちゃん。そろそろやつても良いかなあ？ あたし、もうこのおじさんと話してるの飽きてきちゃったあ」

「ああ、いいぞ。マユメの好きにしろ」

シラクがマユメにそう返すと、彼女は嬉しそうに微笑んで、そして

「おじさん、あたしと一緒にあ〜そばっ」

マユメはベンドールに笑いながら歌うように誘う。
アメジストの瞳に、嗜虐的な光を宿しながら
ベンドールの恐慌染みた絶叫が森中に響き渡った。

く花の精霊くエピローグ

切り立った山の突き出た所から、青年は胡座をかいて座っていた。親指と人差し指を小さな粒を摘むようにして、その隙間から何かを覗いている。

「おお、どうやら発動したみたいだな」

彼はいきなり喜々を含んだ声を上げる。口端を上げてニツと笑うその顔を満足げだ。

「やはり助けたんだな……」

すると、後ろから随分と不機嫌な声が出た。身体の奥底が震えるような重低音は、知らぬ者が聞いたら怯えてしまっただろう。

しかし、青年にしてみたらその声はどの者達よりも馴染み深い。

寧ろ、彼の声は青年の耳にはとても心地良くて好きだった。

「何のことだ？」

青年、リベラはとぼけた顔で彼の方へ振り返る。薄暗く大きな口を開けた洞穴の中に身を隠しながら、リベラの白々しい態度に声の主はふんと鼻を鳴らした。

「しらばっくれおって。あの娘のことだ」

リベラはわざとらしく今思い付いたように「ああ」と呟いた。

「確かに手を貸してはやったが、助けた覚えはないぞ？」

「嘘をつけ。お前、偶然を装ってあの娘を自分の方へ来るよう引き寄せただろう」

少しの沈黙の後、リベラは素知らぬ顔で口笛を吹く真似をしている。

「しかも、“リベラ”とは一体誰のことを言っている。そんな立派な名前でもあるまいに……大体慣れない言葉を遣いおって……何が“私”だ“さらば”だ。このえーかつこしいめが」

「いいじゃないか。俺だつてな、格好つきたい時があるんだ。そりゃあ、ちよつとやりすぎた感はあるたかもしれんが……」

「やり過ぎだ馬鹿者。寒気がしたわ」

「おい、そこまで言うことないだろ？」

リベラは少し傷ついてしまったようで、拗ねて唇を尖らせた。そんなリベラを目にして、彼は呆れ気味に溜め息をつく。

「いや、だから本当に助けたわけじゃないって」

とリベラが言っても、彼は疑いの眼差しでじっと見つめてくる。リベラは苦笑を零した。

「確かにお前の抜け落ちた鱗にちよつと細工は施したけど」

「細工？」

疑念を込めて彼が問う。リベラは何処まで信用ないんだ俺は、と情けなさそうにぼやいた。

「光だよ。エンナが何かを見出し強く生きたいと思えば発動するようにした。もしエンナがあのまま負の感情に囚われ、嵌っていくよ

うならあれは発動せず、ルージユの予言通りに死んでいたか、もしくは……」

リベラから表情がサツと消え去った。硝子玉のような瞳には温度が見えず、感情を完全に隠してしまっている。

しかし、それでも彼にはリベラが今どう思い、感じているのか、手に取るようにわかっていた。

「酷く心の闇に引き込まれていたら、あの鱗に魅入られ死んでいた」

鱗に蓄積された心の闇が、持ち主を酩酊^{めいてい}させて何も考えなくても良い甘い“無”の世界へと誘う。それはまるで、ある種麻薬中毒のような……

リベラの質の悪いやり方に、彼は臆することもなく「ふむ」と呟いた。

「甘いな」

意外な彼の言葉にリベラは面食らったらしく、目をぱちぱちと瞬かせる。

「甘い、か？」

「ああ、甘い。甘々の甘ちゃんだ。運命を変える行為なんだぞ。なのに、たったそれだけで発動するようにするなんて……」

「そう言われてしまうと、流石に何も言えないな」

リベラは困ったような笑いを溢して頭を掻く。そんな締まりのないリベラにまた彼は溜め息をついた。

「全く……また奴らにグチグチと嫌みつたらしく文句を言われるだ

ろくな、お前のせいで」

彼は恨みがましい視線をリベラに送った。

「別にそんなのどうってことないじゃないか。言っただろ？ 俺は別に助けたわけじゃない。気まぐれに手を貸しただけだ。堂々としてればいい」

「……付き合いきれん」

鼻息荒く彼がふんと顔を背ける。

コイツはいつもそうだ。

気まぐれ気まぐれとほざいておきながら、結局のところ……

「でも、お前は最後まで俺に付き合ってくれるだろう？」

リベラは漆黒の鱗に覆われている彼の鼻梁に手を添えて微笑んだ。空色の硝子玉に星々を鏤ちりばめたような双眸が彼の眼を見つめる。

リベラの黒い髪に相俟って、その不思議な瞳はとてもよく映えていた。一体幾千、幾万の人々がこの 宝石の虜となったことだろう。しかし、その美しい瞳は憂愁が浮かび不安定に揺れ動いている。彼は金の目を細めた。

「当たり前だ。お前は我にとって、かけがえのない存在、心友なのだから……」

リベラは嬉しそうに感謝の言葉を口にする。と満面の笑みを浮かべた。

昔からそうしてきたように、これからもずっと傍にしよう。

この命、尽きるまで

気を取り直すようにリベラは背を向けた。

「さて、そろそろ帰ろうか。俺達の故郷へ」

振り返ったりリベラの笑顔は、先程の愁嘆さはなく、この空のような清涼さを取り戻していた。

~~~~~F i n~~~~~

## 「花の精霊」エピローグ（後書き）

執筆をはじめてから「花の精霊」完結までに約一年以上もかかってしまいました。

当時もつと短く終わらせるつもりが……結局の所、40×40のページ約180枚という長い長い話となってしまうました……力量の無さが浮き彫りですね。泣きたい……

でも、その分「花の精霊」では色々勉強させて貰いました。

挫折そうな時もありましたが完結まで書き続けられたのは、これもそれも、応援して下さい下さった方々や読者の方々のおかげです。ありがとうございます！

そして次回作ですが、まったりした後にある程度書き溜めてから更新できたらなあと思っております。

その次回作で今回不明な用語とかの説明が出来たらなと……「？ 決意の光」なんかは特に、何この新しい単語って感じだったかと思えます。あそこはリユースやシエルなどの視点のため、そういつたことは知ってるものとして書いているため、ご容赦頂ければ幸いです。

更新速度も遅いにも関わらず、最後までこの話とお付き合いして下さいまして本当にありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0164i/>

---

精霊騎士

2010年10月11日12時41分発行